

新しい風俗文化雑誌

風俗草紙

風俗草紙

昭和十八年十月二十五日創刊十一月一日発行毎月一回
定価 百円
昭和十八年九月十九日第三号発行
日本国政府登録第...
日本国政府登録第...

定価 百円

11 11

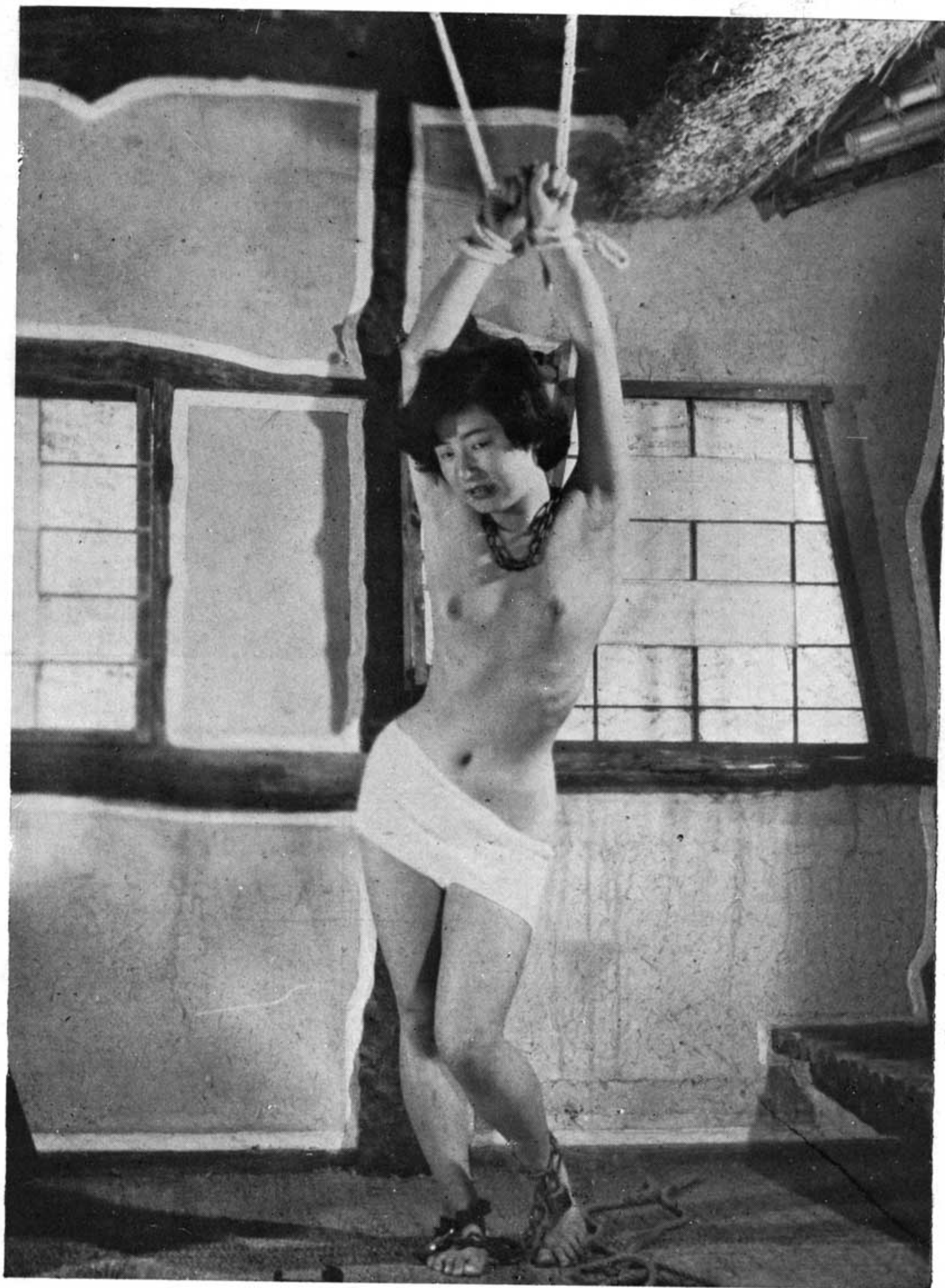


「フフ、、由美さん、今夜こそ君は僕のものだ」以前からしつこく言寄つてた課長の塚本は、普段の仮面を脱いで、変態性慾者の本性をむき出しにしながら、身動きも出来ぬ豊満な処女の体をソロソロと鬨ぶりに掛ける。「ア、、止めて……」羞恥と恐怖に身もだえる彼女の唇から、果敢ない哀願の叫びが空しく尾を引いて……。



肌を揺るがす

本誌特寫





→ 吊られた小鳥

成熟した美貌の処女ぐらい美しいものはない。その処女を、人気のない一軒家に連れ込んで、縛って、吊して、鞭うって、思う様に辱かしめる。

こんな空想は、誰しも描いてみるものだが今號の持寫フォトはそういった雰囲気特に強く狙ってみました。

ふだん自分を嫌っている女を、さんざん苦しめて、哀願させる楽しみ、これこそサデストの最高の悦樂であらうと思はれますが、そんな幻想を描きながら、この写真集をユックリ観賞して下さい。

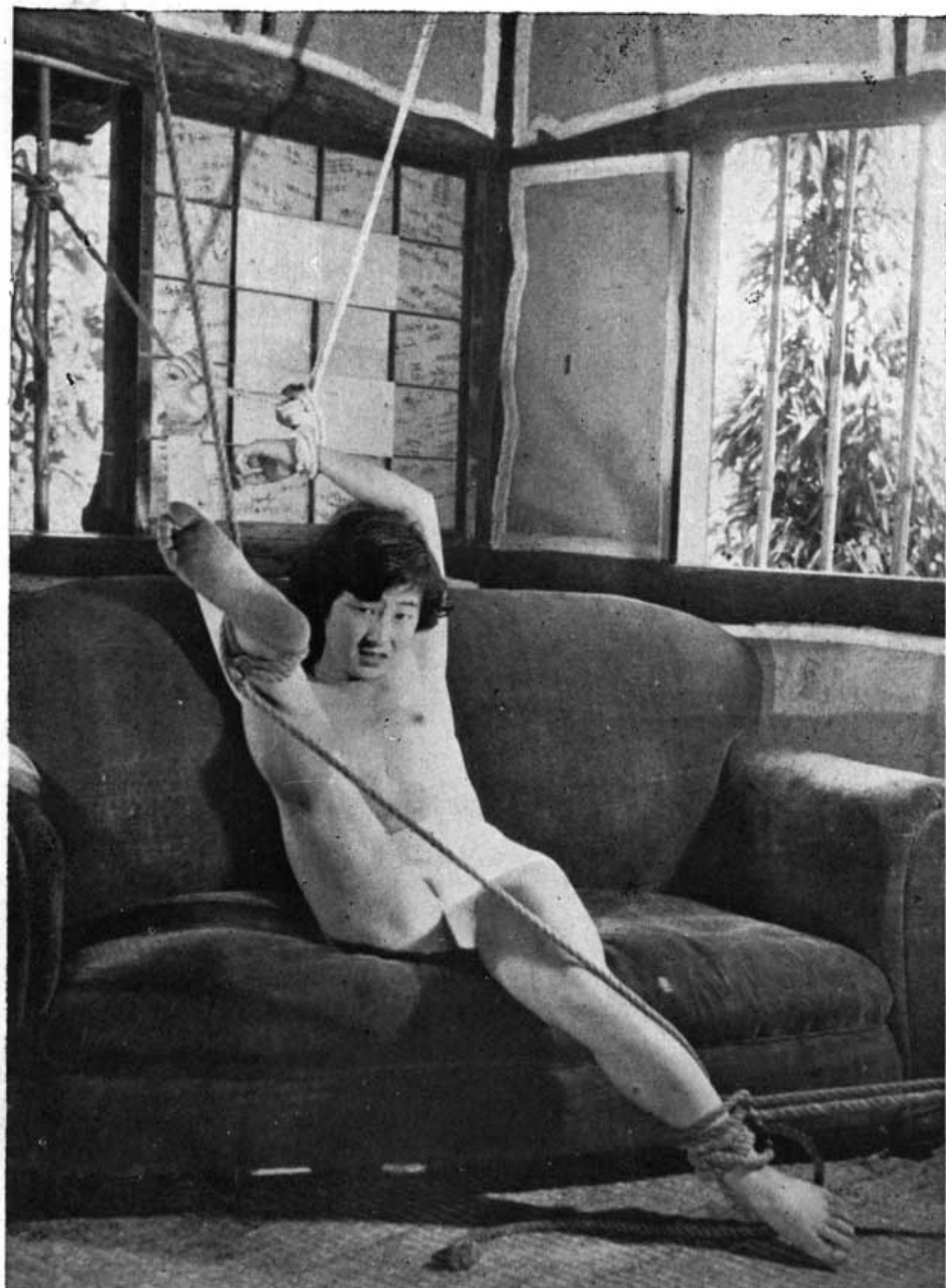


← 乳房のうめき

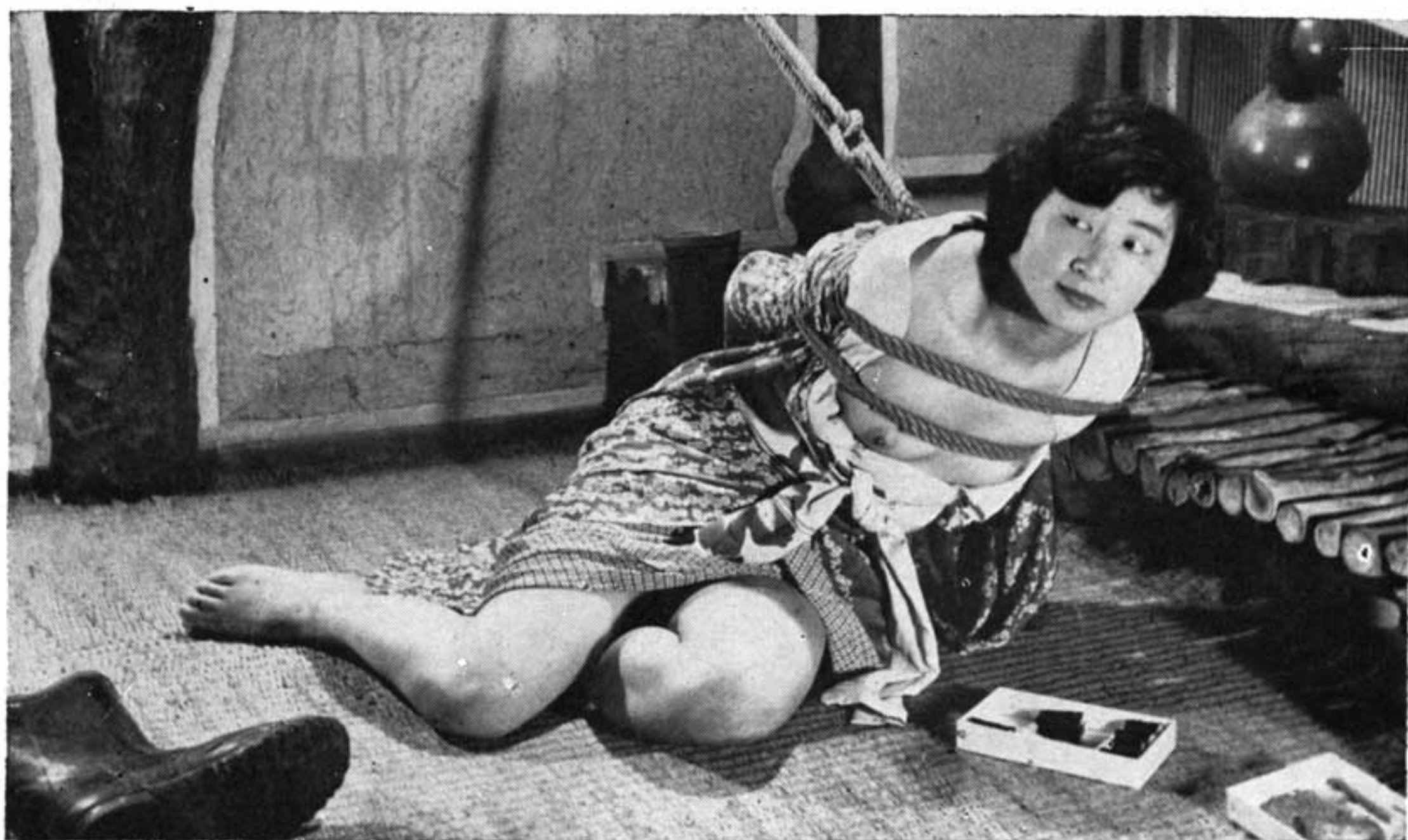
一枚一枚衣類をはぎとられて、羞と怒りに悶える処女の肌！ だがやがて、體に喰い込む縄や鎖の痛みに、抵抗する気力も次第に消え失せ、腫に浮ぶ涙と共に、彼女はグッタリとなつた身を貴方の前へ投げ出す。

誇高い白鳥が、悪魔の力に翻弄される悲劇のシーンです。

← 凌辱のソファ



← 犬の餌





↑エプロンの處女

蜘蛛

蛛

文 大月大三
画 喜多玲子

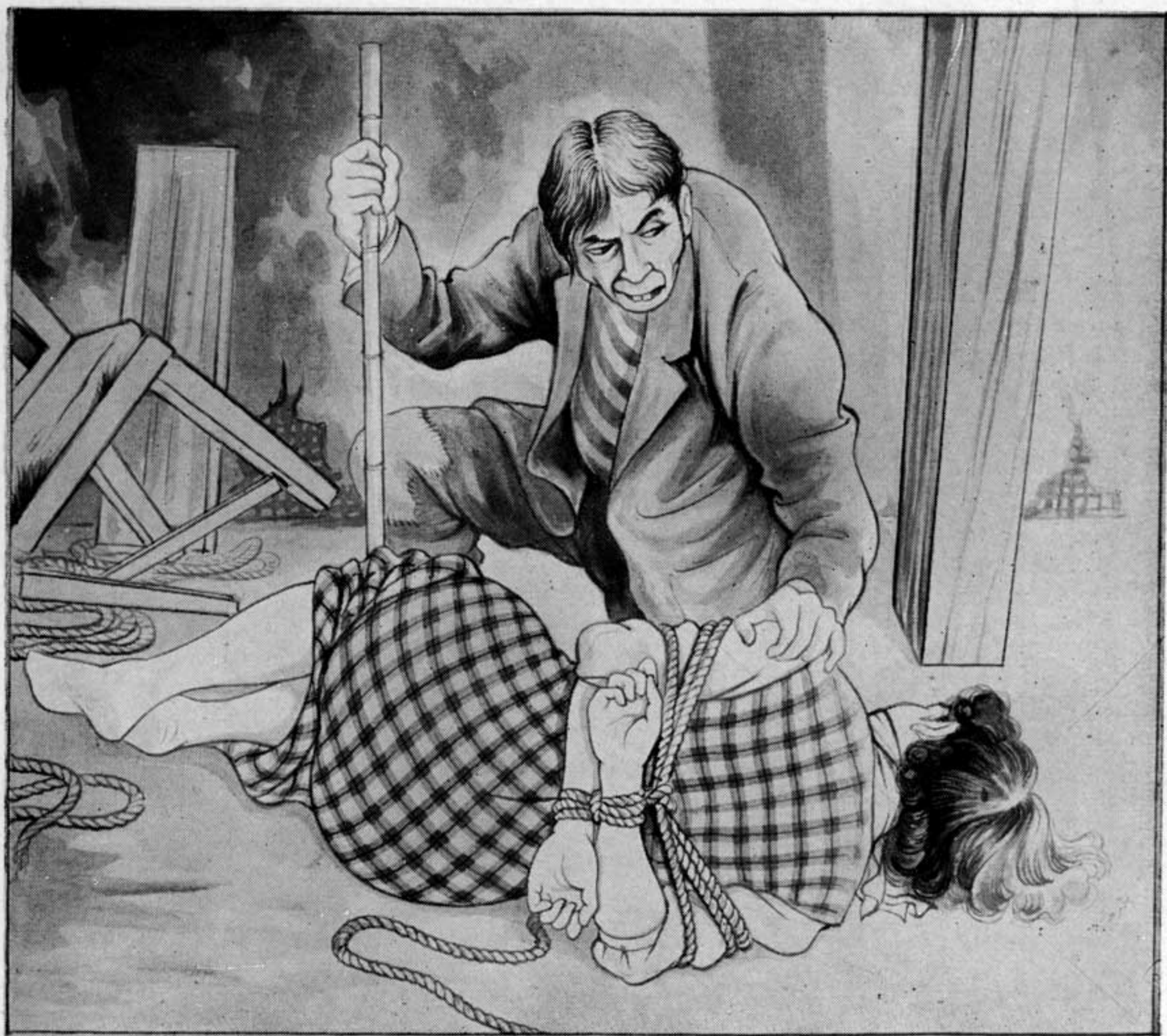
が 然とした、物置のような此の部屋のうす暗さに眼が慣れて来ると、貴美子は自分の傍にうずくまつている怪しい人影を見付けて危く声を出しそうになつた。だが、いつの間にはめられたものか、口には猿轡がかまされている、その上、荒縄で後手に縛り上げられているのだ。

「フ、フ、。気が付いたようだね、貴美子さん。フ、フ、」

そう云つて彼女の顔を覗き込みながら、すり寄つて来るのは、せむしの三公であつた。

「……何も、おいらはこんな手荒いこたあしたくねえンだが何しろ親分の云いつけなンでね。お前さんの兄貴のことで親分は凄く気が立つてるンだ、素直に兄貴の居所を教えてくれりやア痛い目を見ずに済むんだが……」

三公は猿のような顔を歪めてにたにた笑いながらそう云つた。貴美子の兄の浩司が、土建業新井組の親分源三が囲つていた女と手に手をとつて逃げ出した爲に、妹の貴美子からその居所を訊き出そうと焦っているのだ。しかし彼女は兄の居所などを知る筈もなかつた、業をにやした源三は貴美子に眠り薬を飲ませて自宅の物置まで三公に運ばせたのである。





お い貴美子、浩司の奴ア何処にかくれているんだ。俺の面に泥をひっかけやがったあの野郎と由美の阿魔を探し出して、たつぷりお礼がしてえんだが、素直にしゃべってしまわねえと痛い目を見るぜ。おめえが知らねえ筈はねえ」
 先刻事務所で貴美子を訊ねてきた言葉つきとはガラリと変つて、どてら姿の新井源三は眼を光らせて貴美子に迫つた。
 「そうだぜ、親分の云う通りだ。痛い目に逢わねえうちに早いとこしやべつてしまつた方がいゝぜ。浩兄貴は由美さんをだまかして連れて逃げただけじゃあねえんだ、明日人夫に渡さなきやあならねえ十五万の金を行きがけの駄ちゃんにかつさらつて行つたようなひでえ男だ、どうせ捕まるんだが、そうなつてからじゃあ遅いぜ、おめえの口から親分に頼んで詫びごとの一つも云つて居所を明かすのが本筋じゃねえか」
 三公も伸びない背を不気味に曲げて、源三の尻馬に乗り貴美子に強要するのだつた。日頃から貴美子に身の程も知らず横恋慕していた三公は内心では何を考へているか知れたものではない。恋のかなわぬ意趣ばらし、案外貴美子が浩司の居所を知つていると源三にたきつけたのも此奴かもしれない。
 「……あ、あたし兄が何処に居るのか存じません……」
 何度訊いてもそう答える貴美子を強情な娘だと源三は責めにかゝつた。
 「おい。三吉、一度身體に訊いて見ようぜ、ピラを引んむいておしやかにしてしまえッ」
 縛られた縄を解かれて逃げようとする貴美子に、源三と三公は狼のようにおどrikaゝつた。

悲

鳴を上げて、外に聞える事もない密閉された物置小屋の中で、貴美子はブラジャーとパンタロン一つの姿にされたまゝ悶えていた。逆さまに吊り上げられた足首に喰ひ込む荒縄の痛さ、そして後手に縛られた両腕が今にも折れそうな気がするのだ。

源三は貴美子のそんな姿を眺めながら、浩司と一緒にづらかった由美の肉体を思い出していた。

（あんな由美などのような女に比べたら、此の貴美子はどうしてどうして、てえしたものだ。えへへ）

貴美子の悶え苦しむ姿を見ながら、源三はだんだん自分から逃げ出した由美の面影が薄れて行くのを感じている。今まで考へてもいなかった貴美子に対する淫らな気持が頭を持ち上げて来るのだ。それは浩司と由美に対する怒りが矛先を変えて燃え上ったものかも知れない。

「あ——ッ。ひい——ッ」

三公の突つき廻し叩きつける竹棒のあくどい責め方に、貴美子は髪をおどろに乱して冷たい床の上に身をくねらせた。「どうだ。これでも云わねえか、これでも……」

源三は何かに憑れたように口走りながら内心

では浩司の行方も由美のからだも、十五

万円の金のこと、どうでもいい、

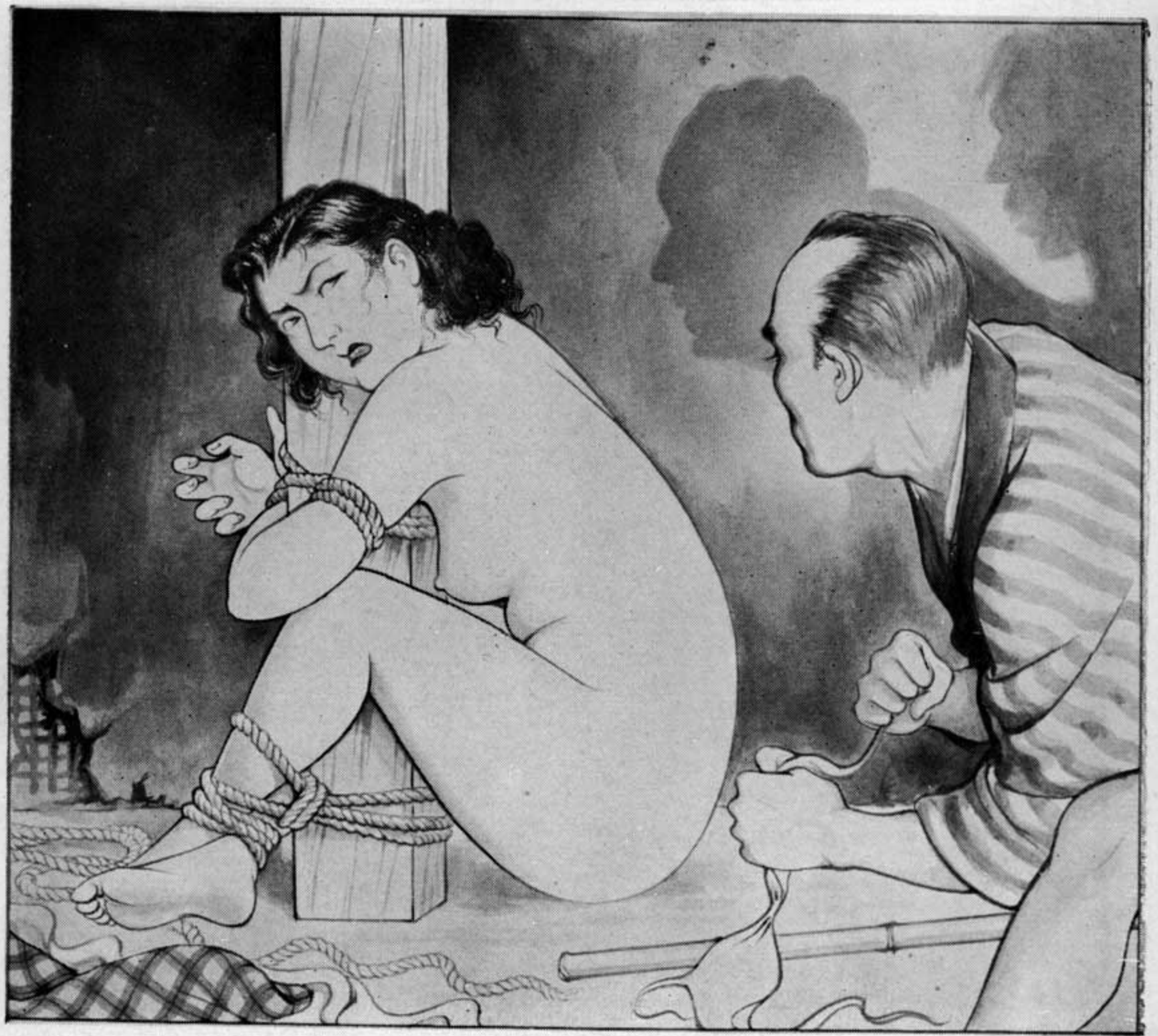
ような気になっていた。

たゞ眼の前にあ

るものは貴美子

の肌だけだった。





貴

美子は羞恥と恐怖と絶望に悶え続けた。

うすぐらい物置小屋の中にも、その裸身は白く純のよう輝き、苦痛と羞恥にタラタラと流す脂汗が処女の肌からえも云われぬ香りを部屋の中に発散させて源三と三公の鼻腔を擦るのだ。

「貴美子、強情を張らずに、浩司の居所を云ってしまつたらどうでえ……」

源三はまだそんなことを訊いている。それはもう、自分の欲望をかくす手段の一つの現われでしかなかった。

親分がそんな気持の変化を起していることを全然知らないせむしの三公は、たゞ此の機会に翻れる美女の肌の柔らかさに酔っているだけなのである。此奴には始めから浩司も女も金も頭の中にはない。

三公の爲に柱を抱いたような恰好に縛られた貴美子は、無慙にも一絲もまといつていなかった。くると独楽のように動き廻るせむしの姿は、あたかも犠牲を捕えた蜘蛛の姿であつた。

「え、へへへ。親分こうすりやアどうでがす」

そう云つてジロジロと貴美子の肌を眺める三吉の眼に源三は火のような嫉妬を感じた。畜生！、此の女の肌を貴様等に自由に眺めさせてたまるか！ 源三はそんな気持になつていた。浩司も由美も何処にでも消えてしまえ！

「おい、三吉ッ貴様ア外に出てろ！」

俺は貴美子のからだから十五万円を取り返すのだと源三はそう心の中で独り決めにして三公をにらみつけていた。

縄と刺青

北多玲子・文



口 絵	(四色) 美しい獲物……………北原環画
（悦 ストオリイ） 蜘蛛……………文 喜多月大子	
賜ぶられるやわ肌……………本誌特選写真	
縄と刺青……………喜多玲子画	

まにや地獄 第四回 女装男……………日夏由紀夫 (24)	
------------------------------	--

巧妙な女装によつて彼の生活は一変した！ 婦人便所やプールの脱衣場でたかぶる官能……

続 刑事部屋の拷問 (女性篇)……………三谷祥介 (36)	
-------------------------------	--

好評を博した前回の続篇！ 警視庁生活二十年の筆者が豊富な資料によつて描く力作！

(小説) 夢魔……………松井頼子 (50)	
-----------------------	--

責めて、責められて、のたうつ女の濃厚な官能を麗筆に描き盡す新鋭女流作家の圧巻！

芸談 浪花節と血……………正岡容 (90)	
空 裸になりたがる淑女……………武野藤介 (69)	

そごみああの断層……………鹿火屋一彦 (140)	
--------------------------	--

——男色を不可解とする人のために—— ソドミアの権威があらゆる角度から抉る生態！

日本刑罰史 第四回 女犯刑絵巻……………菊山進 (126)	
-------------------------------	--

ア ストオリイ 嗜虐の果て……………黒須芳男 (113)	
------------------------------	--

玲子十二月画集「雨」……………喜多玲子 (104)	
---------------------------	--

特集・変態人性記 (あぶ・せくすありす)

惨酷 鬼……………(男性サチ)……………三森四郎 (98)	
-------------------------------	--

切斷された女体を見てカッと疼いた心！ 果てしなき嗜虐の泥沼に아가く男……

秘密な淫蕩……………(病癖処女)……………赤沢澄子 (174)	
---------------------------------	--

満員電車や映画館内でイタズラされる処女の羞恥と奇妙な快感！

畜類人間……………(男性マソ)……………宮内二三夫 (134)	
---------------------------------	--

犬小屋に入られてチンチンする私！ 美しい奥さまに騎ぶられて、踏まれて……

悦楽の悲鳴……………(女性マソ)……………青山いずみ (44)	
---------------------------------	--

兇暴な夫に縛られた私は浴槽に浸けられる……この苦痛、恐怖の呼ぶ激しい快感！

執念日記……………(レスボス)……………草葉蓉子 (120)	
--------------------------------	--

醜女ゆえに同性の肌を求めてのたうつ官能……孤独な美容師が辿る同性愛地獄……

蒼ざめた色情……………(ソドミア)……………駒井登 (62)	
--------------------------------	--

結婚したソドミニスト。これ程悲惨で滑稽なものはない。それは灰色の新婚旅行だった！

ガミアニの閨……………(女性サチ)……………国方万里子 (83)	
----------------------------------	--

純真な女学生に嗜虐を加えて欺ぶ美貌の女！ 奇怪なサチズムの遊戯が次々と進行する……

レスボス通信 (女性だけの秘密な愛のサロン)……………園村恵子 (147)	
---------------------------------------	--

そごみあ通信 (そごみああの秘密な交歓室)……………藤井晃 (168)

読者交歓室 (サチ・マソ・ソド読者の新設サロン)……………(163)	
------------------------------------	--

閉された女体……………鳥羽瑛子 (152)	
-----------------------	--

世間や家族から取り残された雙啞娘の生理！ 兄夫婦の秘事をソツと覗き見る彼女の燃える眼……

落城秘史 第二回 伊丹落城哀史……………岩堀光 (182)	
-------------------------------	--

城主に逃げられ、敵に通じた将士に落城を迫られた悲惨な伊丹城！ 姦される愛妾上臈たち……

連載第二回 サチイズム小説 奴隷祭……………D・B・アレラ原作 三宅一朗訳 (74)	
--	--

兇暴なサチズムに憑かれたアスコットと気が狂ったイヴリンの凄まじい情痴！ 益々白熱！

表紙・秋吉 樹 目次絵・浜田 稔

総頁



九
玲
子

風 俗 草 紙

現代人の新しい趣味雑誌



十一月号



1

千吉の、この、世にも奇妙なくわだてが、あんなに易々と成就した事のかげには、彼が、天涯孤独ひとりの身寄もない、アパート住いの身の上だと云うことや、そのとき、恋人はおろかな素因として横たわっていると云えるだろう。

実際、彼は淋しい青年だった。ある小さな会社へ出ていたが

ま
に
や
地
獄

第四回

女 装 男

若い娘たちが組をなして、花束が崩れるようにどつと飛び込んでくる。そうして、くすぐり合ったり、笑ったりしながら、忽ち薄いパンティと、乳おさえだけに……それもとつてあられもない姿になり、會館専用のビツチリした水着にきかえるのである……

日 夏 由 紀 夫

水 澤 深 雪 画



女友達一人出来なかつたのだ。と云うのは、彼は、少年の時から、ひげも殆んど生えて来ず、肩幅もせまく、皮膚は生白くぶよぶよで、一見して女みたいで、男らしい特色は何一つもつていなかったから。女は、こういう男を嫌うものだ。

「あのひと、イヤ。何だか、氣味が悪いわ、そばへ寄られたただけで……」

女はみんなこう云つて、眉をひそめ、彼に近寄らなかつた。だから、女友達をもたない青年の例にもれず、彼も毎日を、寢床のなかで、女のあらゆる姿態についての妄想になやまされ

ながら、うつうつとして愉しまなかつた。

そういう妄想がこうじたのであろう。ある晩彼は夢をみた。

……ヘンな夢だつた。彼が女になつて、女達にかこまれて生活するという夢なのである。夢のなかでは、女達は、現実のよう
に彼をおそれず、すつかり氣を許して、接吻や、あるいはもつ
とひどいことまで、平気で彼にゆるす。もとより、彼も女なの
だから、女同志の接吻や、同衾もそんなに奇異なことではない
が、不思議なことには、それを感じる彼の感覚だけは、ちやんと男のまゝなのだ。そんな夢だつた。

真夜中に目をさました彼は、今見た、その奇怪な、そして甘
美な夢をしばらく、回想して、楽しんでいたが、……その時だ
彼が、その奇妙なくわだてを大膽にも思いついたのは。

女装して街を歩く！

彼は、この計画を空想するだけで、異様な興奮をおぼえ、あ
ぶらあせがじつとりと軀ににじんでくるのをどうしようもなか
つた。

それからの彼は、綿密な計画を立て、それを一つ一つ実行に
うつして行つた。それが彼の生活の唯一つの生甲斐となつた。

彼の頬はにわかに生々と輝きはじめみるからに楽しげだつた。

第一に、彼は、髪をのばしはじめた。会社では、「芸術家ぶ
るない」など、冷かされたが、幸いだれにもそれはあやしまれ
なかつた。ちやうど、ブワドルカットという男のように短かく
かりあげた髪が流行つているときだから都合がよかつた。彼は
その髪にしようと思つた。

それから彼は、薬屋からエヴァクリームを買つてきて、軀ち

ゆうの生毛をたん念に、とりはじめた。ことに、足と手先に氣
をつけた。そのために、二三回、それをくり返すと、もともと
女みたいだつた彼の肌は、毛のほとんど生えてない、ぽつてり
とした肌になつた。

一番の難関は何と云つても、服装だつた。彼は、よつぽど、
和服にしようと思つたが、和服をそろえる金が彼にはなかつた
ので、洋装ときめ、服は、なるべく手足を包みかくすような型
のものを既製服で買つた。一番恥かしかつたのは、下着をそろ
える時だつたが、彼は、わざと場末の、小さな洋品店をえらび
出掛けて行つて、

「女房にたのまれたんですけど……」

などと云い訳をしながら、絹ものの下着一式、それに、乳パ
ットやヒップパットまで求めた。靴は、その方が、しりが持上
つて女らしく見えるだろうという配慮から、きやしやなハイヒ
ールを選んだ。

2

こうして、とうとう、彼が、胸をときめかして待ちに待つた
日がやつてきた。

その日、彼は早く会社からかえると、髪を自分でブワドルカ
ットに切り、こてをかけて端をちぎらした。髪が変るだけで、
もう女のようなだつた。

それから化粧にかゝつたが、さすがに、お白粉ののりは悪か
つた。それでも、頬べにをつけ、口紅を思い切り強く引くと、

もうまがう方ない厚化粧の女だった。化粧料の匂いが、彼にはめづらしく、自分で気分をそゝられた。

下腹部はT字帯のようなものをつけてしぼり、その上にパンティを穿いた。少しふくらんで見えるが、その位ふくらんでいゝる女はいゝるものだ。

コルセットのなかにヒップパットを入れ、乳当てをつけ、スリッパをつけると、まつわりつく、柔らかな女の肌のような絹の下着の感触が、彼を不思議な陶醉にさそうのだった。

彼は、そうして、すっかり仕度をとゝのえると、ハンドバックをもつて鏡の前に立つてみた。さすがに、どこか、いかつい感じがして、美しい女とは云えなかつたが、しかし、女であることは、完全に女だった。

はきなれぬハイヒールをはいて、胸をとろかしながら、アパートの廊下に出た。自分では女になつたと思つていても、どこかに重大なミスをおかしているような気がして、千吉は、管理人の前を通るとき、何か云われやしないかと、びくびくしたが、窓口で、新聞をよんでいた管理人は、彼のことをちらつと見ただけで、すぐ眼を新聞へかえした。どこかの訪問客と思つたのだらう。

彼は、この最初の成功に、ホツとした。脇の下にびつしより汗をかいていた。

ハイヒールで歩くことは、思つたより、ずつとむづかしかった。彼は何度もよろめきそうになつた。

彼は、今日、最初にどこへ行くか前から計画していた。その計画にしたがつて駅へ行き、都心までの省線の切符を買つた。

どうしたのか、電車は、ぎらぎちに混んでいた。だれも、千吉の女装を不審がるものはいなかつた。彼の姿を見るものさえ居なかつたが、その車のなかで彼は、最初の、あやしい経験をした。

彼は、人々にはさまれて、白い棒のあたりに立つていたのだが、千吉より二三人向うに、下ぶくれにふとつた顔の、いかにも町娘らしい若い娘がのつていた。髪をくくつて紺のリボンでむすんで、真赤なセエタアを羽織つて、そんな目立つなりをしていたが、男たちにはさまれて、時々、眉をよせたり、けわしい眼をして、うしろの男を振返つたりしていた。何か、いたづらでもされているらしかつた。

そのうちに、我慢出来なくなつたのであろう。人を分けて、千吉の方へ寄つてきた。そのあたり、女は（女のなりをしているのは）千吉しか居なかつた。それで、千吉のそばへきて、千吉に、ニコツと笑いかけながら、

「ごめんなさい……いやンなつちやうの」

そう云つて、軀の前面を自分からピッタリ彼の軀におしつけてきたのだ。ふつくりした娘の軀の温かい、胸や、お腹の円みが、千吉の洋装した軀にほとんど、じかのように伝わり、彼を狼狽させた。彼は思はずツバをゴつくり飲込んだ。

「そうだ。娘は女同志の気安さから、男にいたづらされるのを避けようと、彼に軀の前をあづけにきたのだ」

と、とつきにさとつた彼は、微笑をかえすと、彼の方も軀をくつつけながら、腕をおぶおぶ廻して、娘の腰を、ほとんど、尻に近いふくらみの部分を、そつと、かこつた。娘を男の手か

ら守るためのようにして……。しかし、さとりれやしまいか、
 というおそれの爲に、彼の手はふるえた。

だが、娘は、彼の手が腰へ廻つたのを知ると、

「ありがとう……」

と、恥かしそうに云いながら微笑んで、一層甘えて軀をおし
 つけるようにしてきた。あゝ、その軀の優しい重さ、柔らかい
 肉の微妙な圧迫！ 彼は、美しい娘から、そんな風にされたこ
 とははじめてだった。熱い血が、軀中を駆けまわった。手につ
 たわるお尻の肉は、電車がゆれるたびに、自分の軀をさゝえよ



うとして、グリグリと動いた。……その貴い肉を掌で支えてい
 ても、娘はなんとも云わず、かえつて感謝さえしているのだ。
 それだけでも、彼の苦心はむくいられた、と思つた。娘の足は
 段々おされて、彼の足の間にはさまれるように入つてきた。が
 娘は、それさえ何とも思わず、

「いやんなつちやうわねえ。こんなに混む時は、女は本当にイ
 ヤネ……」

そんな事を云いながら、人なつつく、彼のハンドバックを
 もっている方の手を上から、ぎゅつと握つたが、若い娘の掌は

3

汗とあぶらで、にちやにちやしていた。

この車中の経験が彼の自信をつけた。すつかり大膽になつた彼は、なぜ、早くこの、心おどるような刺戟の強い遊戯を思いつかへなかつたか後悔するほどだつた。その娘に別れた彼は、有楽町で、電車をおりて、巨劇場に入つて行つた。

やつてゐる映画が女性向のせいもあつて、若い、きらびやかな女性が、一杯に入つていて、劇場のなかは、香りの高い花をまいたようだつた。……だから、男達も、千吉のような骨つばい、野暮な洋服姿の女には一人として目をつけなかつた。

入つたときは映画のおわり頃で、女客はハンカチで、涙をふいたりしていたが彼はそれどころではなかつた。胸をおどらしながら、終るのを待つて、ふるえる足で、廊下へ出た。若い女客が、ばたばたと席を立つて、彼をおしのけるようにしながら廊下の突あたりに消えた。

彼の今日の目的は、そこにあつた。FOR・LADY……扉にはそうかいてあつた。女がその秘密をみせる所、……赤裸々な生理の密室。……女が見栄も外聞も忘れて最も女らしい事をする所だつた。千吉は、今まで、何度そこへ入りたく思つたことだろう。……今、それが公然と果せるのだ。

扉をあけると、もうなかは、満員だつた。鏡に向つて口紅をぬり直していたり、なかの個室の扉の前に紙をもつてならんでいた。香料の匂いと、生温い酸性の女の分泌物の匂と、

入れまざつて、甘ずっぱい、あの女のトイレ特有の匂いが部屋一杯にこもつていた。

彼は思わず、頬に血が上るのを覺えたが、だれも彼を見るものはいなかつた。どの女もみんな自分の生理にだけ夢中で、外の女になぞ関心をもちたないのだ。

「あゝ、もつちやうわ。……ずつと我慢してたの。……早くしたいわ」

番を待ちながら腰をおさえて、そんな事を友達にさゝやいてゐる娘さえ居た。男が一人も居ないという気安さからだろう。千吉が男だと云う事を知つたらどうだろう！

前の扉があいて、美しく着かざつた和服の奥さん風の女が、前を乱したまゝ出てきて、千吉の真ン前で、パタパタと、お腰から直しはじめた。ちりめんのお腰のなかに、餅肌の真白いふともゝが、根本の方まで、一瞬あらわに見えた。パンティははいてないらしかつた。

千吉が、扉のなかへ入ると、その奥さんの捨てたもゝ色のキレ紙が、いく片もういて、いゝ匂いを放つていた。

前でも後ろでも、若い女らしい、華やかな、勢の良い音がきこえた。高い音。ひそやかな音。紙を使う音。彼は、女の香にむせそうだつた。……しばらくして出て、鏡をのぞくと、興奮のあまり、彼の顔色は蒼白かつた。頬紅を濃くつけ、髪に手をやると、彼は、やつとの思いで、そこを出た。

——それから、彼は、会社を無断で休み、憑かれたもののやうに、この珍奇な遊びに熱中した。それでも晝間は、さすがにポロの出ることをおそれて部屋のなかにとちこもり、夕方から

町へ出て、あつち、こつち歩きまわつた。

最初の日の経験に味をしめて、混んだ電車や、混んだ映画館に、好んで入つた。そうして、男のなりをしていては、到底味はえない愉楽を味うのだつた。

混んだ電車や映画館のなかでは、男と女は敵、女同志は味方であつた。そこでは、声のない戦いがひそやかに行われる。ほんの偵察から小ぜり合いから、もつと深い深刻な戦いまで、間断なく行われ、うめき声や、声にならぬ悲鳴が、場内に充満する。そういうとき女は女同志、難をさけて寄りあつまるものだ。千吉はよく、前後左右から女にかこまれ、身うごきも出来ない事があつた。手をうごかせば手が、女の下腹部に当り、足をうごかせば足が、女の足にからまる。胸も背中も女の乳房で息も出来ないほど、おさえられてこすられ、ぐつしよりと、軀中、あせにぬれそぼることがあつた。以前は、電車のなかで、千吉の手がふれただけで、女は、離れて行つたものだつた。しかし、段々、回をかさねるうちに千吉はこの程度の刺戟にはなれつこになつてきた。

そして、もつと、あくの強い、もつとドギツイ刺戟を求めた。二度、彼は、遠い街の銭湯に出掛けて行つた事があつた。湯道具をかゝえて、女湯ののれんをくぐり、脱衣所のところでカゴを前にしながら、ゆつくり、ゆつくり着ているものをつて行く、そして、最後の裸体になる寸前に、急に、気がついたふりをして、またあわてゝ服を着なおし、「玄関に鍵をかけてくるのを忘れたから」と番合に断つて、出てきてしまうのだ。——その、わづか二分か三分の間に、着物をぬぐ女、鏡の前に

全裸で立つて、自分の裸に見とれてゐる女、足をぶざまにひろげてふいている娘などを、眼の底に焼きつけるように盗み見た。これはたしかに新しい刺戟だつた。

女便所とは違つた、もつと健康で、あけひろげた女の姿態を見る事が出来た。温いモヤにつつまれた女の桃色にゆだつた裸は、思わず見とれる程、貴く、美しかった。着飾つた女の裸が案外見すばらしく、カンタンなブラウスと、よれよれになつたスカートなど着た十六、七の町娘が、裸になると真珠貝から誕生したヴィナスのような肉体をもつていたりすることを、発見するのだつた。

——だが、何と云つても、この大膽な銭湯行は危険すぎた。一つ間違えば、大騒動になる可能性が強かつた。——それで、もつと安全な、そして、もつと落付いて、女の裸を見られる遊びを考えついたのだ。

4

彼はある日、神田のある宗教団体の女子会館が、女の傭員を募集しているのを新聞広告でみた。彼の目をひいたのは、その仕事に、女子プールの清掃及脱衣所の管理と断つてあるからだつた。女にとつては、こんな小使のような仕事は、あんまりうれしくない仕事だつたろうが、千吉にとつては何ものにもかえがたい、有難い仕事だつた。もう、彼が女装をはじめて、何ヶ月もたつていたから、服装もこなれてき、身のこなしも、どことなく女らしくなり、女の会話もそんなにまごつかなくなつ

ていた。(太い声は直しようもなかったが)

それに、プールの清掃人なんかの採用は、だれもやかましく云わなかったから、行つたその日から採用された。

「あんたみたいな若いひとが、どうしてこんなことを志願したの。月給も安いんだよ」

と、断わられたが。

もう季節は秋だつたが、さすがに外国資本でたてただけあつて、暖房設備のある温水プールだつたから、プールへ泳ぎにくる娘たちはたえなかった。

会員は、殆んどが、はいつつとした未婚の上流家庭のお嬢さんで、外国の娘も多く、国際色豊かだつた。これこそ、彼が夢みたこと、いや、それ以上だつた。

プールのわきの部屋に、ロッカーがずらりとならんでいる。その入口に、カギをもつて腰かけているのが彼の役目だつた。間違いないように、見守つていれば、それでいゝのだ。たゞ女のなりをするだけで、こんな世界が彼の前に、何の造作もなくひらけるとは！

若い娘たちが、たいてい組をなして、花束が崩れるように、どつと、飛込んでくる。そうして、にぎやかに笑つたり、くすぐり合つたり、飛びはねたりしながら、色とりどりの服を忽ちぬいで、うすいパンティと、乳おさえだけになり、……そして平気で、それもとつて、あられもない姿になり、会館専用の黒い、ぴつちりした木綿の水着にきかえるのである。(水着の持込みは許されなかった。必ず、そのうすい黒のタイトな水着をきなくてはならなかった)



なかには、友達同志で、素裸のまま、軀を見せつけたり、
「あら、こんな所に、キツスマーク！　すごいわねえ、だれにつけて頂いたの！」

「違うわよ。……あなただつて、ほら、この辺のズイこと！　たくましいわねえ。前よりまた濃くなつたぢやないの？　ちよつとさわらせてよ」

「ひやア。くすぐりたい！」

など、云つて、キヤツキヤツとふざけつこしたりする。男子禁制という気安さから、思い切り大膽になるらしかった。

外國娘の裸も、千吉は、はじめて見る事が出来た。血管が見える、すき通るような白い肢や手に、金色の生毛がうづまいていた。体毛は、金の針金を、こんぐらかしたように見え、おそろしい程の毛深かさだつた。

外人娘のパンティは、一体に、ほんの申訳のようなもので、よくあれで平気で街をあるけると思えた。しやがみでもしたら大変なことだろうと想像された。自動車にばかりのるので、あれで済むのだろうが、……ほとんど覆う役をしていない体裁だけのものだ。

5

こうしてだれにも不審がられずに二週間ほど、無事に通つたが、突然全く思いがけない事が起つた。

あるとき、一人の若い娘が、ロツカーに入れといたさいふが無くなつた、とさわぎ出したのだ。

もし盗難でもあれば、彼の責任である。彼も蒼くなつた。

所が、しばらく騒いだあとになつて、その娘が、思いちがいして、別な所に、金をしまつていたことが分つた。——真理子というその娘は、そんなことで、千吉にめいわくをかけたことを済まながつて、何度もあやまつたが、二三日して、再びやつてきたときに、洋菓子箱を千吉の前に出した。

「おわびの印しよ。あがつて頂戴！」

「そんなこと……」

それがキツカケになつて、真理子はくると千吉に挨拶するようになった。

「あなた、何ておつしやるの、名前」

「とし子つて云うの。平凡な名前ですわ」

千吉は、こゝではとし子と偽つていた。

「ぢや、これから、トシ子さんつて呼ぶわ。トシさんは私より、幾つ位、お姉さんなのかしら」

この美しい娘に、験べられるように見られると、千吉は、女装を見やぶられはしまいかと思つてびつしりと汗をかいた。しかし、こんな美しい未婚の娘と口をきくことはふるえるような喜びだつた。

真理子はブルジョアの娘らしくいつも良いなりをしてきた。

下着なんかも豪華なレースを一杯つけたもので、すらりとのびたむき出しの足は、若いめ鹿のようだつた。裸になつた胸にロケットが、ぶらさがつてゐるのを見て、注意して、とつてやり「いゝロケットね」

と賞めると、

「上げるわ」

と、事もなげに云うような娘だった。

何故か、真理子は、粗末な服装をしたあまり見栄のしない千吉に、自分から近づいてきて、

「私のお家へ遊びにこない？」

と、さそつたりした。千吉はときまぎして、

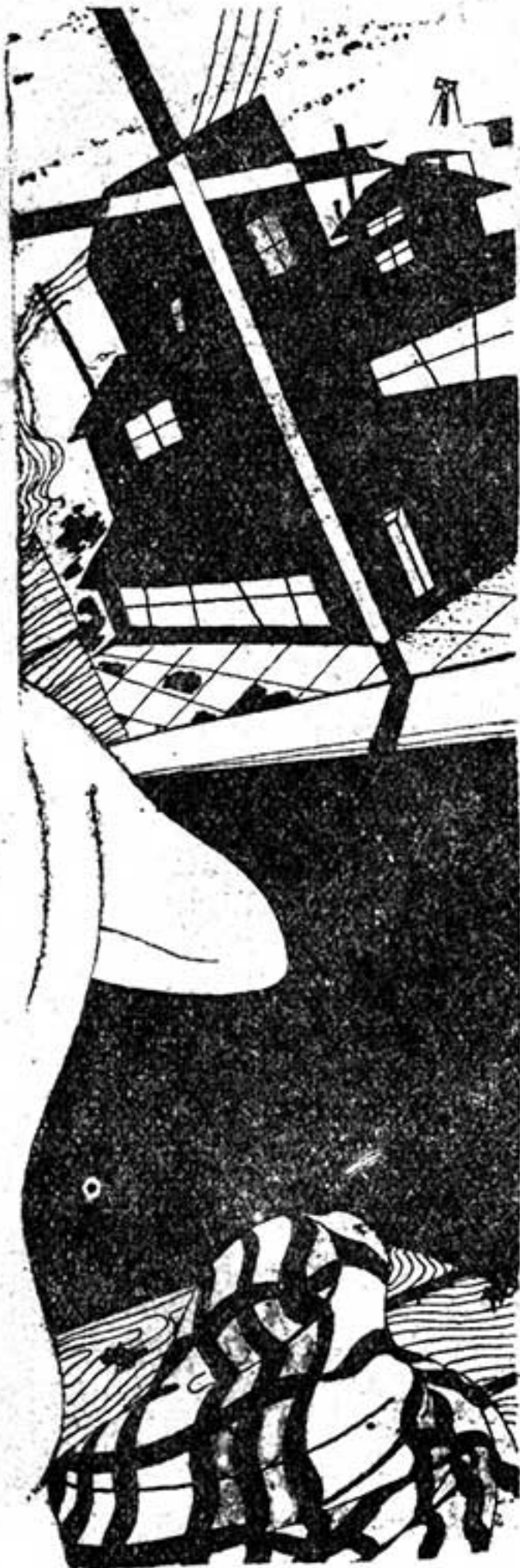
「だつて、私なんか。……いゝお友達が一杯いらつしやるでしように」

と口のなかで答えると、

「遠慮なんかなさるもんぢやないわ。いらつしやいよ。私、あなたとお友達になりたいの！」

そう云つて、ふと熱っぽい眼をして、千吉を見つめた。

千吉は気づまりだった。自分などは意識してもらいたくはなかった。たゞ、自分の前で若い娘が、平気で、着ているものをぬいたり、裸をふいたりしていてもらいたかつた。それをじつと喰い入るように見るだけで満足だった。だから、なるべく真



理子をさけるようにしたが、そうすると、益々真理子の方ではつきまとつてきて、

「なぜ、私を避けるようになさるの？ 何故、私の家へ遊びにきて下さらないの？」

うるんだひとみで、恨むように見つめるのだった。

それで一度、真理子の家へ遊びに行つた。本郷の高台にある豪華な邸宅だった。彼女の部屋は洋室で、娘らしい調度一杯かざつてあつた。

「あなたは、アレのとき、どんなバンドなさるの？ 私は、こんなにするんだけど、少しきついよ」

女同志の友達というのはじきそんな話をするらしく、そんなきわどい話を持ち出して、自分で、それをつけて見せたりするのだ。

「ね、こゝが、少しつれるでしょ。あなたのは？」

「普通のよ」

「見せて」

「イヤ。恥かしい……」

千吉は、危い橋を渡りながら、不思議な戦慄を感じた。ソファの上で、真理子は、千吉の胸に甘えて、すり寄るようになしながら、

「お姉様になつて！ マリ子、あなたを見ると胸がドキドキしちゃうの。……どうしてだか分らないの。毎日あなたのことばっかり考えてるの。……ネ、お姉様になつてエ！」

千吉が男のときは、その女々しさが若い娘に



嫌悪感をあたえた。所が、女装した彼は、今度は逆に、そのなかにある男つぼさが、真理子のような娘の軀をひきつけるのだろうか？……真理子の白いムキ出しの腕が、ためらう千吉の頸に巻きつき、

「男と女のひとつて云うのは、こんな接吻するンですつてね。お姉様、真理子に男みたいな接吻して」

千吉は、思わず、真理子の唇をくわえて、吸った。真理子は、うめいた。……

「あゝ、御姉様。私はじめてなのよ」

千吉は、真理子が、千吉の軀へ手をふれない先に、愛撫する方へ廻らなければ、と思つて、彼女の胸に掌をあてた。ふくよかな、優しい肉のかたまりがあつた。

「イヤ。……何だか、くすぐつたいの」

と彼のひざの上に半分のせた軀をくねらせ媚態をみせるのだつた。真理子の父も母も、彼を娘の女友達とみて安心し、顔も出さなかつた。

6

しかし、こんなことが、そのまゝ済む筈はなかつた。破局は、案外早くきた。

ある日の夕方、いつものようにロッカーのそ

ばにいた千吉のところに、真理子が、ひどく蒼い顔をして入ってきた。

「どうしたの？」

「ね、お願い。あなたのところへ今夜とめて、……私、お家へかえれないの」

千吉は、さつと顔色をかえた。一人でアパートに居ると話してあつたのだ。

「どうしたの。一体、わけを話してみて……」

「ダメなのよ。結婚させられるの。だから逃げてきたのよ。宿屋へとまるのはこわいの、とめて」

「きたない所よ」

「いゝのよ！ ネ、お願い。助けると思つて」

部屋へつれてかえれば、女装がばれるのは必至だ。……だがもし、うまく行けば……千吉は、バレても、おどかせば、騒ぎ立てることはないだろうと、度胸をきめた。真理子のような美しい女を自分のものにする機会は二度と再びめぐつてこないに違いない。バレたら開きなおつて、無理やり関係をつけてしまえば！

「布団も一つしかないのよ」

「いゝわ。一つで……」

千吉が、そんなおそろしい事を考えているとは知らない真理子の瞳は、哀れみをこうようにぬれている。

真理子をアパートの附近の喫茶店にまたせ、彼は、部屋へかえつて、男のもの一切を押し入れへつゝ込んだ。名札もと、靴もしまい、女のものだけ、わざと壁にかけたりした後、真理子

をつれて入った。

真理子はめづらしそうにあたりを見廻し、

「このお部屋とても臭いわ。寄宿舍みたい……」

敏感な処女の神経は、男臭さをそれとは知らずかき当るらしかった。

彼は、真理子の感覚をマヒさせるために、いきなり彼女を抱いて、強い接吻を与えた。

真理子は忽ち、しびれたようになって、

「私、結婚なんていや。お姉様といつまでこうしていたいわ」と、うるんだ鼻声で囁いた。

彼が、台所で、夕食の仕度をしようとする、と、「私にやらせて」と、真理子は、子供がママゴトでもするように、はしやいで、仕度をした。そういう事がめづらしかった。

おそい夕食ののち、彼は、押し入れから、よごれた、せんべい布団を引取りだして、四畳半の部屋の真ん中へ引いた。彼は、その破れ布団にひけ目を感じたが、真理子は、スリリングな冒險でもしているように目をかゞやかしていた。——その布団には、男のもののシミが一杯ついていた。そのよごれによごれた布団で、彼女の処女の肉体は、包まれようとしているのだ。

座布団をおつて、枕にし、

「さア、服をとつて、お寝よ！」

「えゝ……お姉さまも」

故なく頬をそめる真理子が抱きしめたいほど可愛かつた。初夜の処女妻のようだったが、実際、それに近かつたのだ。

「さ、ぬがしてあげよう……」

續 刑事部屋の拷問

(女性 篇)



「おい橋本、この女のからだを調べろ、共産黨は女を使つて變なところへ文書を隠しておくことがある」……橋本刑事はみだらな笑いをうかべたが、水木主任は儼然とした四角な顔であつた。……

三 谷 祥 介

画 大 橋 彌 生

共産黨の大幹部となりいまもお地下にもぐつて活躍している野坂参三夫妻は、終戦になると間もなく十六年目にソ聯から引きあげてきた。彼等は岩田義道とその愛妻宮本菊代の仲に産れたミサゴという美しい女をつれて帰国したが、ミサゴについては次のようなワケがある。

警視庁の特高課に藤井という鬼警部がいた。彼は橋本や土田などという腕利きの刑事を引き連れて、小石川の小日向台町へ捕物に向うところだつた。一行の乗つた自動車は神田橋を渡り鎌倉河岸へさしかゝると、どうしたわけか故障が起つた。そこで藤井等は車内で修理の済むのを待つことになつたが、その

えだが、すでに遅い。いきなり背後から土田刑事が抱きついて大格闘となり、岩田は取押えられて警視庁へ護送された。いつたいこの岩田義道という男は、三・一五の大検挙をのがれて、再生日本共産黨の指導者となり大活躍をつづけていたのであつた。

とき、ちやうど目の前を、ニツカ・ポツカをばいてゴルフ帰りのような風体の紳士が通りかゝつた。よく見るとかねて各署に写真をくばり、特高が手配している岩田義道であつた。刑事たちは腰をぬかさなばかりに驚いて、「あッ！岩田だッ！」と叫んで飛び降りた。これには岩田の方も驚いた。彼は振り向きざまにアストラの六連発——小型ながら精巧なピストルを取り出して身構

彼は昭和三年八月十日の拂曉に捕えられ、

獄中生活を送るうち、肺患のために刑の執行を停止された。岩田は三年目の昭和六年一月に保釈仮出獄をゆるされたものである。だからそれからずつと監視つきの要視察人となっていたが、たくみに見張りの巡査をまいて再び地下にもぐり、こんどは共産党のアジ・プロ部長になつて猛烈に運動していたものだ。

藤井警部は思いがけないところでタナボタ式の大手柄を立て、引きあげると、さつそく取調べをはじめた。しかし岩田はあばれて手がつけられない。翌十月の三十一日には留置場から引き出して真ッ裸にし、刑事が岩田の前と後に四人立つて、水に浸した捕縄を鞭にしてなぐりつけた。これにはさすがの岩田もほと／＼まいつたものとみえ、その日はアジトだけ自由した。それは意外にも成城學園の教授で村井康男の家だつた。

翌日の晝ごろになると、藤井警部はまた岩田を連れ出した。あばれるという理由で、岩田は留置場内でも手錠をかけツ放しにされていた。彼は我慢ができなくなり、

「おとなしくするから手錠を弛めてくれ」と言つた。すると藤井警部はゲラ／＼笑つて、

「お前は少聯の政府から金をもらつていながら、オレは日本の政府から月給をもらつている。だから日本のためにならんヤツは用捨しない。お前の面を見ると日本人らしい。同胞のよしみでオレが飯を食つてゐるあいだ弛めてやる。お上のお慈悲だ。天皇陛下を拜め」と言つて痰唾を吐きかけ、部下の鈴木という警部補に命じて手錠を弛めさせた。ところが岩田は、とつぜん鈴木警部補に体当りを喰わせて、仰向けにぶツ倒すと足で蹴つた。

「この野郎ッ！」

部屋にいた特高の刑事が総立になつた。岩田の顔面には刑事のメリケンがところかまわず乱れ飛んだので、岩田はノビた。

「目がアガつたようですが、どうしましょうか」

土田刑事が藤井警部に伺いを立てると、藤井は片手に弁当箱を持ち、右の手には鰻の蒲焼をはさんだ箸を持つて出てきた。

「留置場へほうりこんでおけ」と言つて、藤井はうまさうにその場で蒲焼を食つたのである。

岩田義道は翌日の十一月二日午前零時三十分五分に、たれひとり看護するものもなく、留置場内でさびしく息を引き取つた。ときに行

年三十六歳——彼の死体は、実妹の野々垣しき子に引渡され、共産党の連中が立會で、医博安田徳太郎の執刀のもとに解剖した。岩田の死体は大腿部や胸部に大量の内出血があり人爲的なものと報告された。申上げるまでもなく特高刑事の拷問によるものだつた。

党のために殉じた岩田は、両親や妻子に対する愛情がまことにこまやかであつた。岩田が死んだ後の宮本菊代は、早稲田の鶴巻町に住んで、ささやかな喫茶店を開いた。彼女は愛娘のミサゴをいつくしみ、掌のうちの玉として養育していたが、特高の刑事は蛇のようにつきまとい、片ときたりとも眼をはなすことがなかつた。

そのころモスクワには、老年となつた片山潜に代つて、バリ／＼活躍している青年闘士の山本懸蔵というものがいた。彼等の同志は『山懸』と呼んでいたが、特高の刑事は山犬と呼び、獅子より怖い男であつた。妻の関まづは浦汐斯徳の日本人街で、料理屋の酌婦をやつていた女である。

ロシア人の名にウラジイ・ミールというのがたくさんあるが、ウラジイは直訳すると支配という意味で、ミールは世界ということである。つまり名によせて世界を支配せよというのだ。オストツクは東方の意味だから、浦汐斯德は『東方を支配せよ』という意味の地名で、日本にとつては有難くない。ところが関まつはウラジイオストツクで、その地名の直訳どおり腕に筋金を入れて山懸と夫婦になった。

このすごい女闘士は新婚気取りで内地へ潜行し、コミンテルンのテーゼに従つて働いたが、山懸は特高の刑事に芝田村町のアジトを突き止められ、豪雨の中を逃げ出すと、同志にたすけられて列車の火夫に化けこんだ。彼はそのまま北海道へ飛んで漁舟に乗りこむと浦汐斯德へ辿りつき、ようやくモスクワへ往つたものである。

山懸は逃がしたが、妻の関まつは、特高の名譽にかけて逮捕しなくてはならぬ。こうして血眼になり探しているところへ、思いもよらぬ情報が入つてきた。

関まつは狸穴町のソ聯大使館にいる——というのだ。刑事たちはこおどろしてよろこんだが、大使館は治外法権だから立ち入ること

が出来ない。しかし根気よく待つておればきつと出てくる。そこで大使館を夜となく晝となく見張りすることになった。それにはしつかりした者を責任者とし、張込みの重任を申しつけねばならなかった。白羽の矢をたてたのは伊東元広という刑事だが、彼は平刑事ではなかつた。四五人の部下を自由に使つていくデカ長で、ソ聯の事情には非常によく通じていた。というのは田中内閣のとき、郷里の長野の聯隊からシベリヤ出兵して、満期になるとモスクワへもぐり込み、靴磨きなんかをやりつゝ露語を勉強した男である。

「やりましよう、引受けました」

と伊東は課長の前で胸を叩いた。

「君なら申分がない」ということになり、いよく張込みにすることになったが、これはしかしたいへんな大仕事であつた。

伊東は妻を迎えたばかりで千葉の中山に住んでいた。なぜそんな遠方から通勤していたかと言うと、ちようど適当な借家がないので当分のあいだ女房の里方で寝起きをしていたのだ。さて張込みの責任者になつてみると、千葉の中山へ帰ることが出来ない。夜は狸穴町の街頭へ自動車を停めて、その中で見張りをした。部下の平刑事と交代したときは、特

高の宿直室で寝るという工合だつた。一ヶ月くらいなら我慢も出来るが、この勤務が六ヶ月つゞいた。普通の刑事ならまいるところだが伊東は降参しない。天皇陛下のために生命を賭して使命をはたす決意である。

「伊東はいいが、細君がかわいそうだ」という刑事もいた。

「夫婦になつたばかりだ。細君にはまだあのいい味がわかつていないよ。われ／＼が考えるほどではないさ」と言つて笑う刑事もいた。しかし笑つてはいるが、心中では驚いた。まつたく掛値なし、一所懸命の見張り勤務だつたので、同僚たちは舌を巻いた。

ある日、特高の平刑事が、伊東の代理になつて、中山にいる細君に月給を届けに往つたことがある。彼は部屋へ歸つてきて、

「伊東の細君がでかい腹をしている」を報告した。

このことを聞いた課長は顔の色を変えた。「しまった。伊東の勤務が長すぎたのだ。若い身空だから細君が情夫をつくつたのかも知れぬ」と思つた。

わき目もふらず、忠実に見張り勤務をやつ

ている伊東に、妊娠してでかい腹を抱えているなんて、もし告げ口でも仕様ものなら、狂人になるかも知れない。課長は思いなやんでいたのであつた。

ところがそれから間もなく、妙な噂が立ちはじめた。夜になると終電車で細君が東京へやつてきて、伊東が見張りしている自動車の中へ姿を消し夫婦のイトナミをしていると言ふのだつた。それだけのことなら愛嬌のある笑話ですんだが、ソ聯の大使館にかくれている関まつがそのことを感づいて、伊東夫婦がイトナミしている最中に、大使館から抜け出したという確実な情報が入つた。

「なんてダラシのねえ野郎だ」

と課長は真ッ赤になつて立腹したが、とにかく関まつは、ソ聯大使館のほかには身のおきどころがない女だ。いきなりモスクワへ潜行することはきまり切つたコースである。なにはともあれ、早いところで手をうたねばならなかつた。

そこで全国の特高警察に関まつの手配をするかたわら、高橋鉄夫という刑事がすぐさま彼女の後を追つた。そして彼は下ノ関を固め

て見張勤務に服したのだ。泉原信吉という刑事は、その夜の汽車で青森へ急行した。申上げるまでもなく北の出口の青函を固める役目であつた。かくして日本の港という港は、各署の特高刑事が嚴重な張込み勤務についた。にもかゝらず二十三日目に、警視庁の特高部へ宛てゝモスクワから関まつ電報が打つてよこされた。それには、「下ノ関の張込み

ご苦労さま。モスクワへ無事着きました」とあつた。

関まつが下ノ関から船で渡つたとすれば、いったいどんな姿で船に乗りこんだか？ もちろん県の特高も高橋刑事に全力をあげて協力したことであるし、まさか見のがしたとは思えない。こゝに不審なことは、早稲田の鶴巻町で喫茶店をやつてゐる宮本菊代の家から



彼女のいとし子であるミサゴの姿が見えなくなつたことだ。

ミサゴは当時六歳であつた。特高の刑事はミサゴのいなくなつたことを不審して、母親の宮本菊代を取調べたが、彼女は家出をしたと答えるだけだつた。

六歳の少女が家出をして、警察へ届出もせず平気でいられるというのは、きつとその裏にコンタンがある。特高では関まつが刑事の眼をくらすために、男装してミサゴの手を引き、下ノ関から船に乗つたものであらうと判断した。それは後になつてアテのはずれた観察ではなかつた。

しかし母親の手許から愛娘のミサゴを取りあげたのは、つまるところ特高刑事の仕業だつたと言えないことはない。

夫の岩田義道は刑事部屋で死に、今またミサゴを手許から無くした宮本菊代を想うとき世の中にこれ以上のせつない拷問はあるまい。

「日本の武士道精神は一朝一夕に出来あがつたものではない。われ／＼が祖先の血をうけついで、やがて血となり肉となつたものだ。

しかし日本の共産党はまだ幾年も経つていない。彼等はいちじの思想カブレだ。こんな連中は刑事部屋へ連れてきて、ヒドイ目に遇わせる。と転向する。ことに女の共産党はこッピドクやつつけて転向させねばならぬ。女は子を産むからね。こんなヤツの子は先天的に血から肉から共産党になりきるのだ。そうなつては天皇陛下に対して洵に相すまぬことだ」と、特高の課長は部下の刑事を集めて訓示した。殺してもよろしいとは言わないが、殺すような結果になつても、いたしかたがないという口ぶりだつた。

関まつがモスクワ入りして間もなく『学生社会研究会事件』というものが勃発した。帝大（現在の東大）には新人会という尖鋭分子の集りがあつたが『学社研』は、新人会に働きかけ、ひそかに大学内に党の拡大を計画していた。これを警視庁の特高刑事が嗅ぎつけて調査すると、中心人物として現われたのが共産党の大物で是枝恭二というものであつた。さらに掘りさげると、是枝の愛人で女党員の波多野操が浮びあがつた。

操は宮城控訴院長波多野商吉の愛娘であ

る。

まだ若かりし日の波多野商吉が、神戸地方裁判所の判事として赴任し、法に基いてなんの用捨もあらばこそ、片ツ端から共産党員に罪の宣告を与えていたとき、操という世にも美しい女が産まれた。

波多野判事は神戸から札幌地方裁判所長に栄転したが、操も長じて北海道に渡り札幌高女に入学した。のち彼女は東京の女子大に入学して学ぶことになつたが、そこでは是枝恭二を知ることになり、昭和三年二月女子大を退学すると、レポーターとして日本共産党に入つたものである。

『学社研』はひとたまりもなく特高の刑事に弾圧され、是枝も愛人の操も共に刑事部屋へ引き立てられた。だが困つたことには波多野操の取調べである。どこまでも黙秘する彼女を、まさか拷問にかけるワケにもまいらない。地獄の沙汰も金次第という諺があるが、親の光りは七光り、刑事部屋にも宮城控訴院長の肩書ある親の光がとゞいていた。特高の刑事が拷問にかけなかつた女の党員と言え、恐らく波多野操ひとりだけだつたかも知れぬ。



女の共産党員は名家や素封家の出が非常に多い。宮原省久の情人となり党に殉じて働いた小松千鶴子は、長野県上諏訪町の酒造家で小松銀之助の愛娘であつた。小松家は諏訪町で有名な旧家である。千鶴子は東京の女子大に入学したが、のち党員の上條寛雄の紹介で共産党入りをした。

彼女は『労働農民新聞』の発送係をやるかたわら同志間の連絡を受持つていた。

千鶴子は下谷区坂本二丁目の停留場附近で街頭レポの最中に逮捕された。八月九日の暑い日であつた。

「お父さんと呼ぶから転向を誓つて上諏訪へ帰りな。ここでは何もかも残らず喋つてしまふんだよ」といひかせ水木主任が刑事部屋の椅子を持ち出すと、彼女は部屋の中を見下すような態度で、刑事の顔をひとり／＼見詰めてせゝら笑つた。千鶴子を見るからに勝気な性格で、引き締つた細面は美しかった。

居ならんでいる刑事の下司ばつた顔は、上諏訪の実家で働く酒倉の杜氏（とうじ）より以下に見えたかも知れない。特高の刑事はそのほとんど全部が、田舎の貧乏な百姓家に育つた二男三

男坊で、彼等は一徹な真面目さと、天皇陛下に忠義をつくす精神を見ぬかれて、一万五千の巡査の中からえらばれた刑事であつた。四十を過ぎた水木主任も、その生立ちと同じである。彼は千鶴子が自分をバカにしている態度が、天皇陛下をバカにしていることだと思つた。

「仕様のねえ女ツ子だ。お前は街頭レボをやつていたそうだが、文書をどこか隠しているだろう」と言つて水木は女の頬べたをなぐりつけた。

千鶴子はメリンスの単衣に、博多帯を胸高くしめていた。髪もつゝましく引きつめて結い、街頭レボとして働くものの目立たぬ服装であつた。水木主任は女の細紐を取りあげて誰べた。

「おい橋本、この女の局部を調べろ、共産党は女を使つて変なところへ文書を隠しておくことがある」

橋本刑事はみだらな笑いをうかべたが、水木主任は儼然とした四角な顔であつた。

一段高い合の上に女を乗せると、両方の股を広くひろげさせ、裾をまくしあげて千鶴子を立たせた。二人の刑事は女の肩をささえていた。橋本は台の下から千鶴子の局部を覗く

ような恰好で、水道にとりつけたホースを向けていた。まるで消防士が火掛けするようなポーズであつた。

真夏のことはあるが、蛇口をつたつて橋本のあやつるホースから走り出る水は、水圧のために、千鶴子の局部を冷たい錐で刺しとおすような力があつた。

千鶴子は目を閉じていた。彼女は幽かな声で、

「わたしは党に殉ずるときがきた」と自分の肉体に言いきかせた。

そして力いつぱいの声で、

「労働者はきつと団結する」と言つて後方へ仆れかゝつた。彼女は氣絶したのであつた。

日本橋浪花町の花柳街に戸を構え、坂田きよの表札をかゝげて、口紅をつけておしろいを塗り、言葉の訛も芸者衆そっくりのなまめかしさ、妾のように装つて、同志との会合には箱根や修善寺あるいは伊香保のあたりまでお色気の遠出と見せかけていた女。これがなんぞはからん女共産党員中のピカで本名は丹野せつ。彼女は福島県の小名浜町に生れ、看護婦となつて日立鉾山につとめたのが

自活するはじまりだつた。のち東京へ出て芝口の実費診療所の看護婦になつたが、そこで知合つたのが渡辺政之輔というガツチリした男。やがて日本共産党の大幹部になる人物であつた。たちまち二人は結ばれて、丹野せつは女ながらも党になくはならぬ存在となり第二次日本共産党事件に連座した。彼女は檢舉された中のたつた一人の女性であつた。

丹野せつを檢舉するためには、特高の刑事がたいへんな苦勞をはらつたので、それだけに拷問もきびしかつた。けれども彼女はよく耐えしのんで断乎として自由しない。当時せつは三十一歳——色気のうせた年増ではなく芸者に仕立てゝお座敷へ出しても、立派に通用する容姿であつた。

自由しない彼女にも判決が下されて、七年の刑が申渡された。ところが、どうしたわけか、丹野せつは服罪したのである。

共産党員がオノレの罪をみとめて、服罪したという例は、これまでにかつてないことである。彼女は栃木の女囚刑務所に下獄したが丹野せつを知るほどの人達は、郷里の福島県に実母のとし(62)というものがいて、娘のせつを涙ながらにいさめたので、ついに彼女の思想は、母親の愛情に克つことができず、

女らしい気持にかえつたのだというが、はたしてそれが真実であろうか？

だいたい共産党の取調べほど長びくものはない。それにはいろいろ理由がある。ことに女党员の思想は精神的なもので、むしろ多分に宗教的であつた。それゆえ彼女たちはどんな拷問にも耐えて自白しないのだ。

共産党の取調べと言へば、思想的にむづかしく、理窟責めのように考える人があるが、それはまつたく見当ちがいだ。特高の刑事は何時、何処で、誰に会つたかを取調べていた。それに対して黙秘すればいつこうラチがあかなかつた。拘留期間の最高は二十九日である。だがこの期間では追ツつかないので、期間が過ぎるといちど放免して再び検挙し拘留しなくてはならないが、書類の上では放免したことで、引きつゞき留置しておくことを鹽廻しの処分というのであつた。

こうしてまいにち何時、何処で、誰に会つたかを繰り返した。

農村から出てきた無産階級の特高刑事が――共産党の赤旗をかゝげて、そのユートビヤに向つて運動をつゞける大学出の金持の息子

や令嬢を、天皇陛下の名において取調べるのだから、この対立にはなんとも割り切れない諷刺と諧謔がふくまれていた。

しかし女の共産党员を取調べる場合は、特高の刑事にも別な感情が涌くのであつた。彼女たちは刑事になぐられたり巻タバコの火をさしつけられたりすることが、やがて手術台に乗つて外科医にメスで肉体をえぐられるような感じとなり、そのことを繰り返かえしてゐるうちに、肉体を責めさいなむことのヨサを知る女が多かつた。それはちやうど、苦しいお産のあとの、ホツとした安らかな気持で、つかれはてた肉体にはある快感さえともないぐつたり留置場の床の上に伏すのだつた。かくしてひそかに合寄る心は、特高の刑事はなぐりながら、女思想犯人はぶたれながら、その肉体の火花を散らして接触するところに男と女の因果な性慾がほのかにあつた。この事実が丹野せつの服罪を安易に物語る立証にはならないまでも、彼女の心境の変化については、些か参考資料となるかも知れない事を附記して置こう。

★

★

★

愛 読 者 通 信

小生は此の十月号で始めて貴誌を拜見致しましたのですが大いなる喜びをもつて読ませて頂きました。

さて私は二十才になるものですが都内のソドミニストの方と交際致し度いと思つて居ります。都内のソドミア社交場をお知らせ願ひたく思います。(プロフェツショナルな所でもよい)、右に述べたことと別個の事柄としてもう一つ願ひ致し度いと思ひます。都内のソドミニストと交際致し度いと思ひます。で男性的(能動的)の方で二十七、八才以下の若い方(年下でも結構です)

申し遅れましたが年齢二十才身長一六七です現在まで同志との交際はありません。学生です。右御願申上ります。(東京T・Y生)

前 略

御誌愛読者の一人です、廿五才独身、今春大学卒業の会社員、未だ童貞、同性愛的傾向が有り、同性の友を欲して居ります。但し男色には経験有りません。どうぞ、適当な方御連絡、御文通下さい。(東京T・K生)



あぶ・せくすありす

悦樂の悲鳴

時にはフト氣がつくと、私はタイルの上に長くなつて、夫は私にかぶさるやうに人工呼吸を行つてゐる。彼の手が胃の上を壓迫すると私はそのまゝガツとお湯を吐く。しかし私たちの瞳はしつかりとからみ合つてゐる……

青山いずみ

午後五時になると、私は落着か

なくなつて、幾度も時計を見上げる。追われるやうに鏡台の前に坐つて、化粧や着更えにかかるのだけれど、時にはフト口紅を持つ手が止つたりもする。

五時半、ガス風呂に火をつける。

たつた夫婦二人つぎりの世帯なのに、わが家には不似合なほど立派な御湯殿がある。そして、殆ど毎

日御風呂をたてる。

「まあ、御二人つきりですのに、ずい分不經濟でしよう？」

と、近所の奥さんに云われて、私は思わず赤くなつたこともある。御風呂こそは、私たち夫婦に、かくべからざるものになつてしまつたのだから……

すべての用意が手落ちなくとのつて、六時になると、よくよくの事故のないかぎり、門の前に夫の足音がひびいてくる。この時を



私は期待と不安の入りまじった。云ひようのない気持で待っているのだ。その複雑な心理――

ガラリと玄關が明くのと同時に、もう上り口に跪ひざまづいていた私は、

「お帰りなさいませ」

と、挨拶するけれど、夫はその返事のように、無言で玄關の錠をピンと下してしまふ。その音を聞くと、今夜も……と、私の胸は異様に震えてくるのだ。いくら馴れても、その錠がかけられる音を、私は平気で聞き流すことは出来ない。それは、ピシツと、私の躰中に響くのだ。こうして、私達夫婦の夜の生活が始まる。

夫は玄關の式台にドツカリと腰を下す。この時も夫は無言なのだ。私はすぐタタキに飛び下りて、夫の足を膝の上に乗せて、靴を脱がせる。力を抜いた男の両足は重たく、如何にも扱い憎い。しかし、少しでも愚図々々し

ていると、私はイヤと云う程胸を蹴飛ばされてしまふ。

それから夫が着更えをする間も、食事の間も、私は本当にコマネズミのようにクルクル動き廻り、神経をハリめぐらしていなければならぬ。ほんの少しの手落ちがあつても、夫は見のがしはしない。残酷な意地の悪い眼が、私をジツと見すえているのだ。

その日は、着更えして卓の前に坐つた夫に、お茶を運ぶのがほんの少し遅れたため、彼は激怒した。

「間抜け！」

そう云つたのと同時に、大ぶりの湯呑み茶碗が飛んで来た。アツと身をそらせて、茶碗は後の柱に当たつたけれど、左の頬から首すじ、肩、胸にかけて熱湯が飛んだ。

「アツ！」と躰が縮んで焼けるような痛感が走る。熱い茶の好きな夫のために、心をこめていれたばかりのお茶なのだ。たかが湯呑茶碗一杯と云つても、顔から肩にかけての熱湯が肌にジツトリにじみこんで、私は思わず、「アツ、アツ……」と口走つてしまつた。

普段着の紫の銘仙が、みるみるうちにじんで鮮かに色を変える。湯気の立つような肩

に手を当てて彼を見上げると、鉄ブチの眼鏡の奥に、如何にも心地よさそうに冷めたく光る夫の瞳がある。

「何処へ行くんだ？」

立ち上がろうとする裾を、ムズと押えられた。

「あの、濡れましたから着替えてきます……」

「バカ！ お前なんぞ、濡れたまままで沢山だ、そのまま飯の給仕でもしろ！」

「ぢや……、あの、髪と顔だけでも拭いて参りますわ」

「俺がいつたら、いいんだ！」

その夫の冷めたい語調にねじ伏せられたように、私はしよんぼり坐り直すのだ。一人食事を始める夫の前で、髪も着物もぬれそぼれて熱湯のほてりに左半身をうずかせながら、坐っているのだ。夫はまるでそんなみじめな私の様子に、食欲をそそられでもするように食事を重ねる。ジロジロと私の躰から、視線だけははずさない。

私は夫が済んでから、台所の板の間に坐つて、ソソクサと食事を済ます例になつていく。冬でも板張りに坐つて、女中以下の食事なのだ。それを間の障子を明けて、茶の間の

火鉢によりかかつた夫がジツとみつめてい
る。意地の悪い、刺すような視線なのだ。そ
れを意識すると、私の背筋はゾクゾクと細か
く震えてくる――。

世間の方がこんな私共夫婦を見たら、まる
で奴隷のような私の生活に呆れ、夫の冷酷さ
に、人権蹂躪などと騒ぎ出すかもしれない。
そして、そんな氷のように冷ややかな夫婦生
活が続いている、私達の神経を疑ひもするだ
ろう。

氷のように冷ややかな、と私は今書いた。
確かにそうなのだ、夫は暴君でただ腕力を振
うばかり。私は一年中オドオドと彼の顔色を
うかがいながら、意志のない人形のように彼
の蹂躪に甘んじている。けれど、私は間違い
なく愛されているし、私も又夫を愛している
と云つたら、人は笑うだろうか……？

私達の家庭を、こんなにも異様なものに育
て上げたのは、実は私だつたのだ、結婚のそ
の日から、私はまるで白洲にひき出された罪
人が、御奉行様に対するような態度で接した
のだから……。それが、私が少女の日から抱
きつづけて来た、新家庭の理想だつたのだ。
夫は始めは嫌がつた。元々隠微な性格では
あつたけれど、さすがに近代人だから、私の

時代錯誤的な態度に驚いたらしい。しかし、
私は何時の間にか、その夫の意識の奥に眠つ
ていた、男性のサチズムを引出すことに成功
したのだ。

今では彼の方が、まるで女奴隷のようにみ
じめな妻を眺めることに、しびれるような快
感を味つているらしい。仕事以外に何一つ道
楽もない夫が、執拗に、そのことだけに溺れ
てくるのが判つた。これはみんな、私の不思
議なマゾヒズムに端を発しているのだ。

私は兄弟四人の生れだけれど、兄が二人、
弟が一人だから、結局女の子は私一人。男ば
かりの兄弟の中で、たつた一人の女の子なら
ずい分可愛がられて育つのが世間の常識だろ
うけれど、私の場合は少し違つていた。

私の少女時代は、例の軍国主義華やかなり
し頃で、しかも父は聯隊付き参謀だつた。も
の心ついた頃から、私は父の転任につれて、
各地の陸軍官舎を転々として育つた。今から思
えば、この陸軍官舎と云うものは、一種独特
の雰囲気をもつていた。封建色が強く、徹底
的な男尊女卑^{かたき}氣質なのだ。しかし、私の家ほど
それが甚しかつた家庭はないかもしれない。
父は鹿児島出身で、女なんて卑しいものだ
と思ひこんでいた。母に対しても絶対的な権

力者で、妻の意志などかつて尊重したことが
ない。典型的な職業軍人タイプだつた。又、
母も至つて古風な人で、自ら卑めているよう
な性格だから、これでは申分のない、封建的
な家風が出来上がる。

私共四人の兄弟のうち、男の子たちは、將
来お国のために役立つのだからと、それは大
事にするけれど、女の私はまるで余計者扱い
なのだ。勿論、両親も愛情がないわけではな
いけれど、なにしろ男尊女卑でコリ固まつて
いるのだから、ノビノビ育つた、普庭の家庭
の女の子とは余ほど違つていた。

両親がそんな風だから、兄や弟たちも「い
ずみ！ いずみ！」と、まるで女中扱いで、
何時もコキ使われ、面白づくでイジメられる
有様だつた。

たしか女学校一年の頃だつたと思う。広い
官舎の庭を、兄や兄の友人たちが、砂ほこり
を上げて駆け廻つていた。私は部屋でひつそ
りと本を読んでいたのだ。

「オイ、いずみ！ ちよつと来い！」
兄に呼ばれて私は何気なく庭に降りた。

「なあ、ちよつと話があるんだ――」
ニヤニヤ笑いながら招く兄の傍に近づくと、
その手から何かパツと投げつけられ、そ

れが真正面に私の額に当たつたのだ。
「あッ！」と叫んで顔を蔽つた時には既に遅く、もう眼を開けては
いられなかつた。無数の砂が
両眼、鼻、口に飛びこん
でくる。それは紙に砂を
包んだ、目つぶしだつた
のだ。

私は泣き声をあげて
うづくまつたが、彼等
は歡声をあげながら、
次々にその目つぶしを
私に集中する。私は眼
の痛さ、恐しさに夢中
になつて逃げ出した
が、両眼は見えないの
だから、やたらに木に
ぶつかつたり転げたり
するばかりで見当がつか
ない。

兄たちはそんな私をワアワ
アと追い廻しながら、小止みも
なく目つぶしを投げる。頭から耳、
製服の衿にも砂がジャリジャリ入つ
て、私は逃げまどい、とうとう板塀の



ところで地面に倒れるように泣き伏してしま
つたのだ。

「ワアイ、女なんて弱虫なもんだ！」

そんな捨て台詞と、あの時の云いようもな
い混乱を、私は今もはつきり思い出す。
それから、これも同じ頃、やはり
兄たちに呼び出された。

「いずみ、ちよつと来い！」

私はオズオズと兄たちの前に
立つた。二人の兄は当時中
学生でも教練として実習し
た、例の銃剣術の道具をつ
け、長い木銃をかかえてい
るのだ。私はもう不安に目
がくらみそうだつた。

「どうするの？」

「なんでもないよ、大人しく
してればいいんだ！」

兄たちは二人がかりで、私を庭
の榎の木に縛りつけるのだ。

「いや、御兄様、勤忍して！」

「バカ、黙つてろ。ただ薬人形の代
りじゃないか！ 怖いなら、目かくしし
てやらあ……」

そして、兄たちの吠えるような気合と共に

木銃が私の躰に迫ってくる。丸いタンポのついた木銃の先が、肩の肉に喰いこむように突き出されるのだ。型の稽古だから、さすがに力一杯に突いているのではないけれど、それでも三本に一本は、息もつけぬほど手ひどく、私の躰の何処かを突いた。

「ようし、一本！」

「やあ、失敗失敗」

そんな兄たちの会話を、私は恐怖にじびれてゆく意識の内でボンヤリ聞いていた。

この時は全身十ヶ所あまりの青アザで、さすがに母は眉をひそめたが、父は兄たちの旺んな士気を、我が意を得たと云わんばかりに称讃したのだ。

ところが、私はこんな父や兄を、ただの一度も怨んだことがない。少女の私の目には、無暗に父が立派に見え、絶対服従の母の態度は、当然のことと思われた。こんな家に私は育つたのだ。

男女同権を主張し、夫に家事さえも分担させる生活には、私はなんの憧れも感じなかった。夫の視線の前に腫を伏せる時に、躰の底から震えてくるような微妙な喜びは其処にはないのだから……。常に夫の逆鱗、暴力の前に躰を晒している。不思議な不安と期待。幼

少から私の躰に忍びこんでいるマゾの血が、こんな異常な夫と妻を作り上げてしまったのだ。

前にも書いたように、私たちの生活から湯殿は切り離せない。小さな家だけれど、買取つてから建て増した湯殿は贅沢な設計になっている。そして、その湯殿の窓は、四季を通じてキッチリ閉まっている。それは、いくら湯殿でも、長時間裸体でいるために、保温の目的もあるけれど、主な理由は、毎夜其処であげられる、私の悦楽の悲鳴が洩れるのを防ぐためなのだ。

夫はどう云うものか、水によつて私を苦しめることに、非常な快感を覚えるらしい。前記のように、御湯呑の熱いお茶を浴びせたり、真多にイキナリ雑布バケツの水を頭からかぶせたりする。ぬれそぼれた女体に亢奮するのである。そして、その窮局は当然湯殿と云うことになってくる。

食事のあと片づけが済むと、私は黙つて脱衣所に入り、衣類をすつかも脱いでしまつてから、静かにマットの上に横になる。夫は何処に居ても、私が裸になると、ほとんど間髪をいれずこの部屋に入ってくる。そして、私の両手を後手に縛り、別に両足首を一緒にし

て縛るが、この紐は長く残してある。それをつかんで、夫は私を浴室のタイルの上にひきずりこむのである。

約二時間後、湯殿から出る時まで、この紐は絶対にほどかれない。私丸太のように、時には縄をかけられた塩鮭のように、浮び、沈み、又はつり下げられるのだ。

夫はここでも殆ど無言だった。つかれたように喋り、口走り、悲鳴をあげ、泣くのは私一人なのだ。考えてもみて欲しい。手も足もしつかり縛られたまま、湯の中に投じられることの、不安、恐怖……。

「かんにんして、ねえ、かんにんして……」
グイグイと、手荒くタイルの上をひきずられながら、縛られている私は夫の足に唇をかじりつこうとする。勿論顎を蹴飛ばされ、時には逆にグイと足で唇をこじ明けられたりする。私はそんな時の、仁王立ちになつた夫の逞しい裸体が好きだった。

夫は私を何時も頭から先に湯に沈める。視界が半透明になつて、凄く息苦しいし、それよりも縛られているために心理的にひどい不安に襲われる。私は夢中でもがいて、もがいて、やつと丸太のように浮び上ると、ポーツかすんだ水滴の向うに、キラキラと夫の腫が

見える。その腫は冷酷にまたたきもせず、又グイと紐を引く、両足首の紐を上にも引かれると、否応なしに私の躰は沈んでしまう。息つく間もなく、又湯の責苦なのだ。

もがいてやつと浮び上るたびに、私は大きく息をつく。それは自然に海女の息笛に似るけれど、それは反面、私の悦虐の叫び声なのかもしれない。

三回、四回となると、疲労しているから、無意識に湯をのみこんでしまう。そして、殆ど私が失神状態におちいるまで、夫の遊びは止められないのだ。その失神まぎわの、苦痛と恐怖と、なんとも云ひようのない情感の入りにまじった身心の戦慄――。

時にはフト気がつく、私はタイルの上に長くなつて、夫は私にかぶさるように人工呼吸を行つてゐる。彼の手が胃の上を圧迫すると、私はそのままガツとお湯を吐く。しかし私たちの腫はしつかりとからみ合つてゐる。そして、彼の感覚が燃え上るのだ。

かすかに湯の音がするタイルの上。其処が夫の最も好む喜びの場所なのだ。しかも、私は依然として両足首を縛られている。

そんな風変りな湯殿の風景が、毎夜くりかえされる。殆ど毎夜――。だから勿論、例の

Mの時にも……。そんな時、夫は私をタイルの上に放置して、ジツとみつめてゐる。白いタイルの上ににじむあざやかな色が、彼にはたまらない刺戟であるらしい。

いくら相手が夫だと云つても、これは女の身にとつては、耐え難い恥しさだつた。それは苦しいほどにも切なく、身の置き處もない思ひなのだ。

夫の視線を意識しながら、タイルの上で躰を縮める。でも……。哀しい女の生理はこんな時でも……。いゝえ、気持が充ぶるためか一層に――。その時の、異様に光る夫の腫とヒタと視線が合う瞬間の、戦慄的な喜び。それはもうまぎれもない喜びなのだ。

何時か私は、指を折つて毎月のこの日が来るのを待つてさえている。夫にとつても、それは同じらしいのだ。

そして、そんな夜、湯殿から洩れる私の悲鳴は一層はげしいのかもしれない。夫がこんなにも、湯や水にひかれる理由は私にも判らないけれど、海辺で育つたと云うことだから、或はなにか過去の記憶に關聯するのかもしれないと思つてゐる。

(おわり)

愛読者通信

めつきり涼しくなりました。貴誌のそとみあ通信を拜見しまして早速ペンを持ちました。

十月号の記事中に(京都M・Y生)として有る方が居りましたが、御連絡が付きませんでした。誌上でも結構です御紹介下さい。

私は今年二十九才の独身者ですが、一度思う存分慰めてくれる方でしたらいいのです。人には手は出しません受ける一方で、どんな事でも辛棒致します。

尙もう一つのお願ひですが、責める事の好きな男子の方、女の方でも結構ですが、あまり遠方の方では困ります。京都、大阪附近ですと大変結構なのですが。

僕は責められる事が大変好きです。思ひきり責めて呉れる人がないかと日夜悩んで居ります。生命に異常のない限り、どんなにひどく責められてもかまいません。

そんな方がありましたら今すぐでも、飛んで参ります。

同好の方、是非御連絡下さい。御まちして居ります。

(滋賀T生)



夢

魔

昇二郎の口から苦痛に似た呻き聲が洩れてきた。身を悶えても無駄と知りながらも、男の體は女を抱擁しようとして、縛られた體をくねらせる。手も足も自由にならない。柱ごとあばれるように、昇二郎の裸身は波打つた……

松井 籟子

喜多 玲子 画

一

川風にはためく幟に、奈津子はふと足をとめた。なつかしい関西の役者の名がつかつていたからだ。その中には、父のひいきにした役者の名もある。その文字が奈津子の目をうるませた。それは生れた土地の

大阪への思いでもあり、父が生きていた時の華やかな生活への思いでもあった。

「嬢さん」

ぼんやり立止っている奈津子に、声をかけた人がある。

「かねまさんはんの嬢はんと違いまつか？」

見ると、父のひいきにしていた役者の弟子で、昇二郎という、まだ若い役者だった。

よく師匠と一緒に、島の内の奈津子の家へ来ていた奈。津子の顔を見ると、ポーツと頬を赤らめるような少年だった。久し振に逢う昇二郎は、ひげのそりあとの青い、若手役者らしい美しい青年になっていた。

「あら、あんたも来ていたの？」

言いながら、奈津子は自分の身なりに、今の貧しい生活の匂いがありはしないかと気になった。

しかし、相手はなつかしさがさき立つような声で、

「一寸もお変りにならしまへんなあ」



と言ったが、急に声をおとして、

「かねまさんはんも、えらい御不幸やったそ
うで……」

と、言う。

奈津子の顔が曇った。

それと察してすぐに

「でも、まあ、嬢さんのお顔みて安心しまし
た。ずつと、こちらに……？」

「ええ」

「あの……」

御結婚は……と聞きたいらしかったが、それをためらうように、

「今日はどちらへ？」

と、言葉をかえた。

「一寸そこまで用があつて……」

「私も今度は早く役があけるので……」

「もう帰えるところ？　ぢや、御飯でも一緒に……」

奈津子は言つてしまつて唇をかんた。

かねまんといえば、北浜で多少は知られた株屋だった。乳母の他に女中が二人、「嬢はん、嬢はん」と、何不自由なく育てられた奈津子だった。父が死んで、かねまんという屋台骨はもろくも崩れてしまつたのだが、身についた昔の贅沢はなかなか捨てられないらしい。「ごはんでも……」と言つてみたところで、その金が今、彼女の財布の中にはなかつたのだ。それなのに、すらすらと、そんな言葉が出てしまう。あとで唇を噛んでも仕方ないことだった。

一一

川添いに築地の方へ歩きながら

「どこへ泊っているの？」

奈津子は聞いた。

「師匠の親類へ御厄介になつてゐるんですけど、何だか気づつなくて……」

昇二郎のいう「気づつない」という大阪弁がなつかしく、何かしら奈津子は十年の時のへだてを忘れたように、昇二郎を身近く感じた。

奈津子は恋にあこがれる年頃に、昇二郎の少年らしい美しさに惹かれた日もあつた。しかし、役者というものは恋の夢であつても、現実のものではなかつたのだ。それというのも、その頃の奈津子の気位の高さから、役者を夫にしようとは思わなかつたからだろう。

奈津子はしきりに昔が偲ばれた。そんな自分に反撥するように

「よかつたら私の家へ来ない？」

彼女は言つた。

「かましまへんか？」

そういう昇二郎の頭に、多分島の内の自分の育つた家のような大きな家がえがかれてゐるのだろうと思つと、バラック建で二間しかない今の家が悲しいより滑稽だつた。

「そのかわり少し遠いわよ」

「今度は晝の部はきりの狂言に出るだけですさかい、朝はゆつくりでよろしいねんけども、本まにお差支えごわへんねんか？」

そう言いながらも、昇二郎は彼女の家へ厄介になるときめて、公衆電話へ走つて行つた。師匠にことわつておくというのである。

澁谷まではタクシーに乗つた。それからさきは電車だつた。

島の中にポツンと建つた小屋の様な家に、昇二郎は一寸驚いたらしかつたが、部屋に入ると、いつそ気がらくになつたという調子で、

「嬢さん、おひとり？」

と聞いた。

「嬢さんはやめてよ。おかしいわ。ごらんの通りひとりきりよ」

今夜は……とつけ足そうとしてやめた。今日はひとりだが、あしたは二人になつても、昇二郎に関係のないことだ。

奈津子は冷蔵庫から冷たいビールを出して来た。他にはトマトしか入つていない。それなのに、氷を絶やさないと、バラックの家に似合わない昔の生活の名残だつた。

「嬢さん、お強いでんなあ」

「親ゆずりでしよう」

「ほんに……」

「昇二郎さんも遠慮なく……。ビールが足りなければ、サントリ―とまではいかないけれど、トリスならあるのよ」

「でも。こうして嬢さんと二人きりで酔つてしまつたら、失禮なことでかすかもわからしまへんで」

「フワ、、どんなこと？」

「そんなことつて……」

と、昇二郎は急に座り直すと

「嬢さん」

あらたまつて彼女をみつめた。

奈津子はふつとその目に射すくめられたようになったが、「なあに？」

さりげなく聞いた。

「お願いがありますねん」

「昇二郎さんのことなんなりと……」

奈津子は少し酔つていた。

昇二郎を家へ誘つた時には、昇二郎と浮気しようなどとは思つていなかった。しかし、誰もいない家に、二人きりで向き合ふと、夜の電気の光は三十女の体に妙な波紋をなげかけた。二間しかない部屋の、片方の部屋につけた六十ワットの電燈は、次の間を薄ぼんやりと照らして、その薄くらやみの中に、香の様に立ちのぼる妖気がある。和服を着た昇二郎の胸もとの白さが妙に気になった。

「嬢さん、私がどんなこと言つても、どんな思いもやらんことお願いしても、かなえてくれはりますか？」

「フフフ、こわいのね」

奈津子は笑いにまぎらしたが、胸がときどきした。

「ほんまにきいてくれはりますな」

「ええ、いいわ」

はつきり言つて、奈津子は今にも昇二郎がにじりよつて、彼女の手をとつて引きよせるかと思つた。

しかし昇二郎はなおも言葉をつゞけて

「そんなら申します。けれど、このことはどなたにも言わんといておくれやす」

「言やしないわ」

「ほんまに、ここだけのことにしておいておくれやす」

「くどいのね」

口では強く言いながら奈津子はよつほど自分から昇二郎の胸に身をなげかけようかと思つた。何度も念を押す彼の臆病さが可愛く思われたからだ。

しかし、その時、昇二郎は思いきつたように言つたのだ。

「嬢さん、私をくくつておくれやす。なんぞ細引でもあつたら、私をぐるぐる巻きにくくつておくれやす。私は一ぺんくくられてみとうおますねん。舞台上で縛るのは軽くだ前から縄をまわすだけや。本まに縛られたらどうなるか、一つぺんでいい、自分の体で味つてみたい……。それを今まで誰かに頼む機会も、頼むお人もありませんでした。嬢さん、この畠の中の一軒家で、私は嬢さんに縛られたい。お願いです。私を縛つておくれやす」

三

奈津子は昇二郎の着物をぬがせた。下に銀鼠色の長襦袢を着てい

る。

「いいえ、このままで縛つておくれやす」

「いや、それもとらなけりや……」

「でも……」

「そんなら何故縛つてくれなんて頼んだの。私のいうとおりにするのなら縛つてあげるけど、さもなければいや」

奈津子はお嬢さん育ちの我まゝさをとりかえした。長い間、ひと

に向つて、そんなけん
高な言葉を使つたこと
はなかつた。

「嬢さん、そんなこと
おつしやらんと……。
では脱ぎます」

昇二郎は女のように恥
らいながら、長襦袢を
ぬいだ。まだ下に肌着
を着ている。

「それもぬぐのよ」

奈津子は言つた。

「これも？」

「そうよ、裸になりな
さい。そのかわり、お
風呂焚いてあげるから
……」

「はい」

昇二郎は素直になつ

た。そして、裸になると、自分から手を後に廻わした。

奈津子は押入から細引を出して来て、彼の手を後手に縛つた。

「どうされてもいいのね」

「あしたの芝居に差支えないかぎり、どんなになさつてもかましま
へん」

奈津子は細引を胸へ廻わした。一と巻き、二た巻、しめあげても



昇二郎はじつとされるまゝになつてゐる。その従順さが奈津子の癪
にさわつた。彼女に一度縛られたいというのは、たゞ彼の芸熱心か
らきたことなのだろうか。それを自分は血をたぎらせ、今でさえ、
こんなにかぶつた氣持でゐるではないか。

「ピシッ！」

と、奈津子の手に残つた細引のさがが、昇二郎の背中中で鳴つた。

「あつ！ 何なさいます！」

昇二郎は横へ顔をそむけるようにして言った。髪の毛が一すじ額へ乱れた。

「どうされてもいいと言ったぢやないの！ さあ？ どう痛い？」
ピシッ、ピシッと細引になる。

昇二郎は前かゞみに倒れると、肩を荒く渡うたせた。

「嬢さん、かんにんして、私が変なことお頼みして悪かつたんや。かんにんして！」

昇二郎は悲鳴のようなかすれた声で叫んだ。

「うるさいのね。自分から言い出したことぢやないの。声をたてるなら猿ぐつわはめるわ。それとも、おとなしく私のするとおりになる？」

「どんなこと？」

「なるかならないかだけ言やあいいのよ」

「でも……」

「そんなら猿ぐつわをはめるわよ」

「……」

「さあ、なる？ ならない？」

奈津子は両手を彼の脇の下へ入れてくすぐった。彼は右に左に、体を渡うたせて、彼女の手をはずさせようとしたが、後手に縛られているので自由がきかない。

「なります、なります！」

そういうよりなかつた。

奈津子は彼の足首に紐をかけると、ぐつと頭の上までもちあげた。踊りの素養があるせいか、昇二郎の体は女の体の様にやわらか

かつた。両方の足首は昇二郎の顔の後へやつと届く位に押しまげられたが、のけぞるように後へどおと倒れた。パンツははいているものの、昇二郎の尻が天井をむく恰好になった。

「かんにんしておくれやす。嬢さん、もうかんにんしておくれやす」

彼は自分のみじめな恰好を思うと羞しさにたえられないらしかつた。たゞ後手に縛られた姿なら、舞台で見ても美しさがある。しかし、足と手が一つになる程醜く押しまげられた体は、さぞおかしく形だろう。人間というより下等動物のよう……昇二郎は泣きだくなつた。

「もう、かんにんして！」

そう声を出すのさえ苦しかつた。

奈津子はパンツをずらして、両方の尻をあらわにしようとする。

「あつ！ それは……」

拒もうとしたがどう身動きが出来らなう。

奈津子は魔に憑かれたように昇二郎のあらわになつた尻を、筆のさきでくすぐり出した。

「あつ！ あつ！」

どう転つても、上向いた尻をかくしようもなく、起き上ることも出来なかつた。昇二郎の肌にしつとり汗が浮いてくる。

海老責めというのとも違う。自分の足首を自分の肩の上にのせているのだ。折りまげた足の間隔だけ胸もとがあいているのだが、手は後手に縛られているから、だるまさんのように転がされたら転がされたまゝでいなければならぬ。くすぐられても、打たれてもどうしようもないのだ。

昇二郎は体がやわらかいから、骨太の男よりは苦痛が少いかもしれないがそれでもだんだんに耐えられなくなってきた。

奈津子も一寸心配になったのか、足首の縄をほどいた。昇二郎はほつとして、足を疊に思いきりのばすと、深い息を吐いた。

「苦しかった？」

奈津子が聞いた。

ええというのが何だか癪で

「いいえ」

と、昇二郎は涼しい顔で答えた。

「まだほどこいてあげないわよ。今夜はお望み通り、一と晩中責めてあげるわ」

奈津子は酔いたかつた。何でもいい、酔いしれたかつた。酒でも恋でも、麻薬でも……。

父が亡くなり、母が亡くなり、砂山が崩れるように何もかも崩れて、残ったものは東京の郊外の畠の中の一軒家だけだつた。それも東京、大阪とはなれていたのと、貸した金のかたになつていた家だけに、僅かに債鬼の目を逃れて、奈津子の手に残つたのだ。彼女はそこでひとりでくらしている。趣味でしていた手芸がどうにか女ひとり食べさせてくれるのだが、時々夜中にふと目をあけると、大声でわめき出したいような淋しさを感じる。愛してもいない、生活の僅かの足しにしかないような男友達、たまに彼女のひとり寝をおそうこともある。肉慾に酔いしれて、朝を迎えれば又してもやりきれない孤独感だつた。

今日はたまたま銀座から、築地の郵便局へ行くつもりで、演舞場のわきを通つたのがいけなかつた。関西歌舞伎の幟、昔を知つてい

る昇二郎……。『嬢さん』という呼名さえ、奈津子には毒だつた。どうまねいてもかえらない昔と知つてはいても、そのあきらめが身に痛さを覚えるような今夜だつた。

昇二郎との思いがけない遊びに自分を失うほど酔わなければ、どうして今宵一夜をすごせよう。

「こつちへいらつしやい」

奈津子はじやけんに昇二郎の縄尻を引っぱつた。

「お望み通り、ぐるぐる巻きにしてあげるわ」

昇二郎を部屋と部屋との間の柱に縛りつけた。いつもひとりで寝ている時に、もし強盗が入つて、縛りつけられたらどうしようと思つて見ていた柱だつた。二つの部屋と台所の間が頂度縛るに手頃な柱になつていた。ひとり寝の夜中に強盗が押しこんで、奈津子をその柱に縛りつけ、猿ぐつわをはめて、盗るものを盗つてそのまゝ出て行つてしまつたら、奈津子は縛られたまゝ救いも求められず、たまたま誰かが尋ねてくれるまで、水一つ飲めずに飢えて死んでしまふのではないだろうか。飢えて死んでも、まだそのまゝ柱にくくられて、やがて肉が腐つていつても、縄は朽ちた女の体を柱にくくりつけておくだろう。

奈津子はそんなことを想像しながら、一晩中目をさましている夜もあるのだつた。

今、その柱へ彼女は昇二郎を縛りつける。胸も腹も、腰も、ぐるぐると麻縄で締めつけた。膝をくづして座つていたその膝の下へも縄を廻し、腿をしつかり結えてしまふ。足首にも縄をかけた。昇二郎の体はまるで天井から芋ざしになつたように、動けなくなつてしまつた。

そうしておいて、奈津子は風呂を焚きに行つたのだ。

四

役者という稼業はほとんど陽のめを見ない囚人と同じだ。家を出て芝居小屋へ来るだけの間外氣にふれる。あとは日曜も祭日もない、一と月の大半は劇場でくらす。終れば又すぐ次の狂言の稽古がはじまるのだ。陽に焼けるひまがないから大抵の役者は色が白い。年とれば白粉やけで黒くなる。

昇二郎の裸体は魚のように青白く電燈の下に晒されていた。

奈津子が風呂場から戻つて来た。

「もう痛いことはやめてあげるわ。そのかわり私の玩具になるのよ」

何をするつもりなのかと思うと、昇二郎は体が引き締つた。その額へ、ピシヤツと冷たい感覚が走つた。瞬間刃物で切られたようにゾーツとした。冷たい……。次の瞬間に激しい痛みになるのではないか。それをふつと待つような気持で緊張したが、目の上から頬を伝つて、冷たいものが流れてきただけだった。思わずそれが何であるかたしかめたくて身を動かしたが、動かしたただけ縄目がくいこむように痛かつた。しかし視野のはしでとらえた額から流れたものは赤い色をしていた。

——血……？——

しかし、それにしても痛みがないのが不思議だった。

「フフ、一寸凄くなつたわ」

そういう奈津子の手の中に絵筆がにぎられていた。

今度は口のはしから顎へかけて、だらだらと血が流れたように赤い絵具がぬられた。胸には紫色で痣のように……。背中は柱にくつついているので筆がとどかない。肩から、わきの下、腿と、めつた斬りにされたように、幾すじも赤く血がしたたつたように痕がえがかれる。

「見せてあげましょうか」

そう云つて奈津子が鏡合を目の前に置いた時、昇二郎はそこに無惨な自分の姿をまざまざと見た。犇々と縄をかけられた裸の体に、どんなひどい拷問を受けたことか……。鞭の痕、焼き鑊の痕、刃物で刮ぐられた痕……。白い体のそのおびただしい疵痕は、気の小さいものなら卒倒することだろう。昇二郎自身、縄目の痛さ以外の苦しさはない筈なのに、鏡の中の自分の姿を見ると折檻されたあとのように、肩でようやく息をしているような気がしてきた。本当にこのまゝ気が遠くなつて死んでしまうのではないか……。

しかし、その時奈津子は荒い息づかいで、いきなり彼の唇に唇を押しあててきた。

昇二郎は後手に柱に縛りつけられているから、女を抱くことは出来ないのだ。その瀕死の晒し者に最後の情交をせまるように、奈津子は彼の唇を吸い、咽喉を吸い、そして彼の全身を唇で愛撫した。

昇二郎の口から苦痛に似た呻めき声が洩れてきた。身を悶えても無駄と知りながらも、男の体は女を抱擁しようとして、縛られた体をくねらせる。手も足も自由にならない。柱ごとあばれるように、昇二郎の裸身は波打つた。

すると鏡の中の昇二郎は苦痛に悶えているように見える。体中から血をふき出して、断末魔の苦しみにのたうちまわるようだ。

快い陶醉なのか、苦痛なのか、昇二郎は呻めきつゞけているうちに、気が遠くなるようで、一声高く、くいしばつた齒の間から呻めき声をもらすと、放心したようにぐつたりとなつてしまつたのだつた。

五

夢魔に踊らされたような一夜があけた。

酔つて、酔つて、酔いしれても、朝の光が白々とさしてくれば、残るものは頭の重さだけだつた。

朝食も食べずに昇二郎が出て行つてしまつたあと、奈津子は光を恐がるように雨戸をたてたまゝ、布団にもぐつていた。

案内もこわずに殿村が入つてきた。

二つ並んだ枕もそのまゝだつた。

殿村はいきなりその一つを蹴とばした。

「何すんの？」

奈津子は言つた。

「あんたにそんなまねする何の権利があるの？」

しかし殿村は嫉妬で口もきけないらしかつた。いきなり奈津子の衿がみを持つて引き起すと、ピシヤツ、ピシヤツと頬に手がとんだ。

「誰をつれこんだのだ？」

殿村がいう。

「誰でもいいぢやないの」

奈津子はくやしかつた。

殿村は奈津子の夫ではない。愛人でもない。ただたまに殿村が来合せている時、何かの集金人がくるとかわりに拂つてくれる。奈津子はそれを体でかえしているつもりはない。百や二百のはした金で体を売る程自分を安く思つてはいないのだ。ただ妻や子もある殿村と、男友達としてつき合つていゝうちに、酒の酔から女友達とはしないことをしてしまつただけだつた。たまにたてかえてくれる僅かなお金の爲に、亭主面をされるとは思つていなかった。

もし奈津子が殿村を愛していたら、彼の嫉妬をかえつて嬉しく思うだろう。奈津子はただ自分がみじめだつた。僅かの金でもたてかえてもらえば助かつていたのだ。つい知つて知らん顔していた自分が浅間しい。そして、その爲に、今、殿村が当然の様に奈津子を引つぱたく。これが「嬢さん」のなれのはてなのか。

「よしてちようたい！」

奈津子は殿村をつきとばした。

「なにを！」

彼は奈津子の腕をつかむ。つかんだつもりが身をかわされて、殿村は袖をにぎつた。ビリビリと、片袖がちぎれた。

「俺の来ない日はいつもこんな事をしていたのか？ お嬢さん顔して……。売女！」

彼は憎らしそうに枕をとると、奈津子にほうりつけた。

「帰えつてちようだい。あんたにそんなこと言われるおぼえはないわ」

奈津子は唇を強く噛んだ。「売女」というようなひどい言葉をかけられたのは生れてはじめてだつた。

昨夜、奈津子は酔つたように柱に縛つた昇二郎を愛撫した。しか



し、縄をほどいて風呂に入れると、あとは背中合わせに寝てしまったのだ。風呂から出た昇二郎の顔をまともに見られないような気持になつていた。だから並んだ枕は情炎の汗にぬれてはいなかった。ただお客布団をとり出すのが面倒くさくなつて、一つ布団に寝たまでだった。

しかし殿村は、ひとり寝の淋しさをよく聞かされているのに、二つ並んだ枕が自分を嘲笑うように思つたのだ。

「誰と寝たんだ？」

奈津子につめよつた。

そんな問われ方をしなければ、素直に昨夜の顛末を話せたらう。しかし、奈津子は依古地になつた。

「言う必要ないわ」

「言わないな、よし！」

殿村は奈津子におどろかされた。そして、彼女を押し倒すと、奈津子の顔を自分の膝の下へふんまえて、ぎしぎしと押した。

「痛い！ 何するの？ どいて、どいてよ！」
奈津子は必死にもがいたが、太い殿村の足はびくともしなかった。

殿村は奈津子の手を後手にねじり上げた。
「言わないか？ 言わないと縛つてしまうぞ」

「縛るんなら縛つたらいいでしょう」

昨夜は昇二郎を縛つた。その同じ縄で縛られるなら、縛られて苛められてもいいと思つた。二日酔いの迎い酒にも似て、奈津子は激しい麻痺剤が欲しかつた。

殿村は奈津子を腰紐で後手に縛ると、布団の上に転して、薄い夏の掛布団で海苔巻をまくようにぐるぐると奈津子の体を巻いた。奈津子はもう動きようもなかつた。そればかりか、殿村はその奈津子の上へ重い体で馬のりになると、

「この口で今までいいかげんな嘘をついていたんだな」

と、彼女の口をひきちぎるように抓つた。

「いつない何人男があるんだ？ 言え！」

言えと云われても、口のはたをねじまげられて、どうして口がきけるだろう。ただ、

「ううつ？」と、呻めくだけだつた。

「言わないが昨夜の男は誰だつたんだ？ さあ、言え！」

殿村は手を放したが、奈津子のふとんから出ている両肩をわしづかみに押さえつけている。

「誰でもないわ」奈津子は言つた。

「強情をはるか！ 誰だか名も知らない奴をつれこんだのか、君はそんな淫売だつたのか」

と言うと殿村は「ペッ！」と奈津子の顔に唾をはいた。

「あつ！」と、奈津子は顔をそむけようとしたが、上から押さえつけられてはわづかに横を向くだけだつた。

すると殿村は奈津子の髪をつかんで正面を向けて、つぶけて「ペッ！」「ペッ！」と顔中へ唾をはきかけて、

「さあ、言え、言わないな」

肩にかけた手で奈津子の寝巻の衿を引き出すと、胸をあらわにした。そして、肩といわず、胸といわず両方の指で抓り出した。

奈津子はされるまゝなっているより仕方がなかつた。昨夜昇二郎の胸へ絵具で書いたようなぼたん色の痣が胸から肩にかけて一面につけられた。顔には気持悪い唾がかかつて、奈津子の顔を癩病のよう汚している。もらすまいと思つても息のとまるような痛さはくいしばつた歯の間から呻めき声となつて出るのだつた。胸も肩もヒリヒリとはれ上つたように、指をふれられただけでも痛い。皮膚の色も変つてしまつた。

「本当のことを言えば許してやる。本当のことをいうか？」

殿村は言うのだが、奈津子は本当にも嘘にも言うことはない。昇二郎との昨夜の遊びをどう告げられるだろう。

腹を立てた殿村は、奈津子の口へハンケチを押しこんで猿ぐつわをはめると

「夕方にもう一度やるから、それまでそうしていなさい。君は友達のつもりだろうが、本当のことを言わないなら僕は友達だと思わなから、もつともつともてあそんでやる。女にこんな手荒いことをしたのははじめてだけれど、僕だつて男だから、もつとひどいことだつてしないとは限らない。君の返事の仕方ではもつとヒーヒー言わせてみないものでもないよ。いいね」

そういうと殿村は外から鍵をかけて出て行つてしまつた。

奈津子はぼんやり天井を見ながら、いつそのまゝしめ殺された方がいい、強盗でも入つてしめ殺してくれないだろうか、又しても、自分の体の腐つていくさまをえがいてみるのだつた。

瀬尾がやつとの思ひで権利金を積み、アパートに越して来た翌晩のことだ。

彼の隣室で何かヒソ／＼と話声がする。

しかもそれはどうやら女の声らしい。と云つても、別段不思議がるには及ばないかもしれないが、引越の挨拶をした時には、隣室の主は四十五、六才ほどの陰気な男で、独身の官吏だと聞いていたから、瀬尾にはこの夜中の話声はちよつと意外だったのだ。

彼自身はまだ三十前の元氣をもて余している癖に、しがないアルバイト画家で、まだ恋人もない身分だから、どうにもこの隣室の話声は気にかゝる。自然、これが始ると聞耳を立てるようになった。なんともなまめかしき限りの、媚をふくんだ女の声が洩れてくるのである。

ところがどうにも不思議なことがあつた。この声の主の女性を一目見たいものと、瀬尾がそれとなく隣室の出入りを注視しているのに、一向それらしい姿を見かけない。朝になると隣室はシーンと静まつ

て、顔色の悪い四十男の官吏が、毎日同時刻に勤めに出掛けてゆくばかりである。

ドアには勿論鍵がかゝつてゐる。外には人がいる気配もない。もと／＼好奇心の強い瀬尾は、こゝに於ても早や自制も忘れ、ある工作を始めたのである。壁一重の隣室の、その壁にである。何分当分は隣は無人だし、悠々と、巧妙にこの窃窺穴は作り上げられた。

ヤ——。彼(?)の胸はコンモリと、まるでパリの踊子のように盛り上つてゐるではないか——。

勿論大きな乳パットの仕業なのだろうがそれにしてもあの胸の隆起は……。男はその上にやはり贅沢な縫ひとりされた白サテンのコルセットをとり上げている。そしてぴつたりと肌に吸ひつくよう締つたサポタ

1の上にそれをつけるの處。

そして、ナイロンの靴下も……。それ等を身につけながら、男は声までも女のようになまめかしく、眩きつゞけてゐるのだ。

「いやだつたら貴方……。こんなところをそんなに御覽になつちやあ……」

赤黒いゴツ／＼した筋肉質の躰に、コルセット、ブラジャー、靴下をつけて鏡の前で躰をくねらせる、髭の生えた四十男——。

瀬尾は得体の知れぬ幻覺に襲はれたように身震ひしながら、その異様な雰囲気につきづり込まれていった。

コ

ン

ト

秋

元

勉

髭

と

コ

ル

セ

ツ

ト

あぶ・せくすありす

蒼ざめた色情

警戒を忘れた彼等は、まるで僕の反應をためすように、タイルの上でたわむれた。デクのようにそれを眺めて息をはずませながら、僕は苦痛と快感を同時に味うのだつた……

駒 井 登



新婚旅行には人並に伊豆にいった。新橋を夕刻に発つたのだが、発車のベルを僕はイライラしながら待った。

と云つても、別段旅館につくのが待遠しかつたわけではない。その時、もう僕はいい加減うんざりしていたのだ。幾日も前からゴタ

ゴタして、いよいよ当日になれば、朝から目まぐるしいほどの大騒ぎ、親類縁者が出たり入つたりの上に、形式ばかり大げさな神前の挙式、ホテルに於ける披露。みんな僕の心境にかかわりなく仰々しく行われる。僕はすっかり疲れて、馬鹿馬鹿しくさえなつてくるの

だ。

二等車の窓に二人立つて並んでいても、ホームに一杯溢れた親類知人に見送られるのが、イマイましい。いい晒者にされているような気持さえる。

やつと発車してヤレヤレと思つた。しかし、今度は隣りに坐っている女性が如何にも重荷になつてくる。あまり黙っているのも悪いと思つたが、別段話しかけるような会話もみつからないのだ。

もちろん、恋愛結婚ではない。純然たる見合い、それもさんざん母親に泣き落され観念しての結婚だつた。しかし、結婚するからには、これを機会にすべてを清算してよき家庭人たらんと、僕は一応そのつもりになつてはいたのだが……。

少しばかり恐る恐る妻の方を見ると、彼女はつつましく窓外を眺めている。なんとか人並に優しい言葉をかけたいと思つた。しかし、その彼女の首筋に、まだ先刻の濃化粧が残っているのを見ると、なにか醜惡なものを見せつけられたような気がして、僕は眼をそらせてしまつたのだ。

ここで少し僕と云う男の性癖をのべると実は女性に対して殆ど関心がもてないので

ある。ソドミニスト。世の中にはこの僕のような同好の士が少からざることを知つたのは最近になつてからのことだ。当時は、だから人知れず惱んだ。この思出は今でも胸が痛むほど、深刻なものだつた。

中学時代の後期に、僕は始めてこの世界を知つた。相手は三ツ年長の従兄。夏期休暇で遊びに行つた親類の家で。——田舎の旧家のことだから、場所は蔵の中だつた。僕は始め半分ペソをかきながら逃げ廻つて、従兄に笑われた。

彼はしかし、そのうち眼を光らせて、僕をつかまえ、足拂いをかけて僕と一緒にドタリと倒れた。この地方には、昔からそうしたソドミヤ的氣風が多かつたことは後で知つた。学校でも柔道部の主將をしていた従兄は、東京から来た、色白の坊ちゃん坊ちゃんした僕を見て、多分食指を押え兼ねたのであらうと思う。

それ以来、僕は休暇になると、従兄の家に رفت。彼は九大に在学中だつたが、僕は休暇が明けて新学期が始まつても帰京せず、両親から電報で照会されたこともあつた。

しかし、それは休暇中だけのことで、普通は平凡に学校に通つた。それほど欲望に煩わ

されることはなかつたのだ。しかし、大学二、三年から卒業前後にかけては、大いに動揺もし、煩悶もした。友人のあけすけな打明話に、平靜に相づちを打ちながら、内心は自分かみじめで仕方がなかつた。

例の従兄はその頃既に卒業して、満鉄に入社し、奉天に赴任していたのだ。僕はある夏思い余つて遂に大陸の彼の許まで尋ねたことさえある。久振りの逢瀬は僕を有頂天にした。彼は一段と恰福がよくなり、頼もしく見えた。

しかし、彼は既に妻帯していたし、夫婦二人暮らしの社宅に飛びこんだ僕はなんとも恰好がつかず、絶望的になつた。小柄な、人なつっこいその奥さんを、僕は内心呪わずにはいられなかつたのだ。

その時彼は「ヨカところに案内してやる」と云つて、僕を太車に乗せた。支那風の建物だが、いやに天井が高く、洋家具が置いてあつたが、僕は始め如何なる場所だか、さつぱり見当がつかなくつた。しかし、酒や料理が出て、その酒席の世話をする少年を見た時僕はアツと驚いた。

美貌。女にも欲しいような。或は女とも見まがうような美貌——。歳は十六七だろうか

頬から肩、臀部もすべて女ののような丸みを帯びて、大和撫子よりも数倍も嬌々と見える。僕は息を呑んだ。そして、その少年が同性の好者に一夜の情を売る、この家の商品の一人だと聞いては、まったく言葉も出なかった。

「どうだ、いいだろ？ 御望みなら斡旋するぜ？」

従兄はニヤニヤしながら云った。彼としては、結ばれがちな僕の旅情をなくさめるつもりだったのだらう。

僕は奉天の夜に、言葉も通じないその李少年と夢を結んだ。幼少の頃からそのように慕われて育った彼の技巧は、まったく僕の魂を飛ばせてしまったのだ。そして、来る時よりも、もつと激しい悩みを抱いて東京に戻つて来た。今まで受動的にしかそれを知らなかった僕が、始めて積極的に愛することの喜びを知つたのだ。

それからは煩悶の連続だった。つまり、常に晴れやらぬ思いと云うのか、心からな

る喜びを味うことは一度もなかった。相手が居ないのである。まだ、今ほどソドミアについて喋々されることも少なかったし、性格的にも内攻する方だから、相手を求めるような芸当は到底出来なかったのである。

ら、僕は居眠りするほど退屈だった。ところが終幕近くになつて、僕は眼を見張つた。「西鶴五人女」とか云うことだから、どうせ今迄のと同じような踊りだろうと思つてみると、それは男色を扱つた「薩摩源五兵衛」の舞踊化だったのだ。



幻想的な舞台装置で草庵に住む僧形の源五兵衛が悩む場面も僕にはピツタリ来た。これは藤間万三哉が踊つていたが、なにか少し中性的な味があつて、今でも僕には慕わしい人なのだ。御小姓に身をやつして来た吾妻徳穂ともつれて踊るところなど、僕は呼吸が迫つてくるような息苦しささえ感じたのだ。

息子だから母は縁談をヤイノヤイノと攻め立てるし、実際途方にくれた。その頃、踊りを習っている妹の関係で、三越劇場の一流舞踊家の発表会に無理に連れてゆかれたことがある。何しろ赤い着物を着たお姫様や町娘などの恋模様の踊りばかりだから、伊東の旅館の奥まった部屋で妻と向き合つ

を前に戻す。

ても、殆ど情熱が感じられない。風呂にも勿論別々に入つた。だんだん夜が更けて来ても、味気なさが増すばかりだつた。

肉体交渉そのものは、なんとかなるだろうと思つていたが、妻がなにか喋つたりするのを聞いてみると、なんだか不安になつてくるのだ。事実、その夜、僕は勇気を振り起して、初夜の夫としての務めを実行することは出来た。しかし、それはまづたにお話にならぬほどの、悪戦苦闘だつた。

僕は従兄との思出や、あのムキ卵のような肌をした李少年を思い浮べ、その助けを借りなければならなかつたのだ。それに、僕は結婚前には、妻との間に肉体交渉を持つことによつて、妻に対しての愛情も生れてくるのではないかと、ひそかにそれを期待する気持ちもあつたのだ。

しかし、それは裏切られた。私は妻を抱きながら、その化粧品や香水、それにほのかな体臭も入りまじつた匂い、つまりその女臭さに辟易してしまつていた。

「なんて、嫌な香水なんぞ、つけているんだらう……」と思つた。赤い長襦袢も、寝化粧もパーマした髪も、ベトベトした感じで、僕の眼にはいやらしくさえ写るのだ。

白いシャツの衿から見える清潔なうなじ。散髪したばかりのすがすがしい髪。――妻とは対象的に、僕はそんなものを求めていた。

だから、その翌朝、僕は廊下に出ると、不味い煙草を喫つた。もう、この結婚を後悔していたけど、後の祭りでどうなるものでもない。ただ、妻がいわゆるアプレ型ではなく、大人しく世間知らずなので、その点は幾分か気が楽だつた。

その朝も、風呂番が気を利かせたようないたり顔で、

「御家族風呂の方へどうぞ――」

と、案内に来たが、僕はやはり一人で男湯に降りた。

「まだ馴れないから、ゆつくり、一人で入る方が、あなたも気持ちが楽でしょうから……」そんな恩着せがましいことを云つて、その奥、逃げるように部屋を出たのだ。

風呂から上つてブラブラ長い廊下を歩いてみると、前をドテラ姿の男が二人、ピタリとよりそつて歩いてゆく。女と違つて、同性だと不思議に僕の神経が動く。同性なら、注意深く観察するクセがついていたのである。

僕は一間ほど後から歩きながら、なんとなく気になつて、二人の様子に視線を止めた。

ガツシリと肩巾の広い四十年輩の人と、まだ二十二、三かとも思われる青年の二人づれ――

すると、その若い男の方が、なにかクスクス笑つて片方に話しかけながら、相手の手をさぐつてグツと握りしめるではないか！僕はハツと思つた。

そんな行爲は、男同志の間では、滅多にあるものではない。よほど特殊な関係がなければ、そんな態度を見せる筈はなかつた。そう思つて見れば、後から観察しただけでも、彼等の間が、如何に親密なものであるかが、僕にもうかがわれるのだつた。いわば、蛇の道は蛇と云うわけだが、僕はそれを直感すると凄く緊張してしまつた。

それとなく、彼等の跡をつけるつもりでいると、二人は僕の隣りの「青貝の間」と云う部屋に入つた。もの欲し気な視線を送つていく僕には、眼もくれない様子で――

その時、二人の顔がよく見えた。年輩の方の男は平凡な容貌だつたけれど、若い方はちよつと歌舞伎の先代福助のような優男だつた。

隣室にそうした特殊関係にある男たちが泊つていようとは、僕には思いもかけないことだつた。始めて、他人のそのような実態をた

しかめて、僕はまったく平静を缺いてしまつていた。

自分の部屋に帰つても、壁一重隣りに、同性同志のどのような情痴がくりひろげられてゐるかと思うと、とてもジツとしては居られなかつた。だから、妻が恥らいながら何か話しかけても、僕はひどくトンチンカンな返事をしたりして、彼女を驚かせたのだ。

しかし、いくらヤキヤキ一人でしていても、どうなるものでもなかつた。まして僕には、昨日結婚したばかりの妻が、殆ど片時も離れずくつついてゐる。まったく身勝手な言い分だが、僕はもう妻と向き合つてゐるのが、苦痛にさえなつて来た。

悶々の裡に、なやましい夜が来た。何も知らない彼女は、鏡合に向つて、一層入念に化粧を始める。それを眺めてゐることの、なんと云う空々しい腹立たしさ――。

僕の神経は隣室だけに向けられてゐる。夜が更けたが、僕は再び妻と床を共にする苦しさから一寸のがれに、

「ちよつとお湯に入つてくる。あなたは先に休んでいらつしやい」と、云つて部屋を出た。

僕は誰も居ない、ガランとした浴室で、ぼんやり湯にひたつてゐた。妻から離れたと云うことだけで、いく分かの安らぎがあつたのだ。

その時、浴室の戸が開いて、誰か入つてくる。しかし、僕は氣にもとめなかつた。だがフト聞き覚えのある声を耳にして、湯氣ごしにそちらを見た。そして、思わず半身を起してしまつた。

あの二人づれだつたのだ。彼等は、人氣がないと思つた浴室の隅に私を見出して、ちよつと吃驚したらしかつたが、次の瞬間には完全に僕の存在を無視してゐた。

年輩の男の方が手桶に湯を汲んで、それをするようにして湯の中に入つた。色白の青年の方は、まるで子供のようにはしやいでいた。湯の中でもびつたり抱き合うようにして、たえず何かしやべつてゐるのだ。

旅の恥はかき棄て、と云うつもりか、もう深夜に近い、うす暗い温泉の中では、他目の心配もないのか、二人の態度はひどく露骨なものだつた。彼等は僕がジツと注視しているのを氣にもとめず、ふざけ合つた。

それはまったく、肉体を通じて愛し合つて

いる者同志の姿だつたのだ。殊に年輩の方の男は青年を「タツちゃん、タツちゃん」と呼んで、舐めるように可愛がつた。

話の様子では、そのタツちゃんと云うのは何処かの洋品店の店員をしてゐるらしく、「なにしろ、タツちゃんはすぐ、誰からでも目をつけられるんだから、気が気じゃないんだ。この間一緒に歩いてゐた奴だつて、どんな仲だか判りやしない……」

などと、しきりに妬いてゐる様子だつた。まったく、その青年は、人好きのする容貌だつたが、それにも増して素晴らしいのは、その色白のスナリした裸体だつたのだ。僕はもう彼の姿から、視線を外すことが出来なかつた。

まったく女の肌のように白く脂がのつて、丸くしなやかだつた。色黒でガツシリした筋肉質の男と、からみ合うようにふざけている様子は、僕にはひどく挑発的だつた。僕はもう、部屋でただ一人、僕が戻るのを待つてゐる新妻のことなど、すつかり忘れ果ててしまつてゐたのだ。

二人は背中を流したり、流されたりする。激情を押え切れないように、互の軀をみつめ合つては、クスクス笑つたりする。僕にとつ

て、これほど刺戟的な光景はなかつた。僕は亢奮し、湯の中で一人身もだえした。苦しいほどの羨望に耐え切れなかつた。

彼等が傍若無人にふる

まつて、やつと浴室を

引揚げてから、僕は

すつかり疲れてし

まつて、ぼんや

り部屋に戻つ

た。妻はホツと

したような顔で

僕を迎えたが、

口を利くのもも

の憂くて、僕は

そのまま床に入

つてしまった。

すつかり煽られ、

燃え上つた僕の欲情は

しかし、白粉臭い妻の床

に行く気にはなれなかつた。

手をのばせば、届く場所に寝

ている妻の存在は遙かに遠く、

隣室の気配ばかりが気になるので

ある。



なんだか、

ヒソヒ

しのび笑いが聞えるような気がして、眠るどころではない。僕はジツと耳をすましながら闇の中にあのタツちゃん、のびやかな肢態を描いて、牀を堅くしていたのだ。

翌朝、僕たち二人は、伊東を発つて修善寺に出かける予定になつていた。僕は迷つた

が、誘惑に耐えられなかつた。ありもし

ない口実を作つて、尙この旅館に止る

よう、妻を納得させた。彼女はなんと

なく淋しそうな様子だつたが、僕は

彼女をかまつてやるような、気持の

余裕はなかつたのだ。

ただあの二人づれに対して、全神

経を動員していた。彼等の部屋の戸

が明くと、僕もすぐ廊下に出た。街

の散歩。娯楽室の玉突き。なんでも

二人の後から馬鹿のように行つ

た。

始めのうち、彼等は全然僕のことを無視

していた。まつたく、女連れの、しかも新

婚旅行の男など、彼等にとつては、何の興味

もなかつたに違いない。しかし、何時も跡か

らついてゆくうちに、彼等も又、僕に対して

関心を抱いて来たらしい。そして、その彼等

と同じ、僕の性癖を見抜いたのは当然だつ

囁く声や、

ソと

た。

毎晩深夜の浴室にゆく彼等の跡から、僕はもう恥も外聞も忘れて、ついて行つた。そして、今はもう、僕の注視に対して、まったく警戒を忘れた彼等は、まるで僕の反応をためすように、タイルの上でたわむれた。

デクのようにそれを眺めて息をはずませながら、僕は苦痛と快感を同時に味つた。男の躰に手をかけながら、からかうように僕の方をチラリと見る、タツちゃんの名まめかしい態度が、僕の性感をひどくゆすぶるのだ。

そうして、彼等二人と、僕との、奇妙な関係がつづいた。彼等は明かに僕の立場を嘲いながら、幾分同情もしている様子だった。

僕たちの新婚旅行も、始めの予定通り行けば、既にもう終つて帰京している筈だった。妻はわけも分らず、ただ僕の不可解な態度に、オロオロしている様子だった。

僕自身も、今はもうどうなることか、見当もつかぬ、自分のやるせない色情に疲れて、瘦せ果ててしまつていた。だが、どうしても抜き差しならぬ、執念のようなもの

に、とりつかれてしまつていたのだ。

その宿について一週間目の夜、僕はやはり隣室の戸が明いた気配で廊下に出た。それは珍しくタツちゃん一人だった。僕は胸を躍らせながら、後を追つた。そして、曲り角を何気なく曲ると、思いがけなく、タツちゃんがニコニコ笑いながら、僕を待受けているではないか！

「あのね、もし、なんでしたら今夜、僕たちの部屋にいらつしやつてもいいんですよ」彼は笑いながら、囁くようにそう云うのだった。僕はあまりの意外さに言葉が詰まつた。

「大丈夫です。あの人も承知しててなんですから。温泉なんて、そうそうは来られないんだから、楽しめるだけ楽しんで、遊ぼうつて、そう云つててんです」

その夜、もちろん僕は隣室を訪れた。もはや、理性でどうなるものでもなかった。その部屋で男三人、どのような奇妙な情欲図がくりひろげられたか、それは御想像に任せよう。

新婚旅行の新妻が、一人放置されたその隣室で……。哀れなのは妻か、或は僕であつたのか、それは今も判らない。

愛 読 者 通 信

拜啓、そどもあ通信を通じて同好の皆様との通信御交際願ひたく御便り致します。

小生二十四才、身長五尺四寸、体重十五貫五百、色は浅黒いと言つた感じですが。私は先天的な同性愛者で、それを意識とまで行かなくとも、それを感じた事は小学校三年の頃からです。幼ない頃は心の中で愛して居るだけでしたが、それが中学に入学し、次第に発育して、より知性的な者より無知な者を恋する様になりました。神経質な弱い感じの人は好まず、無精で行動的な人に、憧れを感じます。そんな人を思ひきり愛撫してみたい。

一度男娼と遊んだ事がありますが、女装した男性には嫌悪を感じて満足は得られません。時折り新宿や上野のガルソンと遊ぶ事もあります。その場限りの情熱で満足には至りません。

趣味は音楽、文学、演劇なぞです。同好の方御便り下さい。京都MY東京ST桐生AK埼玉杉田の諸氏誌上御紹介下されば幸甚に存じます。

(E・K生)



變態 十二ヶ月

裸になりたがる淑女

「坊や……あんた、私のヌードを描いてみない、私、モデルになつてあげるわ」中學生は顔を眞ッ赭にして尻込みした。そのうぶツたらしいのが、また、この歳上の女には、可愛くてたまらない……

武野 藤介

1

高橋鉄氏著『あまとりあ選書』第二集、異
常性愛分析、二二五頁に、

「昔々、ナルサスという美少年は、年頃になつても異性など全く興味がなかつた。そして森の中の湖沼に映る美しい裸の姿を瞞めて恍惚としていた。それは云うまでもなく彼自身の映像であつた。こうしてナルサスは自分の姿に見惚れたまま衰えて行き遂に死んでしまつたのである。そのあとに一莖の花。水仙（ナルサス）が咲いたという。この伝説によつて、ネツケがナルチスムスと名づけ、この

自己恋慕症をフロイドは更に詳しく定義している。しかし、こういう心理はすべての人間に大なり小なり潜んでいる」云々。

と、こういう意味のことを述べているが、このナルシシズムは、変態性愛の一部門として、昔からの定説となつていて、勿論、これが「症」といわれるのは病膏盲のたとえで、常規を逸脱するからであるが、人間、特に若い女性には多少ともこの傾向がある。

第一、若い女性が、ハンドバッグに鏡を手放さないのも、身だしなみというものでもあらうが、一面、自己恋慕症的だからではなからうか。

僕は最近、その典型的な自己恋慕症の、ある女性の話を聞いたが、西銀座で有名なさる料亭の、「僱われマダム」だつたので、僕とも一面の識があり、

「へえー、あのマダムが、ねえ。若い時に」と、眼をみはつたものだ。

本名はいずれも仮名にしておくが、いや、その本名よりも、通称「淀君」という愛称で知られ、この綽名をいえば、銀座マンのそこ

らあたりに御存じの人も多からうが、そもそも、そのニックネームをつけたのが堤画伯で彼女と、その料亭を、最初、僕に紹介したのも、この親友の画家だったのだ。

既に、中年を過ぎて、でぶでぶと、二十四貫にもなつたわが身を、デンとばかりに、帳場の長火鉢の前にかまえて、料亭蔦屋の、いわゆる、僱われマダムながらも、裏のことはともかく、おもて向きでは、由緒ある身の固い未亡人ということで、勿論今は、夫もなく、きまつた旦那の噂も聞かず、その姥咲きの美貌が店の看板ともなり、万事の采配をふるつてゐる彼女の、その貫録が、ひとつには、彼女の持つて生れた性格的類似性もあつて、故人歌右衛門の舞台姿を思わせるというところから、この堤画伯がつけた綽名らしい。

この二人は随分古い馴染。中学生の頃から絵の好きだった彼がお稽古に通つていたアトリエで、当時、女子大学生だった彼女も、同じアトリエへ、これはお嬢さんのお稽古事として通つていた。古風にいえば寺小屋仲間だったのだ。

三つ歳下のこの中学生を、すつかり、お姉さまきどりで、

「坊や、坊や……」

と、馴れ親しんで、或日、この女子大学生の荒井久恵が、思いもかけないことを云いだした。

「坊や……あんた、私のヌードを描いてみない、私、モデルになつてあげるわ」

中学生はその場で顔を真ッ赧にしてしまった。尻込みをした。そのうぶッたらしいのがまた、この歳上の女には、可愛しくてたまらないという様子だった。

勿論、この中学生は画家志望で、少年の頃から天才児などといわれたりして、親達も、周囲の者も、その気で激励してゐたのである。アトリエではクロッキーもやつた。モデル女のヌードには、とつとつに、この中学生の眼も慣れてゐたが、それはそれで彼女達を職業婦人として見たし、また、その裸婦がいわば唯一の売り物でもあつたから、神は二物を與えずというのがこれか、容貌が揃いも揃つていずれもいただき兼ねたのだ、わが家の女中たちのほうがよッぽど美人だった。が、荒井久恵のヌードでは、中学生ながらも、モデル女のそれと違つて、平気で見ていられそうになかつたからである。

「坊や、描きたくないの？」

描きたくない筈はないのだ。

「とツても綺麗な肌よ、シミ、ひとつないわ。空気にさえよこれそうな肌よ」

と、そんな風にまで云われたが、堤少年は益々羞んだ表情で、結局、首を横に振つたのだ。

「私ソうちの、洋間のほうの応接間なら、鍵もかかるし、ここをアトリエにしたら、私、平気なんだけどなあ」

また、ちようどその頃、自宅の湯殿を改築してゐるとかで、富裕な、母親のない家庭でひとり娘として、わがままいッぱいに育てられていたこの嬌慢な女子大学生は、父親にせがんで、その浴室のタイル張りの壁に、等身大の鏡をとりつけたという話をしてゐた。

「その鏡に、私、自分のヌードを、いろいろ映してみるのが好きよ。自分でいろんなポーズをしてみるわ。いつまで見ていても飽かないわ」

と、そんなことを彼女の云つたこともあつた。

2

フィリッピンのスポーツ選手の一行が来朝したことがある。日比スポーツの国際的交歓

である。女学生のサイン事件というのがあった。その異国の選手達に、サイン帖を持った女学生の一群が、あちらでもこちらでも殺到して、それが桃色事件を起して、新聞の三面記事になったことがあつたのだ。

この一行に拳闘選手もいた。荒井久恵の父親、この貿易商は、昔から拳闘ファンの紳商として知られていたから、これを目黒の別邸に招待して、国際的交歓の晩餐会を催した。その席上、彼女はフィリッピン選手の一入をじつと、見つめていた。その一挙手一投足から眼を放さなかつた。ふと、それと気がついて、その選手のほうでも、あの時の堤少年のように顔を染めた。あとで、これを父親が笑つて、



「きつと、何か、云いだすだろうと思つたら……」
と、いささかあきれ顔。

「久恵は……あんな眼つきをすると、きつと何か、ねだりごとを云いだすからなあ」

母親のない娘には、父親も馬鹿のように甘かつたが、しかしこのねだりごとは難題だつた。その選手のヌードをモデルにして油絵が描きたいと云いだしたのだ。が、父親の金力をもつてしても、これは容易に先方がオーケーしなかつた。逡巡した。尻込みをすればされるほど、彼女の願望は、いよいよ燃えて、

「それじゃ、せめて、私のボーイ・フレンドに……」

と、云いだしたから、

「モデルのほうをあきらめてくれたか」

父親は笑つて、「お友達になるぐらいのことなら、万事、このパパが、そのような舞台装置をこしらえてやろう。だが、女学生がサイン問題などを起して、新聞種になつたりしている折から、久恵も、よッほど、注意してつきあわなけりやいけないぜ」

「私なら大丈夫よ」

事実、この二人は、父親のはからいで、お友達にはなつたが、桃色問題のようなものは何も起さなかつた。が、彼女は初一念、この異国の青年をヌードにして、モデルにする願いを決して放棄していなかつたのだ。あとで、未完成ながらも、その六十号の油絵を堤少年は彼女から見せられた。

これが、かれこれ二十年ばかり前の話。

そのうち、良縁があつて彼女は結婚。それツきりこの二人は会う機会もなかつた。戦争。空襲。疎開。敗戦と、慌しい歳月が過ぎて、終戦になつてから何年かたち、偶然、この料亭鳶屋で、昔の寺小屋仲間が邂逅つたのだそうである。

勿論、堤画伯には既に妻子もあつたが、昔堤少年を、坊や、坊やといった頃の、あの頃の彼女の眼を思い出させるような笑顔で、

「まあ！ おなつかしい……」

と、いかにも懐かしそうに云つたが、堤画伯のほうでは、見違えるように、ぶよぶよと肥満している彼女に、何よりもまず、眼を瞠つたようにしてみせると、彼女もすぐそれと察して、

「こんなにふとツちまつて……」

「だが、相変らず美人だなあ」

「嬉しいわ。お世辞でも」

と、笑つて、係の女中にも、

「私のオールド・フレンドよ。懐かしき友よ。ここはいいわ。私がサービスするから」

互いに一別以来の身上話を、酒の肴に、話したり聞かせたりしながら、堤画伯もだいたい酔つてきてからだが、急に、思い出したようにして、

「あの絵。どうしました？ フイリツピンのボクサーを描いた未完成の六十号さ」

「何もかも戦災で焼いちやツたわ」

「御同様さ」

「でも……あの絵のこと、よく覚えていらつしたわね」

「君のことを思い出すと、外のことはたいてい忘れてしまつてゐるが、不思議に、あの絵のことを思い出すのだ。いや、傑作だつたら印象に残つてゐるというのじゃない。あの頃、恐らく君はまだ処女だつたらうが……」

「勿論だわ」

「その処女が、さ。どんな気持で、あの異国人の股の間にぶらさがつてゐるものを描いただらうか。それを想像するかららしいンだね」

彼女も笑つた。

3

この邂逅が縁になつて、堤画伯は、それからときどき、この蔦屋へ飲みに行つた。ひとりのこともあつたが、たいてい、誰か友人を連れていた。斯くゆう僕もその友人の一人だつたのだが、或夜、堤画伯はすっかり酔つてしまつて、酒に強い彼が、ジンをちやんぽんにしたのがいけなかつたのか、珍しく、足腰をとられて、前後不覚の酔態なので、僕も聊か持てあまして、

「マダム。君に預けて行つてもいいかい。昔の寺小屋仲間のことじゃないか。御介抱をお願いしたいな」

「いいわ。置いていらつしやい……」

と、まるで、品物でも預かるように、笑いながら、気軽に云つた。

こんな場合、これは誰でも一応、訊いてみる合詞だが、その後、堤画伯に会つた時、

「あれからどうしたい？」と、僕が訊くと、

「赤坂の待合の一室に寝かされていたよ」

「他人事のように云うが……」

「は、は、は……」

と、堤画伯が笑うのだ。

「ひとりでおやすみじやあるまい。マダムのあの御介抱の様子では、僕の見たところ、君にもしたところがあつて、いつになく、あんなに酔ッぱらつたのと……違うかい？」

「図星だ！ 流石に、艶笑作家！」

と、僕をおだてるような笑いかた。お土砂をかけたつもりか。

堤画伯にも、あの夜、そのしたところのあつたことは事実だが、それというのも、このあいだからちよいちよい、このマダムに、据臍も据えそうな謎めいた言葉をかけられていたので、そいつが自分で確めてみたくなつたからだというのだ。

こんな会話も二三度同じ合詞で、

「一遍、私と一緒に寝ない、あと腐れなく、

さ」

「据膳かい？」

「でも、二十年前からの私の据膳だもの」

と、こんな冗談らしい会話。その冗談から駒が出たようなところもあつたのだ。

第一、相手は、あのデンとかまえた二十四貫の淀君である。甚だ申し遅れたが、この画家は二十年前と同様、いまだ、十二貫を超過したことはないという瘦身である。相撲にも何ンにもならない。

「いつてみれば、堤画伯のアルバイトのようなもの。いや、そのアルバイトも覚悟の上でともかく、僕も、待合へ運びこまれるまでは万事、豫定の行動だつたのだ。多少は、酔いを誇張したところもあつたろうが、いつもよりかひどく、深酔いしていたことも嘘ではなかつた。まず、ぐッすりとひと眠りしたの、さ。第一、このままでは、かんじんなものがお役に立ちそうにもないからね」

さて、夜中に眼が覚めた。咽喉がからからだ。その酔いさめの冷たい水のうまさ。二ツ並べて敷かれた寢床。

それへマダムが寝ているのだ、

夏のことだから蚊帳が吊つてある。が、気がきかないにも程があるといいたい。枕もと

には、定法どおりに、スタンド・ランプもおいてあるのに、それを消して、寢床の真上にカンカンと電燈をつけたままだつた。雰囲気のおち壊しも甚だしい。チエッ！と、舌打ちのひとつもして、酔いさめの冷たい水を咽喉に通すと、堤画伯は何気なく、マダムのほうの寢床を見た。

「お眼覚め？」

「……………」

「ひどい癖だつたわ」

「……………」

「その上、今夜は、いやにむすわね。久しぶりで寢床の変つたせい知ら。ちツとも眠れないのよ」

こちらへも団扇の風をよこしながら、

「暑い、暑いッ」

ぱツと、軽いかけ蒲団を脚で蹴るようにしたかと思うと、そのカンカンとした明る過ぎる電燈の下で、彼女の全裸の姿。文字どおりに一糸も身につけていないのだ。

「ほう！これはまた、思いがけない絶景だなあ」

「何ッ、云つてんのよ」

昔も、彼女が自慢してただけあつて、肥満の巨体ながらも、実に、美しい肌だつた。

「美しいなあ……………」

お世辞の嘆息ではなかつたのだ。

「画家が、女のヌードを、珍しいみたいに云うのは滑稽よ。おかしいわ」

「……………」

「私、いつも裸で寝るのよ。娘の頃から習慣よ。自分で、自分の肌を見ているのが……好きなんだわ」

「冬でも？」

「そうよ。冬は、かえつて、裸で寝るほうがあたたかいわ」

さて、二人のこの初夜は、焼けぼツ杭に火がついたような錯覚だつたそうである。が、この一遍で、堤画伯は懲り懲りしたと云つていた。その巨体に挑戦する事もさること乍ら、彼女が非常な汗かきだつたからだ。

「まるで、水びたしみたい、さ」と、これは誇張だつたろうが、面白そうに笑いながら、

「僕、早速、彼女にプレゼントの品を持つて行つてやつた。御介抱の寸志という気持だ」

「僕、何をプレゼントしたと思う。コント作家なら、これも一ツのおちだと云つて、褒めてくれそうなのだが……」

「何をプレゼントしたい？」

「シツカロールさ」

(おわり)

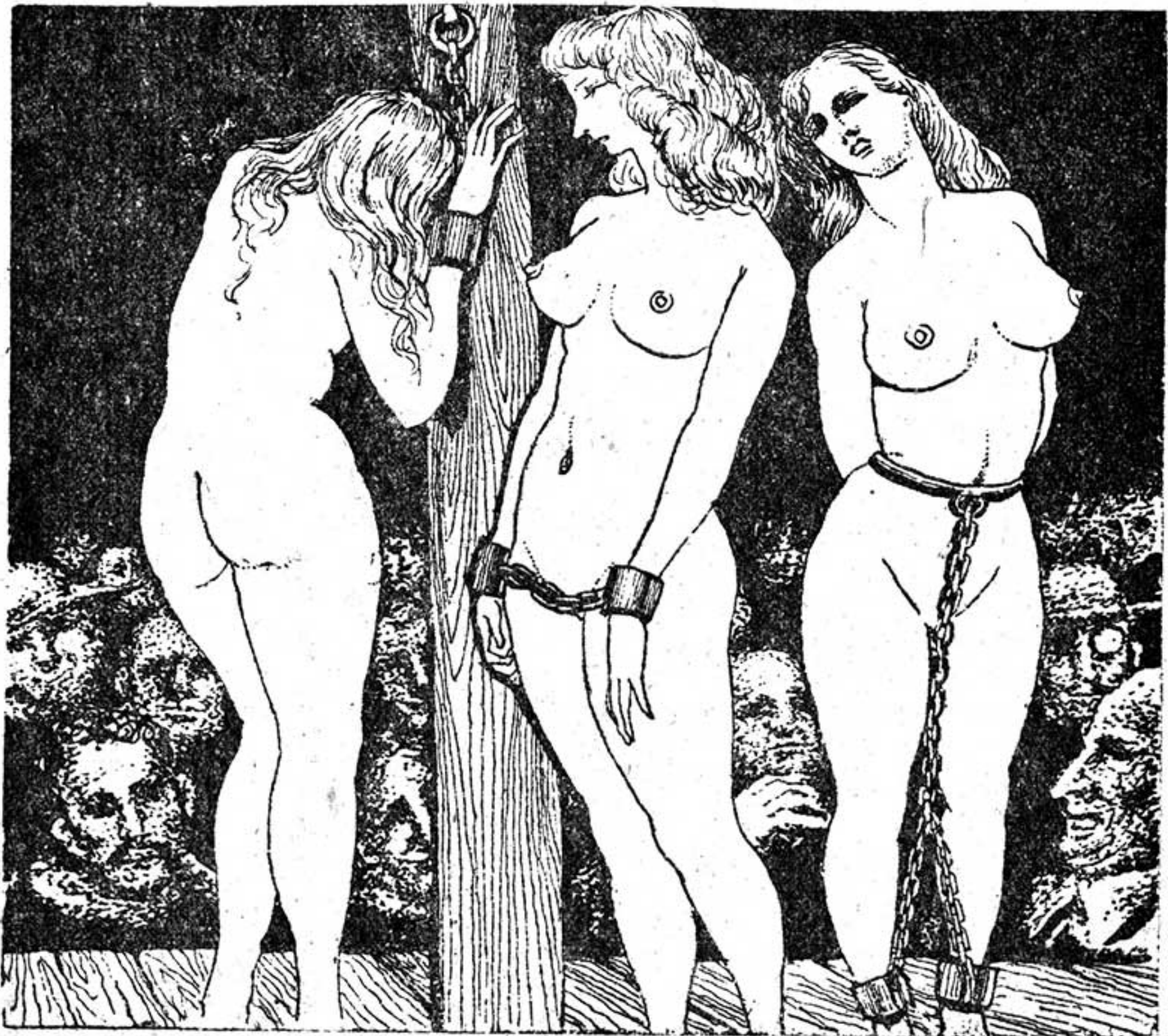
連 載 ・ 第 二 回

奴 隸 祭

ためらっている彼女を、黒ん坊の下男達が忽ち眞裸にして食卓に上げた。
とたんにビュツと鳴る鞭の音、一條の赤い線が彼女の肩から背中に斜めに浮
んだ。續いて第二の鞭が、勢よく白い盛上ったお尻に食入る。第三撃が……

D・B・アレラ原作 三宅一朗譯

画・中 川 彩 子



その三 五人の女奴隸

両手を鎖で縛られたイザリンを乗せた馬車は、暴風雨をついて走りつづけた。どこへ行くのか彼女にはわからない。スプリングフィールドの我家がどの方角かも見当がつかなくなった。魂が抜けた痴呆のように馬車の隅にじつとしていた。怒つても悲しんでもいない。

馬車は、ニューオルリアンズの北にあるゼツファッソン郊外のアスコットの邸に着いた。彼は、打つて変つたように女の子が変なので、少々うす気味わるくなり、せつかく苦心して手に入れた大事なタマに万一のことがあつてはと、家に帰るとすぐ黒ん坊の女中にイザリンの世話をさせ、一方医者と呼んできて手当をさせた。もと通りの正気と健康をとり戻してから、あくまで反抗する彼女をムリヤリに屈服し自由にする楽しみを後日にとつておいたのだつた。

数日して、彼は、ひよつこり同好の士である農園主のモーチマに会つた。

「やア、ちようどいいところで会つた」とモーチマはいつた。

「留守にしていたそうだが、いつ帰つたね？　じつは今から二週間後に僕のところまで面白い催しをやるからぜひ来てくれたまえ。綺麗どころがタンと居るぜ」

「行くよ」

「どんな趣向があるかはおあづけた」

約束の日、アスコットはアーサー・モーチマの所有地ドナルドスンザイルに出かけてみた。なるほど、彼の家は活気づき、遠近の農園主たちが二十人以上もお客に来ていた。その人たちより、まずアスコットの眼をひいたのは美しい三人の貴婦人と二人の娘だつた。一種のパーティーで、みんな飲んだり食べたり踊つたりしたが、主人のモーチマ以外、誰も五人の女性の正体は知らなかつた。こういう席へ呼ばれてくる踊子や商売女にしては上品すぎた。好奇心に馳られて訊くと、モーチマは、ただニヤニヤして話をそらしてしまうのだつた。

酒がまわつてくると、そろそろ座が乱れはじめ、お客たちの言動が下品になり淫らになつてきた。いつまで経つても主人が女たちの身分を紹介しないので、図々しい連中は、勝手に彼女たちをつかまえて口説きはじめた。瘦形のブリュネットの女がシスリイという名だとわかつた。

一人の好色そうな老人がしきりにブロンドの背の高い、五人のうちで最も肉感的な女に言い寄つていた。

「バーデイさん」とモーチマは声をかけた。「その女のひとに何をたのんでいるんですか？」

「わしかね？　わしやアね、あんたの胸はさぞ美事ぢやろうと言つとるところだ」

「ぢや御覧になつたら如何がです。ローレンス、御覧に入れなさい」

ローレンスと呼ばれた美しい女は、歎願するように主人を見たが、やがてきつと睨んでいるモーチマの視線に眼を伏せ、お

ずおずと胴衣の紐に手をかけた。

「早くせんか！」

一座は水を打ったように静かになつて彼女の指先にあらゆる眼がそそがれた。

彼女は胴衣の紐をゆるめ、両手を我が胸に差し入れると世にも美事なギリシャの彫像のようなふくよかな乳房をとり出した。一同、ぐつと唾をのんだ。

二つの乳房は、息をはずませてゐる彼女の起伏する胸に生物のようにうごめく。

「うーむ、わしの言つたとおりだ」

バーデイ老人は取つてつけたように呻くと、ぐいと盃を飲みほし、そのままカップを一つの乳房にかぶせた。

「どうだ、このカップにびつたりじゃ」

「男の手にもびつたりさ」

とアスコットが叫んで、残つた片方をぐつと手いっぱいにつかんだ。

わつと満座は一齊に喝采した。と同時に、一人の青年が女の一人にびしやつと頬を平手打されて低い声を発した。女は真赤な顔をしてスカートをなおしている。どうやら青年は、皆がローレンスの乳房に見とれてゐる隙に彼女にイタズラをしたらしい。

ところがである、この有様を見たモーチマは、ゆつくりとその女のところへ歩き、おい、と黒ん坊の召使に合図して革紐のついた鞭を持つて来させ、びゆつと一振りテーブルの上に円を

描き、次にヒイツという女の悲鳴と同時に、ぴしりと彼女の白いムキ出しの肩を打った。

「ぢや、この女たちは奴隷だつたのか？」

誰かがやつとこう訊いた。

「じつはそうなのだ。できるだけそのことをヒミツにして皆さんの驚きと喜びを大きくしようとしたのです。お客さんが何をしても我慢してると厳命していたんですが、デイジイのやつが一人前の貴婦人らしいマネをしたんでこつちが我慢ならなくなつたんで、はッはッは」

と前置をし、彼は、先頃の棉花の暴落と経済恐慌のために、それぞれの事情から奴隷の身分に落ちた彼女らをニューオルリアンズの市場で買ったイキサツを物語つた。

「みんな立派な暮しをしていた女どもだから、はじめは山猫を馴らすのより大変だつた。泣いたり喚いたり、氣絶したり怒つたり、死ぬほど口惜しがつたものだが、こつちはそれだけ余計に馴らすのが楽しいものだ。今では御覽のとおり羊よりおとなしい。このデイジイとシスリイは義理の姉妹、つまり御享主だつた奴が兄弟つてワケ。いちばん若い娘はデイジイの本当の娘だ。さ、デイジイ、お客さまを撲つた罰だ、裸になつてテーブルの上へ上れッ！」

ためらつてゐる彼女にモーチマの合図で黒ん坊の下男たちが寄つてたかり、たちまち一糸まとわぬ真ッ裸にして食卓の上へ上げた。

しばらくは、息をのんだ会衆が、その美しい女体に感嘆と好



色の視線をそそいだ。

とたんにピュツと唸る笞の音、一條の赤い線が彼女の肩から背中中に斜めに浮んだ。つづいて第二の笞が勢よく白い盛り上ったお尻に食い入る。第三撃――

客たちは一齊に興奮した。あたりは一種の殺気じみた異様な空気につつまれた。

「ほかの四人も出し給え」

「われわれにも楽しみを頒けろ」

「独り占めはケシカランぞ」

わいわい騒ぎだした。

「諸君」

とモーチマは、やおらテーブルに上つてデイジイの肩をつかんで一同を制した。

「まあ静かにして下さい。皆さんの気持はよくわかります。誰しも、あんな女奴隸と二人きりになりたいと思うのは当然のことです。しかし女は五人、皆さんは二十人以上、とうてい各人に満足をお与えすることができません。そこで、今日のところは十五分間だけ

女たちを皆さんの御自由にまかせます。その間は何をなさろうと御勝手ですが、おたがいに紳士らしく礼儀を守つて見苦しい争いのないように願います。ただしです、いちばん年若のクラは、まだ処女ですから、どんな目に会わせても構いませんが処女たることだけは保存願います。皆さん、お誓い下さいますか？」

「誓う！」

一同が異口同音に叫んだ。

「さいごに」とモーチマは一段と言葉に力を入れた。「もう一つ大きな条件があるのです。というのは、私は、これらの五人の白人奴隷を手に入れるために財産を全部つぎこんでしまい、破産一步前にあるのです。ついては、私は金が欲しい。そこで向う一ヶ月のあいだ私の宝クジを売り出しますから奮つて御買上げ下さい。一枚五百ドル、一人何枚でもかまいません。なるだけ多勢に吹喋していただいて一枚でも多く売れるようにして下さい。おツと肝心の賞品のことを言い忘れていました。賞品は、当りクジの人が好きな女を五人のうちから選んで下さい。つまり、たつた五百ドルで白人の女奴隷が一人手に入るワケです」

わあツと歓声があがった。賛成、異議ナシ、十枚買った、狡いぞ、商売達者、等々色々な声が上った。

「それでは皆さん御後援下さるものと認めまして今から十五分間、女どもを解放します。クジに当たったときに迷わぬよう、ごゆつくりと隅々までお検べの上、男が女にできることは何でも

お試し下さい」

見栄を切つたモーチマがさツと手にした鞭で合図すると、残つた四人の女が半裸体で黒人たちの鞭に追われて次の間から駆けこんできた。それを迎えた上気した男たちは、たちまち一人に三人四人と群がつて、オモチヤのように女体をいぢりはじめた。五分もたたぬうちに五人のうち四人までが真ッ裸にされてしまつた。狂気のようにのぼせた赤ら顔の中年の紳士は、金髪のローレンスを長椅子の上に捻じ伏せている。そのうち何処から持ち出したのか、男たちは手に手に革の鞭をもつて、うつ伏せに抑えつけられた女たちの盛り上つた二つのお尻を打ちはじめた。食卓の上に裸の女を仰向けにしてブドー酒を注ぐ者もいた。異様な男たちの動物的な荒々しい息づかいと唸り声、女たちの鋭い悲鳴、あらゆるものが奇怪な一団の混乱に渦巻き溶けていつた。

その四 狂女的情欲

モーチマの家での乱痴気さわぎが悪夢のように頭の底にこびりついたまま、アスコットは、疲れきつた身体を引きずるようにして我家に帰つてきた。もちろん、彼も、女の屈辱と苦痛を十分に味わつた一人だつたが、他の連中のように野蠻ではなかつた。よほど変つた苦痛を与えなくては面白くなく、いわば智的な残忍性、程度の高いサディズムでなくては満足しなかつたのだ。

ぐツたりと眩掛椅子に腰をうずめ、じツと眼をつむつたまままるで意識を失つた者のように長いあいだ身動きもしなかった。何一つまとまつた考えはできない。もの凄く疲れている。そのくせイラ／＼して落着けない。——いつたい、これは、どうしたというのだ。俺は発狂するのではないかしら？ 女、ああ、女。どんな女も、どんな女と、どんなことをしてみても満足しない。今日、モーチマのところで見た五人の女だつて、けつきよく似たり寄つたりなものだ。これといつて惚れこむやつは居らん。イヴリンだつて、あんなに熱狂的に自分の所有にしたが、今の状態では触手は動かん。いつたい、俺は、どうしたというのか？

じつさい、アスコットは、今の自分の気持に驚いていた。一切がつまらなく、すべてが物足りない。それでいて死ぬほどの快楽とスリルを求めている。いつそ、自分のからだも家も土地も、世界中の人間も、地球も、めちや／＼に碎け散つてしまえとも思つた。

この狂気は、イヴリンの変化にあつた。猫が鼠をナブリ殺しをするように、彼女の健康が元どおりになり次第、ゆつくりとその貞淑を犯そうと舌なめずりをしていたのが、意外、彼女はあの暴風雨の夜のショックを受けて頭が変になつたまま治らなかつた。

一見、彼女は、べつに変化はない。しかし、過去のこととは忘れてしまったようだ。良人のチパーズも、彼にたいする愛惜も貞節も失つたらしい。だから、悩みも、悔みも辱しさもない。

ただ、自分が奴隷になつたという意識と熱い人間の牝の血がめぐる成熟した女体があるだけだつた。この女体の安定を、彼女はアスコットに向けた。アスコットが手を出すまでもない。彼女のほうから進んで身を投げてきた。

アスコットはびつくりした。と同時にがツかりした。とたんに彼女にたいする情熱がさめ、イヴリンが、あらゆる女の嬌態で迫れば迫るほど、男は、むしろ恐怖を覚えてきた。

これが何日もつづいて、彼の神経もおかしく、ちぐはぐになつてしまつた。

「だめだ、なんとか、あいつを仕末しないと俺までが気狂いになる！」

彼は、こう独り言をいつて椅子から立上つた。そして、憑かれた者のように二階を睨んでいたが、やがて決然とイヴリンの部屋へ上つて行つた。

「イヴリン」

彼はこう叫んで部屋に飛びこんだ。

イヴリンは、もう寝ていたが、すぐに半身をベットのの上に起してニツコリと笑つた。

「イヴリン、お前はチパーズのワイフだな？」

「ちがいます、あなたの奴隷です」

「畜生ツ」アスコットは齒ぎしりした。

「チパーズを忘れたのか？ お前の亭主だ」

「そんな人は知りません。私は、あなたのモノです。どうして自由に、滅茶々にいちめて下さらないの？ 私は、こんなに

求めています。私に女のよろこびを与えて下さい」

「バカヤロウ！ どうして貴様は反抗しないんだ。なぜ口惜し
がらないんだ。怨め、俺を憎め、呪え」

「あなたを愛します」

「この牝豚め!!」

アスコットは苛々してあたりを見廻し、いきなりカーテンに
飛びつくと、太い曳綱を狂気のように引き千切った。それから
異様に眼を光らせながらイザリンに近寄ると、彼女は艶然とほ
ほえんで白い腕をあげて彼を抱こうとした。瞬間、ぴしヤツと
女の頬に平手打が飛び、恐怖と驚愕と情欲に見開いた女の眼の
前に男の顔と手が縦横にチラつき、みる／＼うちに彼女はベッ
トに仰向けになつたまま、両手は頭のうしろの柵柱に縛りつけ
られてしまつた。と思つた次には、アスコットが、半狂乱の態
で、寝巻を脱がせ、袖を引き千切り、下着を引き裂き、またた
く間に彼女を全裸体にしていた。

「……………」

期待にくねらす女体をじつと男は見下していたが、ふと身を



ひるがえすと、さっさと部屋を出て行つた。

しかし、狂女は、はじめてそんなことをしてくれた男が嬉し
いのか、美事にくびれた腰をうずかせながら男性を、牡を待つ
ていた。やがて男は戻つてきた。数本のブランディを持ってい
た。彼は、にやりと笑ふと、こんどは女の太ももを強く／＼縛
つてから、ゆつくりと酒壇の栓を抜いた。

二人とも無言。アスコットは、たくましく張つた女の腰と太
ももにチロリと眼を投げ、ブランディを、ももと下腹とで出来
上つた軟い谷間に注ぎはじめた。ぴつたりと合わさつていて酒
は一滴もこぼれなかつた。やがて、谷間の湖水のような酒の池
ができた。

それは世にも異様な光景だつた。いつの間にか半裸になつた
アスコットは、別の栓を開けた強い酒壇を、とき／＼ムリに女
の口に当てて一飲み二飲み吞ませ、こんどは自分が彼女の体に
出来た湖の酒を少しづつ味わうのであつた。

こうして何分か経つうちに、いつのまにか男と女の忍び笑い
が聞えるようになり、そのうち、きや／＼／＼という女の嬌声や
男の嬉しそうな笑いが部屋からもれてきた。どうやら二人とも
酔いがまわつてきたらしい。

ふと笑声がやんだ。ウウウウという女の苦痛と歡喜の呻き声
がした。

今、二人は一声もださない。いつのまに手を解いてもらつた
のか、イザリンは、犇と男を抱きしめている。脚は、まだ縛ら
れている。死んだように抱きあつてキッスをつづけている。キ



ツスというより、むしろ相手をムサボリ食べているといったほうがよい。がつくと――

アスコットは、女から身をほどくと、ペットの横にあつた大きなローソクに灯をつけた。

「ヒヒヒヒヒ」

彼はノドの奥から絞め殺されるような溜息とも笑声ともつかぬ声をだし、つとローソクを女の頭に近づけた。ヂヂヂと少しばかり髪が焼け、とたんに生臭い匂いが部屋を立ちこめた。

「もつと」

イヴリンは、わざと髪をローソクに近づけたが、アスコットは、すばやく手を引つこめた。はずみに、ぽたツ、と一滴、蠟の涙が乳房の一つに落ちた。

「熱ッ！」

女が上半身をくねらせた。が、ぐツと肩を抑えられ、つづいて一滴、二滴、熱い蠟滴が胸に落された。そして、胸からおなか、おなかから下腹、太ももの上。

「ヒヒヒヒ」

ぽたくと、そこらちゆうに溶けた蠟が落ち、そのたびにヒク／＼と女のからだがふるえた。

「どうだ叱豚め、思いしつたか！」

「もつと」

「えいッ、畜生ッ、まだか！」

アスコットは忌々しげに唸ると、ローソクの尖をぐツと女の脇腹に押しつけた。じいツと皮膚が焦げて灯が消え、ぎやツと

いふ女の魂げ声。

「ああ、御主人さま、私は、あなたのドレイです。殺して。殺して下さい。そのほうが嬉しいんです。もつといぢめて」

「よおッし」

どこから取り出したか、アスコットは、女の衣裳に付ける安全ピンがついた赤いリボンを手にし、いきなりイヴリンを横にすると、その白い肩の肉をつまんでプスリと針を突きとおした。小さな血の点。

「あはははは、これでリボンが直かについた、イヴリン」

こう言うと、彼は、女の太ももを縛った綱を解いた。

「ちよつとでも逆つてみる、そのリボンをむしりとつてやるから、豚め」「アスコットさま」

脚の自由を得たイヴリンは、よろ／＼と立上ると、なやましそうに彼に挑んできた。「えい、うるさい！」

どんと突きとばすと、びゅうと一振り、二つの大きなお尻に鞭が飛んだ。

「こんど、モーチマのところで五人の白人の女奴隷のセリ市の祭があるんだ。貴様も景品に加えて叩いてやるぞ」

「その五人のうちにブロンドの女がいますか？」

「いるよ」

「あッ、そいつだ」と、イヴリンは眼をかがやかして叫んだ。

「その女が私の敵です。ねエ、旦那さま、その奴隷祭に私を連れて行つて下さい。思いきりブロンドの女をいぢめてやりた

い。ええ、殺してやりたいわ」

「どんなふうによ？」

すると、イヴリンは、さも内緒事のようにアスコットの耳に長々と何かささやいた。と同時に、さも嬉しそうに固く／＼彼を抱きしめていた。

「うふふふ。なるほど気狂い女の考えそうなことだ。ちよいと面黒いな。よし、連れて行つてやる。思いきりブロンドの女に復讐したらいい」

狂女の顔は歡喜にかがやいた。男の唇をはげしく求めた。二人は、どちらがどちらか解らないくらい、からみあい、ころげまわつた。

その夜、おそくまで、その部屋では、この世のものとも思われないような異様な、凄惨な、呻き声や叫び声が聞えていた。

(つづく)

おことわり

さきに會員募集致しました通信風俗草紙は別に之と云う規則も設けず會員數も制限致しませんでした爲か、全く意外に多くの會員申込が御座いました。その爲、尨大な會員の皆様を対象にしての通信となりますと、結局範圍も広くなり自然多少はばかられる事態も出来、其の上皆様方の御期待に充分御添い出来兼ねる始末となりましたので、従来の通信風俗草紙は一応発展的解消と云う事に致し、読者交歓外手紙廻送等の点は本誌風俗草紙を増頁致し御取り扱いさせて頂く事に致しました。尙一層の御支援を賜りますよう切に御願申し上げます。

あれは今から三年前、あたしが高校に入つたばかりの年だつた。

あたしたちの学院は、誰でも知っている、

古い伝統のあるミッションで、中学部もあつた。だから高校に入つたと云つても、中学時代からの、御馴染みの御友達が多くて、とても家族的だつたし、割合に明るくて自由な学生々活をたのしむことが出来た、と云つてもいいのではないかしら？……

あたしは、この学院で、多感な思春期を過したのだけれど、やはり、^{つづ}跪き易い時期だつたのだ、と思う。それは最近よく映画になつている、性典もの、思春期ものとはまた別の意味だけれど。

その頃「番線グループ」と云うのが、^{チヨイ}チヨイ新聞種になつて、評判になつた。

それはあの新宿駅のホームを利用した軟派学生のグループのことなのだ。こんなグループは、当時ずい分たくさんあつ

あぶ・せくすありす

ガミアニの閨

やがて、押えられ、テーブルの上に縛りつけられた。丁度、解剖臺に乗せられたせ死體のように……。その時青子さんが握つていたのは白い羽根ペンで……………。



國方麻里子

たのだそうだけれど、なんでもそのグループはとても会員が多くて、派手な行動をしていてと云うことだつた。

だつたけれど、それが某週間雑誌にスッパ抜かれたものだから、一時はとても大変だつた。

「嫌ねえ……、汚いわ」
つて、あたしたちは不潔がつた。でも、前々から知つてた方や、案外平気な方もあつて問題にしたのは、私のような世間知らずが多かつたのかも知れない。

一年上で、中学時代からとても仲よくして下さつた邦さんと歸りに一緒になつた時にも、その御話が出たのだ。

「嫌だわ、男の人と一緒に遊びに行くなんて、どうしてそんなことをするのかしら……」

「どうしてつて、男の人たちと、一緒にお泊りしたりするのが、きつと面白いんですよ」

邦さんはハッキリそんなことを云つて、あたしの顔を見るのだから、私はみるみる赤くなつてしまつて、慌てて、

ところが、その番線グループには、あたしたちの学院の生徒も五六人いると云う。仮名

「いやッそんなこと、思っただけで、麻里子胸が悪くなつちやう！」

赤くなつたことを意識すると、一層恥かしくつて、あたしは耳まで真赤になつた。

あたしたちの学院は、共学ではなくて、女ばかりだつたし、男の兄弟もないから、あたしは男性に対する知識は至つて乏しいのだけれど、なんだか、若い男の人つて、生臭いような気がして、傍にいるのも嫌だつた。

その時はそのままで済んだのだけれど、翌日の放課後、ラケットを持つてコートに出ていると、遠くから邦さんが手招きする。何気なくショート・パンツのまま駆けてゆくと、花壇の傍まで引つぱられた。

「麻里ちゃん、あなたを今日、とてもいいところに連れてつて上げるわ」

「いいところつて？」

「黙つてついてくればいいの。とつてもたのしいグループなのよ」

グループつて聞いて、あたしが抗議しようとする、邦さんは笑いながら、

「あんな下品なグループじゃないわ。第一、男の人なんか一人もいない、女だけのグループのなよ」

とてもエレガントで、小じんまりした、た

のしい集りだと、邦さんはそう云つた。私はハニカミ屋だから、それでもなんとなくグズグズしていたけれど、女ばかりの集りなら、と思つたのだ。それに邦さんは、

「ほら、此処で待つてて上げるから、早く御着替えしてらつしやい！」

と、せき立てる。まるで命令するような口調だけれど、あの人はあたしに対して、そんな風に御姉様ぶる資格がある。又、あたしも大抵のことなら邦さんの云ひなりになるのだ。これは誰も知らない、あたしたちの秘密なのだ――。

と云つても、別にあたしたち二人の間に、特殊な関係があつたわけではなくて、全然精神的なことなのだけれど……。

中学部の二年の時、やつぱり放課後の激しい運動のあと、私は急に講堂の裏側で動けなくなつてしまつた。真つ蒼になつて地面にしがみこんだまま……。早くトイレに行きたいと思つても歩けないし、そのうち、白いショートパンツが汚れていることを知つた。その血の色を見ると、私は本当に死そうな気がしたのだ。

もちろん、生理の話は先生から聞いてはいたけれど、小さい時に母を失つて父と二人暮

しだから、あたしはそれを極く象徴的にしか知らなかつた。こんなに急に、しかもこんな場所で……。

幸ひに、御友達には誰にも気取られなかつたけれど、建物の裏つ側にうづくまつたまま、さて、これからどうしたらいいのか判らない。運動服を着更えなくては、と思つても、人目の多い脱衣室まで、こんなに汚れたショートパンツで歩くくらいなら、本当に死んだ方がいい……。

キャアキャアとはしやいでいる御友達の声を遠く聞きながら、私は本当に気が遠くなつてゆくようだつた。気持が悪くて、牀中の血が流れてしまうような不安――。

「まあ、こんなところで、どうしたの？」
ギクリとしてふりかえると、邦さんが立つていたのだ。その時は、まだ御名前もしらなかつたけれど。

「気分が悪いの顔色がたいへんだわ」
のぞき込まれても、立つことも出来なくつて、あたしは悲しさと恥しさに、ワツと泣き出してしまつた。

「あら、なあんだ、そうなの……。大丈夫。いいのよ泣かなくつても……。今、私がちやんとして上げるわ、待つてらつしやい！」



邦さんはそれから、
 テキパキと私に必要な
 ことを問ひただしてか
 ら、駈けていった。私
 は幼児のようにシヤク
 リ上げながら、一寸も
 動かずに待つていた。
 戻つて来た時、邦さ
 んはあたしの制服と、
 脱脂綿やガーゼを抱え
 ていたのだ。私は人目
 に脅えながら、汚れた
 下着を脱いだ。すつか
 り汚れた太腿も内もも
 も、邦さんはガーゼで
 きれいに拭つて下さつ
 た。

「泣かなくてもいいの
 よ。あたしたちは、み
 んなこうなるんだから
 ……」

「あたし、怖い……」
 「怖くなんがないわ、
 大人になつたのよ。さ
 あ、元気を出して！」

邦さんにそう云われて、私は汚れたショ
 トパンツを丸めながら、まだすすり上げてい
 たのだ。

前にも書いたように、私にはママが居ない
 から、この私の来潮を知つたのは邦さん一
 人。しかも恥かしいその始末を一切合切して
 貰つたのだから、それからもう、邦さんが私
 にとつてはグツと身近な人になつてしまつ
 た。あたしに対して、御姉様ぶる資格が、あ
 の人にはあつたのだ。こんなことを通じて結
 ばれた、女同志の微妙な暗黙の誘いのような
 ものは、男の人にはきつと判らないと、あた
 しは思う。

とにかく、その邦さんから誘われたのだから、
 あたしは勿論斥むわけはないのだけれ
 ど、なんとなく不安だつた。

「ほんとうに、男の人は居ないのね？」
 「オブ・コース。黙つてついていらつしや
 い」

代々木で国電を降りてから、七八分歩い
 た。ちよつと気が利いたアパート。その二階
 の東の外れの部屋の前に立つた。邦さんはそ
 のドアを、ヘンな風に調子をつけてノックし
 た（そのノックが、グループのサインだつた
 ことを、あたしは後で知つた）

「クニなの？ 遅いじゃないのさ？」

ドアを明けた人はそう云つて、あたしをジロジロみつめた。

「だつて、今日は御嬢様づれですもの、手間どつちやつた」

邦さんはなんだか蓮つ葉に云つて、あたしの腕をとつた。あたしは不安であの人の顔を見上げると、邦さんはもうなんだかキツイ顔をしていたから、一層気おくれしたのだ。

ガラソとした感じの洋間で、古びた椅子やソファ、それからテーブル。その外には一杯花を投げ込んだ花びんがあるだけだった（でも、あとで気がつくと、壁にモナ・リザの複製や、美術雑誌の口絵を切り取つたものらしい、レンブラントのサスキアの肖像画などが貼つてある）

「この人、麻里子……」

邦さんはそう簡単に云つて、あたしに腰を下すように合図したけれど、あたしは、この部屋の見知らぬ三人の女の人の視線に気押されて、ぼんやりつつ立つたままなのだ。

邦さんは、その人たちにあたしのことを紹介したくせに、あたしにはなんの説明もしてくれない。どうせ、詩や文学の研究会と云つたものだろうと、簡単に想像していたあたし

は、すっかり面喰らつてしまった。

「いいわね」

「クニ、あんた眼が高いわ」

口々にそんなことを云つていたけれど、窓ぎわの眩掛椅子にもたれた人は、黙つてあたしをみつめている。これが、青子さんに始めて会つた時のことなのだ。（その人は、青が好きで、身につけるものはすべて青色だった。だから青子さんと呼ばれていた）

それからのことは、順序だつて覚えてはな。あたしは動揺していたから……。事実、それから三十分ほどのちには、あたしは亢奮から失神してしまつた。

邦さんを入れて四人の女性は、みんなまだ高校や大学の学生で、グループのキャプテン格の青子さんも、やつと二十だと云うのに、この人たちは思ひもかけず恐しい人たちの集りだった。それは、それまで、あたしが思つてもみなかつたような、異様な性格をもつたグループだったのだ。

こんなグループ、こんな同性が、世の中に存在していることを知つた時の驚き……。それに、あたしはほんとうに、ねんねだったのだから……。

とにかく、気がついた時には私は見知らぬ

部屋の、ベッドの中にいた。裸だった。傍にあの青子さんと云う人がいた。（やはり後になつて、この部屋が先刻の部屋と二間つづきで、グループのために青子さんが借りていてことを知つた。青子さんは、大臣になつたこともある。有名な某実業家の妾腹の娘）

「寒い？ 震えてるわね」
「……………」

その人はそう云つてから、血のようなブドウ酒を口うつしに吞ませて下さつた。ためらいながら、あたしの喉がゴクリと鳴るのを、青子さんは鋭い眼でジツとみつめている。あたしは羽根布団にもぐりこむようにして、露はな肌をかくそうとせずには居られなかつた。さつきのことを思出すと、恥かしくて、牀のおきどころがなかつたから……。

私は邦さんに連れ込まれた時から、なんだか異常な空気を感じてはいたけれど、一座に男の人がいないことに安心していただつた。まさか、同性ばかりの手で、あんな理不尽なことが行われようとは――。

もちろんあたしは逃げまどつたけれど、青子さんの前で、一枚つつ服を脱がされていつた。やつぱり、死ぬほど恥かしかつたし、怖かつた。でも、シミーズのスナップを外そう



とする邦さんの手から必死に逃げながら、気持の何処かで、テニスをしたまんまの、汗になつた下着を恥かしがつていたのだから……その頃から、もうあたしの気持は支離滅裂だつたのかもしれない。

やがて押えられ、テーブルの上に縛りつけられた。丁度、解剖台に乘せられた死体のように……。こうして思出していても、あたしの体はゾクゾク震えてくる。今では、時間が逆に回転して、もう一度、あの光景が再現さ

れればいい！ とさえ、あたしは思う。そして、なんだか、わけのわからない涙さえ浮んでくるのだから――。

その時青子さんが握っていたのは、白い羽根ペンで、先の方の三分の一ほどは、青く玉虫色に光っている美しい羽根だつた。

「あの羽根、記念に日記のしおりに置いてよ」

そう云われて、あたしは赤くなつたこともある。

その外、荒い庭箒の先を小さく束ねたようなものから、革紐、足枷さえちやんと備えつけてある。お医者様がつかう器具さえもあつたのだ。

でも、青子さんは、身に傷をつけることはとても嫌いだつた。

「こんなに美しい麻里ちゃんだもの――」

と、あの人はそう云つたけれどあたしの手首にかすかに赤く縄のあとがつく程度なら、よかつたらしい。よく、その手首の赤い縄のあとに、青子さんは唇をつけた。

あの人がよく実行したのは、あたしの高くあげた両手に、大きな花瓶などを乗せる。花も水も入ったままだから、とても重い。もちろん裸で——。青子さんはベッドの上で黙つて眺めてる。時にはスケッチブックにそんなあたしの御仕置きをデッサンしたりする。

三分もしないうちに両手がしびれて、五分となるともう感覚はない。見事な花瓶や、美しい花を損じまいと思つて必死にこらえるけれど、肉体の耐える力には限度があるのだから、その時、あたしは花や花瓶と一緒に床に崩れてしまう。

青子さんはそんなあたしを見すえて、

「黄の花は駄目ね、真紅のダリアが一番よくうつるわ」

などと云う。どうしてか、静止したポーズをさせるのが好きで、あたしがバレエを習っているのを知ると、

「ソウ、白鳥の湖の、ソロで足を上げてるところ……、そう、そのまま動いちゃ駄目！」

あたしはトウシュウズだけをつけて、命じられたポーズを作る。一分、二分経つて、ガラリと躰がゆれると、

「駄目！ 動かないで？」

それがどんなに苦痛を伴うものか、青子さ

んは充分知っている筈だった。承知の上であたしの肉体をさいなむことに、あの人は異常な喜びを見出しているのだ。

だから、とても怖いひと。しかし、その青子さんの素晴らしい魅力は、其処に根ざしているのに違いない……。

なんだか断片的に書いてしまつたけれど、あたしたちのグループは六人。青子さんがとても気むずかしい人だから、資格がなかなかやかましいわけ。容貌や肉体的条件の外にも絶対秘密が守られなければならない。それから、青子さんは、声が悪い子は大嫌ひ、と云つたこともある。

あたしたちは週に一回、土曜日に例のアパートに集る。みんな思い思いの服装だけれど、青子さんは何時でも青い服。色が蒼白いから、それがとても素晴らしい。(あの人は、下着も青で、シユミーズなども、チュール入りの青いナイロンだった。)

あたしが行くと、何時でも青子さんはもう来ていて、窓ぎわの舷掛椅子に坐つている。傍に行つて挨拶すると、ジロリとあたしの服装を見て、実に辛辣な批評をするのだから怖かった。

始めは大人しくレコードなど聞いているけ

れど、お酒のグラスが出ると、みんなは人が変つたようになつてしまう。一人が氣狂ひのように床の上をゴロゴロころげ廻つたりするのを見ると、とてもジツとしてはいられない。あたしたちは犬ころのようにつかみあつて、髪をふり乱してしまふのだ。

みんなでもつれ合つて泣く人も、笑う人もある。あたしたちのグループには、恋人を占有しないと云う不文律がある(もちろん、同性の恋人)みんなでたのしむ。特定のカップルを作らない、と云う建前だけれど、これは一種の嫉妬(ジエラシー)から出た会則かもしれない。

でも、青子さんだけは、氣ままにふるまう。あたしは一時あの人のベッドで、あの人がばかりに愛されたのだけれど、それも半年ばかりのことだった。あたしの次に入つて来た美しい混血児に、青子さんの関心は移つてしまつたから……。あの人は、とても怖い人なのだ。なにかしら、躰の奥底まで異常な病癪にむしばまれているのかしもれない、と思う。とてもパツショナルなくせに、何処か冷めたく、とりつくしまもない。

始めて混血児のユリちゃん、うすい櫻色の肢態に見入っている時の、青子さんの瞳を見て、あたしは氣が遠くなるような絶望を感

じた。グループからも離れたいと思つたのだけれど、あたしにはそれがどうしても出来なかつた。

みんなとふざけ合つていても、隣りの部屋からユリちゃんの悲鳴などが聞えてくると、瞬間あたしは聞耳をたてる。今まで綿のようになつてほてつていた牀中の血が氷つてしまつて、もう、どんなたわむれも受付けなくなつてしまふ。

時にはその部屋から、「麻里！」つて呼ばれることがある。この時はもう判つているから唇を噛むけれど、結局青子さんに呼ばれると、あたしは伏眼しながら、その部屋に入る。

三人で遊ぶこともある。その時は対抗意識もあつて、あたしはもの凄くとりのぼせてしまふけれど、大抵はあたしをいじめて、いじめ抜いて、青子さんとユリちゃんはふざけている。

ベッドの足に、横ざまにくくりつけられたこともあるし、恥かしい恰好で立つているように命じられたこともある。それは、とても書けるようなポーズでない。

始めは青子さんとユリは笑つていたけれどその内に眼がつり上つて……。ユリは牀が異

常に敏感なのかもしれない。とても高い声をあげる。あたしはそれを眼の前に見ながら、ユリのことを、殺して仕舞ひたいと、思うこともあつた。

ユリが憎くつて憎くつて、本當に頭に血がのぼつて仕舞ひそうになる。あたしは彼女を殺すことを、空想したこともある。それには毒藥なんぞは駄目。柄のところが金で、いろ／＼な彫刻がある西洋の短剣がいゝ。

それを握りしめて、グサリと、あのユリの盛上つた乳房のあたりに突き刺す。眞紅の血が、ユリの乳色の肌の上を、ベツトリと濡らすだろう……。それは、きつと素晴らしい光景だろうと思う。考えただけで溜息が出るくらいなのだから——。ユリの肌は、そんなにも素晴らしいのだ。

あたしも、始めは彼女と青子さんを張り合うつもりだつたけれど、その内、それは所詮無駄な悪足だと悟つた。なんと云うのか、ユリの牀には生れつき、同性を無中にさせるなにか、ひそんでいるみたい……。

だから今では、あたしは青子さんとユリの、どちらを愛してるのか、どちらの爲にこんな嫉妬してるのか、自分でも判りやしないのだ。

愛 読 者 通 信

★貴誌創刊号よりの愛讀者ですが、ソドミニストの意外に多いのに驚き且意を強くしました。私は当年二十七歳未だ経験もなく同好の士との機会を望んで居ります。当地近在の同好の諸兄そどもあ通信を通じ御交際致したく念願して居ります。

大宮川辺様御同情致します。
(水戸T生)

★「そどもあ欄」を拝借致します。

私は鉄道員廿一歳身長一メートル六三体重五七瓊の完全な「そどもあ」で苦しんで居ります。

私の希望の方は山口県福岡県(その附近の県)在住の職業のある人又は学生十八、九歳から三十歳位迄の健康で好男子の方です尙男性的な方なら無条件です。

おつきあい下さる方は「そどもあ欄」を通じて日時場所をお知らせ下されば何時何処にでもお逢ひしに参ります。よろしく願ひします。
(福岡Y生)



ぐろてすく藝談・第四回

浪花節と血

……餘りの面目なさに切腹したが未遂に終り、腹部を縫うとその足ですぐ悠然と次の興行地へ乗込んで行つた。そして見事に一段語り、これが日常以上の出来栄だつたというから物凄い……

正岡容

兄弟分とは?!

NHKで時を隔てて放送、おかげで好評中の浪曲師を主人公とした拙作戯曲「何が何して何とやら」の第一回放送のとき国友プロデューサーから囁かれて一座の本郷秀雄、恩田清二郎、北原文江君らに、明治中世の浪曲師氣質を説明することになったが、即ちそのとき私はかう云つた。

「芸人だとおもはないで、マーと口に云つたら長谷川伸文学中の股旅たちをでも表現するつもりでやつて下さいな。当時の彼らは今日の浪曲家のやうなもの柔かなんちや全然なかつたんだ

から、さうしたらきつと巧く表現できませう」

事実、全くそのとおりで、昭和の事変以前に於ても、私と兄弟分になつて呉れと云つたある浪曲師は、いきなり懷中からジヤソクナイフを取出して、

「オイ湯呑かコップを貸して呉んねえ」と云つた。

「何にするんだイ一体」

と訊ねたら、このナイフでお互ひの二の腕を傷けて、その生血をコップのなかで一つにし、啜り合つて兄弟分の誓ひを固めようぢやないか。云々。

おどろいたネ、これには私も――。

兄弟分にならうと云ふから、せい／＼こちらは所謂親友にならう位の意味に解釈して快諾したのに、相手はあくまで次郎長や国定忠次の世界も宛らに、本筋のぼくち打ち同様の盟友たらずと私に迫つたのである。

一事が万事、これでおよそそのかみの浪花節の世界がどんなものであるかも分つて頂けようが、戦後、新講談の服部伸さんと野州の佐野へ公演に赴いたとき、服部さんから聞いた話などはもつと／＼コワかつたな。同氏は明治大正の浪曲界に金字塔を打ち樹てた一心亭辰雄その人の転身であるが、何でも服部さんがその一心亭辰雄で全盛時代、旅興行にでかけたら、ある夜半、泊つた宿の隣室で、一座の某の曲師（三味線）たる実母が「畜生々々、な何てえ真似をしやあがるんだ、この大馬鹿野郎め」

とひどく威勢のいい啖呵を切つた。

で、おどろいて仲裁に入つた服部さんが事情を訊いて見たら何とその若手浪曲先生、現在の阿母に挑みかゝつてハリ倒されたのだと云ふ。

咄——！

散るやこの花

同じ明治の半、美男美声、殊には仇な節廻して、関東浪曲の花と諷はれた初代浪花亭愛造に付いて述べよう。

彼、婦女子間の人気がじつに大へんなもので、妙齡の蓮ッ葉

娘はもちろん、人妻から後家、さては子守ッ子までが、愛造が寄席から寄席へ、常に掛持ちの人力車の梶棒を握まへて放さなかつた。同じころ女義太夫には所謂堂摺連とて（演技、高潮に達するや、客席からドウする／＼と囃し立てたゆゑにこの名あり）彼女らの俤の後押しをする書生たちが多かつたと云ふが、女客の浪花節狂などは珍しからう。

さて愛造十八番の演題は、「佐倉義民伝」や「国定忠次赤城篝火」「天保六花選」「松山綺談八百八狸」などだつたが、そんな風ではつい／＼並々外れた女道楽をもせざるを得なかつたらう。そのため彼はたうとう烈しい脳梅毒に罹つて尙且、人氣花形だつたから、連夜、方々の寄席へと出席してゐた。

ところが「義民伝」をいま語つてゐるかとおもふと何しろ脳梅毒なのだから忽ちそれが「六花選」になり、さらにまた「幡随院長兵衛」になると云つた塩梅で支離滅裂、何が何やら薩張り分らない。

と、愛造の文句がめちや／＼になるたんび、

「アアアアお氣の毒だねえ愛造師匠も」

「ほんに。まゝになるなら変つて上げ度いよ、いつそ私が」

と満座の女たちが、さめ／＼涙をながして哭いた、と云ふ。

見兼ねて初代玉川勝太郎（先代）が、

「オイ兄弟、一ぺん大学の病院へ行つて診て貰ひねえな」

とすゝめたが、

「なあに俺ア病人ぢやねえ」

と愛造決して肯かない。そこで、

「ぢやためしに一から十まで数へて見ねえな」
と重ねて勝太郎が云つたら、

「ウム」

と指折り数へだしたが、何べんやつても六つまでしか勘定が
できない。

はじめて自分の病態の只ならぬを知つた愛造が帝大病院へ駈
付けたときはもう手遅れ（いまならいい療法もあつたのだらう
が）あたら一代の天才が、明治卅八年九月一日、夭折した。享
年、わづかに卅六才。

かくて愛造自身の「芸」はあくまで繊細艶冶だつたが、その
狂死へのプロセスはたしかに花やかにも亦グロテスクなものだ
つたと云へよう。

浪 花 節 女 腹 切

現下、少女浪曲から出発した鈴木照子が、久しくある薬品の
中毒で病臥してゐたと聞くが、のちに改進軒女雲となつて変死
した吉川小福も、やはり腹からの浪花節で、娘のころから高座
へでてゐた。

と云つて彼女、切腹をして死んだのではない。

切腹はさらにその以前のことと、何しろ大丸鬚にして全身の
刺青、鉄火至極な純関東節で「赤尾林蔵」や「国定」など三尺
物（俠客伝）が十八番だつたと云つたら、大ていその人となり
が知れよう。



改進軒女雲

終

関西浪曲の元老富士月子をや、神経質にした感じの美人だつたと聞くが、何しろそんな風だから、一天地六の賽の目勝負が三どのめしより好きだつたは、勿論。

ために横浜壽亭出演の折も、契約金を取っておきながら勝負事のため無断休演してしまひ、雲右衛門と兄弟分だつた土地の顔役沢野某にいたく叱責されると、

「まことに申訳ござんせんでした親分さん。小福、これからはきつと量見を入れ替へますから」

と流石に三拜九拜して彼女、あやまつた。

にもかゝらず、同じ興行中にまた／＼楽屋で勝負を争つて無一文になり、沢野が関与してゐる次の興行地へ行けなくなつたため、余りの面目なきに切腹したが未遂に終り、腹部を縫ふとその足ですぐ悠然と次の興行地へ乗込んで行つた。さうして見事に一段語り、これが日常以上の出来栄だつたと云ふから物凄。

小福、これを契機に一念発起、そののちは芸道一路と進んだのだつたら、晩年も余程幸福だつたのだらうが、好きな「道」はまた別か。

我には許せ敷島の道で、そののちも相変らず四六時中袁元道との縁は離れず、つひにそれで八方塞がりとなつてしまつて根岸の自宅で、折柄来合はせてゐた曲師の戸川小浅（相模太郎君の亡師先代東家三叟夫人—隠退）に、

「私、いま毒を飲んだよ」

ニツコリと云ひながら、スーッと立上ると、やがて「ウー

ム……ウーム」と傍らの簞笥へつかまつて苦悶したし、「イイエいけない騒ぐんぢやない。もう駄目なんだからお騒ぎでないよ」

と、少しも取乱さずに死んで行つた、と云ふ。

彼女の歿年は四十余才の大姥櫻だつたと云ふが、大正中世の出来事と云ふから、としたら折も折、関西では「真田入城」を得意としてゐたレブラ患者の藤川友春が、無惨に崩れつくした顔容で出演、警察の厳命で漸く舞台を去つたところと相前後してゐることも亦一奇と云へよう。

浪 花 節 お 千 代

『頃しも明治廿九年九月廿一日の夜のことなりき、東京でグツと山の手なる四谷区塩町一丁目の派出所の巡査が丁度十一時の巡行をせむと派出所を出かけてカタリ／＼と靴音をさせながら御嬢端を一文字に今しも市ヶ谷本村町まで来かゝらんとするとあすこは合力松と俗に呼べる古き大木が往来の片隅にコンモリ一本茂り、丁度御嬢端の高みなれば、遙か下には市ヶ谷から牛込の人家の燈りがチラ／＼と小さく見え、御嬢ひとつを隔てゝ向ふは麴町土手三番町にて御嬢の縁を縫ふて彼の甲武鉄道の線路なるが、最早夜の十一時とて上りの最終列車も通つてすてんしよ（註——ステイション、停車場の明治訛り）には洋燈の影シヨンボリ輝いてゐるばかり、往来は人ひとり通はぬ物寂しい中に件の合力松の下にて何やらウン／＼と唸るやうな声のする

にぞ、巡行の巡査は「ハテナ」と足を停めて耳を澄ませば矢張り人の唸る声に違ひなきより、直ぐに其の方へと早足で駆付け角燈をさしつけてハツと驚きぬ、打見れば年ころ四十前後の別嬪が血まぶれになつてウン／＼唸つてゐる、今が最後の断末魔』

これが「探偵実話、浪花節お千代」の発端で、被害者の小指に常に三味線を弾いた形跡（撥だこ）があるところから芸人と見て、近所の寄席の、戦災まであつた喜よしや、金沢へ人を派して首実検をさせるが分らない。さらに山本亭（俳人たりし四谷育ちの故油出一谿氏によつて山本亭は喜よしと同じく見附より新宿への南側の横丁で、そのころ前記した愛造の師匠の名人浪花亭駒吉がよくかかり、界限の人たちは喜よしが客止めだと山本亭の駒吉を聴きに廻つて渴を医してゐた由）の主人を呼寄せると至つて、浪曲師雪廼家盛壽の妻女で芸名お千代なる曲師だつたことが、はじめて判明する。

この事件に付いては、最前も紹介した服部伸さんが、嘗て私にかう談つた。

「私が十六、七の時分でした。

浪花節お千代は、雪廼家盛壽の女房で曲師なのでしたが、そのお千代が春日井明壽と云ふのと只ならぬ間となつた。

これを嗅付けたのが盛壽の妾で、やはり曲師だつた女ですがお千代を追出したら、あとへ直つて自分が本妻になれるとおも

つたんでせう。

『お前さん、お千代さんを明壽の奴にとられて、ヂツと黙つて引込んでゐる気かえ』

と、いろ／＼に焚付けた。

一ぺんにカーツとなつた盛壽は、折柄、四谷の山本亭へお千代がでてゐる。そのかへり、明壽と連立つてかへつて来るところを一とおもひにやつてしまはうと弟子を語らひ、市ヶ谷の只今の救世軍の学校のあるところ——合力松の下のところ、戻りを待受けてゐた。

ところがその晩、明壽は別にかへり、お千代ひとりが戻つて来た。

いきなり飛出して行つて盛壽は、弟子に手伝はせ、慘らしくお千代を殺した。

壕端一帯は道普請で、大きな鉄管がゴロゴロしてゐました。その鉄管のなかをくぐつて逃帰り、血の付いた手拭その他を妾に渡すと、妾はその血染の品々を自分の着物のなかへ縫込んで隠した。

かうして事件は迷宮入りをしかけましたが、浅草新福井町の盛壽の家の縁の下へ張込んでゐた刑事が、ある夜の盛壽と妾との一言一句によつて逃れぬ証拠を掴み、一も二もなく踏込んで捕縛した。

盛壽は北海道網走監獄へおくられましたが、出獄後はもう浪花節にはならず、神奈川県の方の寺の墓守りになつたとか聞いてをりますよ」

合力松の夜の雨よ

同じく浪曲界の最長老で、いまでも余生を愉しんでゐる浪花亭峰吉さんは、またかうも私に云つた。

「お千代は細おもてで、目の細い、おとなしい女でしたよ。

巧い曲師ではなかつたが、盛壽の節は独特の間の伸び方をす



る。それを補ふには絶好の撥さばきで、つまり夫の合三味（名コンビ）としてはじつによかつたと申せませう。

盛壽は些か目が悪く、語り癖としては一と節やると横を向いた。つまりその横を向く結果が間延びともなつたのでせう。

しかし、ひどいしみつたれでしてネ、夜はお粥を常食としてゐまして副食物なし、沢庵が四切れと決まつてゐた。それも必ず数へてから皿に盛るらしいんで、私がこの家へ居候をしてゐるじぶんにも四切れ以上食べたなら、大へんに叱られましたよ。

何しろ妾のところへ行くのに、米を五合携へて行つて、一日二合五勺づつ喰べてたてんですが、何もそんなおもひをして妾を持たないだつてよささうなもんですが、そこが所謂傾城買の糠味噌汁てえ奴でせうか。

いえ、この女はお千代殺しのときの妾ではなく、そののち怪談を演つた浪花亭愛吉や只今義太夫の三味線で語る二代目木村重友を彈いてゐたみさを婆さんでさあ。セメ（急迫した曲調）のみさをと云はれた達人ですよ」

ところで、「探偵実話、浪花亭お千代」であるが、明治廿三年九月、金櫃堂の発兌にかゝり、この実話小説は大阪新報掲載の由。

作者あをば生は、のちに「小松嵐」（渡辺

默禪作)の「殺さば殺せと馬子の時……」で一代を風靡した二代目東家楽遊が得意とした、やはり探偵物の「生首正太郎」をも同じ書肆から上梓してゐる。

私は、この「あをば生」を松居松葉(のちの松翁)と推断した。なぜなら「浪花節お千代」の広告欄には、「江戸ざくら」(渡辺默禪)「新比翼塚」(伊原青々園)「山賊芸者」(紫頭巾)(松居松葉)の広告があるからで、即ち青葉城下たる仙台市出身ゆゑの松居さんの匿名だつたのだらう。のちに日本橋駿河町(いまの室町)三越百貨店の文化部長に就任したときには、駿河町人の筆名を用ゐてゐたことさへある松居さんならば――。

この小説では、お千代の本名を佐川わかとしてゐるが、おもしろいのは盛壽がお千代より醜婦なのに三味線の巧いお君の方に魅かれてゐる心理で、いかに節と絃とが不即離なものであるか、これは今日の斯界と雖も変らない。

またお千代が盛壽に追はれ、あきらめて明壽に許したあと、今度は盛壽の方が彼女のよさを知り、養女や弟子に呼戻しにやる。このときお千代が早まつたと後悔をし、いろいろ煩悶する心理は流石に巧い。よくある単純至極の男で、ひとり徒らに明壽に許したお千代のことを激怒して先立ちで殺してしまふ弟子の盛蔵、最後までお千代には未練があり、それ以上に好感も抱いてをり、盛蔵のやり口を傍観してゐる盛壽など、やはり「松居松葉——松翁」ならではと云へよう。それにしても私はおもふ。「殺される晩縁日で菊を買ひ」と云ふ井上剣花坊の川柳があるが、その晩山本亭でお千代は、やつぱり無心で「ヨッ、ハ



ッ」と掛声おもしろく、最後まで知らずに情人明壽の三味線を弾いてゐたことだらうか。一方、他の寄席で盛壽は(中堅ではあるし、休めば却つて足が付くから出演したにちがひない)いかにばかり殺氣ある高座をつとめたことだらう、峰吉師匠の云ふごとく、やつぱり一と節喰つては横を向いてゐただらうか。

市ヶ谷本村町、救世軍の合力松は、戦災まであり、佐藤春夫氏の「美人」と云ふ小説には、たしかあの辺が描かれてゐたとおもふが、私は「浪花節お千代」の顛末を知つて以来、国電で四谷ちかくをとほるたんび、窓外のあの松を伏拜んではお千代盛壽の冥福を祈つた。成程、天王横丁(註——四谷画馬町新丁目と戦前三村竹清氏考証)の山本亭のかへりなら、当時は余程寂しかつたらうし、屈強の殺し場だつたにちがひない。

でも戦災は、つひに市ヶ谷をとほつても、私からこの感傷を奪つてしまった。

……未だ／＼二代目愛造（初代とちがつて醜男で芸風も乱暴狼藉、そこにまた頗る愛嬌があつた）が愛人を斬つて獄につながれ、鉄窓で溢死した話などもあるが、もう紙数が盡きた。

戦中、私には「雲右衛門以後」なる随筆風の浪曲史の著があり、亡き秩父宮さまにも読んで頂け、大そうの読者があつたが吉川小福のこと以外の殆んどは、未刊の「雲右衛門以前」の方からピックアップできたことは、読者諸君にも幸福だつたと云へよう。いづれ合冊、「雲右衛門前後」として、完全な愉しい浪曲史たらしめ度く、年と共に読者の徳懃も大きい、未だその機を得てゐない。

でも、このやうな暗鬱陰惨な浪花節の国だつたからこそ「稲妻お玉」「五寸釘寅吉」「海賊房次郎」「官員小僧」「梅山大佐」ETCの探偵物や毒婦伝や明治開化のお家騒動も生れ、尙且それを巧みに語りこなせもしたのだらう。

いづれ浪花節が扱つてゐるそれらのストーリーそのものに付いても談らう。

×

×

×

×

——終——

★
最近本誌の類似誌と称する某雑誌が、その誌上において、しばしば悪質の誹謗的言辞を弄してをりますので、一言辨明してをきます。

某誌の執筆者に対する冷遇、編集の無定見は既に業界において定評のあるところで、その爲に有数の執筆者は続々と某誌を離反、信用売行ともに日一日と凋落の道を行く現況であります。また美辞に隠れて行ふ読者からの搾取は甚だしいものであります。かゝる誌命の衰退が、隆々日の出の勢にある本誌を嫉妬せしめ、上述の如き非紳士的文字となつて現れるにほかなりません。かゝる笑止無礼なることあげ、黙殺するに如くはないのでありますが、万が一にも純情なる読者に於て誤解を生じることあるを憂い、敢て一言反駁致してをきます。

しばしば述べる如く、本誌の編集方針は、イチゲンの客から通の通の客迄に、思はず舌鼓を打つような美食を呈供する熟達犀利なコックの精神です。

読者からの赤裸々な体験、真実の告白を記した投書投稿は毎月山をなしてをりますが、本誌は原稿入手に困却して徒らにこれを羅列するような無定見の編集は嚴にいましめてをります。これは類誌と本誌を比較されば、一目瞭然のことであつて、多言を要しません。

何卒いよいよ深き御支援御愛読をお願い申し上げます。

、あぶ・せくすありす

惨

酷

鬼

私は夢中で死體の上の崩れたものを除いた。白い上半身が現われると、力まかせに引いた。死體はズルズルと動いたが…
…その時私は「アツ」と叫んで尻持をついてしまった。…



三 森 四 郎

画 小 田 明 男

少し年配の人なら、天勝と云えば「あゝ、あの奇術の……」と、思出されるに違いない。それほど、ひと頃はあの天勝の奇術が全国を風靡したものだつた。

尤も奇術の興行もいろ／＼あつたのだが、やはり松旭齋天勝に勝るものはなかつた。第一に肉付のいゝ美人だつたし、ダイヤモンドをちりばめていると云われる、美しい歯を見せてニツコリ笑つた時の舞台の彼女は、なんとも云えぬ、したゝるような色気があつたものだ。

私は幼い頃、この天勝の興行がくると、毎晩のように通つた。劇場主が親類だつたから、毎晩観客席の一番前に陣取つて、舞台でくりひろげられる、さまざまの奇術に眼をみはつた。文字通り手に汗を握つて、時間が経つのを忘れた。少年だつた私を、天勝の舞台は簡単に魔可不思議の世界に連れて行つてくれたのだ。

その中でも、私が一番ひきつけられたのは、正式にはなんと呼ぶのか知らないが、例の棺のような長い箱に美女を入れ、ゴシ／＼と鋸で真中から切り離して仕舞う奇術だつた。美女は真二つと思いきや、ニツコリ笑つて飛び出してくるのだが、幾度見ても、私は

それが不思議でたまらなかつた。

毎晩見ていても、男が大きな鋸でゴシ／＼引き始めると、私の血は氷つた。まばたきも出来ず、舞台を凝視していた。確かにあの箱に入っている筈の美しい女の人はどうなるか？……あの美しい胴体に鋸が喰いこんで、今にも魂きわまる瀕死の絶叫が聞えるのではないか？ あゝ、もうあの女性の躰は切断されてしまう。血ぬられた死体、しかも真二つに赤い切口を見せた……。

少年の私は舞台をみつめ乍ら、その箱の中の切断される女体を頭に描いて、躰を震わせていた。あゝ、殺されてしまう……。だが、天勝がニツコリ笑つてパン！とピストルを打つと、確かに切断された筈の赤い衣装の女が実に潑刺と飛び出してくる。

私には、それが不思議で仕方がなかつた。「何故、あの女の人は生きているのだろうか？」

大人たちは、あまり真剣な私の様子を笑つて、「あれは、ちゃんと仕掛があるんだよ。カラクリだから、切られやしない」

私はガツカリした。しかし、だからと云つて熱がさめたわけではない。やはり見に通つ

た。私はこう思つたのだ。

もしも——、もしも誰か、舞台の人が仕掛を忘れるか、故意に邪魔をするかすれば……、そんなことがないと、どうして断言出来るよう？ 万一、そんなことがあつたら、あの女の人は本当に真二つにされてしまう、観衆の眼前で——。

だから、私はやつぱり固唾をのんで舞台を見守つた。血への期待に胸を躍らせながら——。だが、こんな私の悪魔的な期待には拘らず、毎夜この奇術は華かな結末をつける。私は疲れて不気嫌にグツタリするのだつた。

現在の私を暗示するこうした傾向は、しかし、それでポツンと途だえる。奇術の興行が町から去つてゆくと、私の血への幻想も何時かうすれた。私はそれから、別段顯著な特徴もなく成人したようである。平凡に結婚もして、二男一女の親にもなつた。

ところが、やはり、私の躰には、異常な血が眠つていたのである。それが再現したのは、あの江東一帯を襲つた大空襲の翌日のことだつた。

私の住ひは世田ヶ谷にあつたが、深川に工場を持つていた。遙かその方向に火の手があるのをみつめながら、その夜はまんじりと

もせずに過した。二十歳の時に郷里を出て、一職工から営々と築き上げた工場である。財産でもあるが、又一しほ愛着も深い。

翌朝は夜の白々明けに家を飛び出した。どうせ交通は途絶しているに違いないから、戦鬨にゲートル姿だつた。現場近くなると、余燼なほさめぬ一帯は、実に慘澹たる光景だつた。

焼けたゞれて、男とも女とも見分けられぬ死体が、ゴロ／＼と転がつている。劫火から逃れようとして、四つん這いになつたまゝ、道路にのめつてゐる焼死体もある。髪の毛をふり乱した女が、焦点の定らぬ瞳で、フラフラ歩いてくるのにぶつかつた。見ると、腸をはみ出して既に死んでゐる子供を抱いてゐるではないか——。

残り火はくすぶり、なんとも云えぬ臭気が私を包んだ。行けども／＼無残な死体ばかり。そして狂気のように両親の安否を尋ね歩く人々——。そんな、此の世のものとも思えぬような地獄の跡をさまよつて、私の神経も異常にならざるを得なかつた。極度の亢奮で神経がねじれて仕舞つたのかもしれない。

夢中で工場に辿りついた。と云つても、私の全財産であるその鑄物工場は、直撃弾を浴

びて、跡形もなく崩壊してしまつていた。幸い、その一角だけは炎焼を免れていたものゝ、こんなにつぶされてしまつては、それがなんの慰めになろう……。

私は工場の入口にへた／＼と坐り込んでしまつた。まつたく、泣くにも泣けぬ氣持だつた。しかし、私はわずかに氣を取り直して現場に入つた。私の工場も又、軍需工場の末端だつたから、当時は晝夜兼行の突貫作業で、当夜も、三十名ばかりの工員たちが夜業を行つてゐる筈だつた。

「全員無事だといふが……」と祈つたが、無駄だつた。もう足元に爆風で飛ばされたらしい、首のない男の死体があつた。工場の棟の下敷になつた五、六人の無残な圧死体もあつた。中庭の防空壕の入口には幾人か折重なつて倒れてゐる。

痴呆了たように歩いてゐると、足元の崩れた屋根の下に、女の白い横顔が見えた。瓦や板切れを除いて見ると、私が特に目をかけて使つてゐた、事務室の女事務員だつた。工場では美人で評判の娘だつた。そんな美しい娘が、無残な建物の下敷になつてゐるのは、如何にも痛々しかつた。

私は夢中になつて、死体の上に崩れたもの

を除いた。二半身が現われたので、肩のあたりをつかんで、力まかせに引いた。ズル／＼と、死体が動いた。そして、私はアツと叫んで尻持をついてしまつた。暫くは、そのまゝ動けなかつた。

私が引き出した女の死体は、上半身だけだつたのだ。見よ、彼女の躰は、丁度臍のあたりから見事に切断されている。直撃弾を浴びた時に、どのように彼女が逃れようとし、又その彼女の躰の上に、どのようにして建物が崩れかゝつたのか、それは判らない。とにかく、その物凄い圧力は、若い彼女の生身の躰を切断して仕舞つたのだ。

血の色、そして、はみ出した内臓。私は眼の前にそれを見た。それは実に、少年の日の私が夢に描いた、女の切断された胴体だつたのだ――。

私はそれから、再び狂氣のようになつて、彼女の下半身を掘り出しにかゝつた。それは大きな柱などが折重なつて、まつたく難事業だつたが、二時間ほど後には、私の手でやつと彼女の二つの躰が並べられた。

私は、もう精も根も盡き果てゝいた。しかし、地面に坐り込んだまゝ、美しかつた彼女の、真二つにされた死体に見入つた。それは

焼死体でないだけに血の色も生々しく、恐怖にゆがんだ表情も生けるようで、凄惨にも美しいものだつたのだ。

それから、集つて来た工員を督令して、私は工場の跡始末にかゝつた。跡始末と云つても、第一はまだ／＼下敷になつてゐる工員たちの死体收用作業である。私は熱心に陣頭に立つて働いたから、工員たちは、「さすがに、社長さんだ」と、感激したと云うことだが、実は、私が死体に対して、異常な関心を覚えたからなのだ。

だが、どう云うものか、男の死体にはなんの興味もなかつた。若い女の、腕や、足がもぎ取れて仕舞つた死体を、美しいと思つた。そんな死体や、あの女事務員の二つになつた死体は、焼いて仕舞うのが惜しいような氣さへした。

私たちは工場の中庭に死体を集めて、工業用のガソリンをかけて火をつけた。工員たちも、集つた家族たちも、その酸鼻な光景と耐え難い臭氣に、ジリ／＼と遠のいて行つたが、私は一人最後まで見届けた。それも社長としての、責任感と恩情からと思われ、感謝されたいが、私の悪魔的な戦慄は、神のみぞ知る、であらう。

終戦後は如才なく
平和産業に切换え、
再び夢中で地盤を築
き上げた。そして、
人も世もやつと落着
いた時に、再びサチ
ストの血がチロ／＼
と燃え始めたのであ
る。

始めは、ひそかに
絵画や文献を漁るだ
けで満足していた。
しかし、その内当然
それだけでは満たさ
れなくなる。女性を
責めたい。責めて責
め抜いて、あの死体
のように、もの云わ
ぬ無気味な物体とし
て、転がして見たい。
どんなに愛を囁いて
も、足蹴にしても、
それはもう永久に何の反応も示しはしない……

私は、そんな妄想にとり憑かれた。まさか



実際に殺したいとは思わないが、そのように
して、私の幻想のうちに女を責めたいと云う

強い欲望に引きづられるのである。

だが、上流家庭に育った妻を相手に、
そんなことが実行出来る筈はない。それ
に、私はどう云うものか、家庭では、穩
和な夫、立派な父親でありたいと切望し
ていた。又、家族もそう信じ、現在でも
私に対する家族の評価に変わりはないであ
ろう。

こうして、二重人格の私が生れた。立
派な家庭人である一方、なんとかして例
の欲望も実現したいと焦った。始めは金
の力で芸妓やダンサーなどを待合に連れ
こんで縛ったりした。嫌がる女を拜み倒
し、揚句には札を積んで見せて、やつと
足などを縛らせて貰ったのだから、お話
にもなんにもならない、みつともない話
である。

勿論そんなことでは満足出来る筈がな
い。それにダンサーはともかく、芸妓の
裸体はあまり美しい場合が少くて、私は
甚だしく失望した。私の描く雰囲気には
遠いのである。殊に、縄で胸の上を縛つ
たりする時、相手の女がクス／＼笑った
りすると、私の気持は非常に傷つけられるの
だった。

私はそんな時に、とても神経質になつてい

たし、気持の隅では、そんな残酷な妄想を追っている自分を責めてもいたから、相手の女の気分がひどく私に反応した。多くの女は、不真面目な遊び半分だったり、たゞ御義理で調子を合わせたり、又は嘲笑的だったりした。

一度は、某雑誌の読者欄に三行広告を掲載して、相手を求めようとしたこともある。この時は相当に反響があつたが、それは私の広告文中に記した謝礼の金高が多かつたためで、その内のこれだと思う相手に連絡して会つて見ると、とんでもない喰わせ者だつたりした。女名前で男が現われたり、ジキパンまがいの子だつたりしたのだ。

だが、そんなにも焦燥の毎日を送つた私も現在は誠に満足すべき状態にある。理想の女性とまではいかないが、私は彼女を通して、奇怪な私の想念のうちに遊ぶことが出来るのである。

彼女の名は、此処では仮に芳子としよう。山谷のある鳥料理家の仲居をしていたが、割合にスレた処のない女だつた。当時二十三歳だつた。私はその馴染の鳥料理を訪れた或夜、酔余にまかせて、例の大空襲実見論を語り始めた。凄惨な現場の模様を、微に入り細に穿

つて、それに少々おまけまでつけて喋るのだから、聞く方もゾク／＼するらしい。

いゝ歳をした仲居たちまで、キヤア／＼悲鳴あげて耳を押えたり、部屋から逃げ出した

場から余り遠くない妾宅に囲っているのが、この芳子である。

こゝでは、万事巧くいつている。自分の思ひ通りの女に、彼女を仕込んだわけだ。

私は工場の帰りに妾宅を訪れると、すぐ遊びにとりかゝる。妻や子供たちのいる本宅には内密なのだから、グズ／＼してられない。



りする内で、一番年若な芳子だけが、膝をすゝめんばかりにして、ジツと私の顔をみつめて聞いている。その時、私は直感的に、

「この女はモノになる！」と思つた。現在工

のモンペを着用させる。防空頭巾や救急袋までつけさせることもある。

それから縛つて責めるが、実は私の窮極の目的はこの責めではないのだから、別段目新

まづ私は冬でもパンツ一枚と云う姿になる。これは私が肥満しているためもあつて、全身絞るような汗になるからである。芳子の方は裸体にする時もあるし、和服、洋服その時々によつて異なる。しかし、私にはまだあの空襲時の記憶が根強いせいか、よく芳子に

しいことはない。たゞ、通り一ぺんの縛り方では満足出来ず、如何にも見た目に酷い縛りをやらなければ気が済まない。

頭を足の中につまこむようにして縛つたり、後手に両足も折り曲げて一緒に縛つたりする。使用するのは赤いメリンスの腰紐にきめている。責めに用いるのは、しなやかな柳の小枝が多い。時には心張り用の六角棒なども使用するが、アザになる程度で、肉が破れるような責めは、月に一度か二度のことである。

それなら、私のサチズムの本領は何処にあるかと云えば、実はこの責めの跡にある。さる／＼責めた揚句に、芳子は「うーん」と呻めいて、息が絶えたようにグツタリとのびて仕舞う。

「ざまあ見ろ、とう／＼死にやがつたか……」私はそう云つて、彼女の死体を足蹴にする。水を頭に浴びせて見る。それでも動かなければ、真実死んでいる筈だった。彼女は髪をふり乱し、手は虚空をつかみ、唇を喰いしばつて倒れている。ミシリとも動かない。

それを見ると、私はすさまじい喜びを感じる。すぐ傍にある化粧箱をひきよせて、化粧にかゝる。と云つても、美しい死化粧ではな

い、つまり、彼女をより死人らしく見せるための、メーキャップなのだ。

近頃は紫や青などの化粧料が出ているから好都合だった。まずうす青いフェースチックを、顔面一体にのばして、あの死人の色を作る。鈍い、死んだ皮膚の色だ。それから、アイシャドウを巧みに使つて眼のまわりにクマをつくる。唇の色をすつかりなくしてしまふ。勿論手や足の皮膚にも化粧を施す。こうして完全な死体が出来上るのだ。

始めのうちは可笑しなところもあつたが、馴れると恐いもので、無器用な私の手で、凄く迫真力のある死体が生れるようになった。今でも、この死体のメーキャップと云う点では、私は誰にも負けない自信がある。例えば歌舞伎の舞台に出てくる死人や幽霊よりも、私の作り出す死体の方が、数等真に迫っている、私は確信している。これには私独自の創意による工夫がある。

化粧が出来上ると、今度は血糊を死体にかける。これは舞台用の血糊と同じもので、私が妾宅にいくまでに、芳子が毎日こしらえることになつている。この血糊をその時々によつて、太腿にかけて切断されたように見せたり、腹の上、胸、首、腕などいろ／＼たのし

みはつきない。

この血糊の使い方もなく／＼むつかしいが、私は最近この方法を会得して、実に無惨な血まみれの惨死体を作り上げる。

事情を知らぬ人が何気なくその場に入つて来たら、きつと悲鳴をあげて飛び出してしまふだろう。それは何処から見ても、完全に死体なのだから。空襲の翌朝、崩壊した工場で見た死体と同じような……。

「芳子、お前もとう／＼死んでしまつたのか……」

そう云つて頬にふれたりすると、始めのうちには、芳子がクス／＼笑い出したりして、私はひどく氣隙を悪くし、又激怒したこともあつた。

今では、どんな長い間でも、彼女はコソとも動かない。唇を合わせると、それはヒンヤリと冷めたいような氣持さえするのだ。私はそれから、さまざまにこの死体を愛撫する。自分の体が血糊で汚れるのも平氣だった。いや、自分も彼女の血に朱に染つて、死んだ女体への奇怪な欲情にのたうつことに、私の最高の喜びがあるのだ。

雨 月 二 十 子 玲

— 其 の 三 —

冷たい雨がお秋の白い肌を刺すように降りそそぎ、真珠の玉のような水滴となつて、絶え間もなく足元に流れ落ちた。

温泉旅館水月荘の内庭である。女將は庭樹

に縛りつけられたお秋の濡れそぼれる肌を冷やかに眺めながら口元を歪めた。

「……いくら母親が病気でお金が要るからつて、大切なうちのお客の鞆に手をかけて無事で済むと思つてゐるのかい。え？、本来ならば警察に突き出すところだけれども、女中部屋のお前の荷物の中から、抜き盗つたお金が出て来て安村の旦那の手に戻つたんだから、且

それは許してやれと仰言つてゐるんだよ。お詫びをしてお行きと云うのにどうして言うことが聞けないンだね。ちつとばかり顔がきれいだと思つて増長してさ、さア、お詫びに行くのかい、それともまだお詫びに行かないと強情を張るつもりかい？」
身に覚えのない濡れぎぬを着せられて、お秋は口惜しさに涙ぐんでいた。しかしそ





玲子

れが常日頃からいやらしい素振りをする安村と女將との仕組んだ毘だつたとは気付く由もない。

やがて、無理矢理に連れ込まれた部屋には安村がもう何本目かの銚子を空にして、トロリとした眼付きで待つていた。

「疊が濡れてしまつちや、仕様がなねえ……」

意地悪い女將は、お秋のからだからグツシヨリと濡れた腰の布を剥ぎ取つてしまふ。声もなく突俯すお秋の冷え切つた肌にキラキラ光るのは露か涙か。

「旦那、どうにでも、お氣の済むように折檻してやつて下さいましよ」

意味あり気な笑いを残して女將が立ち去つたあと、お秋は身を切られるような視線を感じて立ち上ろうとした。しかし、縛られた腰紐の一端を安村にグイと引かれて其場にうずくまつてしまふより仕方がなかった。

「ふゝゝ。取つて喰おうとは云わないぜ」男の酒臭い息。丸窓の外に降る雨の音がひとときわ激しい。

(繪と文 喜多玲子)



淫虐の終點

十九歳で始めて處女を刺したのがきつかけて、それから相
手の女が、負傷した事を認めると共に射精したさうであるが、
そのあとではあの時のようにぐつたりしてしまふ……。

坂ノ上言夫

平安朝時代の、ある物語本に、女盗でサジストの挿話が一つある。日本の古典に
あらわれるサジズムの例としてはめづらしいのだが、これはしかし、単なる鞭フラセレーション打
にすぎない。

モルが報告するそれでは、健康な家庭に育つた二十六歳のHという夫人が、性器
的な何らの異常もないに拘らず、正常の交接が満足を与えない、与えないという以
上に、むしろそれを嫌がつて、陰部が恋情と深い関係があることをどうしても理解
できなかった。ただ接吻によつて、相手を噛むと快感を感じ、血が流れると、快美
の絶頂感を感じたという。これは生得的な変質性に原因するものではなく、多分、
家庭や環境があまりに健康すぎて、固陋な結果の精神的な抑圧が潜在したのである
う。

今一つ、エビングの記載で、結婚した一人の若い男が、両腕についてるたくさん
の切傷について語るところによると、その神経的な若い妻に、性的にちかづくため
には、自分の腕を切らねばならなかった。妻はその傷を吸つて、はじめて高度の色

情興奮をおぼえるのだという特殊な例がある。

それにしても、婦人のサジズムは大体においてすくないので、サジズムとは、異性を屈服しようとする要求が主要な動機をなしており、その性質からいつて男性色情の病的亢進を示すものである点からと、それから、生理的に女は男よりも痛覺に鈍いといわれているので、積極的なサジがすくなく、マゾの傾向が強いのかもしれない。ちかごろでは、女のサジが目立つてきたようだが、それは元來のマゾが、サジへの心理的な要求を示すただ要求だけの仮装のサジズムかもしれない。

ところで、サジズムの中に、架空のサジというのがあるが、それはただ空想の中にだけあらわれるので、たとえば手淫とか或は夢精をとまうサジズム的な空想夢想の形で行われる。リアルなサジ行爲への実行力がないものにおいての空想淫虐である。そのようなものにおいては、デ・ラメイヤーがいつたように、「わが望みは、いわゆるリアリズムの世界からぬけ出すにある。空想的経験こそは、現実の経験にくらべて、一層リアルである」ので、この空想の上のサジ行爲によつて、現実の性興奮と、絶頂感に達する。きわめてロマンチックなサジストである。だから、女性が暴行を加えられた話がその話だけで、彼を狂ほしいほど肉欲的に興奮させる。そういう例はいくちもある。たとえば、われわれが考へ得べきあらゆる残虐なサジ行爲を活写したサド侯爵の「ソドムの百二十日」なんかよむと、とたんに射精してしまうだろうほどのロマンチストだ。

単にサジズムといつても、その中にはピンからキリまであつて、手法の上に、或は対象の上に、いろいろ非常に複雑で、単

なる言語表象上のサジズム（言葉の上のいやがらせ、刺すような諷刺、輕蔑、暴言などで相手をいじめる）から、チヨツとぶつとかつねるとか、舌や唇をかむとか、腕にかじりついたり、汚損したり、その程度の軽いサジズムは、どこでも、誰れにでもあるので、それはむしろ、愛の表現的な技巧にさえなつているのであるが、刺激が刺激をこえて、それは非行から暴行となり、虐待となり、残忍となり、遂に絶頂的に殺す、喰肉というところまで行く。そうした淫好淫虐の絶頂を示す殺人淫樂をここでの主題とするのであるが……

惣じてサジズム的な行爲は、その病理的な面から見ても、大体三つの形態に分類されている。第一に、単に普通な性交ではありあまつた淫力が飽き足りないもので、交接のあとで、さらに後戯としていろいろな淫虐のテクニクがおこなわれるもの。次に、淫力が減退して、これを興奮させ、よびさますために、まづ前戯的におこなわれるもの。第三に、正常な交接のかわりに、何らかの原因で全く淫力を缺くものが行うもの。この場合は、淫虐の行爲それ自体、ただそれだけの行爲で絶頂感に達し射精する、それを目的としてのものである。

第一のもの、第二のものにおける前戯的な、或は後戯的なそれでも、もちろん残虐の行爲そのものが、それぞれに起淫と充淫との力をもっているもので、場合と人によつては、その過程で、またオルガズムに達するものもあるのであるが、単なる残虐とは、この点でするべく区別されねばならぬ。

るとよぶ二十六歳の医師があつた。神経病性の體質だつたが普通の時は自然的な交接で十分満足するにも拘らず、酒をのむ

とだめだ。満たされない、しかるに、そんな時、女の臀部を刺すか外科用のメスできつて出血するのを見ながらだと、はじめて射精するというのが報告されている。

前の第一か第二の場合の補淫であるが、同様のケースのものとして次のようなものもある。

Mという金満家で六十歳の老人である。幸福に結婚し、十八と十六になる二人の娘があつたが、彼はいつも娼婦のもとに行つて、そこで長椅子にすわり、裸体の娼婦を近づけしめた。しかも、その場合、何人かの娼婦が、一人づつ、だまつて微笑しながら近づかねば

ならない。Mは、針と麻のハンカチと鞭を手にして、自分の前にひざまずく娼婦に、約百本の針を刺し、それからなお、二十本ばかりの針のついたハンカチをその胸にあて、かくして女を鞭ち、陰毛を抜き、乳房を握りしめ、他の二人の娼婦に額の汗をぬぐはせて猥情をそそる淫褻なポーズをとらせる。ここいらでやつと興奮してくるので、はじめて正常に交接するのだという。まことに手数のかかる前戯、いや予行淫虐ではある。

前述の第三の場合の例としては、次のようなデエタがある。その男は、十四歳の時からすでに色情的興奮があつたが、ユ



ウジュアルな交接によつて、この亢奮を満足させようという気持は全然なかつた。むしろ、そのことには嫌悪を感じた。

手淫を軽蔑して、自分が切つた処女との色情的結果を夢に見てたのしがつた。十九歳にして、はじめて処女を刺したのがきつかけで、それからは無数に切つた。総数五十人ほどの処女を切つた記録のホルダーである。これは危険でない程度に切るので、相手は処女に限つたらしい。たしかに、その女が負傷したことを認めると共に、射精したそうであるが、そのあとではぐつたりして、丁度あのとときのような事後のはげしい疲労を感じ

じ、すこしばかり良心的な苦しみをおぼえたという。そのため腰や手や頸をわざかに圧迫することで満足しようと自制したがそれでは単にエレクトだけで到底オルガズムには到達しないので拔身の短刀で切ることにした。彼の家には、短剣、仕込杖小刀などがたくさんかくされてあつたという。彼はこれらの兇器を、ただ眺めるだけで強烈なエレクトを伴う淫情に亢奮したのだという。

ガルニエに従うと、この種のサジズムには、一種の崇物症^{フェティシズム}が加わつて、サジ・フェティシストとでもいうべきものがあるというけれども、ここではその詳説にはふれないこととする。

さて、こうした三態のサジズムが、おのおのその刺戟の極点に達したとき、いわゆるルストモルト^{lustmole}が起る。だから、この殺人淫樂、淫樂的兇殺も、やはり、前記の分類による三つの形態に従つて観察できるわけだ。その予行淫虐においてまづ兇殺し事後に交接を行うもの（いうまでもなく、それは屍姦となり、従つて、屍好的な亢奮が合体する）のデエタとして語られる一例は、エビングが報告する有名なもので、一人の屠牛者に係るものである。

一八九四年三月、二十一歳の女を虐殺して、その頸を切断し腹をふみつけ、右側胸部の一部を切取つてのち、その死体に対して交接をとげた。その十一月には、十三歳の少女に同様のことを行い、翌年五月、十七歳の処女を襲い、その八月には五十八歳の婆さんをしめころして同じく屍姦した。同月、十六歳の処女の頸を切り腹を割き、九月には、十四歳の男児に同様の非行を加え、その陰部を傷けて死体を猥褻に弄んだ。一八九六年

の十月には、十四歳の少女を襲い、陰部を切りとつて持ち帰つたが、翌九七年五月には、十四歳の男児を殺して死体に鶏姦した。

この男は憤怒性で且つひどい追跡妄想があつたため、精神病院に入れられたのだが、全治したというので退院することになった、その退院の途上に徘徊して、もうこんな淫虐をはじめたのである。かくて、殺人じつに十一回に及んだが、その殆んどすべてが淫樂的殺害のサジだつた。多くは絞殺と頸部の切断でその死体に交接して思う存分淫樂の満足を味わつたのち、陰部をえぐりとつたのであつた。鑑定の結果、別に精神障害の徴候もなく、精神病患者ではないことが証明されたので死刑になつた。

次ぎに、まづ姦して補淫的に残虐に及ぶもののデエタとしてこんなものがある。

二十四歳の男、若いころからメラニコリックで、しかも腹が黒い性質だつた。森の中で偶然に出会つた一人の美しい少女、十二歳位の可愛い娘にいきなりとびついて強姦し、その上で陰部をえぐり、心臓をえぐつてこれをたべ、血をすすつた。

ビュッヘルという男は、一人の処女をおかしてから、「女の胸を切りひらき、小刀で体のやわらかい部分を切りきざんだ。それから、屠殺者が家畜を料理するみたいに、その肉体をさいたり、小間切れにしたあとで、更に斧で小さきざみ、山の上につくつておいた穴へはこんでかくしておいた。時々、穴をあけて見ると、快感で全身がガタガタふるえ出し、死体の一片をとつて喰べたい衝動を感じた」と。これは、この男の告白であ

る。

四歳になる少女が行方不明になった。翌日、同家の借家人であるメネスクロウという男が容疑者として捕えられた。蓋し、同人の上衣のポケットに、少女の前膊が発見され、なお同人の家のストウヴの中に、半ばやけた頭と内臓があつたからである。仔細にしらべると、便所にも屍体の一部が発見された。しかも、陰部だけはどうしても発見されなかつた。結局、メネスクロウ自身の陳述によつて、確定的に、彼がその少女を強姦してから殺したことが明らかになつたが、口が重く、腺病質で、知能が低い彼は、自分の行爲に対する反省も後悔もなかつたところから観察すると、強姦の事実をかくすために殺したのではないらしい。殺すつもりもなかつたのだが、強行しているうちに死んでしまつたのだと申し立てた。何しろ四つの女の子ではそれは当然すぎる当然の成行でなければならぬ。猛烈な手淫癖があつて、時として牝犬を獣姦したという。発見されなかつた陰部は、多分食つてしまつたのであろう。それともうまぐどこかへ隠したのかもしれない。

これらは、事後の淫虐であるが、ノウマルな性交の代償行爲としてだけの淫乐的殺害の諸例においては、次の如きものが報告されている。

一八八七年の十二月、翌八八年の八月、九月、十月、十一月にわたつて、何人かの婦人が、ロンドンでしばしば殺害された。それはいつも一定の特殊な方法で、殺害ののち細断されている。バラバラ事件のロンドン版だが、全然犯人に見当がつかなかつた。検屍の結果は、まづ女の頸をきり、のち腹腔をひら

き、内臓をえぐりとつたことが想定されたが、多くの場合、彼は内外の生殖器をきりとつて持つてしまふのが常例だつた。彼はおそらく、これを眺めたり、かじつて楽しんだのであろう。或る時は、現場でこれを寸断して淫樂を味わつた。しかし、彼はその女に、生前でも、殺したのちでも、色情的な征服をした形迹は全然なかつた。つまり、兇殺そのこと、寸断することそのことだけによつて、十分淫情をみたしたのである。

次のケースは、殺人淫樂における最も典型的なものだとし、エビングによつて記録されたものである。

ザインチエンツ・ヴェルチエンというこの変態男は、久しく病臥中の伯母を殺したのを手始めに、すべて女に関する絞殺の数罪が摘発されて一七八二年一月十一日以来留置場にぶちこまれた。その前年の十二月、十四歳になるヨハンナ・モツタという女を殺戮したことについての嫌疑が摘発のきつかけになつたのであるが、これより前、八月の二十八日に、二十八歳になるフリジエニという女が死体になつて、裸のまま畑に横わつてゐるのが発見された。もちろん他殺で、頸のまわりには絞殺による痕迹が明瞭に見られた。しかもなほ、多くの負傷の上に腹部は割かれ、腸は引き出されていた。しかし、その加害者はわからなかつた。モツタのことで摘発されたヴェルチエンが、その犯人ではないかという容疑は深かつた。段々、しらべていくうちに、有力な証人が出た。マリア・プレヴィタリというまだ若い十九娘である。九月の末の或る日、彼女が、畑に出かけていくと、このヴェルチエンという男に追つかけられ、投げつけられ、絞められたが、すきをねらつてうまくにげてしまつた、



というのである。とうとう、以上の数犯がみな彼の仕業だとわかつたのであるが、彼の犯罪動機は自由によると、そうした殺虐の行爲は、言語に絶する淫好の快感をよびおこし、エレクトと射精を伴うというのであつた。ヨハンナ・モッタに対してはその大腿部に夢中にかみつ、その柔かい肉をかみしめてそこから血を吸つた。衣服や内臓はもちかえりこれを嗅いだり、ふれたりして、無上の快感をむさぼつたのだという。常に彼はきまつて「絞殺」したが、その陰部にふれ、又は犯そうとおもつたことは一度もなかつた。ただしめころして、血を吸うだけで十分だつた。それで絶頂のオルガズムに達する。

もちろん終身刑になつたが、十二歳の時、鶏を絞めて快感をおぼえたのが、こうした変態な性欲の目ざめたつたという。絞められる断末魔のあがきが、淫情を無上に挑発したらしい。ただの強姦で、絞め殺すものがあるが、これは殺すということそのことに魅力があるのでなく、この断末魔における女体の全身的なケイレン、特にケイレン的な収縮をよるこぶためである場合がある（犯跡をくまますための殺人は別として）。で、これは殺人淫虐でも、すこしわけが違ふ。

わが日本での古典的な資料として、その典型的な殺人淫楽に清水浜臣の「遊京漫録」に出ている「白髪煙の怪」という挿話があり、これも、ただ女肉をしやぶり、その血を吸うだけの淫魔であるが、このような例はまだ外にたくさんあつて、たとえば一八六一年以来、数年にわたつてパリを騒がした八人の娼婦に係るのと切り事件の如き、それはジョセフ・リップという色情殺人狂の狂わしき乱舞だつた。それから二十年たつてまた、

ロンドンを恐怖のドン底にたたきこんだ英国版のど斬り事件もある。

むかしから、よく淫魔というものが巷間に伝えられて、魔性の伝説或は迷信の如く扱われているけれども、これはたしかにサジの人間、闇にさまよう無名のサジストだつたのだとおもう。人間欲望の最も深い根本的な性衝動が、無拘束にその絶頂に立つと、その人はもう人間ではない。暴れ狂う悪魔である。それを超自然、超人間的な淫魔、悪魔神と表現する、この考え方は極めて自然である。で、も一度くり返そう。伝説的にいう淫魔の正体は、じつはみんな無名のサジストで、その殺人淫魔だつたのだと。

例の吸血鬼という名の悪魔も、化人狼といううまい口実の魔性である。みんながごそんじの通り、吸血鬼は夜な夜な、人間世界にあらわれて、人の肉を食い血を吸る。これは墓から出てくるのだが、その墓から出てくるといのが第一怪しい。じつは墓をおそい屍体をあばく屍好のサジストでもあつたのではないか。とにかく、残忍な悪鬼であるが、化人狼というのは、魔法で狼に化けて、人肉をあさつてある。これも立派なルストモルトだ。吸血鬼も化人狼も、所詮自称で、無名のサジストが考えた口実上の代物ではあるまいか。

フロイドの定義に従えば、サジズムは生物生得の破壊本能が性欲衝動に、特に強く混入している場合の表現だという。で、それは、あくまでも、一の性的なエゴイズムである。克服と破壊衝動の頂上^{ピク}における行爲が、だから殺人から喰肉にまで徹するのは、興奮における本能の運命だともいえるのであろう。

これは変態の名によつてよばれており、あきらかに変態だが、しかし、エビングにいわせると、世にいわゆるプラトニツクラヴといつて肉欲を否定する恋愛も、これはまた変態で、空想か自己錯誤かのどつちかだという。痛烈な皮肉である。

ところで、この淫好と残虐との結びつきについて、エビングはまた、おもしろいことをいつている。つまり、淫好の極点においてあらわれる激情は、憤怒のパシヨンとおなじものだといふのであつて、だから、憤怒であらわす顔面のひきつり、はぎしり、ひつかき、かみつきといったような表情と行爲の、生理的な圏内で行う場合とおんなじで、それが憤り心頭に燃えては遂に相手を殺すというところまで行く、そうした表情と行動と揆を一にするといふのである。

いうまでもなく、それが淫好の場合の絶頂を示すルストモルトである。殺すことによつて憤怒の激情は一ぺんに弛緩するであらう。同じく殺すことによつて淫好のはげしい衝動も一ぺんに弛緩する。このようなサジストの殺害では、申し合せたように、みんなその屍肉を喰うのであるが、この場合、その屍好といふこと、喰肉といふことの上には、強くサジ・フェチズムの極点も見られる。フロイド流にえば、かくして彼の破壊衝動は、なしくづしに、自分自身を破壊しつつある。それは自己破壊への過程なのだ。フロイドはこれを破壊本能における慢性自殺という。ルストモルトはその最も辛酷な破壊衝動の顔である。

(おわり)

気がついたときは一糸も纏はぬ奈々子の、濡れた陶器のやうな躰の全長が蓬々たる長い野草を押し倒して、おれのすぐ目の下に……



嗜虐の果てに

アブ・ストオリー

黒須 芳男

(1)

死んだ水木奈々子の母親ぬいがはるばる福島から出て来て、半狂乱のていで喚きちらしたときは、六年間を癒るあてもなくこの療養所で過してきたおれのしたたかな心臓も真蒼になる思ひだつた。

「ね、黒須さん、奈々子は胸廓整形術なんか受けるほど悪くなかつたんです。それを嫌がるのを無理に実験材料みたいにされて！ その外科の笹沼とかいふ先生にすぐ逢はせてください！」

ぬいが笹沼医師に逢つたらおれが彼を唆かして奈々子を強引に手術させたことが曝れてしまはないとも限らない。おれは必死になつて、

「日本でも一流のこの外科をそんなに非難するものじやありません。みんな最善と思つてしたことです。私だつて最愛の奈々子を失つて……」

おれは病衣の袂を目にあてて戯りあげてみせたものだ。すると、ぬいは案外あつさりと言和しくなつて、

「ハ、ハイ、諦めます。壽命がなかつたんでしよう。黒須さんにも大変お世話になりました」

て、あの子も一緒に退院することばかりをたのしみにしておりましたのに、そればかりが不惑で、――」

おれはぬいに泣きつかれると流石に苦しくなつて、奈々子を殺したほんとの張本人はおれだと叫びたくなるのをやつと押へつけた。と、面会室の扉の外の廊下でなにか悪戯でもされたりしい看護婦の悲鳴がきこへる。みると、火傷で顔が右頬から顎にかけてひきつっている当の笹沼医師がぬつとつつ立つていてではないか。おれはハツとしてぬいの躰をはなすと、慌てて廊下に飛びだし、笹沼の耳元に早口に囁いた。ぬいにはさいわい気づかれないすんだ。ぬいは奈々子の遺品に、と言つて翡翠の帶留をくれた。おれは表門のところ、もはや秋の気配の濃い松林の間の小径をトボトボと帰つて行くぬいのうしろ姿を見送つてみると、奈々子を失つた寂寥にいまさらの如く測々と迫られて、がつくりと首を垂れるのだつた。

(2)

おれが奈々子の肌の匂いをはじめて、いかに嗅いだのは、忘れもしない四月二十七日（ああ、なんという因縁だろう。奈々子は九

月の同じ日に息を引取つたのだ）の、消燈後二時間ちかく経つてからの奥深い松林の中でのことだつた。木立ちを透して見ると、遙か遠い視界の中に処置室だか宿直室だかの灯が一つ二つ、何処からか野犬の遠吠へと武蔵野線の電車の音のみ。薄曇りの夜空には星の淡い光がなまあたたい春のそよ風にまたたいている。おれの仄かな希望のやうにだ。さうだ、右肺葉の三分の二と左肺葉の上層をやられて近代医学からも見放されているこのおれにとつては奈々子を獲得することが、残されたいつさいの望みなのだ。

「な、奈々子！」

おれは技巧も口説もなんのその、全く飢えた野獣そのままに、奈々子の重い躰を夜露でぐつしより濡れた草の上にねじり倒した。いまから思えばおれの瘦せさらばえた摺古木のような腕のどこにそんな力があつたか不思議なくらいだ。

「黒須さん、どうしたの！ よして！」

奈々子が氣も動顛して必死におれを押しつけたのも無理はない。おれは賢臓を粟粒結節でおかされてる奈々子におれの顔で特にストレプトマイシンを貰つてやるからと言つてこの夜つれだしたのだ。薬品倉庫はすぐそこに

あかあかと灯のついている看護婦寄宿舎の角を曲つた道の突き当りだ。おれも一瞬自分をとり戻したが、奈々子の寝巻のゆかたの胸がはだけて、荒く喘いでいるむっちりした肌が夜目にも白く浮きあがると、

「奈々子！ な、なんにもしやしない。お願いだ、じつとしていて！」

おれはいきなり鼻を奈々子のねとねとした肌にくつつけて、くんくん嗅ぎ廻つた。それからもう我慢ができなくなつて、奈々子のなだらかな首すじから肋骨、そしてふくらんだたゆやかな丘にかけて強くきゅーつと吸いつづけた。齒ぐきから血の出るほど。

「いや、いやよう！ くすぐつたい！」

おれの顎の無精ひげがさわつたのだろう、奈々子は身悶えるようにして忍び笑いを洩らした。が、そのときおれは奈々子の笑いどちぐはぐにおれ自身でも予期しなかつた熱い鳴咽が胸奥から込み上げてくるのを押えられなかつた。入院した翌日からもう奈々子の五尺四寸の豊満な躰（ああ、そのすべすべした肌の内部を腐らすとは神の仕業もなんと残酷なことだろう）とコケティッシュな明眸は男患者女患者を問わず療養所内の人気を一身に浚つて、「KSの女王」と騒がれるようになって

た。その奈々子をおれがいま手に入れようとしている。カフキー三号で余命いくばくもないこのおれがだ。おれはすつかり感激してしまつたのだ。おれだつて一年半まえ、飯能の農家から出てきたばかりの看護婦を妊娠した

お蔭で周囲からすつかりマークされるまではそう女に不自由しなかつたと思うと、いくぶん哀しくもあつた。奈々子も三十二歳のおれの不覚な涙に気づいて、「あら、どうなすつたの？」

おれはテレ臭くて、お前は美しすぎるよ、などと泣きながら奈々子の肩のあたりの柔肌を松葉の先でチクツと刺してやつた。すると、どうだろう、奈々子は「一度、いたいッ！」と叫んだが、瞬後、妙にじいーつと息をひそめてるではないか。おれも

おやつと思つて、刺したり渦巻型に擦り廻してやると、奈々子はもつともつといわぬ許りに肩の盛り上つた肉をおれの手の方に持ち上げてくるのだ。そして、う、うッ、うッ！となんだかとても堪らないやうな奇妙な呻き声を洩らした。この娘、マジ癖があるな。そ

う直感したときからおれはもうすつかり夢中になつてしまつたらしい。奔騰する血がこめかみのあたりでドクドクと脈を打つのをときどき意識しただけだ。おれはいつ奈々子の帯を解いてしまつたのか殆んど憶えていない。



AK

奈々子の期待するものが何であるかを察知し得たおれの理性の方がもつと不思議だつたらうか。ゴクリと生つばをのみおろしたおれはちやうど診察する医者のように膝を合せて奈々子の牀のそばに坐ると、風を音を立てて鳴るあの松の鱗状の手頃な実をとつて、それで奈々子のうなじから背筋へかけて、これ以上はできないほどの緩い速度で撫で上げ、撫で下ろすのだつた。

「ヒーヒー！」

奈々子は松籟よりも鋭い金切声を上げて、向うへ反転して行つた。

「こいつ！」

おれは歯ぎりしながら逼つて奈々子を追つかけた。すると奈々子もゴツンと木の根元に頭をぶつけて又じーつと動かない。

おれは又、顎ひげをわざと強くこすりつけながら、右手でつまんだ松の実をコマのようにクルク廻して次第に下へ下降させて行つた。奈々子の牀の幅広い部分の方へ下降させて行つた。

「あ、あッ！ もうよしして！」

気がついたときは糸も纏わぬ奈々子の、濡れた陶器のような牀の全長が蓬々たる長い野草を押し倒して、おれのすぐ目の下に横たわっていた。あたかもおれのつぎの所業を息を殺して期待するかのように。奈々子もよくもそこまでじつとして来たものだと思う。が、

奈々子がもう身も世もないふうにおれの肩にとりすがつたのは、おれの長く垂れた髪で腑の辺りをくすぐられたからだろうか。おれがそう思つたとき、かなたの病棟の前あたりで、明りが、たしかに懷中電氣の光茫が流れた。おれたちを捜してゐるのかもしれない。おれはひどく慌てた。すると、奈々子はまるで人が変つたようにガバと跳ね起きて、寝巻をひつかむと、

「バカ！」

と、おれの頬を平手でピシツと叩いた。その瞬間、おれはかえつて背筋がゾクツとするほどの快感をおぼえて奈々子をつかまえようと飛びかかつて行つた。が、どうしたことだろう。おれの機能は萎えたままなのだ。すっかり泡を喰つたおれはゴホンゴホンといやな咳をして、

「あつ、血痰だ！」

と、袂で口をぬぐつてやつとごま化した。奈々子もすかされたように一瞬茫然としたがやがてほつと安堵の溜息を吐いた。おれはやつぱり、……と思うと、もう視界がむらさきに染つてその場にへなへなと坐り込みそうになつた。いつか担当医がおれに注意した事があつたつけ。

「黒須さん、どうもあんたは攝後線を結節でやられてるらしいね」と。攝後線の障害は機能を目にするのだ。

(3)

それからのおれは毎日が暗かつた。おれはあと何年も生きれない運命なのに、その上、天はおれに不能の烙印を捺したのだ。それまで多少親しくしていた女患者や看護婦もおれを見ると、ぎよつとしたように視線をそらした。おれはおれの突き放された険悪な顔が映るのが憎らしくて洗面所や風呂場の鏡をなんどかなぐりつけたのもその頃のことだ。が、奈々子だけは廊下であうたびにいつも魅惑的なあの目を片方細くしておれに媚笑を送ることを忘れなかつた。が、周囲がうるさいし、お互いにあまり狎れ狎れしくできない。おれはこないだの夜の快楽を呼び醒まそうとするかのように、じいーつと奈々子を見据える。そのおれの、冷い蛇のようなまざしはおそらくぞくつとさせられるものだつたに違いない。奈々子も羞らうように思ひなしか頬を染めて、あとはさりげなく行つてしまふ。おれは嚴重に監視されてる身なのでふたたび奈々子と逢う瀬はいつ廻つてくるのかと思うと、

じりじりした。おれは奈々子にとつて一日もいや一時間と雖もなくては済まされぬ存在にならなくては。——だが、おれはおれの肉体ですつかり奈々子を所有することは所詮できないのだ。が、おれはいつの日か奈々子によつておれの肉体を甦らせようという儚い望みもないわけじゃなかつた。そんなおれだから奈々子が男患者や担当医とちよつと親しげにしているのを見ても、目の吊り上がるのが自分でも判るくらいだつた。飛び出して行こうとするおれを漸つと押えるものは、最古参者として皆んなから慕われてるおれの自尊心だけだつた。

そんな或る日のたそがれ時、おれは病室の裏手の畠につづくところに、によきつと聳えてる杉の木をひとり撫然と見上げていた。ちようどおれの頭のあたりの高さに手頃な瘤があつた。あそこに縄を掛けて首を吊ることもできるのだ。……と、おれの肩をうしろからポンと叩くものがある。笹沼医師が醜惡な顔をひきつらせて笑つてゐる。

「どうしたい、黒須くん。——ときに五号の個室の飯島くんね、ちかごろマイシンのお蔭で容態がすっかり好転したよ。君も随分慈悲深いね。」

皮肉そうに言つた。

「飯島くんですつて！」

おれは飯島とはあまり親しくしたことがないし、まして面倒を見てやつた覚えもないので一瞬ポカンとした。かなりの重症患者だが年の頃は二十四、五、ちよつとジャン・ルイ・パロオにおもぎしの似た一種の近代的な美青年だ。「君もおめでたいね。KSの女王の情事のおてつだいをしてさ。まだわからないのかい彼女は君から貰つたマイシンをちよくちよく飯島くんに廻してゐるんだよ。しつかりし給え。」

「えつ、いつの間に」

「水木奈々子は案外頭がいいから、晝間の安静時間に飯島くんのところに入り浸つてゐるんだよ」

「チクショウ！」

おれは齒ぎしりした。——が、笹沼医師はハツハツハツと笑い声をのこして、すうーつと影のように炊事場の向うに消えてしまつた。そうだ、奈々子は五度の軽症だから安静時間じつとしてなくても大して文句を言われないのだ。なんという迂かつなことだつたらう。おれは、黒須さんのお蔭で微熱がとれましたわ、と尤もらしく感謝の微笑をうかべ

た奈々子の顔を思ひだすと、憎悪と嫉妬で身が焦げるような氣持だつた。その夜くらい、おれは宿直看護婦が消燈の鐘を鳴らして廊下を歩くのがもどかしく待たれたことはない。

おれは芝生を踏んで女患者たちの大部屋の窓べりにフツ飛んで行つた。あの、月経時の女体が放つような醜えた異臭のたちこめる中で露骨な猥談のざわめきと忍び笑いがきこえるおれは薄闇の中を見透した。が、向つて左側の、窓べりから三つ目の奈々子の寢台は藻ぬけの殻なのだ。おれにはもう判つていた。

おれは病棟の窓枠の下を、躰を二つ折りにかがめて夜鳥のように五号の個室めざして疾走した。息が切れた。腐爛した肺臓がちぎれてそつくり口から飛び出すかとおもわれた。おれは五号個室の壁板に蝙蝠さながらにへばりついた。あッ、手が手をとつて影が大きくカーテンの裾に映つてゐる。飯島の奴が奈々子の手をとつて口吻けしてるのだ。おれはくらつくらつと眩暈がしてその場にぶつ倒れそうになつた。そのつぎに、裏切られた激しい憤怒で頭がカーツとなつた。おれが飛び込むのをやつと泳いだのは、療養所から追出されて、その日から喰うのに困るのを恐れてだつたらうか。それとも、奈々子によつて甦る希

望を捨てきれなかつたからか。それはおれ自身にも判らない。

十一時過ぎ頃だつたと思う。なにしろ宿直医室から斯が聴えた。静寂の底だ。おれは五号個室から出てきた奈々子の髪をいきなり掴んで診察室にひきずりこんだ。奈々子ももう観念してるとみえて大して抵抗しないのだ。高窓から射しこんだひとすじの月の光が卓に置かれた携帯用人工氣胸装置の長方形の装置を仄白く浮きあがらせてゐる。奈々子の額に二すじ三すじふりかかつた乱れ髪、吊りあがつた眼の異様なかがやきはこれまでの奈々子にない凄い妖氣を放つてゐる。おれも奈々子も暫くはただ息をハアハア喘がせるだけで口もきけずにいた。

「この売女！」

おれは骨ばかりの硬い拳で思いきり奈々子の頬を擲りつけた。すると奈々子の口から糸をひいたように血が流れ出た。血を見るとおれはよけいカツとなつて、もう頭といわず顔といわず滅多矢鱈に擲りつけた。

「ヒー、ヒー！」

奈々子の悲鳴もおれの逆上を一層助長するばかりだ。おれは奈々子のふくよかな胸を双手でドーンと突いて、硬い黒革の診察用ベツ



ドに奈々子をのけぞらせた。その上へおれも折り重なるうとした拍子に、おれは胸の奥から熱いものがググツと込みあげてき

た。しまった！ 喀血だ！ が、もう間に合わない。鮮血が奈々子の顔面に一杯にふりかかった。奈々子の血とおれの血が互いの皮膚

AK

の上でねばねばと混り合った。おれはもう無我夢中だった。奈々子を殺しておれも死のうと思つた。おれは壁に掛けてある聴診器を奈々子の首に捲きつけて力一杯締めつけながら、

「言えつ！ お前はさ、さつき飯島の部屋で、何をしていた言え！」

「く、くるしいーっ！」

奈々子は白眼をとろーんとあけて、全身のたうつた。廊下の向うの方で、急患でもあつたのかスリッパの音がバタバタしなかつたらおれはそのときすでに

奈々子を殺してしまつただろう。

(4)

奈々子はおれのためにそんな酷い目にあいながら、飯島の下着を洗つたり卵を持つて行つてやることをやめようとしなかつた。そのたびにおれは奈々子をうしろ手にしぼりあげて蹴つ飛ばすような手荒な真似も何度かした。全身に脂汗をにじませて呻りながら、奈々子はなにかうつとりと目を細くしている。まるでおれの折檻が欲しくて飯島と狎れ狎れして見せるようなものだつた。そのうちに、おれたちの十号病棟では、「KSの女王」が担当医の隈部の宿舍へ足繁く通いだしたという噂がパツとひろがつた。隈部はまだ独身の色白な男で、ふだんから女患者たちに騒がれていた。おれがそれを知つたときも奈々子を殺せなかつたのは、やつぱり奈々子によつて一度甦つてみようとする執着を捨てきれなかつたからだ。——そこで、おれは考えた。奈々子は元来淫奔な氣の多い女なのだ。が、おれはまいにち廊下などで、手術のために肩が落ちたり乳房の形も殆ど見分けられないよう

な枯木同然の女患者たちを見ている。全く彼女らときたら何の魅力もない。女らしい水々しさが無いのだ。そうだ、そうした女たちに混った奈々子の魅力はやつぱり、あの豊満なとても患者とは思えないような肉体の魅力なのだ。おれはそれに今さらの如く気づくと、奈々子の躰をほかの女患者のようにしてしまつたら、奈々子は特に騒がれることもなくなるだろうと思つた。そのとき、奈々子はすっかりおれのものになるのだと考へた。おれは奈々子の肉体の弾力にたしかに圧迫を感じている。それが萎える原因なのかもしれない。おれはもつと瘦せた奈々子なら、きつと魅れるにちがいないと思つた。

おれは外科の笹沼がときどき便所の覗きをやつたり、女患者の洗濯物を盗つたりして、多分に変質的な男であることをまえから知つていた。おれはさつそく笹沼に、奈々子の胸を切つてみる気はしないかと相談をもちかけた。すると、笹沼が、

「黒須くん！ 僕はかねがね『KSの女王』の厚い脂肪の層を覗きたくて夢にも見てるくらいなんだ！」と、感激のあまりポロポロ涙をこぼしたのはおれもびつくりした。

梅雨に入つた頃で、ちやうど隈部が静岡の

結核臨床医学研究報告会に出席して留守なのは好都合だつた。

とつぜん整形術しなければ駄目だ、と宣告されたときは奈々子もずいぶん駭いたらしかつたが、笹沼があくまで真剣そのもののような顔で、他の患者の、レントゲン写真や悪化した血沈を突きつけたのだから、どうしようもなかつたのだろう。

「黒須さん、大丈夫かしらん？」

不安におののく奈々子を、おれはもちろん大きく領きながら強く抱きしめてやつた。

いよいよ手術の当日の木曜日、（火曜と木曜が××療養所では手術日になつてゐる。）クロホルムの全身麻酔で昏睡状態に陥つた奈々子を乗せた担架が手術室の方に行くあとから男や女の患者がそろそろ跟いて行つた。

「やつぱり、病氣つてわからないもんねえ」

「『KSの女王』も、……型なしになるな」

看護婦が物見高い見物人を追つぱらつたあと、——おれは手術室の金網の外にひとりじつとゐた。奈々子は寝台の上にうつぶせになつて上半身を露出している。いよいよ笹沼が研ぎすまされた一尺近いメスを看護婦の手から受けとつて奈々子の裸の背部の方にかがみこむような姿勢になつた。笹沼の垂れ下

つた紫色の唇が緊張のために微かに慄えるのが見えた。そのとき、おれは奈々子のあの白いすべすべした肌が疵ものになるのだと思うと、もう堪らなくなつて、

「待つてくれ！ やめる！」

と、叫びながら、裏庭を廻つて扉の方に突進した。が、おれが鍵穴から覗いたときにはもう奈々子の背中では五、六センチも立割られてトマトのような真赤な肺臓の上で、奈々子の呼吸のたびに血だか注射液だかが一緒になつてピチピチ跳ねていた。

ふと、おれは忙がしうに手をうごかす笹沼の火傷でひきつれた右頬に隠しようもない変質者特有の満足の薄ら笑いを見てとつた。

奈々子の肌に永久の疵痕をつける満足！

奈々子の洩らす呻きも苦悶というよりはむしろ陶酔の瞬時に発する声のようにきこえる。おれは奇妙な激しい嫉妬に駆られて夢中で扉を蹴破つて飛込んだ。

「お、おれにも切らせろ！」

奈々子が手術後、経過が悪くて死んだのはそのときおれが笹沼の腕をつかんでメスの方を角を狂わせたせいかもしれないかつた。

あぶ・せくすありす

執念日記

彼女の唇は、かすかに虫歯の匂いがしたが、薄くて柔かだった。十九歳の彼女の体はよく締つて、青い果実のようにまだ固かった。しかしそれは、私を夢中にさせた……。

草葉蓉子



私が起した事件は、当時の新聞を賑わせたから、或はまだ記憶に残つて居られる方があるかもしれない。それはなんでも、

「硫酸を浴びた花嫁、変質美容師の犯行」と云つた見出しだつたそうだと云うのは、私はその場からまづすぐに現行犯として連行されたから、新聞は見なかつたわけだ。

私は犯行は即座に認めたが、なに分三日ほどの間は亢奮が甚だしく、狂躁状態にあつたので、さすがに猛者の刑事連も手がつけられなかつたそうである。

その狂躁のあとには、反動的に陰鬱になつ

て、私は留置場の隅で眼ばかり光らせていた。どんな取調べにも黙りこくつていたのでとうとう精神鑑定が申請された。

それで、公判廷では検事や弁護士によつて、突発的精神異常、変態性異常性欲、同性愛などの定義について、しきりに論争が行われたのである。私は両側から看守に守られながら固い被告席の椅子に腰を下して、その無意味な論争を聞いた。

だが、それは殆ど私の胸にひびいては来なかつた。此処で行われた論義は、すべて私の気持から遠くかけ離れた、空々しいものでし

かなかつたのだ。この時は、私はもう水のように冷静だつたのである。

「被告は、哀れむべき異常変態性慾者でありまして……」

など云う声を、私は遠くに聞いていた。誰にも、私の気持が判る筈はないのだ。私以外の誰にも……。

私は公判廷で、白々しい論告がなされる退屈な時間に、私が此処に連れて来られるまでのことを、ぼんやり回想していた。

生れは茨城県の某町。故郷を出たのは七年前だが、まだ茨城ナマリが残っている。一人

で東京に出た。二十二歳の秋だった。と云つても、別段東京に憧れたわけではなかった。絶望の揚句、居たたまれなくなつて、飛び出して来たのだ。

私には両親はなく、駅前でラジオ商を営んでいる兄の家にいた。兄と云つても異母兄だし、冷酷な性格の人だから、私はずい分厄介者扱いをされていたのである。私は当然暗く陰気な性質になつていった。

しかし、そんな私にも希望があつた。幼い頃からの許嫁で、相愛の人がいたのである。その小野は、近くのM市の市役所に勤めていた。若く、気は弱いが善良な人柄だった。

私は一日も早く彼と結婚して、気まづい兄の家から離れることを願っていた。二人つぎりの新家庭を空想すると、胸が躍つて溜息が出るのだった。

二十二歳の五月には、いよいよ挙式の日取りも定まり、私はその支度に忙殺された。縫物などをしながら、あと十日、あと一週間と指をくるのだった。

いよいよその五日前のことだった。私は最後の羽織仕上げにかゝつていた。火鉢で焼いた鰻を右手に持ち、焼け具合をたしかめようとして、丁度顔の真正面に構えていた。

其処に後から、五歳になる甥が飛びついて来たのである。

「あッ！」と云つた瞬間、もう鰻は離れていったけれど、それには私の頬の皮がベツタリくつゝいていた。

私は気丈なところもあつたから、そのまゝ前かけで患部をかくして、外科病院に飛び込んだ。しかし、病院に入ると失神した。それほど耐え難い苦しさだった。

それからのは簡単に書く。五日後の挙式の予定だった日には、私は鏡の前で泣いた。傷はまもなく癒つたが、勿論元通りになつたわけではない。傷そのものは案外目立たず、丁度鰻の大きさにテカ／＼光つて引きつれているだけだから、少し濃く化粧すると、それほど醜悪でもない。

しかし、どうしても頬の筋肉が縮んでいて、ために、右の下まぶたが、丁度赤んべえをした時のように引きつれているのである。小野の足はだん／＼遠のいた。そして、やがては人を介して、破談を申込んで来たのである。

兄は一層露骨に邪魔者扱いをする。故里の町にも、兄の家にも居たゝまれなかつた。東京に出ると、私は女が一生独身で終える爲の

職業として、美容師を選んだ。もう、一生男の顔など、見えない処で暮したい——とも思つたのである。

私は澁谷の「パール美粧院」に住込みで入った。此処は主人夫婦と、弟子が七、八人いる中級の美粧院で、住込みは、当時私の他に四人いた。店の二階が、私たちの部屋になつてた。

何処の美粧院も同じように、マダムはケチで人情味がなかつたが、私はそんなことに頓着なく、よく働いた。なにしろ、他の若い相子弟たちと異つて、一生を賭ける仕事だから私は熱心にならざるを得なかつたのである。

他の人たちのように、夜映画に抜け出した、始終休暇を貰つたりする必要はなかつたから、マダムの受けはよかつた。二、三年は夢のように過ぎた。

「パール」では、私は弟子たちのうちで一番年長だった。一日中立ち通して疲れて、やつと仕事から解放されて自分たちの部屋にくつろぐと、若い女たちの話題は毎晩同じだった。

映画の話、食べものゝ話、そして若い異性の話。私一人が仲間はずれだった。私は仲間の若い娘たちが、店の近所の男の噂などに夢

中になるのが不思議でたまらなかつた。私にとつては、男性は不潔な虫けらであり、許すべからざる不徳義漢だつたのである。

しかし、男性に対する不信の代りに、私はそれだけ強く、同性に対して関心を抱き始めていた、冷めたく氷つたような女だつた私も、誰かを愛せずには居られなかつたのだ。その対象は、同じ住込み弟子の絹ちゃんだつた。彼女は千住の方の大工の娘で、色白の大人しい女だつた。私は彼女に夢中で溺れていつた。

爪に火をともしようにして溜めていた貯金を下して、彼女にこつそりハンドバッグなどをプレゼントした。絹ちゃんが包みを明けて糸切歯を見せて喜ぶ顔を見るのがたのしかつた。それは、男性が女性にプレゼントする時の心理と、まづたく同じだつたのかもしれない。

私は朝も晩も、仕事中も絹ちゃんから意識を外すことはなかつた。誰か、店の仲間や、御常連のお客様などが、彼女と親しそうに笑つたりしているのを見ると、私はカツとなつて我を忘れ、セツトの手が狂つたりする。私はまづたく客の前であることも忘れて、櫛を持つたまま彼女を睨むこともあつた。

仕事の合間を見ては、彼女を誰も居ない二階の部屋に引っぱり上げて詰問する。

「絹ちゃん！ あんた、どう云うつもりなの！」

「お姉さん、あたし、なにも……」

オド／＼する彼女を見ると、一層イラ／＼して、私は甲高い声をあげて仕舞うのだ。

「ふん、人の前でみつともない。あんな奴と二人でコソ／＼笑つたりして……、あんた、私が嫌になつたのなら、そうハッキリ云えないじゃないの！」

「そんなこと、誤解だわ」

「嘘おつしやい！」

紫色になるほども、彼女の腕をツネリ上げたこともあつた。彼女がす／＼り上げて泣くのを、私は複雑な眼の色をしてみつめるのだつた。

だが、そんな晩は、同じ部屋の仲間が寢息をたてると、私は何時もより一層熱情的に、絹ちゃんの傍にすりよつた。私達は隣り合せて床を敷いていたのだ。

彼女の唇は、かすかに虫歯の匂いがしたが薄くて柔かだつた。十九歳の彼女の肌は、よく締つて、青い果実のようにまだ固かつた。しかし、それは、私を夢中にさせた。私はな

んとか彼女の情熱を燃え上らせようとして、そのためには、どんなことでもした。

とにかく、当時の私は、絹ちゃんを熱愛しなんとかして彼女の方からも、同程度、或はそれ以上に愛されたいと思つていたので。だから、彼女の反応をためそうとして、私はある同僚の名で、絹ちゃんにラヴレター（？）を書いたこともある。思いつくことは何でも実行に移した。

こんな私の狂態が、マダムや同僚に知れない筈がなかつた。私はとにかく仕事は熱心だつたから、マダムの方は知らぬ顔をしていたが、同僚たちは面白半分に、さん／＼私の噂をしている様子だつた。一度は、それが偶然私の耳に入つたこともある。私は同僚の前で真蒼になつて、ヒステリックに叫んだ。

「そうよ！ 私は絹ちゃんを愛してます。それがどうしたの？ あんたたちに何の関係があるの？ 大きな御世話ぢやないの！ 私はあんたたちのように、薄汚れた、みつともない男なんかツバも引つかけないんだから！ ふん、男なんか、みんなあんたたちにくれてやる！ 私は、絹ちゃんさえ居れば、一生男なんか見たくない！」

これには、みんな面喰つたようだつた。

しかし、私は絹ちゃんと二人になると、すっかり気弱くなつて、

「絹ちゃん、私から離

れないでね、一生離

れないつて、誓つ

て頂だい！」

その絹

ちゃん

が、結
婚したの

だ。今から

思えば、あんま

り変質的で執拗な

私の態度が怖くなつた

のかもしれない。お彼岸

に休暇をとつて家に帰ると、

そのまゝ彼女は姿を見せず、父

親だと云う大工が半纏姿のまゝ自転

車でやつて来たのだ。

「お絹の奴も十九になりやがつたんで、丁



ようなわけで……」

マダムと話しているのを盗み聞いて、私は階段の下に倒れて仕舞つた。これが、私が裏切られた二番目の話なのだ。

絹ちゃんが男と結婚した……。絹ちゃんを横取りした男——私にとつて、やはり憎いのは絹ちゃんではなく、男性だつた。

私はそれから、マダムとも同僚とも、あまり口を利かなくなつた。毎日、黙々と仕事をするばかり。マダムには喜ばれたが、弟子たちはみんな、私を変人扱いをする。その仲間の弟子たちも、他の店に移つたり、結婚で辞めたりして、顔ぶれが変つてくる中で、私一人だけがまるで「パール」の主のように動かなかつた。

若い弟子からは「オールド・ミス」などとかげで呼ばれたが腹も立たなかつた。仕事に専念した。私は美しい同性たちの髪を扱うことが、なんとなくしたのしかつたのかもしれない。

その頃、私が愛した、第三番目の人が店に現われるようになった。それが私が犯した事件の被害者となつたわけだ。

私は母親らしい人に伴われて来た彼女を始めて見た時から、カツと頬に血が上るような

度あつし
の弟子に、三ッ違いで、うすばんやりなんです、が、堅い奴なんで一緒にすることに決めた

想いだつた。若く、透きとおるように、清潔な肌をしていた。絹ちゃんのような町娘タイプではなく、スナリと軀がのびて、聰明そうな瞳をしているお嬢さんだつた。何かの調子で笑うと、下ぶくれの顔が如何にも愛らしい。

私はこの雅子さんに、夢中になつた。丁度絹ちゃんを愛したのと同じように……。二度も裏切られながら、私はやはり誰かを愛さずにはいられなかつたのだ。

絹ちゃんの場合とは違い、彼女は月に二、三回、多くても四回程度しか店に来ないのだから、彼女の顔を見た時の嬉しさと云つたらなかつた。私の眼の色は完全に変つていただろう。

相手は良家のお嬢様だし、こちらは一介の美容師だから、店での接触以外には、なんとも近づく方法がないのである。

それだけに、雅子さんを椅子にかけさせ、頭髮からピンを抜き、櫛で、美しい髪をとかす時には、嬉しさと云うより、無上の快感で手も軀も可笑しいほど震えてくる。髪の毛にふれているだけで、その指先から軀中に戦慄



的な喜びが走つた。

私はあまり手が震えて、どうしてもセツトが出来ず、彼女から、

「御気分がお悪いの？」

と、聞かれたことさある。

どうしてそんなに夢中になつたのか、自分でも判らない。私は彼女が姿を見せない日でも彼女のことばかり考えていた。考えることは限りなくあつたのだ。私は店の誰とも口をきかず、朝から晩までムツツリと押黙つて仕

事をしながら、自分一人の空想の中に、彼女のさま／＼な姿を描いていた。

「草葉さんつたら、気持が悪いわ。黙つてゝ時々薄笑いするんですもの」

と、云われたこともあつた。

私は前にも述べたように、仕事には熱心だつたから、この七年間に相当の技術を身につけていた。それに雅子さんに対しては、何とかして彼女の氣に入られようとして、懸命に髪を仕上げたから、彼女は何時も私を名指し

て、くれるようになった。

それは、何時も彼女の表情をとらえ、より美しく装わせることに、大きな喜びを感じている私だつたから、他の誰のセツトよりも、彼女は美しくなる筈だつた。

ある日、雅子さんは母親と二人で店に現われた。私は飛び立つ思いで椅子をすゝめ、仕上げの途中だつた前の客は、後輩の手に任せた。私は彼女の調髪にかゝると、他の人たちの話は一切耳にも入らない。自分の氣に入るようにセツトして、大きなネットをかけ、彼女をドライヤーに入れた。

何時ものように念入りに仕上げて、彼女たち母子が帰る姿を、惚れ／＼と見送っている、マダムが独言のように云つた。

「まつたく、おつとりした綺麗なお嬢さんだから、さぞ美しい花嫁さんが出来るだろうね」

「マダム、なんですつて？」

「あら、聞いてなかつたの？ 今度お嫁にいらつしやるんだつて……、お式も御披露も×会館だけれど、あんたの腕が氣に入つてから、あんたに出張して、当日の髪から着付一切をやつて貰いたいって仰言るのよ」

マダムはいゝ商売だと云つた口ぶりだつた

が、私は眼の前が真暗になる思いだつた。

雅子さんが結婚する！ あゝ彼女さえも……

。又しても私は一人取残されるのだ。

翌日から、一度も寝込んだことのない私が床について、マダムを驚かせた。もう櫛をもつ氣持がしなかつたのだ。私は以前にも増して陰鬱になつてゆくのだつた。

そして、彼女の結婚の当日が来た。私は黒のワンピースの上に、真白の仕事着けつを、若い助手を一人連れて、早朝から××会館に赴いた。

彼女はザワ／＼と落着かぬ、御祝儀氣分にとり巻かれていたが、私の顔を見るとニツコリ笑つた。

氣持の上の闘いにかゝわらず、彼女を鏡の前に見ると、今までの習性で、私は雅子さんを美しく仕上げることに熱中した。それは美しい、如何にも初々しい花嫁姿だつた。身内の人々と一緒に、私もぼんやり見惚れてしまつた。

「どうも、ありがとう」

その言葉を残して、彼女は式場に消えて行つた。式が終つて、記念撮影の時に、私は彼女の夫となる人を見た。モーニングを着てシヤチホコばり、如何にも不潔で狡猾に見え

た。七年前に私を捨てた男と同じように――

こんな男に、雅子さんをやることは出来ない！ と、私は思つた。あんなに初々しい彼女は、汚らしい男性にふれることなく、永遠に処女で暮すべきだ、とも思つた。

賑かな披露宴が始つてゐる間に、私は仕事着をつけたまゝ、街の藥屋に行つた。不気味なレツテルを貼られた、瓶を握りてしめ××会館に戻つたのだ。

そして、私自身の手で美しく仕上げた、新婚旅行の門出の花嫁の顔を目掛けて、その液体を浴びせたのだ。

私はその時の雅子さんの表情を、きつと一生忘れないだろう。極度の驚愕と激痛に引きつゝて、それは実に美しかつた。私がかつて見なかつたほど……。

彼女の顔には、私と同じように、一生消えない傷跡が出来たことだろう。しかし、あんな嫌わしい男性と結婚するよりも、彼女にとつては幸福なのだと、私は信じてゐる。



日本刑罰史・第四回

女犯刑繪卷

禁慾生活を強いられた僧侶と御殿女中とが秘かに通ずるようになったのは當然かも知れない。神聖であるべき寺院が、密室まで造つて歡樂の場と化し……

菊 山 進

法界坊餘聞

塵と埃とでうす汚れた黒い法衣をやつれた体にまとい、小幟を杖にした法界坊。

この法界坊の姿こそ悪業と、破戒僧、墮落坊主の典型的な行状であり、末路なのではなからうか。

『隅田川続傳』で、牛島大蔵という悪党から頼まれた法界坊は、松若丸や、野分姫などの詮議をして、褒美の金にありつこうとする。そして松若丸がやつとの思いで手に入れた鯉魚の一軸をかつぱらい、三囲堤の立廻りとな

るのであるが、この場面は、頽廢期の江戸演劇にふさわしい快美感に溢れている。

要助を縛つて藪に蹴込んだ法界坊が、両手の土をはたきながら堤の上に歸つてくると、足もとに、野分姫が美しい袂を重ねて横倒しになつてゐる。

「ええ匂いがするぞ」

法界坊は見えぬ闇に、鼻をしきりとひこつかせる。
「何処から麝香の匂いをさらしてけつかるのじゃ」

鼻をひくひくさせながら、二足、三足、踏

み出したとたん、野分姫の金爛の衣裳を踏む。

「こんなところにも一枚、いてけつかる。ええ女じゃなあ」

法界坊は惚れ惚れと覗き込むのである。

野分姫は、先程の争いのときに、法界坊の毛脛で脾腹をしたたか蹴られて、失神しているのだ。法界坊は、頭をかかえこんで、「こうなると、アア、お上人、迷うた迷うた」法界坊が恋い焦がれて、無理にでも思いをとげたいと希つてゐる永楽屋の娘お組も、すぐ傍で失神しているのである。

美女そろいなので、どちらを先にすべきか法界坊、迷つてしまう。

やがて、決心した法界坊は、まず、野分姫を抱きおこして、息を吹きかえさす。

おどろいたのは野分姫である。

「こりや、自らをどうするのじゃ」

「なんじゃ、みづから？ おかしな名前のやつじゃな」

と、しばらく考えたあげく、

「やい、みづからよ。お前にこのお上人がお惚れ遊ばしたのじゃ。さあ、早う応と言え」と汚ない面を突き出す。

野分姫はのがれようとして、短刀を振りまわすが、法界坊に奪われ、反対に刺されるのである。

美しい野分姫の屍を見下した法界坊。

「ああ、惜しいもんじゃなあ」

と溜息をもらし、さてお組を自由にしようとしたとき、現われた道具屋甚三にさまたげられ、殺されてしまう。

そして執念深くも亡霊となつてとりつくのであるが、この法界坊、現実にモデルがあつたわけではない。

米原に上品寺という真宗の寺があり、そこ

に法界坊の遺跡と称するものがある。それによると、上品寺の十八世の住職であつた了海という僧正が、法界坊の姿かたちのモデルになつてゐることである。了海和尚は、文政十二年正月二十五日に、八十二歳（七十九歳という説もある）の高齢で、その寺で大往生をとげている。それなのに、三囲堤で甚三のために殺されるように脚色されようとは、法界坊のセリフではないが、

「ヤレコリヤドツコイ、おいとこそうだ、飛んでもない」ということになろう。

了海和尚は、悪事を働いたわけではない。

法界坊の演ずる悪業は、清水寺の墮落僧清玄にヒントを得たもので、了海和尚の修業時代の、塵と埃とで汚れてしまつた法衣に幟を杖にした、やつれた姿に、清玄坊主の悪業をプラスして、典型的な破戒僧法界坊が出現したのである。

もつとも、この法界坊、盛に悪事に働くがユーモラスに描かれていて、庶民に親しまれている。また、うすぎたない男と美女、おんぼろ姿の法界坊と、絢爛たる衣裳の野分姫とを組み合せ、妖しくもしどけない荒れ模様の

あげく、法界坊に野分姫を殺させ、惜いもんじゃなあ、などと言わせてゐるのは、時の権力者である武士階級や、更にその上にどつかりとあぐらをかいて天下をほしいままにしてゐる大名たちへの、町人の反抗を、悪の華の形式で表現したものであろう。悪党でありながら法界坊が庶民に愛されたのには、そのような意味も含まれてゐるのである。

法界坊のような破戒坊主が現実にいたならば、引廻しの末、磔刑はおろか、最もきびしい鋸挽の刑に処せられたことであらう。

男色に不満な女犯僧

徳川家康は、藤原惺窩や林羅山などに命じて、古書旧記を調べたうえで、幕府政治の根本となる諸制度を順次編成した。

第一番に制定したのが、キリスト教禁止や喫煙の禁止、牛を殺すことの禁止などを定めた『慶長十七年法度』である。

次いで慶長十八年六月に『朝臣法制』元和六年七月には武家諸法度・公家諸法度・僧家諸法度を含む『三法度』を制定した。

これらは、すべて、刑法ではなく、それぞれの心得なのであるが、武家と同列に僧家の

心得が説かれているほど、僧侶は重要視されていたのである。

いづれの国の封建制度を調べてみても判ることだが、権力者は、宗教を利用して、権力を維持している。

徳川時代には、佛教をつかさどる僧侶が、その役目をおおせつつあったわけである。それだけに、僧侶に対する戒律はきびしいものであった。

刑法としては、徳川幕府は、家康の時代には戒文律を設けず、不文律で事を裁いてきたが、四代將軍家綱のときに、評定所留役というものを設け、訴訟の判決案をつくらせたのであった。

六代將軍家宣のときに、江戸中とはよりのこと、諸国の津々浦々まで、高札を立てて幕府の禁令を知らしめた。

これが『徳川百箇條』といわれる刑法で、僧侶の女犯に関したものは、その五十一條の『女犯之僧御仕置之事』である。

それによると、僧侶が女犯をおかしたときは、三日間晒したうえ、本寺の触頭に引き渡す。触頭というのは、寺院や社家の中より選定され、寺院または社家に対し、幕府の布令

を伝達する役目で、晒しずみの僧侶を引き渡されたときは、触頭は寺法に依つて追寺するのである。

但し、この刑罰は、僧侶が夫のない女に通じた場合で、女犯の相手が若し夫のある女であつたならば、引廻しのおえでの獄門の刑に処せられるので、触頭の方へは廻つて来なかつた。

僧侶は、真宗を除いては、女色を禁じられていた。その代り、寺小姓や美童などをおいての、男色は、公然と黙認されていたし、蔭間を賣うことは公然の事実であつた。

火付けの大罪で、火刑に処せられた八百屋



お七にしても、寺小姓の吉三に恋い焦がれたための仕わざであつた。公衆の面前で行われる若い娘の火刑は、妖しくも美しい残酷物語ではあるが、火刑については、別の機会にゆずるとしよう。そのようなことはともかく、寺小姓に恋い焦がれたお七は、寺院に於ける男色の、意外な犠牲者であつたと言ふべきであらう。

火刑にかぎらず、晒刑、引廻、獄門、磔刑等々、江戸時代には、さまざまな刑罰は公衆の面前で行われた。これは、罪人をいつそうにこらしめるというよりは、それを見る一般の人々に対して、刑の執行という示威によつて威嚇し、見せしめにしたのであらう。

さて、僧侶は女色を禁じられていたのであるが、悟りすました僧正ならまだしも、血氣盛んな若い僧侶たちは、男色だけではおさまらず、そろそろと遊女のいる家へ女買ひに出かける始末となる。

僧侶の姿だと登樓できないので、医者に姿をかえたり、宗匠に姿をやつしたり、幫間に化けたりする。僧侶の遊蕩用の変装専門の店があつたらしく、上田秋成作と伝えられる『世間妾氣質』という作品集のなかに、数人

の僧侶をたぶらかして、変装用の衣裳をしこたま謀り取つたしたたか女が、どろんを決めこんで数丁離れた場所で、僧侶変装用貸衣裳専門店を開いた話がある。

そのように、変装した僧侶たちが、いちばんてつとりばやい女色である遊女のもとへと通いつめる。

幕府当局としても、放つておけないので、たまに、いつせい検挙を行つたものらしい。ちやうど、いまの、街の女への手入れみtainなもので、売色は公然に許可されていた時代であるから、挙げられるのは、当節とは逆のしかも坊主だつたわけである。

そんなためか、僧侶が晒の刑に処せられるときは、五人とか六人あてかためて晒されたが、天保十二年の三月には、四十八人という多勢の僧侶が、一度に晒されたのであつた。晒をする場所は、決つていた。

江戸の場合に、日本橋の橋畔で、大阪では高麗橋の橋畔、今でいえば、銀座四丁目の角に晒されているようなものであつた。晒刑について少し述べるとしよう。

日本橋橋畔

物見高い江戸のど真ん中。

晒小屋には、年の頃は二十そこそこ、小柄ではあるが、肉のよく締つた女が、浅黄木綿の御仕着せの裾から、雪より白い内股がこぼれるのを気にしながら、後ろ手に縛りあげられ、面をふせて、じつと唇を噛みしめていゝる。鬢がほつれて額に這い、噛みしめた唇だけが燃えるように赤くなまめかしい。

豊かな胸が、切なさそうに息づいている。美しく着飾つていないだけに、かえつて凄艶であつた。

背なか合せに、二十四、五の、手代風の男が、やはりお仕着せ姿で、縛られ、うなだれている。

「せめてものことに、二人一緒に抱き合せて縛つてやればよいのに」

「いい女だねえ。これからという年じやないか。この若さで、どんな辛いことはあつたか知らないが、死のうとは、もつたいたいことをするものだよ」

やじ馬どもの遠慮のない言葉の鞭に、晒され者は、いつそう深くうなだれるのである。

心中を企てた男女の、一方、又は双方が、死にそこなつたときは、その一方、または双

方は、三日間、晒されたうえ、非人の手下として下げ渡されるのである。

晒の刑を受けるのは、このほか、主殺しが三日間の晒しのうえ、一日引廻し、鋸挽きの刑にしたあげく、磔刑にかけられる。

主人に傷を負わした者は、三日間晒されたうえ、磔刑にかけられる。

そして女犯の僧が、三日間晒されたうえ、本寺の触頭に引渡され、寺法によつて追放されるのである。

晒小屋は、間口五尺、奥行き三尺の菰葺で三方は蓆でかこんである。

小屋の前は、竹で二重の柵を造り、見物人が小屋に近づけない様にしてある。前記のように、僧侶が四十八人も晒されるときには、小屋をもつと広くしなければならぬのは勿論のことである。

小屋の準備ができると、朝の辰の上刻（午前八時）に、小伝馬町の牢屋敷から、晒の罪人を引き出し、舂に^{ちゆ}乗せて晒し場へ連れてくる。そして本繩のまま小屋の中の柱に縛りつけ、その前に罪状を書いた捨札を立てて置くのである。

夕暮の七つ（午後四時）になると、再び舂

に乗せられて、もとの牢屋に放りこまれる。

翌日は、また、同じことが繰り返されるのである。

女犯の僧侶が晒されるときは、すでに述べたように、普通は五、六人あてまとめて晒されるが、天保十二年三月のときに、四十八人も多勢のこともある。

捨札には、各僧侶の女犯の次第を書いてある。

まづ、晒された僧侶の属している寺のある場所、宗派、寺名、身分、僧名などを記したうえ、次の如き文句を書きつらねる。

……右者、寺院取締の儀嚴重の申渡有之候処、清僧の身分にて新吉原何町何丁目何屋の抱何女買揚げ、遊興の上度々女犯に及び候始末、不届に付晒しの上触頭へ相渡し、寺法の通り可取計もの也……

——これは女犯の相手が吉原の遊女の場合であるが、若し相手が素人で夫のない女であったならば、相手の女の住所姓名年齢と、関係の次第を詳記するのである。

行状を捨札に書きたてられて、じゅずつなぎに縛られて晒され、うなだれているくりくりの坊主頭の群を想像してみると、刑罰など

という痛ましきなどよりも、むしろ、滑稽さが感じられるではないか。もつとも、そのようにして追放された僧侶のなかから、法界坊のモデルとなつた清玄坊主のような悪虐僧侶をも輩出したのであろう。

しかし、この刑罰は、相手が遊女や夫のない女である場合だけであつて、もし通じた女に夫があつた場合には、晒しどころか、引き廻しの上、獄門の刑に処せられるのである。

引廻しと獄門について簡単に述べよう。

引廻しとは、死罪、獄門、磔刑、火罪等の嚴刑に属する附加刑であつて、罪人は、菰を掛けた馬の背に、後手に縛つたまま乗せられる。この罪人を縛つた繩を呼び繩と言う。

馬の傍には、罪人が犯した罪の次第を記した紙幟と、捨札を持つた非人がついてゆく。

その他、馬に乗つた与力、徒歩でゆく同心をはじめとして総勢二十五人が、罪人が住んでいた町内を、引き廻すのである。

獄門のときは、小伝馬の牢屋敷内で首を切り落し、その首を俵に入れて、獄門の刑場へ運ぶのである。

刑場は罪人の住所または逮捕された場所によつて異つていた。



日本橋以南の場合は、品川鈴ヶ森。

日本橋以北の場合は、千住小塚原。

縦の二寸板で造った高さ六尺二寸、長さ四

尺五寸、幅四寸の獄門合を据えつけ、その上

に首を乗せ、傍には捕物に使用する三つ道具

と、罪状を書いた捨札を建て、番小屋で非人

が番をするのである。

御殿女中との破戒

絢爛豪華な女犯は、何と言つても、男子禁

制の江戸城大奥の女中たちと通じた情痴絵巻
であろう。

江戸時代に禁慾生活が余儀なくされたのは

真宗以外の僧侶と、御殿女中であつた。僧侶
が男色を買うのは黙認されていたが、女犯が
発覚した場合は、前記のとおりである。

御殿女中は將軍大名の側妾、いわゆるお部屋
になつた者以外は、異性に接することを許
されなかつた。不義は御家の御法度。不義が
発覚したときは、嚴罰に処せられた。

有名な絵島生島の事件も、禁慾生活に耐え
られなくなつた御殿女中と、俳優との爛れた
愛慾絵巻で、絵島の行動があまりに大膽すぎ
たために、意外に早く発覚し、絵島は遠島の
刑に処せられたのであるが、罰をもおそれず
にそんな行動をさせるものが、御殿女中の生
活のなかには、ひそんでいたのである。

こつそりと俳優や蔭間に通じていた女中た
ちは少くなく、ばれずにすんだだけのことで
ある。

禁慾生活を強いられた僧侶と御殿女中とが
同病相憐れむわけでもなからうが、秘かに通
ずるようになったのは、当然かもしれない。
信心のための寺参りと言え、外出のむづか
しい御殿女中でも、堂々と寺通いができたの
である。御代参だとか、病氣の平癒祈願だと

か、理由は何とでもつけられた。

このようにして、神聖であるべき寺院が、密室まで造つて、歡樂の場と化した事件も起きたのである。

遠くは京和の頃に日蓮宗の延命院の住職日道が、寺院に多くの俳優を招き寄せて、御殿女中に取り持ったことがあり、日道自身も女犯の罪が発覚して、京和三年七月に処刑された。

だが、何と言つても、天保におこつた鼠山の新感応寺事件が、絢爛豪華な女犯の最たるものであろう。

新感応寺の住職日啓は、大御所家齊の愛妾おみよの方の実父であつた。

そんな関係で、大奥と新感応寺には、すでに連絡があつたのである。

家慶將軍附の老女瀬山、大御所家齊夫人附の年寄花町などは、御代参という名目のほかに、自分の参詣をも申し出て、せつせと新感応寺詣でをつづけた。

新感応寺では、日啓をはじめとして、老僧若僧総動員で、サーヴィスにこれ勤めたのである。

もちろん、普通の参詣人もいたであろうか

ら、公然と戯れるわけにはゆかなかつたが。

「では、こちらで、御休息下さい」

案内されるのは、外界とはへだてられた密室である。

あちらに一组、こちらに一组、飽きること知らない貪婪な愛慾の営みが、人目もはばからずに繰り展げられる。

くりくり頭の坊主と、豪華な衣裳の御殿女中。

それはすさまじい愛慾絵巻であつた。

お互の破戒を、ここをせんとむさぼり愉しむ。

禁断の果実をたんのうした御殿女中たちは、そう度々参詣することはできないので、衣服の加持を頼むとか、寄進するとかの名目でそれを運ぶ長持の中に潜んで寺に出入りする豪の者もあつた。

俳優の中村大吉は、長持の中に隠れて尾州家の大奥内に忍び入つたということであるがお寺通いの女中たちは、彼女みずから長持の中にかくれて忍び通つたのである。彼女たちの禁慾生活に対する反動がどれほど強烈であつたか、そして、性慾を満足さすために如何に手段を選ばなかつたか、この一事で察する

ことが出来るだろう。

天保十一年六月ごろに、この破戒騒動は発覚したが、政治的な発言力の強かつた大奥が運動したため、表沙汰にならずにすんだ。

そのとき以来、奥女中の出入口には、外に持ち運ばれる長持の重量を測る天秤を備えつけたと伝えられている。

(終)

愛 読 者 通 信

私は本誌の愛読者の一人です。

貴誌九月号そとみあの部投書の中に、大阪生と有り、交際を求めておられる記事の中に大阪中津柴島、赤川堤防で、水泳疾走を三時頃よりなさつて居り、土曜に限り赤紐の海水著を着ておられると言うその主をさがして居りますが、どうしても知れません。

出来ますれば御文通なり、御交際なり致したいと存じて居ります。

誌上で大變失礼ですが、この記事を御覽になられましたならば、早速社宛に御連絡下さい。御まち申して居ります。

(北浜生)

風俗草紙臨時増刊號

秘藏版

風俗草紙

12月20日 堂々發賣 乞御期待

部數に制限が御座いますので大至急御申込み下さい。

★内容詳細は御申込次第御送り致します★

秘藏版風俗草紙は凄艶豪華多色刷の折込口繪をトップに一流執筆陣による悦虐マニアの垂涎の口繪寫眞並にソドミア・レスボス・アブニスト・を幻想のオアシスに誘う堂々百頁のアート頁
本文は愛讀者諸賢を歡喜の極致にさそう完璧の内容を斯界の權威並にベテランが精魂込めて執筆超豪華秘藏版たることを廣言してはばかりません

本誌「風俗草紙」は愛讀者皆様の御支援によりまして御蔭様で好評を拍して居ります。誠に感謝に堪えません、厚く御礼申し上げます。扱愛讀者の皆様の御要望にこたへ、こゝに秘藏版風俗草紙の刊行を断行致すことになりました、何卒本誌同様御愛読下さいますよう御願申し上げます。

B5判 350餘頁

6色折込豪華口繪

アート口繪 100頁

定 價 500圓

送 料 50圓

★
自分が元男爵
の、T未亡人邸に
雇はれたのは、二年前
の晩春の頃だったのです。
自分はそれまで勤めていた、品川
の工場も鹹になつて、することもないか※



あぶ・せくすありす

畜 類 人 間

「それじゃ、その犬小屋に入つてごらん!」……自分は吃驚
しました。御大家のこととて立派な犬小屋ですが、なんといつ
てもワイヤ・テリヤの小屋ですから小さいのです……

宮 内 二 三 夫

※ら、毎日狭い家にゴロ／＼していました。
親爺もおふくろも兄貴も、自分の顔を見るた
びに「この穀つぶし」だの「二十三にもな
りやがるクセに——」など罵しつた。
だが、それも家の者にすればまあ無理
のない話で、まったく自分ときたら、何
処に勤めても半年と続いたためしがなか
つたのです。こちらとしては、仕事はノ
ロいが、別段サボるつもりはないのに、
何時でも横着だと云はれた。
それと云うのも、御愛想は云えないし、陰
気にひねこびている上に、元の職場の同僚の
言葉を借りれば、
「宮内と来たら、まったく胸が悪くなるよう

な御面相……」

を、しているから、どうしてもみんなに嫌われるような具合です。

人好きがする容貌と云う言葉がありますが自分はその反対で、容貌も性格も人嫌ひがするわけです。このことは、ずい分幼い頃から自分は骨身にしみて知つていゝのです。もの心つかぬ時分から、御世辞にも「可愛い」と云われたことは一度もなく、それどころか、おふくろは口グセのように、

「どうした加減で、こんな出来そこないが出来たもんだか——」

と、云つていた。

実際、双親も兄妹たちも、品はないが、それほど不様でもないのに、自分一人だけはまるで容貌が違つていゝのです。

近所の子供たちは自分のことを

「モンキー」と呼ぶし、口の悪い友達は、

「お前、なにかと混血児ぢやねえか、動物園に行つたら、親類がゐるかもしれねえぜ？」

と、云つたこともあるのです。

それから、自分がよく記憶していることですが、五年ほど前電車に乗ると、自分の前にきれいなピカ／＼する洋服を着た、映画に出るような可愛い、女の子が、母親らしい人に

連れられていました。

その子はもの怖じしない性質らしく、自分の顔をまじ／＼とみつめて、無邪気な大声で「ママ、あの人の顔、どうしてあんな顔になつたの？」

と、云つたんです。母親はさすがに慌て、女の子を制したが、あたりの人はクス／＼笑ひ出して、自分は真赤になつてしまいました。

丁度十七、八で、色気がつき始めた頃だつたから、軀中に火がついたような、恥しい思いだつたのです。しかし、その反面、そうして笑ひ物になつてゐることが、恥しいのだが少し嬉しいような氣持もしたようでした。その女の子が大変金持の、身分のある家の子供らしいので、そんな家の子供なら、自分は笑われても仕方がないのだと、思いました。

自分が育つたのは川崎の貧民窟で、まったくガラ／＼した大変な場所だから、そんなお邸のお嬢さんや奥さんを見ると、まぶしいような、勿体ないような氣持がするのです。

そんな風で、学校も小学校を出ただけなのに、自分でも親兄妹から文句を云われるのがうるさいから、何処かへ勤めたいと思つたがなか／＼口がなかつた状態でした。

ところが、同じ長屋の左隣りにゐる植木屋の下職が、

「お邸で、庭番や家畜の世話などをする男をさがしている」

と云う話を持つて来てくれた。自分はあまり乗氣でもなかつたが、「元男爵の御邸で、後家でおくのは惜しいような、女主人がいらつしやる」と聞いたから、そのまゝ行く氣になつたわけです。

「おつちやん、お願いだから口を利いてくれ」

と、頼むと、うす笑ひして、「さあ、お前はよくても、お邸の方で御氣に入るかどうか……。しかし、まあものはためしつてこともある。無駄だと思つて、明日御目見えに連れてつてやらあ」と、云うのです。

翌日は兄貴を拜んで、ズボン借り、隣の親爺に連れられて行つた。この邸は、主人も亡くなつてゐるし、斜陽族と云うわけだと思つてゐたが、自分は最初からとてつもなく広い屋敷の構へにキモをつぶした。

自分たちの居るような家なら、百軒も建つような広い庭で、芝生のところ／＼に花

壇があつて、見たこともない赤い花が咲いていました。

親爺に連れられ庭先にいると、其処の硝子戸が明いて、未亡人が出て来られた。大柄で眼がさめるように美しい人だつたのです。自分はこの女主人を見ると、反射的に、どうしても、このお邸で働かして貰いたいと思つて氣を揉んだ。だが、未亡人の、驚いたような顔を見ると、胸騒ぎがしました。

「まあ、フフ、、、この人なの?!——」

そして、御主人はとてもひびく声で、ホホホ、、、と、笑いました。

「まつたく、なんて人を連れて来たの。いくらなんでも……」

隣りの親爺は手拭で、しきりに汗を拭いてゐるし、自分は赤くなつたり、青くなつたりしました。やつぱり駄目か!!、と思つたが、自分は必死で御主人を見上げたのです。未亡人はまだ笑ひながら、面白そうに自分を見下して、

「困つたわねえ……、でも、まあ折角だから適当な人がみつかるまで、臨時に居てもらおうかしら?」

と、仰言いました。自分は嬉しくて、又、赤くなつて、黙つたまゝ御辞儀をした。

こうして、中元男爵未亡人邸での、自分の生活が始まつたのです。自分は天にも昇るような心持だつた。自分のような者が、こんなお邸に住みこめるなんて、夢のように思われたのです。

しかし、すぐお拂い箱になるかもしれないと心配なので、自分は必死になつて働いたわけです。御邸はとてつもなく広いが、家族は未亡人一人で子供もなく、召使は家令のような老人夫婦と、これもちよつと可愛いタイプの女中が一人いるだけでした。

広い庭の掃除、犬や小鳥、金魚などの世話花壇や草木の手入れなど、一日中忙しいほど仕事があつたが、自分は骨身惜しまず働いた。あまり屋内の仕事はないので、御主人の身辺にいることは殆どなく、それが残念のようない氣持がしていました。

そんな風にして暮して、もう初夏になつたある日です。日照りが続いたので、自分は芝生に水を撒こうと思つて、庭の水道栓にホースをつけました。そして、水を撒く前にちよつとその辺りを片づけていると、急に頭上に水がジャア／＼降つて来たのです。

自分はもう吃驚仰天、なにしろ不意のことでもあるし、頭から浴びせられたのだから、

キモをつぶしました。思わずノメつて仰向きにひつくりかえりました。すると眼にも口にも鼻にも水が入つて、眼も明けていられない。實際、この時自分は何事が起つたのかと思つた。

とにかくこの水からのがれようとして起き上ると、二間ばかり先で、ホースを握っている御主人のお姿が見えました。泡をくつていた自分も、この御主人の御姿を見た時には「あッ!」と思いました。誰のいたづらかと思つていたのですが、それが美しい御主人だと判ると、トツサになにか嬉しい氣持になつたのです。

「この御方なら、自分に対してどんな酷いことでもする権利がある……」そんな風に思えたのです。

御主人はホースの筒先を持ちながら、よほど自分のあわてふためく姿が可笑しいのか、軀を曲げるようにして笑つておられた。

自分は頭からズブ濡れになつて、そのホースの水からのがれようと走つたが、御主人は自分を追つてホースの筒先を動かされる。息も出来ないほど苦しい。夢中で走ると濡れた地面に足をさらわれて、ドタリと

転ぶ。その上に水が降りそぐのだから、顔も体も泥まみれになつて、まるでドブネズミそっくりです。

自分は夢中のうちに御主人の美しい笑声を聞きながら、水の下を泥だらけになつてのたくり廻つた。苦しかったが、思いがけなくあの高貴な御主人の手で、そんな思いをさせられることが嬉しくて、自分は無我夢中だったので。だから自分はしまいにはわざと転び

泥土の中に顔をつまこみ、ちやうど田圃の中のじょうのようにはね廻つた。

しばらくして水が止つた。自分が気が抜けたように立ち上ると、身も衣服も水と泥でズッシリ重く、眼も鼻も泥だらけだつたから、御主人はまだ笑いが止らない様子でした。

「まあ、奥様、どうなさいました？」

奥から駈け出して来た、咲と云う若い女中は高い声でそう云つたが、自分を見るとプツ

と噴き出して笑い出すのです。

「咲や、見てごらん、宮内の恰好つたら……オホホ、まるで泥人形。間が抜けるつたら……」

「ホ、ホ、奥様、泥田から這い上つたカツパそっくりでございますよ」

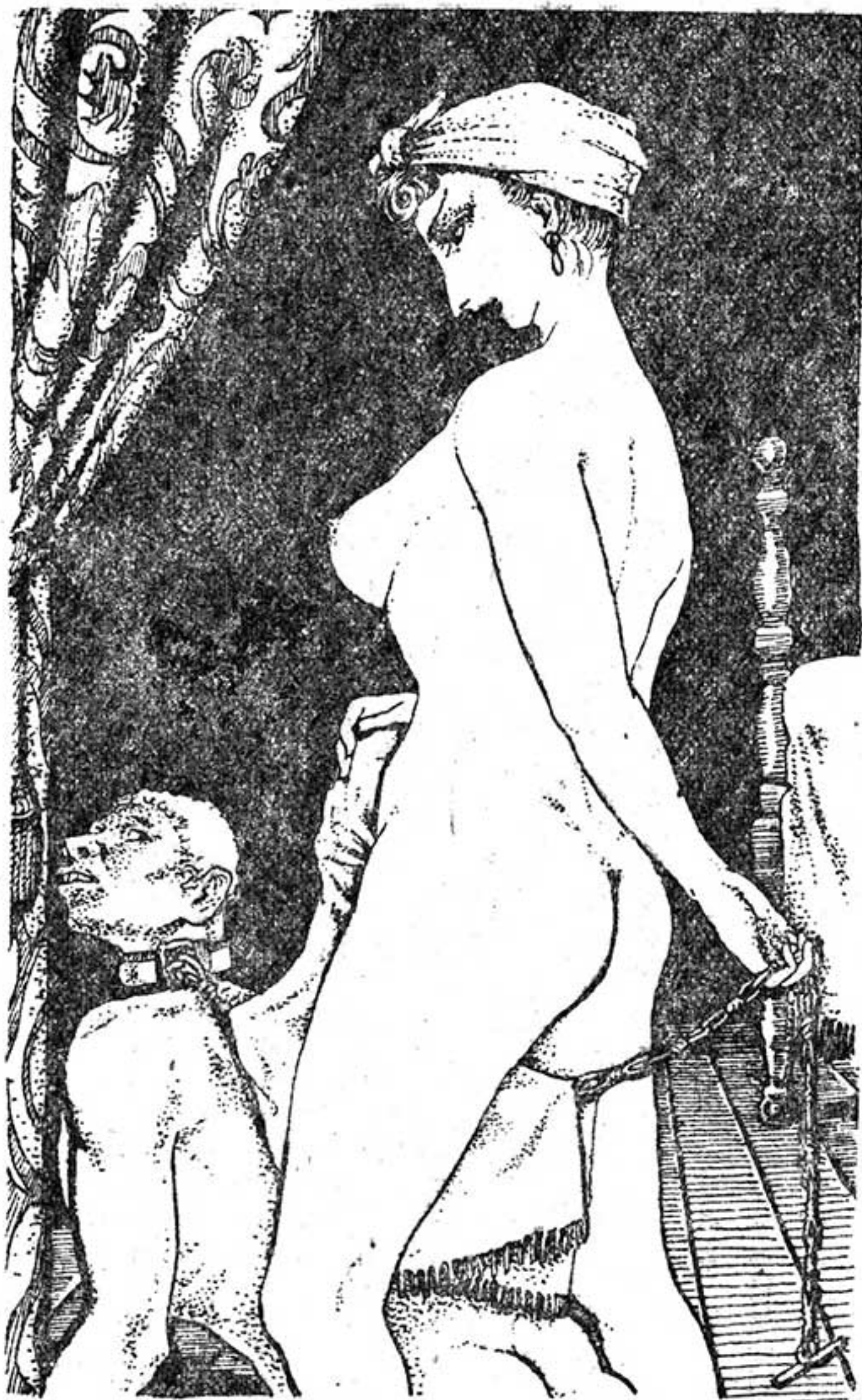
自分は二人の女性からさんく笑い物にされながら、なんとも云えない、浮き立つたような気持になりました。もつと、もつと笑つてくれ、ばい。そう思いながら、自分はだらりと両手をさげて立つていたのです。

そんなことがあつてから、御主人はなんとなく自分に対して関心を抱かれたように思われました。時々、御居間などから、あのよく透る声で、

「宮内！」

と、御呼びになつて、御用を仰せつけられることがありました。そんな時には自分はまだ胸を躍らせながら、しかし又、おそろしく御部屋に伺つた。自分のように醜い卑しい生れの者が、こうして高貴の女性の御用をさせて頂くこと、そのことだけで身が震えてくるのです。

いくら斜陽族とは云つても、このT男爵



家はなか／＼御内福で、御主人は勿論生活上の御心配もなく、毎日高価な、美しい御衣裳で遊び暮していらつしやる御身分だったようでした。

或日のこと、呼ばれて御部屋に伺うと、
「宮内、お前を臨時に雇っていたけれど、丁度いゝ書生がみつかったから、お前はもう家に帰つてよろしい」

と云う、思いもかけない御言葉で、自分は青くなつてしまつた。ドギマギして黙つていと、

「おや、不服なのですか!？」

と、タ、ミこまれる。自分はもう切端つまつて、へタ／＼と床の上に坐りこむと、ペツタリ両手をついて叫んだのです。

「奥様! お願いです! このまゝお邸に置いて下せえまし」

「あら、だつて、こちらの都合もあるのよ。お前ぢやあ、お客があつても人前には出せやしないし……」

そんな残忍な言葉がグサリと、だが小気味よく自分の胸につきさゝつて、自分は我を忘れて、御主人の足元に這いよりました。

「どんなことでも、なんでも致します。どうぞ、お邸でつかつて下せえまし!」

「そう、宮内、ぢやあ、私の命令ならお前はどんなことでもきつとするのだね!」

床に額をすりつけている自分を見下しながら、御主人は念を押すように云われました。

翌日から、自分は一層働きました。御主人の御気嫌を損じて御拂箱になつたら大変だと思つたのです。まつたく、この御主人の傍で暮すことが出来るのなら、自分はどんなことでも嫌う筈がありません。

或る時、こんなこともありました。御部屋の模様替で、家具を運ぶことになり、自分は相当大きな衣裳簞笥を動かそうと、前に廻つて簞笥に手をかけたのです。すると、急に簞笥の後面から何かの圧力が加わり（自分の考へでは、咲さんが故意に倒したのだと思う）自分は重心を失つて、簞笥に手をかけたまゝ、仰向きに倒れてしまつたのです。

後頭部や背骨をしたゝか床に打ちつけたがそれより、大きな衣裳簞笥の下敷きになつたのだからたまりません。胸も腹もガツと押えつけられ、抜け出そうと焦つても、自分の力ではどうにもならない。今にもセンベイのようにつぶれそうなのです。

「た、たすけてくれ!」
返事は御主人と咲さんの、如何にも面白そ

うな笑声です。「あの声……」とか「ひき蛙」

「このまゝにしておいたら……」などと云う声が、きれ／＼に耳に食ひこんで来ました。そして、自分は、あれほどの苦痛が、何時かなんとも知れぬ快感と、すり変つていることに気がついたのです。

それから二、三日して、御主人の愛犬が死んだのです。御居間において可愛がつて居られただけに、大分がっかりされた御様子でした。自分は犬に対して、少しねたましい思いさえしたほどです。

翌日、今は不用になつたその犬小屋を水でゴシ／＼洗つておりますと、御主人と咲さんが通りかゝりました。二人はジツと自分を見て居りましたが、咲さんが御主人になにか囁くと、御主人は笑いながら背きました。

「宮内、お前はあたしが命じたら、どんなことでもすると云いましたね」

「はい、奥様!」

「それじゃ、その犬小屋に入つてこらん!」
思いがけないことで、自分は吃驚しました。御大家のことで立派な犬小屋ですが、なんと云つてもワイヤテリアの小屋ですから小さいのです。そうです。高さ二尺、巾

一尺五寸、奥行も一尺五、六寸ぐらいの小屋ですが、犬小屋だから、出入口はどうにか自分の躰がもぐりこめる程度です。

自分は勿論喜んで小屋にもぐりこみました。中に入るとその窮屈さと云つたら、お話になりません。膝を抱いて、背中を丸めてたら、もう首をのばしても、頭が天井につかえて仕舞います。

思いもかけないことになりました。御主人は自分を犬小屋に入れる思いつきがよほど御気に召したらしく、小屋をテリヤがいた時のように御居間に運べとおつしやつたのです。

「さあ、私がいゝと云うまで、お前はこれの中に入っているのよ。お前は人間ぢやない、動物なのだからね」

「それぢや奥様、裸にして入れたら如何でございましょう？」

咲さんまで、さも面白そうな顔をしてそんなことを云い出します。

自分はこんな美しい女性たちの前で裸になるのが、とても恥しい氣持がしましたが、

「宮内！ 裸になるのよ！」

と云はれると仕方なく裸になりました。咲さんはジロ／＼見て、キャツ／＼と笑い出します。自分は赤くなつたまゝ、小屋にもぐり

こんだのです。

やつと入ると、御主人と咲さんはその小さな出入口に、金網を張つてしまいました。こうして、自分は完全に囚われてしまったのです。トン／＼と金網を打ちつける音を、自分は嬉しいような、むず搔ゆいような、複雑な氣持で聞きました。

「まあ奥様！ ごらん遊ばせ、まるで猿でございませぬ、ほら、眼ばかり光らせて……」
「ホ、ホ、ホ、ほんとに動物だわ、宮内！ 住み心地はどう？」

それが、自分には嬉しいのです。思わずニタリとすると、

「そら、猿が齒をむき出した！」と笑いました。こうして自分の囚われの生活が始まりました。私の持物は小さな便器があるだけです。

殆ど身動きも出来ない狭い場所だから、その苦しさ云つたらありません。暫くすると首、肩、背中、腰、足、いや、躰中、何処も彼処も痛んで、我慢出来ないほどでした。

しかし、自分は幸福でした。あの美しい御主人の居間の、しかもベッドの裾の方に、この小屋は置かれてあるのだから……。殆ど一日中、御主人の姿を見ることが出来ます。しかも夜も――。

その夜、御主人はもうベッドで休んでおられました。自分は躰中の痛さに耐え切れず、思わず呻いてしまったのです。

「うう、ううううう」

その時、ベッドがきしつて、御主人が半身を起されました。

「宮内！ お前も人並に苦しいの？」

「うう、ううううう」

それは言葉にならず、獸の唸り声のようでした。苦しいのは事実ですが、それがあの御主人から与えられた苦痛だと思つて、自分は苦痛よりも、快感の方が強くなつてゐるのです。ジーンと躰中がしびれて、なんと云えぬ氣持でした。

翌朝、咲さんが食事を差入れてくれました。食事と云つても、犬の食器で、御飯の上に味噌汁がかけてあります。箸も匙もついてはいません。自分はその匂いを嗅ぐと空腹に耐えられず、とう／＼食器の中に口を突込んで、ベチャ／＼食べ始めました。
「奥様！ ごらん遊ばせ、ほら宮内が、もう本当に畜生のようにございますよ！」
まったく、自分の姿には、もう人間らしい処は、何一つなかつたのです。

(おわり)



そとみあの断層

—男色を不可解とする人のために—

鹿火屋 一彦

なぜ、男が男を戀するか

戦後、いままで蓋を蔽われていた色々の事が、ジャーナリズムなどによつて天日の下に曝され、鮮明にされて、世人の注目を集めたが男色という此の性現象もその一つである。しかも男色に対しては、目を逐うとともに、一部の人々の関心を増していくようだ。中には男色は、二十世紀文学の重要テーマの一つであると云う人すらある。

一方又、男色はグロだとして眼を背けるもの、或は不可解として心を寄せぬものも少ない。否、それが大半である。

そこで、筆者は、同性愛者のためというよりも、それら男色をグロ視する人や不可解とする人のために、男色の本態並に現今の男色者の生態を茲に鮮明し分析して、その蒙をひらきたいと思う。

まず、なぜ男が男を愛するかについて解いてみよう。

男は異性に惹かれるとともに、また同性に

惹かれる本能を何人ももっているものなのだという事を最初に云つておこう。

その本能は、かなり早期に特に強く現れる。

われわれ男性は、幼少時代には、映画などを見ても、女優などには、いかに美しい女優でも、ほとんど関心をもち、男優に対してのみ、憧憬愛慕の念を抱くのが普通である。

その対象となる男優は正義派でしかも膂力強い役に扮するものが多いから、そこに幼少年にありがちな英雄崇拜的な気持が多分にま

じつてゐることは云うまでもないが、その底には、男の強さ、男の美しさ、男のよさにあるこがれるという同性愛的なものが流れているのである。

又、幼少年の交友、遊戯などにおいても、同性愛の本能が往々にみとめられる。筆者自身の経験についていえば、幼少七歳のとき、仲良しの同年配の少年とタンニンリグスやベラスティーの真似事をしたことを記憶している。

長じて、男同士の深い友情の根柢にも同性愛的のものが含まれていることは否みきれない。女性とは違つた男性特有のよさというものを、男性同士互いに愛しあつてゐるのである。

このように、同性愛は、何人も生れながらにもつてゐるものであり、きわめて自然のことなのだ。

支那などにおいても、古くから、情欲の異なる異性よりも、ほんとうに意気投合するのは同性であるといわれている。

ギリシャの全盛時代、男性が、美しい肉體

と淨らかな精神の年稚い同性を愛することが流行したということは、きわめて自然なことだ。それら少青年の若さと美と精神をわがものにしたいと欲求する当然の行爲とされてゐたのである。

それは公許せられたのみならず、むしろ奨励されてゐたのである。プリユターク英雄伝などを見ても、男色の契りを結ぶということは、同時に少年の薫陶上必要なものと認められたのごとく記されている。

かくギリシャにおける男色は、一種の人格形成の手段であり、個人のみでなく、立法者の深く意を用いた社会現象であり、一種の有益な教育方法でもあつたのだ。

尤も、ギリシャの男色にはそれ相応の規約があつた。愛するものと愛されるものとの間には、年齢の著しい相違を前提とした。

愛されるものは若い男子であるが、かならずしも幼若な年齢にかぎらず、青年期に達した年齢でもさしつかえない。ヒポクラテスにすれば、愛されるものの通常の年配は、十五歳から二十一歳までであるが、プラトンの望

んでいたように、もつと若い少年を愛することについても、法律はこれを禁止しなかつた。

又愛する方は四十歳を越えてないこと、すくなくとも精力のある年配にあることを原則としたが、これにも勿論例外はあつて、五十歳以上の者もあり、六十、七十、八十の老人もおつた。

同年配の男性間において、恋愛が交わされるのは、むしろ異状なこととされてゐた。

これらの男色が、きわめて精神的なものであつたということは、ギリシャの恋愛の一つの特色ではあつたが、しかし、常にそうばかりではなかつた。一面には肉体的な交渉の著しい習性が伴つた。が、これも、むしろ自然なことと見ていいだろう。

いずれの場合にしても、愛するものの肉体的な美しさが、愛情の根源であつたことはいうまでもない。若い美しさにひたるといふことが恋愛の意味であり、美を通じてはぐくまれる魂の豊かさが愛の歡びであつた。

大哲ソクラテスが、「男色は高尚な美風で



ある」と唱えたのも、このころのことである。又、医聖アリストートルは、「男色は人口の増殖を防止する上に必要で、奨励すべきものである」と唱えた。

男色の本質を知つてもらうために、筆者はギリシヤのそれについて少しく語りすぎたようであるが、とにかく、三千年前には、男色はこのようなに大らかに行われていたのである。

男性と女性との恋愛が、自然で美しいものであるように、男性と男性との恋愛も、本質は、それに勝るとも劣らぬほど美しいものであり、自然なものであつて、決して異常でも変態でもなく、決してグロ視すべきものなどでは決してないということを承知ありたい。



男色者はどんな男を好むか

さて、次は、現今における男色者——狭義の意では、男色とはウールニングを指すのであつて、ペデラストは「男風」と称ばれる——

の生態について、説明的に語つていこう。

まず、男色者は対象としていかなる男性を好むかという問題、すなわち彼らの理想の愛人の型はいかにいうに、それには、ウールニングの好む型と、ペデラストの好むの型との二つに別

けられる。

ウールニングは、自分自身も女性的立場に

おいて男性に対する者であるからしたが、その理想の対象も、一

口にいえば「男らしい男」ということになる。いや、「最も男の臭いのする男」とい

かえた方がいいかも知れない。

大体において、ウールニングの好む型は、年齢的には四十歳から五十歳ころの、体質的には肉付きよい丸顔の、服装外見は小綺麗な身装り卑しからざる、そして教養深い紳士、というのが多いようだ。

こうした好みを分析すると、ウールニングの欲求がハッキリと窺われる。

すなわち、四十歳から五十歳ころというのは、性的には精力も円熟し、テクニックにも長け、精神的には人格も陶冶されていよう。

又、デップリと肉付きよい人からは、抱擁力の強さを思わしめ、マゾ的な快感を覚える。身装も小綺麗であるからには、その皮膚も清潔であらうし、教養深い紳士ならば、無暴なこととせぬだらうし、口も堅いだらう、というところだ。

「男らしい男」を好むといつても、ウールニングは、徒らに肩を怒らしたような三船敏郎的型は好かない。むしろ嫌いらしい。彼らの好くのは温雅な型の紳士である。

次に、スポーツマンタイプの学生も、ウールニングから好かれる。但しこれにも「真白なカラーをした清潔な」という断り書が附く。

ただウールニングにかぎらず、同性愛者は自身、および相手の清潔に留意するものだ。蓬髪垢頭の男性は、おそらくウールニングの対象とはならない。

又、紺のハッピ・股引をピツタリと身につけ、頭髮を角刈にサツパリと刈り上げた、イナセな職人型の男も、往々ウールニングに対

象として撰ばれる。

惟ふに、これも、その特有の男らしさ——男らしい美しさと清潔感に惹かれるのであるう。

時には又、老人を好むウールニングがある
こんな一例がある——

大正期に綿貫六助という作家がいた。当時の軍人出だから、相当に骨格厳めしい人だったのだろうが、この人がウールニングで、しかもその好む相手は、老人でなければならぬのだ。

そして又、その好色老人というのが、五十六の筋骨逞しい労働者タイプで、そういう老人を見ると、綿貫氏は堪らなくそえられるのである。

そうした性癖のために、氏は、四十過ぎにもなつて妻子と離別し、愛人の老人と同棲するにいたつたのだが、そうした自分の泥にまみれたような男色物語を、氏は、「変態資料」という会誌に事細かに記している。

ウールニングにおける老人愛は、なかなかに少くないらしく、高橋鉄氏も、最近その実

例を或る機関誌に記していた。

以上挙げたほか、まだその人その人によつて、好む型はいろいろであるが、すべて、ウールニングが胸に描き、そして索めている理想の対象の因はどういうところにあるのかという、それは幼時の体験・記憶に発しているものが少くない。

たとえば、幼少時、病気で医療をうけたとき、腹部を圧迫されたり、浣腸されたとき、何ともいへぬ快感を覚えたが、そのときの医者が鼻下に髭をたてた眼光の鋭い人であつたため、その医者 of 悌が心影となつていつまでも残つて、長じてもそのときの医者と相似した男性を男色の対象にもとめるようになるといった場合が、本人のそれを意識するとしまいにかかわらず、少くないのである。

一般の人にはちよつとグロに感じられる老人愛なども、やはりそこに心因を発していると見てよい。

こうしたことは、男色者でない者にも、多少とも身に覚えのあることなので、そうした心的経過は領けないことはないだろうと思

う。

第二に、ペデラストは対象にどんな相手を好むかというに、これはウールニングの場合ほど複雑でない。

まず好む相手の年齢であるが、先きにちよつと江戸時代のそれを見てみると、榎條軒の「よだれかけ」巻五、男色二倫書の中に、それが論じられてあるので、茲に引用してみよう。

「十六歳も若衆の春といふ也。もろこしの人もかく定め侍ればにや、附余にもしるし書けり。春は盛りの兼言なれば十一より四までをつぼめる花にならずらへ、十五より八を盛りの花ときはめ、十九より廿二までを散る花となん定まりし。此ことは羅山のとはの言ぐさとてある人はかたりき。又十二より二十までの九年が間を三つにわけて、三世に比し三時の心を教らるゝあり。十二より四までの三年を現在にたとへて主童とかくなり。此三年のうち、いかにも心うらゝかに持ちて、ひねこび、さかしだたぬを道とせり。是主童の文字の心也。又十五より八までの三年は未来



にたとへて殊道と書けり。此三年のうちは見るにつけ、聞くにつけても皆心をまよはす時にしあれば、心の水をさそひ来るものは多しといへども、浅沢ふかきえにしをよく酌みしりて心の水をにごさず、たゞ情のみちすなほに、いきごみの幽玄なるを道とせり。是殊道の文字の心也。十八より廿までの三年を過去にたとへて主道とかく也。此三年のうちは、如何にもおとなしく互に道を助けて方の事に過らざるを道とす。是主道の文字の心也。

此三世をすごすを若衆の一昔ともいひ、又は一期ともいふ也。また白玉の草子には、七歳より廿五までを若衆の一期とせり。此道を好むものは、三十までをも用ひきにけりあり。礼記に三十にして室ありとあるはを見れば、げんとぞ覺侍れ」

云々とあつて、大体往時のベデラストの好みの年齢は分る。

又、明治から大正ころの一高生などがよく唄つたデカシヨ節に曰く、

「櫻三月、あやめは五月、稚児の盛りは十五六」と。

又古い支那の書物などを見ても、「恋童」

とか「姣童」の文字が使われているように、

或は前に記したギリシヤにおける男色の例を

見ても分るごとく、いずれの国においても、ベデラストが好む対象は、十代の少年であつた。

美しい肉体、美しい容貌、けがれない心をもつた少年を、ベデラストは好むものなのである。

そして、昔は、そうした年齢の対象を、容易にもとめることができた。ギリシヤにおける男色の公許

支那における

恋童、日本に

おける小姓等

がそうである。

又、支那

における相公

日本における

蔭間というよ

うに、遊所に

おいても、も

とめようとす

れば容易に美少年をもとめ得ることができた。

ところが、現今においては、そうした少年の対象を公然ともとめることができなくなつた。寵童を抱えている富豪などという話を聞



いたことがないのも、決してベデラストが少くなつたわけではなく、ベデラスト本来の好みである十三四歳から十五、六歳の少年がもとめられなくなつたからにはかならない。では、現今のベデラストは、どういう年齢層の同性を愛しているかというに、最も好まれてゐるのは、二十歳前後の青年で、次いで二十四、五歳まで、それに次いで三十歳までである。

尤も例外はあつて、探偵小説家のE氏は、年齢四十歳に垂んとする歌舞伎俳優のQをチゴサン(?)にしているという噂である。

次いで肉体的の好みとしては少年らしい体付の者を好くもの肥えた者を好くもの、瘦せぎすを好むもの、女性的な柔かな膚を好くもの、スポーツマン・タイプを好くもの種々さまざまと各人各説であるが、いずれも美しいことを条件とする事は云うまでもない。

性格的には、温和な者が最も喜ばれ、次いで明朗な者、女性的な者という順のようであ

る。

男色者の職業並に生活

最後に、男色者の職業や生活振りなどについて記そう。

まず職業であるが、ウールニングには、理髪職、洋服裁縫職、呉服商、洋品商等、女性的な職業或は女性相手の職業が多い。勤人としては、銀行員、会社員、国鉄従業員、それからキャバレーのボーイ、旅館の番頭等が少くない。

又、ウールニングには俳優其他の芸能人が多い。歌舞伎の女形にそれがよくあつたことは、昔から云い伝えられていることで、現今でも、名優と謳われるNがウールニングであることは人のよく知るところ。其他にも幾人か数えることができる。

大正期から昭和初期にかけて、浅草六区の興行界を席捲した「オペラ」の俳優間に男色が流行していたことは、谷崎潤一郎の「鮫人」にも書かれていたが、事実、筆者の知つ

ているだけでも、沢マセに、北村猛夫、二村定一等がウールニングであつた。

現今の舞踊界で、ウールニングとして有名なのは、M又、流行歌手のスター級であるHとFがそれである。

次いでベデラストの職業は、会社重役、会社課長、商店主、大学教授、著述家、作曲家等、大体において中年のインテリ層が多い。

男色が、富裕インテリのゼイタクな趣味などと云われる原因も、ここに存するのだろう。

事実、同性愛者は、反・インテリ又貧困階級にはほとんど見られない。この問題は性心理学者にとつて研究の価値があると思うので宿題として提供しておく。

男色者はどんな生活を送っているのだろうか——

大ざかみに云えば、彼らは、表面的生活と裏面的生活の二面をもっている。前者は文字通り他人に知られてもよい生活であり、後者は絶対に他人に知られてはならない生活だ。そしてその他人に知られてはならぬ生活とい

うのは、男色者としての生活なのである。

男色者でない一般の読者諸君に、この事はよく知ってもらいたい。男色というものを、現今一般の人が見ているような眼で見ているかぎり、世の男色者はいつまでも人生の裏街道を歩いていなければならぬということも。

筆者が本篇の冒頭において纏々と費したごとく、男色とは本質はきわめて自然なものであり、美しいものであつて、人生の裏街道どころか、表街道を大手を振つて堂々と歩んで通つてよいものなのだ。筆者が男色者のために、一臂の力を惜しまぬのは、彼らをして、男色をして、人生の表街道を明朗に歩きしめたいためにほかならない。

男色者が、ソドミアであることを秘しかくすために、いかに苦勞しているかということ証する例として、こんな事を或るソドミアからきいた——

ウールニングである或る会社の資材課長、取引関係の客と商用でよく酒を飲むことがあるが、その後で芸者を抱かされるとき、一番困るそうである。



芸者と行爲をせぬときは、不審がられるし場合によつては、その事を取引先の客に喋られぬともかぎらぬし、と云つて女性との行爲は嫌いだし、相手の芸者を説得するために、いつも一骨折ると彼は云つていた。

又、男色者は、ソドミーの相手をもとめるための苦勞が容易ではない。

表面温厚明朗な青年が、会社を退けるや、魔のごとく独り夜陰にかくれて、憑かれたもののように日比谷公園内の便所——そこは男色者の寄り合う場所で、彼らの陰語で「事務所」と呼んでいる——に立つなども、その苦勞の一端を物語っている。

そして又、男色がグロ視されるのも、そんなところに因を存しているのだ。

そんな苦勞をしても、よき相手とめぐりあえば、苦勞も償えるが、時によるとタチの悪い相手——勿論男色者でない男——にひつかかつて、その相手に勤先の会社にまで訪ねて来られ、金をユスラレたりするような目にもあうそうだ。

男色者を人生の表街道につれもどさねばならぬ、ギリシヤの昔のごとく。

(終)

代

理

部

目録

伊藤晴雨著

價五百圓下共

凄艶女體 拷問私刑秘畫集

手梳和紙合紙付豪華艶麗彩色特型帙入限定
會員頒布版 第一集 (五枚一組)

晴雨隨筆 第一冊 小型和裝美幀 價一三〇圓 下共

晴雨隨筆 第二冊 小型和裝二色刷 價一三〇圓 下共

繪物語血血郷談 小型和裝美幀 價一三〇圓 下共

晴雨隨筆 第三冊 小型和裝美幀 價一三〇圓 下共

危機一髪畫譜 小型和裝美幀 價一三〇圓 下共

晴雨隨筆 第四冊 小型和裝美幀 價一三〇圓 下共

與力同心岡ツ引 小型和裝美幀 價一三〇圓 下共

晴雨隨筆 第五冊 小型和裝美幀 價一三〇圓 下共

性犯罪と私刑 小型和裝美幀 價一三〇圓 下共

紅夢樓主人著縮刷凸版刷和裝(同性色情史)
美少年論 價一〇〇圓 下共

被虐の家

キドロド・シュトック著 上製函入 定價 B六判二二六頁 價 三二〇圓 下三二二圓

東京千代田神田神保町二ノ三四
振替口座東京二四二五一番

日本特集出版社代理部

★讀者各位の御希望により代理部を新設致しました左記書籍御希望の方は代理部宛現金書留又は小爲替にて御申込み下さいませ
尚書留御送附御希望の方は書留料加算御送金下さいませ

喜多玲子筆コロタイプ八枚一組三百圓下共

悦虐姿態素描集 (2)

凄艶の姿態を描く喜多玲子の傑作豪華秘帖

峰岸義一著 夜 B六判 二五〇餘頁 價二五〇圓下三二二圓

伊藤晴雨著 並畫菊判 和裝美本 價五〇〇圓下三二二圓

伊藤晴雨著 黒繩 A五判 和裝美本百餘頁 價三〇〇圓下二四四圓

伊藤晴雨著 責のこれくしよん A五判 和裝更紗表紙 價三〇〇圓下三二二圓

伊藤晴雨著 小説に 現れた 責の代表名作選 菊判和裝美本 價三〇〇圓下三二二圓

伊藤晴雨著 十二ヵ月行事奇態刑罰圖譜 價五〇〇圓下三二二圓

レスボス 通信

—女性だけの秘密な愛のサロン—

彼女は、もじもちしていましたがやがて、セーターをぬぎ、スリップをとりました。可愛いお乳首が、恥かしそうにふるえて

園村 恵子



よ。分つていて、どうにもならなかつたんです。……

美代子は、私達でつくつてゐる文化サークルでも、とびぬけて美しい子でした。だから、大人しい子でしたけど、みんなの注目のまゝでした。鼻が高くつて、顔の肌が白くつて、高貴な横顔が素敵でした。白いセーターの胸に、半ば熟したおわんを伏せたような二つのお乳が息づいて、森の奥にひそむ、おく病なめ鹿のようでした。

サークルの会合で、その横顔を一目みてから、私は、はげしく引つけられ、じつとあきずに、美代子の顔ばかり見てました。見るだけで、私は、お酒を飲んだような酔心地を感じ、その美しい顔を自分の胸におしつけない誘惑に声を出しそうになるのでした。

美代子は、あまりだれとも親しくないよううで、寂しげでした。同性とみて気安く感じたのでしよう。じき、私に口をきくようになりました。心に慕情を感じていた私の方がかえつて、ぎごちない態度を見せた位

1

この夏は、氣候が不順で、海へも行かないようなすずしい雨の日がつづきました。九月に入つても、まるで梅雨期のような雨の日が多く、このお便りを書いている今も、しとしとと秋雨がふつております。……それだけでなく、もの思わせる寂し

い秋です。ましてや、れすぼすの愛になやむ私には、ひとしお、この秋は寂しく感ぜられます。こうしてペンをとつております今でも裏切られた官能のもたえは、物狂ほしく、私の廿六歳の肉体をかけめぐるのです。ええ、そうですわ。私は失恋したの。いのちまでもと思いつめた、最愛の子を失つたのです。——でも、それは、はじめから分つていたの

でした。

口をききはじめて次の週の会合日に、

「これ、つけて」

私は、銀のブローチを、彼女に送りました。彼女はケゲンな顔をして、

「何ですの。これ、……私に下さるの？」

「ええ、そうおそろいな。つけて頂きたいの」

私も、自分の胸に、同じブローチをつけました。少し赤くなりながら。……それをレスボスの愛のちかいとはまだ知らずに、彼女も少し赤くなりながら、それを、セーターの胸につけました。……

私は、話をしてるうちに、彼女が、まだ本当に何も知らない、恋をしたこともない初心なお嬢さんであることを知りました。

そういう子こそ、私にとって、何ものにも代えがたい宝物なのです。なぜなら、異性に恋をおぼえた子は、レスボスにはあまり興味を示さないということを、私はいままでの経験から知っていましたから。

映画をみたり、お茶をのんだり、というお附合いが、しばらくつづきました。映画館のなかで、手をにぎつたりする事が、私

に許された唯一つの接触でした。手をにぎる位だつたら、あやしまれませんが、それ以上のことをして、「おかしいわ、このかた」と思われたら元も子もない、と自制しました。美代子の髪の匂いをかぎ、彼女の体温をわが身を感じながら、それをどうする事も出来ないなんて、どんなに辛かつたでしょう。

私は、永い間考えた末に一つのトリックを考えつきました。

「ねえ、美代子さん、私、あなたの肖像画を描きたいの。あなたの顔、とても描いてみたいの」

私は、ある日、思い切つて、こう切り出しました。

「まア」

彼女は案のじよう、ポツと頬をあからめましたが、そんなにイヤそうでもありませんでした。

「モデルになつて下さらない。——勿論、顔だけでいいのよ」

「ええ。——でも、どこで？」

「私の家へきて頂戴。おいやでなかつたら」「うかがうわ」

私は、下手な画をかくことがあります。そ

れでこんなトリックを思いついたのです。

ある日曜日、お花をもつて、家へきた美代子を、私は、部屋に招じ上げ、

「セーター、この黒いのきて頂戴」

とか、

「髪はリボンでむすんだ方がいいわね。こうしてネ」

などと、お人形をいじるように、着せかえたり、髪にさわつたりしました。しばらく描いてから、

「お願いがあるのよ。上半身だけでいいから、裸になつて下さらない？ どうしてもあなたの裸が描きたくなつたの。芸術のためよ」

彼女は、しばらくもじもじしていましたが、やがて、セーターをぬぎ、スリッパをとりました。可愛いお乳首が、恥かしそうにふるえています。——でも、私は、その日は、そのままかえました。段々にならすことが大事なんです。恥かしさを段々失わせることが……。

二三回描いたところで、私は、美代子ですつかり裸にしてしまいました。女学生らしい黒いブルマーをとると、お腹が、もも



に、くつつくところが、あを白いまでの柔
らかいふくらみと、くぼみをつくつて、叢
が神秘的なカゲをつくつていました。

私はポーズを直すふりして、

「こつちの足ちよつと、こつちへやつて頂
戴」

とか、

「腰はこういう風にして」

とか云つては、腰や足にふれました。は
じめは、そのたびに、頬をあからめていた
美代子も、段々なれて、「今度はどうい
う風にするの？」などと、私がされるのを待

っているようになりました。

「きれいな線をしているわ。ここんところが」
などと云つて、胸のふくらみをなぜたり、お
腹のところに何気なく手をおいたりしている
うちに、彼女の方から、私の胸へもたれてき
たり、私の手をとつて、自分の胸をさわらせ
たりするようになったのです。若い娘つてそ
うなんです。皮膚から先に親密になるのです
わ。

私は、彼女に、濃厚な描写の出ている恋愛
小説を貸したり、レスポスの小説をよませた
りして、段々に教育して行きました。——そ

れから、

「美代ちゃん。大人の恋愛つて、どんなこ
とするのか知つていて？」

と問いかけ、彼女が知らないと言うと、
「見せてあげるわ、ほら、こんな風にする
のよ」

と云つて、カギをかけ、カーテンをしめ
たお部屋で、そつと小窓のなかの美しい絵
や写真を見せました。

「イヤ。きたないわ」

そうつぶやいて、顔をそむけるのを、
「きたないはないのよ。仲の良い恋人同志
や夫婦つて、皆んな、こんなことするの
よ。きたないなんて思つちや、いけない
わ」

そう云つて、熱心にせつめいすると、
「本当？」つて、好奇心に眼を輝やかせな
がら、みるのです。

ものも云わず、ひたいに汗をうかばせな
がら、じつと見ていましたが、突然、「い
や、お姉様。私かえるわ」と云つて、かえ
つてしまう、そんな恥かしがり屋でした。
それで今度は、美代子のいる所で、やつ
ぱり遊びにきていた。レスポスのお友達と

仲好くして、当ててあげますと、もじもじして、外を向いているふりしながら、チラチラとこつちを盗み見て、泣きそうな顔をしました。……そんな「お教育」が少しづくと、

「お姉様、もつと変った絵あつたら見せて」

なんて自分から云うようになりました。

もうそれからは、大変。彼女は、いじられるのが好きな猫のように本性をあらわしました。

何かと云つては、自分から、裸になりたがり、

「お姉様。また昨日の！」

なんてせがむのです。

「昨日のつて、何でしたつけ？」

「イジワル！」

そんな娘に交つてしまったのです。

……ふつと目をあけて、「今、あたし、どうなつたのかしら」と、自分の感覚にとまどう幼さをもちながら、一方で、その故に、どんらん快樂をもとめ、一心に、大人のよろこびを知ろうとする子でした。

「お姉様は？」

「いいのよ。お姉様は。……あなたが、よろこんで下されば、それでよいの。お姉様は奉仕よ」

私は、ひざまづいて、美神に奉仕するのがそのままよろこびでした。



2

楽しい半年間でした。いたづら事を覚えた若いお嬢さんが、よろこびに、ひたる様のどんなに美しいか、知らないひとに教えることは出来ません。どこからどこまで、水蜜桃の肌のような生毛におおわれて、指でおせば水のしたたるように柔らかく、大人の軀のよう

な、しみや、色素の集まつたところなど一つもありません。人目にふれない、どんな微細な個所とても、つややかに、光つていたのでした。とりわけ、もののつけ根のところに一つぽつとりと、ついている黒子を見つけたときは、可愛ゆくて思わず、頼ずりしてしまいました。「泣きボクロ」みたいでした。

彼女はとても嫉妬深く、私がレスポスのお友達と遊ぶのは勿論、お手紙を交すのさえ、顔色をかえておこるのです。そして、

「昨日、早智子さんとどんな事したの。私に云つて！」

私の肩を、爪立てる位につかんで、迫つたりしました。

でも、その美代子が、私を裏切つたのです。

一月ほど前のことでした。私が一緒にカマクラへ泳ぎにさそいますと、

「私、今年は、お母様たちと一緒に房州へ行くから行かないわ」

と答えましたので、房州へ行つたのかと思つてましたら、定期入れのなから、海

の写真が出てきたのをみると、それがカマクラの写真なのです。しかも、美代子は、男のひとと肩をくんで笑っていました。

「この人だれ。私の知らない人ね」

唇がふるえるのをおさえてきくと、

「親戚の子よ」なんて、スマしてるのです。

「房州へ行くなんてカマクラじゃないの」

「そうよ。カマクラへも行つたのよ」

私は、黒い嫉妬を感じました。

——そう云えば、変なことがあります。彼女が私が、長い髪の方が好きだと云うのに、最近髪を、ショートカットにしてしまつたのです。「夏であついかからよ」と云うのですが、今まで、私の好む通りにしていたのに、ひとりでそんな事をするなんて、心變りの記しでした。そればかりではありません。

言いにくい事なんですけど、私の愛撫に対する反応と云うか、——私に見せてくれるよろこびの姿態が前と微妙にちがつてきてるんです。ハッキリ云えませんが私は、ハツとしました。それを自然におぼえた、とはとても思えません。——だれかに教わつて、覚えさせられて、それが、私とのことで

も無意識に出たというように感じなのです。「美代ちゃん、最近、男のかたを知つたんでしょ」

私は立ち上ると冷たくそう云いました。

「あら、どうして、……どうして、そんな事お

つしやるの。お姉様」

「分るわよ。変つたんですもの」

「どこが？」

「云えないわ。でも分るの、直感で……愛しているひとの軀つて、すぐ分るのよ。あなたよりもよく知つてゐるわ」

「ひどいわ、お姉様。いじわる」

美代子は、甘えて、私にすり寄つて来、媚態で、私の心をとろかさうとしました。でもそうされれば、されるほど、私の疑惑は深くなるのでした。あのときの姿態が女らしくなつてゐるのです。私の教えたレスポスの愛では、決してしないような……それは明らかに、彼女の軀が異性の愛に反応したあかしと私には見えました。

そうでした。そんないさかいをしてから十日目、彼女は、私のところへ次の手紙を送つてきたのでした。

——お姉様。私はもう、これ以上お姉様を

だます事にはたえられません。お許し下さいませ。美代子には恋人が出来たの。この夏カマクラで知り合い、すぐ深い関係に入りました。みだらで、軽はずみな娘だとおつしやるの？——でも、そういう私にしたのは、お姉様なのよ。愛に目ざめさせて下さつたのはお姉様なのよ。お姉様の、やさしい愛撫は今でも忘れられないわ。飛んで行きたいわ。彼の愛は、もつと乱暴で、自分本位なの。でも、彼は、お姉様のもつていないものをもつています。……そして私は、そういう彼の男らしい荒々しい所が好きなの。彼に征服され、彼の暴力に打伏すよろこびは、何ものにもかえられないわ。お姉様の友情にさえもブローチ、頂いておくわ。お姉様に愛されたよろこびは一生忘れられないでしょう。お姉様どうぞゆるして頂戴。ごきげんよう。

お母様の巢を飛立つた

ひなどりより

……こうして、美代子は永遠に、私の前から姿を消したのです。今夜あたり、この雨の音を彼女は、どこできいているかしら。泣けてくるような晩ですわ。

閉とざされた女體

呻きそうになる口を両手で押えて、男と女の肉體の秘密を、彼女は根こそぎ知らされたのだ。……彼女の全身をネットリと油汗が流れる。それが足から廊下の板の上にしたゝつた……



鳥羽 瑛子

画 浜 田 稔

白 眼

その日は朝から、家の中の空気が落着かぬことに典子は気がついた。

女中のトキとお浅小母さんが、セツセと客間や廊下の掃除に念を入れている。お浅小母さんは昔から、典子の家で何か取こみがあると、割烹着をつけて手伝いにくる。

玄関の水盤にも、応接間の青磁にも惜気なく豪華な花が入れられて、テーブルクロスが眼に

しみるよ
うに白い。典
子はドアにつかま
つてそれを見たが、恐し
いほどの不安に襲はれてくるのだ。

母の部屋を覗いた。だが、典子は襖を明け
た瞬間、この部屋も例外ではないことを知っ
た。皮膚が感じるのだ。

姿見の中の母の顔は、美しく化粧して緊張
していた。だから何かいらだしく険を含ん
で見える。青灰色の派手な訪問着に、金茶に
扇面の帯を締めているところだつた。

辰子はこの娘を見ると眉をしかめた。典子



は短
い声をあげ
て、鏡の中の母の

唇をジツと見つめた。薄い唇が動いた。
「典ちゃん、あんた今日は大人しくしてるの
よ、お母様はとても忙しいのだから……」

彼女はとり敢ずコソクリと肯いた。だが、
それだけでは腑におちなかつた。もつと、気
持が落着くような説明が欲しかつた。だから
一層瞳を見ひらいて母の唇をみつめた。

辰子は一度結んだ帯の形が気に入らないら

しく、乱暴にほどいて、又イ
ラ／＼と結びにかゝつた。
「え、判つたでしよ？ 判つ
たら自分の御部屋で御本でも
読んでいらつしやい——。ほ
ら、グズ／＼しないでつたら！」
帯／＼めを喰えているから、典子
には母の言葉がよみとり憎くかつ
た。しかし、これ以上ウロ／＼して
いると、ヒステリックに叱りつけられ
ることを知つていた。典子は鏡の中の母
に瞳をすえながら、ジリ／＼後ずさりして
部屋を出た。

廊下に出ると、鳥のように両袖をひろげて
唸りながら走つた。が、足音は少しも立てな
い。十七歳の体重が嘘のようだつた。階段も
フワ／＼と身軽く飛んで上つた。

日曜だから、兄の圭介は部屋にいる筈なの
だ。典子はノックもせずには部屋にすべりこん
だ。家の中で、応接間とこの部屋だけが洋間
になつている。

圭介も鏡に向つていた。これは柱にかゝつ
た小さな掛鏡を覗きながら、髭を剃ってい
る。典子は後向きに椅子にまたがって、背に
乗せた両手に顎ものつけてから、圭介の後姿

を見つめた。

御兄様は、御気嫌がいゝ——。と、典子は思った。当つていた。やがて圭介は、剃り跡を白いタオルで拭きながら、ハミシングを始め、滅多にないことだ。典子はガタリと椅子をゆすぶった。

「あゝ驚いた。なあんだ、典ちゃんか……」

快活に白い歯を見せる圭介の傍に、異様に大きな眼で典子はすりよつた。その両手が忙しく動く。

どうしたの？

「なにが？ 典ちゃん」

だつて、今日、お母様も御兄様もへんだ。

「あゝ、そうか——ヘンかい？」

圭介は苦笑したが、典子を見る眼がフツと暗くなつた。妹はその視線を追ひかける。そして、テーブルの上の白いワイシャツやネクタイ。それから半びらきになつた洋服ダンスから見えている、仕立下しの濃茶の背広を見た。再び激しく手真似を繰返した。

ねえ、どうしたの？

「いや、何でもないんだ。今日はね、お晝にお客様が来られる。それでね……」

お客様——。典子はお客様が嫌いなのだ。

お客様があると、彼女は部屋に閉じこもつて

いなければならない。少しでもウロ／＼すると、母から叱りつけられる。そして、何時間でも皆から放つて置かれる——。

「典ちゃん、大人しくしてるんだ。あとで遊んで上げるからね？」

彼女は肯いた。兄だけは嘘を云はない。

あとで、西洋将棋をして頂戴。

出口のところでもう手を動かしてから、典子は兄の部屋を出た。

どんなに母から叱られても、廊下に出ると彼女は風のように走る。鈍重な筈の嬰嬢が嘘のように敏捷だつた。一時間もぼんやり佇んだり、小半日うずくまつて庭の蟻などを見て暮したりもするが、走る時は突風のように——。唸り声をあげて走つた。

だが、彼女の生活は常に真空なのだ。一切が停止している。音から隔絶された世界。それは深海の水底で聞く遠い潮騒のように、音にならない音がドロ／＼と、かすかに鈍く、傷んだ聴神経を震動させるばかり——。

七ツの年に脳膜炎で生死の境をさまよつた時から、もう典子の世界に一切の音はかえつて来なかつた。そして、失はれた耳や口の代りのように、腫ばかりが異常に大きく光つてゐる。乾いて、ジプシー女のように黒く強

い。しかし、その強さは当然病的なものを感じさせた。

彼女は四疊半の、暗い自分の部屋に歸つた。彼女が、この暗さを好んだのだ。部屋の真中に立ちすくんで爪を噛んだ。そのまゝ、白い眼をしてジツと動かない。女中のトキでさえも、小ざつぱりした着物に着更えている今日なのに、典子は前の汚れた銘仙の袴を裾短く着て、お下げの髪にも、今日はまだ、母は櫛も入れてやらないのだ。

だが、ふと机の上の、作りかけの人形に気がつく。典子はカラリと気が変つたらしく、重たいほど飾りのついた人形の首をとり上げた。

色の絹にパンヤを詰めた胴体に、カツチリと首を取りつける。それはもう踊る藤嬢の表情を、確実に見せている。赤い縮緬の布や金欄の帯地の上を、典子の細い指先が忙しく動いた。こんなデリケートな手芸は天才的だつた。

典子は人形作りに熱中した。誰も、彼女をさまたげるものはなかつたのだ。

激 情

彼女はフト空腹を感じて顔をあげた。

時計を見るまでもなく、十時も、晝食の間も過ぎてしまっている。窓の陽ざしを見ただけでそれが判つた。この時間まで、誰も彼女を呼びに来ない。何時もにはないことだつた。

再び典子は云いような不安を感じ始めた。人形はもう九分通り出来上っている。彼女はそのまま、小さく唸りながら走り出していた。

茶の間にも、廊下の藤椅子にも、母や兄の姿はない。応接間の方で賑かな笑声がした。典子は幾度も、その客間と茶の間の間の廊下を駆け廻つてから、音もなく台所の戸口を覗いた。

トキとお浅小母さんが、忙しそうにデザートの支度をしながら、口を動かしていた。

「ねえ、小母さんもちよつと覗いてごらんなさいよ。そりやあ綺麗な御嬢様よ」

「そうだろうねえ、こゝの奥様も、ずい分今度の御縁談には御熱心らしいから……。圭介様だつて、先方が気に入ってなさるんだらうねえ？」

「そりやあそうよ。若旦那様とは、本当に御似合いの御夫婦だわ」

「なにしろ、典子嬢さんがあんなだからね。」

圭介様のお嬢さんが決れば、一安心つてものだ」

ギヤアと、鋭い悲鳴のような声が起つて、二人はギョツと顔をあげた。真蒼になつて、眼ばかりのような典子が立つている。

そして、「アアア……、オウ、ウ……」と呻きながら、ジリ／＼後ずさりする。廊下の角でヒラリと体をひるがえして、飛び去つた。「アア——！」と、彼女特有の声が、無気味に尾をひきながら――。

お浅はトキと顔を見合はせて、やつとお盆をとり直した。

「あーあ、びつくりした。何時の間に来ていたんだろ？」

「いつもあゝなのよ。お嬢さんはちつとも音を立てずに歩くのだから……。気味が悪いつたらないわ」

トキは、驚かされた腹癒せのように云つたが、それでも気になるらしく、

「でも、どうしてあんな声を出したのかしら？ よほど亢奮した時でなきや、あんな声は出さないのよ」

「わたし等の話が、判つたのかもしれないね」「そう、聳つて云つても、唇が動くのを見れば、なんでも判るんだから……」

「でもさ、可哀相なもんだね、御器量はあんなにいいのに。――あたしは、お嬢さんがあんなになる以前から知つてるけれど……。でも、もう世間並みなら娘盛りなのに、奥様は身なりも、ちつともかまつておやりにならないね？」

「そうよ。奥様より、若旦那様の方が、よほど可愛がつていらつしやるわ。――でも、小母さん、お嬢さんはあんなだけれど、体だけはもう一人前にアレもあるのよ……」

応接間は汗ばむほどの陽気だつた。仲人夫人も辰子も、千鶴子の母親も、鼻の頭に汗を浮かべて、賑かに話がはづんでいく。もう幾度目かの会合で、見合と云つた堅苦しきはなく、ほゞ纏つた縁談の、はづみをついた調子が心よく流れている。

千鶴子は上気した顔をあげて、チラと圭介を見た。同じように中年婦人たちの話題からとり残された圭介が、吹き上げた煙草の煙の向うから、こちらを見ている。二人の間に、はにかんだ、許し合つた笑顔が交された。

千鶴子は幸福感から、なにか胸苦しい思ひさえた。事実、華かな振袖に胸高にしまっている帯が、窮屈でもあつたのだ。それから、

彼女が伏眼に自分の帶揚げのあたりを見ている時、フツと、誰かに見つめられているような気がして、瞳をあげた。

圭介ではなかつた。彼女の真正面にドアがある。一度は何気なく見過したが、やはり其処だつたのだ。千鶴子は息をのんだ。

そのドアがわずか五分ばかり明いて、真黒な瞳が、射るようにこちらを見つめている。それはとても顔の一部である瞳とは思えなかつた。顔や体から離れた瞳だけが、まるで其処に張りついているようにさえ思えた。千鶴子は小さく叫んで、無意識に立ち上つた。

「千鶴子さん、どうしました？」
皆が一齊にドアを見た。同時にドアが明いて、典子が立つていた。

辰子が悲鳴のように叫んだ。
「まあ、典ちゃんあなたは……、こんなところに、出て来ちやいけませんつて、あれほど……、お部屋にお歸えり！」

しかし、典子は母の顔を見てはいなかつた。だから、通じやしないのだ。やはり張りついたような大きな瞳で、美しく盛装をこらした千鶴子だけを凝視している。高価な香料の匂いを典子は嗅いだ。

「典ちゃん、いけません！」

「お母さん、まあいゝでしょう。典子のことはお話してあるのだし……。千鶴子さんにはどうせ知つて頂くのだから——」

圭介は典子の肩に手をかけて云つた。

「典子、お客様に御辞儀をなさい」

チラと圭介を見て、再び千鶴子を見た。それから、明かに敵意を見せて、激しく顔を振つた。客たちの間に、かすかに動揺が起つたようだつた。

「典子！」

その兄の手をくぐり抜けて、彼女は例の叫声をあげながら疾風のように走つた。

だが、何処にもゆく場所がなかつた。自分の部屋に飛びこんで、グル／＼と獸のように部屋中を廻つた。「アア……、オウウ……」

と呻きながら、殆ど完成した人形の首を引抜いて、障子に叩きつけた。

両手で自分の髪をつかみながら、跣足のまゝで庭に飛び出していた。口が利けぬ彼女の胸一杯に、得体の知れぬ絶望がふさがつていくのだ。典子は掃き清められた庭土の上にドタリと体を投げ出した。

あの美しい女が、典子から御兄様を奪つてしまふ！

怒りがこみ上げて来た。彼女は虚空をつか

むように両手をつき出しながら、ゴロ／＼と土の上を転がった。エンヂ色の裾と、白いふくらはぎがもつれて、狂氣のように転がっていた。

義 妹

織田邸は、とゞこほりなく新夫人千鶴子を迎えた。

一時はこの縁談の癌になつた典子のことと彼女の聾啞が遺伝性のもではなく、流行性脳膜炎による障害であることが幸いしたのだが、しかし結局は既に圭介と千鶴子との間に結ばれた愛情が、この悪條件を乗り切らせたのだと云つてもいい。

だが、典子はそんなことは知らない。

彼女は千鶴子がこの家に来て以来、すつかり変つて仕舞つた、家の中の雰囲気は怯えていた。彼女が安住していた習慣は殆ど崩されて、家族の關心はすべて千鶴子の明るい姿に向けられていた。

特に兄の圭介の変化が著しかつた。ずばらな彼が見違えるように身だしなみがよくなつた。しかし、そんなことより、家に居る時はあれほどよく典子の相手をして遊んでくれた



総

兄が、千鶴子が来て以来、一度も西洋将棋さえしてくれないのだ。典子の部屋を覗くこともまれになつた。

彼は家にいる間は、何時も千鶴子と一緒にたつた。書斎と二人の居間がある二階に上つたまゝ、食事以外には殆ど階下に降りて来ない。そして、その二階に上ることを、典子は母の辰子からも、女中のトキからもきびしく止められているのだ。

階段の下に立つて二階をふり仰ぐと、典子は何とも云えぬ不安な、不快な気持を押えられなかつた。彼女の震動せぬ鼓膜にも、兄夫婦の打とけた、ひそやかな笑声が聞えてくるような気がした。

典子は嫂を憎んだ。兄を奪つた女——。典子が知っている唯一人の男性である圭介。彼は典子にとつて、兄であり、父親であり、又恋人でもあつた。彼女の限られた狭い世界で自分を愛してくれたたゞ一人の男性だつた。兄と恋人との区別を、彼女の狭い意識が受けつける筈はないのだ。

典子の本能は、たゞ圭介の愛情を奪つた千鶴子を憎悪した。暗い瞳で物かげから、嫂の姿を盗見た。笑顔を見せる千鶴子に、何時までも馴染まないのだ。

だが、愛し合つた新夫婦の夜は、靜かに満
足りている。

圭介は煙草を捨て、微笑した。

「千鶴子、踊ろうか？」

「えゝ、いゝわね」

レコードに針を下して、靜かに妻の背を抱
いた。如何にもピッタリと呼吸が合つて、輕
くタンゴに乗つた。壁に写る影が一つになつ
て、リズム通りに、ゆるやかに揺れるのだ。

千鶴子が微笑んだ。見下した圭介の顔にも
さゞなみのようにそれがひろがつて、新妻の
上に彼の顔がかぶさる。唇がピッタリと触れ合
つた。

ギヤーツと、怪鳥のような声がした。二人
は抱き合つたまゝ棒立ちになつた。

ドアが何時の間にか明いていて、両手でし
つかり髪をつかんだ典子が、恐怖に歪んだよ
うな表情で立つていた。何時ものように元祿
袖の袷で、スリッパもはいていない彼女の全
身が、ガタ／＼震えている。

「典子！」

圭介はチラと千鶴子の顔を見て云つた。

「人の部屋に入る時は、黙つて入つちやいけ
ないよ。必ずノックするんだ」

千鶴子がこの家に来るまで、兄は典子が何

時でも、ノックなしに彼の部屋にすべり込む
ことを許していた。叱られた事は一度もなか
つた。だから、彼女は今になつて兄にそんな
ことを云はせた嫂を激しく憎んだ。

だが、そんな激しい感情も、彼女には言葉
にならない。犬のように唸りながら駈け去る
ばかりなのだ。

千鶴子は氣毒そうに夫の顔を見た。

「御可哀そうね、典子さん——」

「あゝ、彼奴も孤独なんだ。典子に与えられ
た世界は非常に狭いからね。彼奴を見てると
こちらの氣持も押しつぶされそうになるん
だ」

「お母様も、あまり典子さんを見ておあげに
ならないのね？」

「そう、母だつて典子を見るのが重苦しいん
だ。派手で社交好きな人だから、不具の娘に
は愛情よりも、苦痛の方を大きく感じる。母
ばかりは責められないんだ」

千鶴子は聰明に肯いた。實際彼女は義妹の
傷々しい姿に同情を惜しまなかつた。

十七歳にもなつた美しい姿で、何時も小
娘のように元祿袖の着物を裾短かに着て、兵
児帯を垂らしながら、家の中を唸りながら駈
け廻っている。敏感な獸のように不安そうな

その様子は、如何にも不憫で胸が痛むのだ。

千鶴子はたまに夫と二人で外出する時、植
こみの蔭などから、典子が飢えたような眼ざ
しで、自分たちの後姿を見つめていることを
知つていた。母の辰子は、典子を門から一步
も外に出さないのだ。

なんとかして、義妹を馴染ませたいと、千
鶴子は思つた。だから或日の午後、彼女は暗
い典子の部屋を覗いた。

「あら、ずい分綺麗な御人形ねえ、典子さん
が作つたの？ まあ、ずい分お上手だわ」
典子は嫂の顔をみつめた。黒い、大きな瞳
だ。返事がないことに頓着なしに、千鶴子は
つぶけた。

「ねえ、わたしの御部屋にいらつしやらない
こと？ 御一緒に遊びましょうよ」

しばらく迷っている様子だつたが、やがて
コクリと肯いた。

二階のその部屋に入ると、典子は吃驚した
ように瞳を見張つた。以前は殆ど何も置いて
なかつたその八疊の間一杯に、派手やかな調
度類が並べてある。三ツ重ねの桐箆簞。朱塗
りの衣桁、鏡台。鎌倉彫の文机。すべて新妻
の部屋らしい華かな雰囲気なのだ。

典子はもの珍しそうに辺りを見廻していた

が、衣桁にかゝつてゐる曙色の振袖に眼が止ると、吸ひよせられるように傍によつた。その肩のあたりに染め出した、極彩色の花車の模様を、細い指でソツと撫でるのだ。

「典子さん、その御振袖が御気に召して？」

「だつたら、私にはもう派手だから、貴女にさし上げてもいいのよ？」

典子は赤い嫂の唇を、疑はしようにジツと見つめた。それから急に我に歸つたように、激しく両手を動かした。

「なあに？ どうしたの？」

千鶴子は当惑そうに、義妹が繰返す手の動きを見たが、

「あ、そうだわ。典子さん、字は書けるのでしよう？ 今、なんて仰言つてゐるのか、此処に書いて頂戴！」

渡された赤い万年筆を握つて、典子は思いもかけず美しい字で、大きく書いた。

あなた、きらい。

千鶴子が呆然とその文字から瞳を上げた時典子の姿はもうなかつた。

そして、その日の夕方、台所で食事の支度の指図をしてから、千鶴子が自分の部屋に戻ると、衣桁にかゝつていた花車の振袖が、刃物でズタ／＼に裂かれて、無惨に畳の上に落

ちてゐるのだつた。

願望

音もせず、襖が明いた。

何時も二ツ並べて床がひかれてあつた八疊の間に、今夜はさつきトキが敷いて行つたらしい床が、一つだけ敷いてある。典子はかすかに咽喉の奥を鳴らしながら、この床の中にすべりこんだ。裸体だつた。

灯を消した部屋に、カーテンを引き忘れた窓から、かすかに月光が流れこんでいる。廊下を隔てた書齋で、圭介のしはぶきの声が聞えた。典子は柔かな夜具の中で、身もたえするやうに胸を抱いてゐる。そして、再び咽喉が鳴つた。

今夜は嫂の千鶴子は実家に祝事があつて、そちらに泊つてくることを、典子は知つてゐた。もう十二時に近い。階下はすっかり寢静まつてゐる。書齋にいる兄の圭介も、だからもうすぐこの寢室に来ることだろう——。典

子は我と我が乳房を、ひしと握んだ。

彼女は今は、夫婦の間の秘事を知つてゐた。男女の営みがどのようなものか、彼女は判つきり知らされたのだ。

ひと月ばかり前の或る夜、典子は兄夫婦の闇を盗み見た。深夜、彼女はわけの分らぬ嫉妬と疑問に馳られて、階段を駆け上つたのだ。彼女は何の物音も立てずに走ることが出来る。そして、失はれた聴覚の代りに、異常に発達した視神経は、暗闇の中でも犬のやうに見ることが出来る。

呻きそうになる口を両手で押えて、典子は襖のかげにうずくまつた。男と女の肉体の秘密を、彼女は根こそぎ知らされたのだ。

あの女に、御兄様を奪はれた理由が判つた——、と、典子は心の中で絶叫してゐた。そのやうに激しい、力に溢れた兄の姿を、彼女は見たことがなかつた。圭介の乱れた息づかいさえ、彼女には驚異的だつた。千鶴子の白い手がからむのを、息づまる思いで凝視した。

闇の中の夫婦の睦言さえ、典子にははつきりよみ取れるのだ。彼女の全身を、ネツトリと油汗が流れる。それが、足から廊下の板の上にしたゝつた。

それから毎夜、典子は其処にうづくまつた。彼女の部屋の前庭に写つてゐる二階の灯が消えると、典子は寢巻姿のまま、鳥のやうに階段を駆け上る。毎夜、そうせずには居ら

れなかつたのだ。嬬の白い肢態に、嫉妬の火を燃やしながら……。

書斎のドアが明いた。そして、パタンとそれが閉つた。典子は床の中で戦慄した。布団を顔の上まで引きづり上げる。彼女の閉じこめられた意識の中に、肉親と云う特殊な設定がある道理はないのだ。

圭介は彼女にとつて、唯一の男性なのだ。そして、自分は千鶴子と同じ女性に違いなかつた。千鶴子がその肉体によつて奪つた圭介を、典子は同じようにその肉体を賭けることで、奪いかえすだけだつた。

寢室の襖が明いた。圭介は思いつきりノビをする。夜具の裾にある乱れ箱の寝巻に手早く着更えた。それからかすかに明りが射しこむ窓に、カーテンを引いた。暗い中で布団に手をかけた。そのまゝすべりこもうとした体が、ギョツと宙に止まつた。何かと、柔かく、熱くまつわりついたの



だ。そのまゝ巻き込まれそうになつて、一瞬錯覚に気がついた。

今夜は妻は留守なのだ！

改めてギョツと身をひいて叫んでいた。

「誰？ 誰だ！」

答えはなく、しなやかに手が

首にか

らんで

くる。

圭介は

狼狽し

ながら

片手で

枕元のス

イツチを

さぐつた。

青いシェード

のスタンドが灯

つた。その灯の中で

裸の女がニツと笑つた。

「あッ！ 典子！」

愕然として、圭介は叫んだ。信じられぬ

ことだつた。だが、裸体の女は妹に違いないのだ。

彼女はうつろに微笑みながら、兄の体にすりよつた。腫がまるで飢えているように乾いている。

「典子、なんだつてお前は、こんな馬鹿なことを……」

口ごもりながら、彼は知らぬ間に成人していた、典子の見事な姿態に驚かされていた。

あの短い少女のような衿の下に、こんなに成熟した女体がかくされていたのだろうか？見事に盛り上つた双の乳房が、彼の眼前で、激しく息づいているではないか——。

「いけない！ 典子、お前は一体何を考えているのだ……、兄さんだよ、なんて馬鹿なことを……、典子!!」

典子は激しく首を振つた。そのはづみのついた姿態に圧倒されそうになつて、圭介は力の限り飛びすさつた。一間ばかり離れて、双方とも喘ぎながら、兄妹はヒタと睨み合つた。

典子はもの狂はしく胸を掴みながら、「ウウ」と呻いた。そのまゝ牝獣だつた。だが、その乾き切つた腫から、大粒の涙がポロ／＼こぼれ落ちるのだ。

圭介は彼女が閉じこめられた、あまりにも狭い、孤独な世界の地獄を、ほど正確に理解した。彼は寝巻の衿をかき合はせながら、愛情に飢えきつた豊啞の妹を暗然と見守つて、静かに声をかけた。

「典子、自分の部屋に歸つて、早くお休み。そんなことをしていると、風邪をひいちやうぞ。いゝ子だから、早くお歸へり——」

典子は跳ぶように立ち上つて、キリ／＼と圭介の周囲を駆け廻つた。そして「アア……、オウウ……」と気味の悪い絶叫の尾をひきながら、白い裸身をひるがえして深夜の家内を走つた。

轉 生

翌朝、典子はまだトキも起き出さぬ裡に、裏門のくゞり戸から外に出た。

この門から外に出るのは、幾年ぶりのことか、もう忘れていた。それも、必ず母か兄に伴はれていたのだから、一人でこうして街に出るのは、彼女にとつては、実に生れて始めての経験だつたのだ。

朝の空気が清々しく、なにか好ましかつた。しかし、街の中に殊更、彼女の聴神経に

訴えるものがあるわけではない。やはり典子の世界は真空だつた。彼女の聴覚はキーンと張りつめて、しかし、何にもとらえはしないのだから……。

二度と、あの生れた家に歸る気持はなかつた。それだけはハッキリと、彼女にも判つていた。兄にも母にも、もう会いたいとは思はないのだ。

彼女が女として成熟することを怖れて、何時までも幼い子のように装はせた母が、典子に着せた衿はあまりに短い。お下げの髪もすつかり乱れてしまつてゐるのだ。

典子は足が向くまゝに歩いた。肉親の家から離れると、自分の不具をふり落したように身軽だつた。疲れると道端にうづくまつて、眼の前を通る人や車を、飽かず眺めた。

晝過ぎ頃に、素晴らしい繁華街に出た。喧騒な盛場も、彼女には音を失つてゐるから、まるで絵本のようなだつた。美しい装いをこらした千鶴子のような女性も、背広を着た兄のような男も、あとから／＼、ひつきりなしに通つた。彼女にとつては、それは驚異だつた。

日が暮れると、一齊にネオンが輝いた。美しかつた。空腹だつたが、それほど気になるわけでもなかつた。それに、夜になつても人

通りは一向に減りはしない。相変らず飽きずに眺めた。

肩を叩かれて、振りかえつた。同じような風態の、似たような表情の若い男が三人、彼女を取り囲むように立っている。

「ねえちゃん、何処から来たんだい？」

煙草をくわえているから、言葉が読みとり憎くかった。しかし家を出てから、始めて声をかけられたこの男たちに、典子はすがりつくようななつかしさを感じた。不思議に少しも恐怖くないのだ。

「家出だろ？ 行くところはあるのかい？」

「マゴ／＼してると、ひどい奴等にとつてまるぜ？」

そう云つて、男たちはニヤリと顔を見合はせた。一人が仲間に眼くばせしながら、典子の顔を覗きこんだ。

「まつたく、こんな処にウロ／＼していたらひどい目に逢つちまうぜ。オイねえちゃん、なんとか返事しろよ。おめえ、まさか豊ぢやないだろ？」

「とにかくこの器量だ。ツンボだつてオシだつて、俺が相談相手になつてやらあ、ねえちゃん、ついて来いよ」

典子は唾をのみこんで、真剣に肯いた。上

気嫌に口笛を吹き始めた男たちと一緒に、知らぬ街を歩いて、得体の知れぬ家に連れ込まれた。

典子には、千鶴子を受け入れて、自分を斥んだ兄が不可解だつた。そんな兄の世界を憎悪した。狭い豊地獄に閉じこめられた十七歳の女体には、何のためらいもありようがないのだ。

不倫、背徳などの言葉が持つ罪の意識が、彼女の世界に通じる筈はなかつた。すべてから閉された典子に唯一つ残された本能が、兄の上に男性を見出したのだ。彼女にとつて、圭介は男性であり、自分自身は千鶴子と同じ女性なのだ。すべてを封じられた彼女も、その本能の世界では世の女性たちと同等の筈だつた。

典子は獣のような呻き声をあげたけれど、その見知らぬ男の手を斥みはしなかつた。むしろ、自分を避けた兄を憎悪する余り、彼女を一個の女体として遇した、この市井の無頼の男たちに感謝したのかもしれない。

閉された世界で、典子はその時だけ、生々しく生きているのだから。……

(をわり)

原稿募集

★経験談・告白・手記

(四百字十枚から十五枚以内)

誰でも自分だけの奇妙な秘密な経験を一つや二つ持つているものです。殊にアブ党諸兄ともなれば、一寸知人友人には話せないが、といつて自分だけの胸にしまつてをくのは惜しい、といった話があるに違いないと思います。どんなお話でも結構です。御申込の秘密は厳守しますから安心して御投稿下さい。

★アブ・ストオリー・小説

(四百字二十枚から二十五枚以内)

アブ・ストオリーとは前記の異常な体験談などを、やゝ小説風・物語風にまとめたものです。

★掲載分には一枚壹百円から貳百円の間で稿料を呈します。但し原稿の返却はお断り致します。

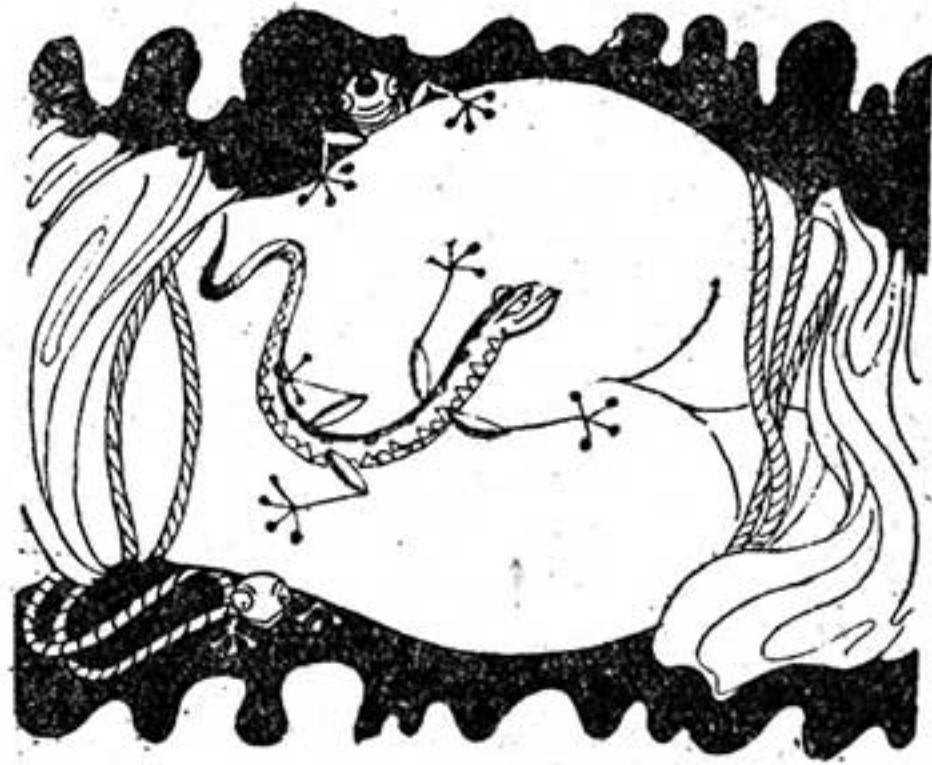
送り先は

東京都千代田区神田

神保町二の三四

日本特集出版社編集部

読者交歓室

さ
ぢ
す
と

★拜啓 貴社発行の風俗草紙の愛読者ですが、去る読者通信で「大磯妙子」と云う方の事情が出て居り、同情して一度御手紙をさしあげたいと存じました。私の身内にも足の不自由な女が居りますので……。

所が十月号には本人の寄せられた記事を見て驚いた訳です。あれが本当とすれば、本人の

希望もさりながら突然のあの行為には憎しみを感しました。私はサヂストと申しますが、私の場合は只女を縛ることのみに興味を感じている丈で、残虐なこととは嫌いです。

妙子さんにマゾ的傾向があるとしても、そうした行為はどこまでも本人と合意的に、そして自然的に行われなければなりません。

次に勝手乍ら若し縛られて見たいと思われる婦人の方がありましたらお知らせ下さい。文通だけでもしたいと存じます。

(静岡 T・C生)

★小生は当年二十八歳の独身のサラリーマンです。

幼時よりサヂスチックな傾向

があり特に喜多玲子さんの絵等を見ると異常なる興奮が起り、一人毎晩苦しんで居ます。常日頃からマゾの傾向のある女性とお近付きになりたいと願っています。お互ひに研究して行きたいと思ひます。私も外国のものなぞ少しですが集めて居ります。

(東京 M・H生)

★私は男性を辱かしめ、虐げる事を無上の快楽とする女です。

私の彼氏はもう五年も私の淫楽の獣として奉仕して居ます。

この頃では鞭打ちも、色んな拷問も飽きてきました。もう一人私と同じサヂイストの女友達がほしいのです。二人で同性愛を楽しみ乍ら、彼を責めてみたのです。二人がよりでなら、もつと色々残酷な事が出来ると思います。

太つた好男子の彼を裸にして思いのままに責めてみ、ひいひい悶えさせる快地よさ、犬か馬

の様に鞭をくれて、恥かしめ、のゝしり淫慾のまゝに思いきりもてあそぶ快感は、何物にもかえられません。

私に共鳴する方には私の奴隷をさし上げます。その代り私と同性愛になつて、共に彼を拷問する変態遊戯を楽しみましょう。

サドの女性マゾの男性はグループを作つて楽しみましょう。

それから物すごい変態のお友達を一人知つて居ます。魅惑的な、二十八歳で独身の女性です。彼女はマゾでもあり、サヂでもあります。若し彼女と御交際をしたいと思はれるなら、誌上に電話番号と名前を發表して下さい。御紹介致します。

さつぱりした清潔な方なら男性共資格があります。

私に拷問されたい男性も名乗りをあげなさい。(川村加代)

★小生貴誌の愛読者ですが、サ

ドです。全国のマゾの女性の方は是非御連絡下さい。

又、小生と同好の方(なるべく和歌山県近くの方)御連絡下されば幸に存じます。(H生)

★貴社益々御隆盛の事と存じます。小生過ぐる日に駅構内で目に止まつた風俗草紙を求めて以来、熱心なる読者となりました。私が求めて止まなかつたオアシスであり夢の実現でした。

幸か不幸か小生裸女を縛る事に大変興味をもつて居り、加虐的性質に悩んで居りました。

今回貴誌を通じて、同好の志又は女性と、文通、交際等出来得ればこの上もない喜びです。

小生今だ、マゾ的な女性に会つた事ありません。是非同好の女性とお近付きになりたく思つて居ります。御同情下さい。

(大阪M生)

まぞひすと

★貴誌九月号の読者交歓室を拜読し、私の胸は高鳴りました。

サデイストの御婦人、是非お手紙下さい。このあわれなマゾヒストをお救い下さい。

三十歳から四十歳位迄の御婦人の暴虐の鞭がほしいのです。

全裸にされ縛られて、はりつけや吊し責め、そしてサジックな鞭で拷問して下さい。空想するだに胸がときめきます。

東京のH・O

さんは是非御交際御願ひ致したいのですが、御文通願えれば感謝にたえません。

当方二十五歳独身です。

(Y・K生)

★御誌の御発展の程書店の店頭でもよく感ぜられます。心からお慶び申し上げます。

誌上で女装愛好の方々を見出し嬉しく思っております。

私は中学二年の時性の目覚めと同時に女装したいしようどうにかられ家族の赤い着物をこっそり着けたり、お風呂の中で化粧する事など覚えました。その様にして自分のナルシスムス

近影 N・M生



も満足させる様になりました。

しかし現在の様な、状態ではなかなか思う様にいかず、苦しんでおります。

大阪の重田さんの夢など実現

出来れば良いと思います。さしあたり最近の自画像を一枚お送りします。市川藤本氏始め、同好の方御連絡下さい(NM生)

★私は二十五歳の青年ですが、異性に何の興味もなく、しかも熱烈なマゾヒストの一人です。

私の宿望している事は、十八歳から、二十五、六歳迄の男性に、全裸にされてがんじがらめに縛り上げられる事です。

しかし、こんな事をする相手もなく、僅かに夜、床の上で全裸になり、いろいろ工夫して自縛自縛して慰めております。

今迄同性に縛られた事も四回程ありますが、最近は一度もないので悶々としています。同じ悩みをもつ方、名古屋山内様、同じく近郊のSK様、是非御会

いしたいと思ひます。お便り下さい。(名古屋 Y・K生)

★未知なる私の女主人へ、私は忠実な貴女の馬です。貴

女が乗馬服を着、手に鞭を持つて、私に近付いておいでになる時、私はこれから始まる苛責と烈しい調教を覚悟いたします。

西部スタイルの派手な乗馬靴、軟らかい細いピツタリした乗馬用ズボン、そして何時も手には西班牙風の結び目のついた長い革鞭、大きな刺輪のついた拍車とを手にして居られます。

私が少しでも貴女の意志に反した時、貴女は拍車が無條件に私を従わす事を知つて居られます。これ以上走れないと言う程走らせておいて、その上まだ革鞭と拍車が責めて責めて責め抜くのです。

時々、ロデオもやります。荒馬は太い牛用の革鞭で散々打ち据えられて昂奮します。貴女は力一杯その大きな拍車を私が貴女を振り落す迄使われます。

何れにせよ、私は貴女の汚れた乗馬靴を舌で美しくします。

是非私をおやとい下さい。

創刊号よりの読者ですが第三号の長靴崇拜傾向の小説双生児の犬に大変感激致しました。優雅な女性の馬として奉仕するという連想は勿論マゾヒスティックなものでありますし、当然馬を見る夫人の一部にもそういう個所がありまして、感激致しました。

「双生児の犬」は独乙の珍画作者ルドルフ・シュリヒテルの感覚を見事に我が国に移植したものと云えましょう。

小生もマゾヒズム、シュティーフエル・フェティシズム等の資料蒐集、創作、研究、翻訳に努力して参りましたが、ここに始めて、ほとんど完全な姿としてのフェティシズム小説を発見して心から喜んで居ります。

又、誰方かヌード或は着衣にて、モデルになつて下さる女性の有志の方はないでしょうか、

愛読者優待

責め寫眞

撮影會

読者優待の責撮影會の第一回第二回は好評裡に終了いたしました、第三回は又々新趣向をこらして十月二十五日(日曜日)開催致します、御申込は至急ハガキにて御願致します、詳細は折返し御返事の際御通知申し上げます。会費二千円

東京都千代田区神田神保町二ノ三四
日本特集出版社

本社
特寫
特選傑作責寫眞

マニヤ地獄の女

マニヤ地獄にのたうち廻る豊満な女体の大膽なポーズの傑作写真集

キヤビネ判印画紙焼付 三枚一組 五百円

白衣の看護婦

清純な白衣をまとう看護婦を心ゆくまで責めさいなむ陶酔の極致美

キヤビネ判印画紙焼付 三枚一組 五百円

(応分の謝礼を呈します故)

読者の中で右様の傾向に興味ある方には是非拜見したく思います。小生所有の資料は千五百点以上あります。サデイズム、マゾヒズム外変態作品など、東西を問わずあります。小生只今、会社社長、外誌輸入業代表者等しております。(昭和初年生) 日夏先生始め同好の方御連絡下さい。(東京 H・T生)

そどみあ

★私は本年三十歳の青年です。独身ですが今後も結婚の意志はありません。職業は理髪業ですがこの職業はあらゆる階級の人が出入りするのです。

昔の事ですが、あるお客様に食事にさそわれ、そのまま旅館で一夜の宿をとりました。それがこの道に入つた最初です。その後、見習の十七歳位の美少年とアクティヴに愛しております

したが、ふとした病で世を去りそれ以来恋人を持たずに過ぎました。戦地で二、三の戦友と交際しましたが、今では音信不通です。

インテリタイプの中年の人重役タイプの人、美青年等を見ると興奮してしまいます。

私は五尺二寸位で体格は普通です。容貌は普通以上です。アクティヴ、パツシヴどちらでもよいのです。十八歳から二十五歳迄迄の方、なるべく美しくい方と真の恋をして見たいと思つて居ります。(S・M生)

★貴紙いつも興味深く拜見いたしております。私はソドミヤ傾向の一人ですが、いつも紙上にて諸兄の記事を拜見いたし、同じ悩みを持つ者のいかに多いかを知り、驚き、且つ、心強く思つて居ります。私は三十台で経験はありません。体重十六貫五百、五尺五寸、血色よく小肥り

セーラー服の女學生

純潔の乙女におそいかかるあくなきサジストの悪魔の縄とクサリ

キャビネ判印画紙焼付 三枚一組 五百円

第1集 泣むせびく悦虐秘図	写真 三枚 キャビネ判印画紙焼付 五百円
第2集 岩風呂の被虐	写真 三枚 キャビネ判印画紙焼付 五百円
第3集 制服の女學生	写真 三枚 キャビネ判印画紙焼付 五百円
第4集 危機一髪處女責	写真 三枚 キャビネ判印画紙焼付 五百円
第5集 エプロン責め姿	写真 三枚 キャビネ判印画紙焼付 五百円
第6集 ガンヂガラメ	写真 五枚 キャビネ判印画紙焼付 三百円
第7集 艶風淫ら責	写真 五枚 キャビネ判印画紙焼付 五百円
第8集 やわ肌責五態	写真 五枚 キャビネ判印画紙焼付 五百円
サービス責め寫眞	写真 五枚 キャビネ判印画紙焼付 三百円

です。

十七貫以上の清潔な男性的な方との誠意ある交際を切望して居ります。

(東京 S生)

本年二六歳最近迄喫茶店のマネージャーをしておりました独身の者です。身長五尺四寸、体重十五貫容貌は醜くありません。性格は潤達明朗で能動的な方です。

理想の男性の型は外国俳優、フアリーグレンジャーの様な方を望みます。

十三歳の頃同室に下宿していた従兄に教えられてから現在迄いろいろな愛撫方法を教えたり教わったりしてこの道をたどつて参りました。

大阪近郊のそとみあ諸兄を動かして、クラブを作りたいと思います。御参同の方は非御便り下さい。大阪T・Nさん御連絡をお願い致します。

(大阪 T・O生)

★当年三十歳の独身の男子。身長五尺七寸、体重、十六貫です。

十年近く前頃、家人に隠れて女装を楽しんで居りましたが、現在では、交際の相手として、女装の方を探し求めて居ります。

好みの相手としては、髪は自分のものを伸ばし、白晝も女装でお会い出来る人、十六、七歳から三十四、五歳頃迄の人。和装でも、洋装でも結構です。

成る可く、茨城、栃木、東京の人、居りましたら是非通信欄に連絡方法をお知らせ下さい。

(茨城 W・B生)

★諸兄にお願いします。

小生風俗草紙を知る迄は、自分と同じ悩みを持つ人のある事を知らなかつたのです。しかし今は同好の志のある事を知り、狂喜しています。

経験は全然ありませんが、無

茶苦茶に愛する事の出来る人を夢想し、骨が折れる程抱いてくれる人の幻を描いています。

好きなタイプ等とせいたくなく事は申しません。誰でも結構です。御連絡下さい。

何処までも出掛けます。

当年三十二歳、身長一六六、体重五六K、容貌十人並位、一見二十六、七位にしか見えないそうです。(鳥取 T・U生)

☆サヂスト・マゾヒストの皆様！ 本誌は豫告の通り次號にソドミアの大座談会を催しますが、引続き、サヂストの座談会、マゾヒストの座談会も催します。

サヂストの座談会には、性心理学の某大家、マゾヒスト座談会には現役医師でマゾ研究家の某氏(両氏とも交渉中)を中心に愛読者有志の出席を乞い、活潑な意見の交流、体験談の発表

を行い、もつて誌上を飾る豫定です。(この他にも著名作家画家等の出席あり)

何卒、我と思われる方はドシドシお気軽に、当編集部宛お申込下さい。開催日時は直接御返事致します。(誌上発表名は匿名を厳守しますから御安心下さい)

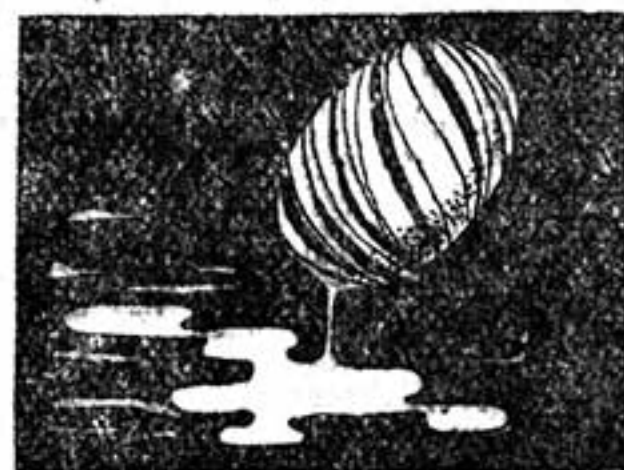
☆また、変態女性の座談会も計画中です。無論架空座談会ではありません。アブ趣味に理解あるアマチュア・セミプロ、プロ女性の座談会です。唯今各女性に交渉中ですから、近く誌上に発表出来ると思います。この豪華な企画を何卒御期待下さい。

☆サヂ・マゾ・ソドミア、その他、アブ党諸兄の簡単な「性の履歴書」を募ります。

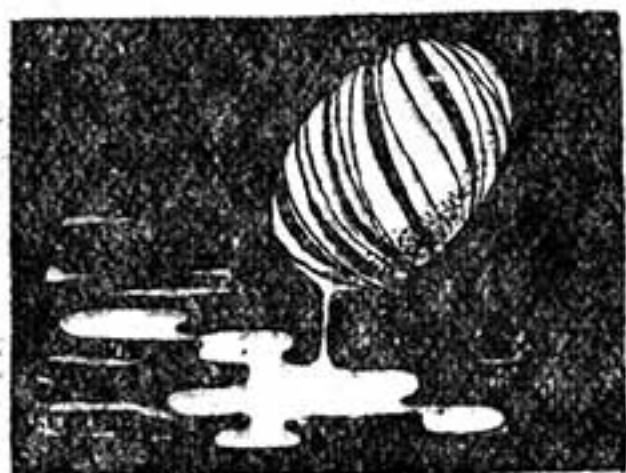
原稿用紙一、二枚から四、五枚位の分量で結構です。これは応募下さった方全部に薄謝を呈します。匿名は厳守致しますから、何卒御協力を乞います。

(担当 編集部 T・U)

讀者交歡室



そとみあ通信



藤井晃

★

小生、本年二十八歳、東京の或る大学を出て、現在は東京でささやかな書籍販売業をやっているが、ある文学雑誌の同人として、文学に専念致すものでありますが、男色に関する作品を二つ三つ書いております。

三島由紀夫氏の「仮面の告白」「禁色」などには、到底及びもつきませんが、自分の体験したものからの取材でありますので、実感は出していると思います。三島氏の作品は芸術的

には立派なものですが、観念が空転して、実は掴み得てないという点があると思います。先生のご感想は如何ですか？
それから、結婚してからの男色関係につき、先生にお訊ねしたいのですが、ご面接願えるでしょうか？ 実は小生の愛人は、今年三十歳になりましたが、先日妻を迎え、ただいま新婚中なのです。
彼は結婚後も交際したいと云つたのですが、小生はいやだと云つて、喧嘩別れのようになつてしまつたのです。いずれとも元通りの関係には戻らないつもりですが、念のため、お伺いしておきたいのです。

(千葉県 K・M生)

答

ソドミアの結婚問題は、ソドミアにとつて、大きな悩みの一つだと思います。それだけに、慎重なる考慮のもとに善処されねばなりません。周囲の事情などにおされて軽々の下になすときは、悔を終生にのこすことになります。

あなたのお質ねの結婚後の男色関係について、やはり同じことが云えると思います。私が開暇なきために、あなたとお会いしてまだ

その詳細をきくことを得ませんが、茲には文面に現われたことだけについてお答えしておくとしましょう。

まず実例をとつてみましょう。私の知つてゐるソドミアにMという二十九歳になる人であなたと同じようなインテリ出の商人がおります。彼も終戦後結婚しましたが、家庭においてはノーマルな夫で、性生活においても妻を満足させ、上京のたびに妻に高価なみやげものを購めたりなど、妻を愛し、しばらくはいわゆる円満にいつていたようでした。

ところが、元々同性愛的傾向の強いMですから、ふとした機会からその道の二、三の男性とつきあうようになり、手紙のやりとりや相互の往復などしてゐるうちに、あまりそれが頻繁になつて来たので、彼の妻も変に感じ薄々その事情を察してしまつたのです。

自分の夫と同じ男性に奪られる——ノーマルな女性にとつて、夢にも思わなかつたことの出現に、眼の前が真つ暗になつてしまつたのです。彼女は最大の侮辱を感じました。

女道楽はしてもいいから男とつきあうことはやめてくれと、妻は必死になつてMに諫告しました。が、ひとたびその道へ戻つてしまつた彼にとつて、その道の快楽が忘れられ

う筈もなく、依然として妻に隠れて、ホモの相手との交際をつづけておりました。

妻はついに家を出て、実家へ歸つてしまいました。云うならば、現歌舞伎界の名女形Nの場合と同じようなことになつてしまつたのです。Nの場合は、風聞によると、妻女が実家へ逃げ歸つてしまつた後でも、同性愛関係をつづけていたということですが、Mはここで醜然としてさるところがあり、いままでの男色関係を断ちきつてしまつたので、妻もふたたびMの許に戻るようになりました。今後のことは知らず、いまのところは、彼の夫婦生活はどうやらおさまつてゐるようです。

右の例を考えてみますと、俳優Nが、夫婦生活の破綻に際しても、なお男色関係を断ちきれなかつたのは、Nがかなり強度のウールニングであつたからであり、Mがそれを敢てすることができたのは、彼がどちらかというトベラスト傾向であり、また知性も強かつたからだと思ひます。

それほどに、ウールとベデとはホモの強弱の度が相違するもので、ウールはホモでなければ絶対にダメなのであり、ベデは男色とともに女色をも愛することのできるものが少ないのです。

賢明なるあなたのことゆえ、あまり嘸々を費すことをやめますが、あなたと愛人との場合も、要は右の例から推し測つて、善処されることを望みます。

★

本日書店にて「風俗草紙」を手にしまして、いままで孤独な淋しい生活を送つていました私は、「そとみあ通信」によつて、少しでも明るい希望がもてるようになりました。

私も、四十歳を越えた今尙、青少年を愛しつづけて来たのですが、真のホモ愛好者に出会わず、その場かぎりで離れてしまひ、二十数年来満たされない心で暗い生活を送つています。

東京などでは、同志の喫茶店があつてわりあい簡単に相手が見付かるようですが、当地では私の知るかぎりでは、そうした所はないようです。

映画館などでは、相手を見付け得るようですけれど、年輩者の私の方から積極的に働かねば、それも可能性はありません。

といつて、気の弱い私のことではあり妻帯もしているし（妻に満足することもできません）又社会的な地位や顔もあるため、積極的な手出しはできず、それかといつて、仕事も手につかず、神経衰弱症におちいり、自殺でもしたいときさえあります。

何とかして同好の青年を得たいとあせつていましたところ、図らずも貴誌を見た次第で、これを機会に、高知の地に小生の愛するタイプの青年を紹介していただき、交際することができれば、終生のよろこびと思つています。清潔な二十歳以上のウールニング型青年を希望しています。

（高知 T生）

答

同性愛者の会合などにおいて、中年の妻帯者が洩らす悩みは、きまつてあなたの仰言ることと同じことです。つまり、表面ノーマルな社会人としてのメンツを持しながらひそかに己が性愛を満たさねばならぬという悩みです。

そうした会合の或るとき、私がそうした人たちに、探偵小説界の耆宿氏の例をとつて、氏が己が男色癖を隠さず、尙且社会人として

堂々と生活していることを云つたところ其座にいた会社の課長だという中年の人が、

「それはE氏だからできることなので、われわれ普通のサラリーマンが、自分のホモを会社や近所にも知られたら、それこそ周囲のいい笑いのものになつて、会社は勿論、家にも住んでいられなくなりますよ」

と言下に云いました。

私もそれは分つています。だが、私がたびたび云うように、一般のソドミアとて、己の男色癖を何でそのように卑下することがありましょう。

そうしたソドミアの気弱さが私には歯痒くてならないのです。それについては前号に詳しく解答しましたから、併せお読み下さい。

☆



小生は五十歳を過ぎた者で、目下子供も成人して別に家庭をもち、自分は孤独で小鳥や植木を愛して友としていますが話のできぬ心淋しさを感じて、やはり満たされない悩みがあります。

小生も同性を愛する気持がありますので、ソドミーの事につきくわしく知りたく、その精神的な愛情、並に肉体的な愛情の技巧等をくわしくお教えいただければ幸甚に存じます。

又、ソドミーの文献及び絵画・写真等



を蒐めたく存じます。何卒御指導下さい。
(長崎県 多田)

答

あなたの通信はちよつと読み過ぐすと、真のソドミアでなく、いわゆる「男色ファン」のように思われますが、私の観察ではあなたは「ファン」どころでなく、むしろかなり強度のソドミアであると思います。私の経験によつても、それは分るのです。

というのは、私の許に寄せて来る同性愛者からの数多くの書信は、その大半は己がホモ癖の悩みを記した告白体のものですが、中に時々、男色ファンらしい文体で、「ソドミーに関する書物・写真・絵画を見せてくれ」とか「教えてくれ」とか云つて来るものがあります。

ところが、それらの人と面接し、つきあつてみると、決して「ファン」ではなく、正真正銘のソドミアで、しかもかなり強烈なそれであり、男色歴ももっている人であることが分つたのです。

では、なぜ、それらの人は最初から自己のソドミアであることを告白して来ないかという、私の推測では、俗にいう体裁家、もつと突込んで云えば、秘密性隠蔽性の強い人でそうした人々はあるのだらうと思います。

尤も、あなたの場合は、自分にホモの傾向があることを一言いわれておりますから、そうした隠蔽性がわりあい弱いといえましよう。

ホモの傾向がかなり強烈なだけに、ホモに関するかぎりのことについては、知るだけ知りたい——それは同性愛全体に共通する念ですが、隠蔽性の人は、よけいその念が強いか

ら、それがこのような書信を書かせる所以となるのでしよう。

愛情のテクニクについては、ここに記すべくあまりに多岐多様で、スペースがないしそれに、本号にはそれらのことについて別に執筆される人がありますから、省略します。又、ソドミーの文献・絵画・写真等は、本社の発行書にも二、三ありますから、それらなどもお購めになつたら如何ですか。

★

僕は三十八歳、銀行に勤めております。十五、六歳の少年の頃は、正常に異性に愛情を感じましたが、そのころ少年倶楽部に載っていた高島華宵の口絵の人物(少年)に魅力を感じてからというもの、異性思慕より同性思慕へと移つてゆきました。

そのためか、華宵の絵に描かれているような純真な智的な感じの少青年を好みます。そしてまた、私は、不思議にも、十八、九歳より三十歳位の人に慕われます。

純真な少青年を愛することによつて、

しみじみ生き甲斐を感じます。これらの少青年が、やがて世間の義理というものを負うて、心なき結婚生活に入るかと思うと、とりのこされる己が淋しく感じます。

精神と肉体の分離した生活にたえかね今独身です。姉の次男を養子として、それも今は高校二年生となり、生活は幾分なりと安定しておりますが、心身は淋しく感じます。

あなたはプラトンの説を奉じて独身でおられるとの由、何かしら氣強さを覚えました。

今、理想とするスポーツマンタイプの二十五歳の人と親しみ合っておりますが彼の住居は小田原の方のため、思うように逢うことができません。

八年前まで東京に住んでおりましたので、東京恋しさに時折上京致します。まことに失礼ですが、私の上京の折りに、決してご迷惑はかけません故、会って頂けないでしょうか？ プラトンの説なるものを直接お会いしてお話を伺えたら、どんなにか幸福と生き甲斐を感じることでしょう。

(群馬県 U生)

答

高島華宵の絵は、私も少年時代に大いに好きであり、チャームされたものです。氏に描かれたかかずの匂うような美少年の顔・姿形は、いまでも眼前に思い浮べることが出来ます。

噂によれば、華宵氏自身同性愛傾向をもつ人であり、氏の絵は、すべて——少年の絵であらうと少女の絵であらうと己——が愛人の



美少年をモデルにしたものだとかですから、そうした華宵氏のホモの愛情は、おそらく画面にもにじみでていたことでしょう。その当時の少年たちが華宵氏の画中の人物に同性愛を感じたのもまことに肯なりというべきです。華宵氏の絵によつて育まれたあなたのホ

モは、察するところベデラストの型なのではないでしょうか。又、名前からうける感じ、文字からうける感じなどから云つて、あなたは肥満体質のように思われます。

が、性質は氣の弱い方らしいですね。プラトンの説に氣強さを感じたという点、又、書信の末尾に「この文雑誌に出さぬようお願いす」と断り書された点などから、それがハッキリとわかります。

プラトンの説に氣強さを感じられるあなたが、なぜ、通信のおわりにそのような断り書などされるのでしょうか。惟うに、本名を誌上に出されることを惧れてそう書かれたものと考えし、匿名にしておきましたが、いずれにしても、己が同性愛にもつと強い信念をもたれることを望みます。

同性愛が、いままでの灰色の世界から脱し真紅なガランスローズの世界え、大きく羽搏きながら飛んでゆくことを、私は常に望んでいる者です。

★

行きずりに会った人に、ほのかな恋情を抱き、その人の面影を追ったことも幾

度か、しかし小生あくまで理性を失わずに、自分から言葉をかけ、或は手を出したことなく、今日まで過ごして参りました。

先生の云われるように、同性愛は、誰でもが一度は通る青春時代の関所ですね。その関所を越えられず、同性に憑かれていた私たちに、「ソドミア通信」における先生の解答は、一縷の光ともいえるでしょう。何ともいえぬ力強さと安心感を抱きました。心から喜び、御礼を云うのは、私一人ではないと思います。

さて、「風俗草紙」の第二号だったかに、桐生のA・K氏の投書が掲載されておりましたが、あまりに僕が中学時代経験した気持と同じなので、A・K氏と文通したいと思います。

彼の場合、あの気持が昂進したならば罪を犯すようなことになると思い、できれば一日も早く、正常な青春の血脈をたぎらせる若人となるよう励ましてあげたいと思います。先生の答に、スポーツ等を盛にして云々と矯正をすすめられておりましたので、お便りした次第です。

(栃木県 M生)

答

桐生のA・K氏の通信には、住所も明記してなかったもので、詳細には分りません。しかし、同君もあなたのこの書信を読まれば、かならずや喜ばれると思います。

★

僕も異性に対し、少しも興奮も魅力も感じない者です。元はそうでもなかったのですが、兵隊に行きました時、或る士官から愛され、日夜関係をもつうちに、彼が僕にとつて忘れられない人になってしまいました。四年間彼と暮しました。終戦と同時に彼とは別れました。それから数年、どんなに淋しい思いで暮したか知れません。

其後周囲のすすめで結婚しましたが、自分の心は同性に傾いているのですから夫婦仲がうまくゆく筈はありません。今は妻と別居しております。それが僕には好都合とは誰も知りません。

又、勤先でもあくまでカムフラージュしてきますから、僕の同性愛傾向に気がつくものではありません。

僕は卅二歳、体重十六貫、身長五尺二

答

軍隊において男色を知ったという人のいかに多いことか、いまさらながら驚かされます。

それが一時の代償性欲であつて、その期間が終れば、すぐに異性愛に転移できる人はいとして、あなたの場合のように、それが契機となつて、男色に捉えられてしまった人は大きな問題です。

妻と別居したり、勤先でカムフラージュしたりなど、無理な生活をしながらも、しかしあなたは、男色に捉えられた自分を、おそろく不幸と感じてはいないのではないでしようか。

悠一のようなあなたの理想の愛人が、読者の中から発見できることを祈ります。

★

★

★

寸、性質は朗かです。小説「禁色」の悠一が僕の心の愛人でした。そのような理想の異性と会えて、交際できたら、どんなにたのしく日々を送れるでしょう。僕によい人を御紹介下さい。鶴首して待つております。

(福井県 Q・Q生)



あぶ・せくすありす

秘密な淫蕩

私は、もう映畫どころの騒ぎではありません、眼がチラチラして、何を見ているんだか分りません。つばをのみ込むのさえ、はばかれる思いて、そつと身をよじり「止してエ」という意志を傳えましたたが……。

赤澤 澄子

私だつて、はじめから、こんな悪癖があつたわけではありません。……私だつて、はじめは、ちゃんとした、つつしみ深い良家の娘だつたの。……いいえ、普通の娘より、ずつと、おとなしい、恥かしがり屋の娘だつたのです。或は、それだからこそ、こんなになつ

てしまったのかも知れませんが……。

でも、今だつて、私は、あの唯一つのいまわしい癖を除いたら、ちゃんとした良家の娘ですわ。現に婚約中のひともいるのですもの。——それが、どうして、こんないまわしい癖を覚えてしまったのか。それを考えると自分の髪を引むしつてしまいたいほどの、悩み、苦しみにおそわれます。自分というものが分らなくなりますの。

一番に、あの女学校時代の通学がいけなかつたんですわ。学校はお茶の水でした。家は阿佐ヶ谷でしたので、中央線を利用しました。通勤、通学時の中央線がどんなに混むか知つていらつしやる人も多いと思います。それにいけない事は、あの線の利用者は、みんなお茶ノ水か神田まで行くひと達ですから、一度のり込むと、全然、かわらず、おりる所まで、まわりのひとと一緒になのです。ドアがあいて、どつと、乗り込む。自分の

力で入るンじやありません。後ろとまわりの

人におされて、入つてしまうんです。なかは身動きも出来ない程キチキチ。オイルサージンのカンヅメみたいになつて、お茶の水まではこばれる三十分以上の苦痛つたらないの。異性の手が、さわつただけでも、さアつと軀があつくなる程、敏感な思春期の娘ですもの。——なるべく、お友達同志さそつて同性だけで軀を寄せあうようにするのですが、そんな、いつもうまく行くとはかぎらず、どつちを向いても男ばかりのなかに、はさまれてしまったときの恥かしさと、怖ろしさ。

軀を出来るかぎり、すくめて、小さくなつていても、その分だけ、男の軀がおしてくるのですから、どうしようもありません。故意なのか、偶然なのか、肉のつきはじめた腰に男の掌がなま温かくふれてる、と感ずると、云いようなない羞恥に、軀がやける様にあつくなつて、唇をじつとかんでこらえていても

涙が出そうになるのです。

それも多ならば、まだしも、夏なんか、うすいブルマアと、スカートだけでしよう？もう、体中からじつとりと汗がにじみ出るのが分る位でした。勿論、声なんかとても出せません。他のお友達なんか、みんな「声を出してやつた」とか「ひつぱたいてやつた」とか平気で云つてますけど、私は、そんな事をすれば、皆のひとから、「この娘がさわられたんだな」つて目で見られるかと思つたら、とても、そんな勇氣は出ず、早くお茶ノ水へついて、自由になりたい、男のかたとの接触からのがれたい、そう思つて、死んだようにじつとしてるだけなの。

カバンが唯一つ、軀を守るたてでした。でも、ギユウギユウ詰めの中内では、それもたいた役には立ちません。

そんなことで、いつもお茶ノ水で、おりると、軀じゆう、汗びつしより、かいていて気



持が悪い位でした。何だか、けだるいような、つかれたみたいないな気持でした。そのくせ、お友達にもなんにも云わず、そんな話が出ても、

「わたくし、そんな事された事一度もないわ」

なんて云つてました。恥かしかったからです。

中央線はそんな男のひとが特に多いのでしようか。——いいえ、どこでも、そうなんでしょう。分りません。ほとんど、毎朝でした。辛くて学校をやめようかと思つたこともありました。夜、ねていても、体をぎゅつと押されて、いたづらされている夢をみて目がさめたこともあります。春に目さめる乙女が、そんなことで、どの位、きずつけられるか、御想像下さい。男の人の入つたあとのお風呂に入るのさえ、本能的に嫌悪する年頃なのですもの。

雨の日なんか、洋傘をついた男の人の手が丁度、私の、体へ当るのです。ああ、そのときのショック。全身へ電気が通じたようになります。中年の男が多く、私がいくら嫌な顔をして、平気なのです。知らん顔して、外の方と話をしながら、それでいて、洋傘をも

ち直したり、位置をずらしたりなさるのです。

なぐり倒して上げたいと思つて、ぐつと歯を喰いしぼるのですけど、何も出来ず、鞆で手を押しのけようとする位が、精一杯の防禦でした。

軀を、殊にお乳をさわられると、軀のシンの方で、何だか、せまい所を無理に通されるような痛みを感じました。自分の軀が、目立つから、そんなことされるのだと思い、ふくらんできたり、肉づいてきたりするのが、イヤでたまりませんでした。

一度、気がつかないうちに、じかに腿をさわられたことがあります。ですけど、さすがに、その時は、ふるえあがつて、拒否しました。その日は、お家へかえつて、さわられた所を、ごしごし洗いました。

二

でも、本当に、何かされるようになったのは映画館でした。お正月のお休みのある日、私は、娘らしく着かざつて、新宿のT劇場へ行きました。お兄様に連れて行つて頂く約束だつたのですけど、麻雀に夢中なので、「ひ

とりで行くからいいわ」と、ケンカして出てしまつたのです。

お正月で、なかは一杯でした。うしろの立見のところ、人の背から、のびあがるようにして見てました。それでも見えたり、見えなかつたりなんです。……そのうちに、人に押されて、よろめきそうになる度に、後ろから、私の帯のところへ手を入れて、支えて下さるひとのある事に気がつきました。はじめは、人に押される時だつたのが、いつか、づつと帯のところへ手をやつていくのです。……私は、赤くなりました。そして、ひじで、その手を、どかせようと思いました。一たんは、どけるのですが、ひじの力をゆるめるとまたすぐ、手がくるのです。貝が、ふたをしめるように、わきの下に押しつけていまして、強い力で、突込んでくるのです。帯の上の帯あげの所なので、くすぐつたくて、身がよじれます。私は、思い切つて、その無礼をなじるように、後ろをふりかえりました。……ああ、中年のいやらしい男と思つていたのに、意外にも、学生帽をかぶつた、美しい若い大学生なのでした。

私はカアツとして、混乱してしまいました。いきどおりは消えて、娘らしい恥かしさ

だけ強くわきあがつて来たのでした。他愛ない私！、きつと、ニセ学生だったのでしょうか。

「どうしたの？ イヤなの」

その人に、微笑しながら、恋人に云うみたいに、耳にささやかれると、もう何も云えなくなつてしまいました。

私は、もう映画どこの話ではありませぬ。眼がチラチラして、何を見てるんだか分りません。つばをのみ込むのさえ、はばかりる思いです。身をよじつて、「お願い、止してエ」という意志をつたえましたがダメでした。私は、ハンドバックを、胸のところにかけようとして、その人の手を、かくしました。せめて、まわりの人に、そんな事さ

——私が、騒がないのを、いいことに、そのひとは、益々大膽になつてきました。私はハンカチで、顔の下半分をかくして、眼だけ

画面をみているふりをしてました。でも、汗が、ひたいにういてくるのでした。他のひとは何も知らない様子です。

やがて、何も分らなくなりました。恥かしくつて、恥かしくつて、立つてるのが、死に勝る刑罰に等しく感じました。それを知つて、そのひとは、私をうしろから、抱くようにして、もたれさせました。私は、そのひともたれ、眼をつぶつてしまいました。

汗が、わきの下から、背中からお乳の間から、流れつたわつて、下着をぬらして行くのが分りました。

三

明るくなつた途端に、私は、人を押しのけて、後ろも見ずに、映画館を出ました。そして、半分かけ出すみたいにして、人ごみにまぎれ、駅の方へいそぎました。そのひとが追

いかけてくるのが、こわかつたのです。明るくなつた所では、顔も見たくありませんでした。弱みをみせてしまつた事が、たまらなく口惜しく、一刻も、忘れてしまいたかつたのです。

後悔と口惜しさで、顔色も紙のようだつた事でしょう。

でも、お家へかえり、ひとりになつて、落付くと、あの、戦慄に似たよろこびの、不思議な感覚を思い出すのでした。あの、苦しさと、よろこびとが一緒になつたみたいな不思議な惑乱！ 私は、お床のなかで、その感覚を反芻しようとして、お布団のえりを噛みま

そうして、私は、いけない娘になつてしまつたのです。

そのことがあつてから、犯罪者が、自分の犯した罪の現場へ、舞いもどるように、私はもう一度、「こわいもの見たさ」にひかれて、



その映画館へ行きました。あのひとにあつたら、逃げてかえろうと思ひながら……それについて、わざと、混んでいる日曜日をえらんで出掛ける私でした。……私は、火の熱さをもとめて飛び入る虫のようだったのです。

そのときは、大して混んでなかったもので、期待したほどのイタズラはされませんでした。勿論、自分から、男のひとのそばに、軀をすり寄せて行つたりすれば、何かされるのでしようけど、まだ、そこまで、無恥にはなれず、ただ、ひどい男の現れる偶然を、人知れず、待つていただけだったのです。髪をリボンで可愛くゆわいた制服の女学生が、そんな破廉恥な夢を抱いているなんて、だれが考えたでしょう！

お嫁に行くときに、破つて棄てようと思つてある秘密の日記帳があります。私の「よこされた青春」の記録です。その一部分をうつしてみます。……こんないとわしい悪癖をもつ娘になつたのです。

×月×日。新宿T座。「デイヴィヴィエ、週間」なので、学生が多い。それを期待して行つたが、果して、満員。ここは、立見席が良い。入つて行くとすぐ、すつと寄つてくる。感じの悪い、汚れた服のひとだったのだ

すぐ、きらつて、別の扉へ逃げる。よこれた放出の古着なんかきてるひとなんて、素状が分らないから、怖い。すぐ、学生のひとにかまる。いきなり手をぐつとにぎられた。映写中、手をにぎつたり、話しかけたりしてくる。「いいですね」「面白いですね」などお友



達になりたいらしく、ひどいことはしないでただ手だけ。——でも、私は、ちがうんだもの。お友達になんかなりたくないわ。背が高くてチョット、ハンサムだったけどそのおどとした態度がいやで、外苑の散歩にさそわれたけど、断る。その人をまいてから、今度は、中年の会社員みたいなひとに、イタッ

ラされた。前の横木につかまつて、レインコートをたらして、かくす。……中年男は図々しいので、顔から、火が出る位恥かしかった。いい加減の所でふり切つて、階段をかけた。いつ迄黙つていると、つけ込まれるだろうから。お家へかえつて、汚れた夜をもつた。

×月×日

有楽町のN劇。二階のすみで腰かけていたら、左となりの背広服の三十位のひとが、しかけてきた。はじめ、その人は、腕をうしろの背もたれのところへやつていて、遊んでいる手先を、私の二の腕と、脇の下の間のところへ当ててきた。私がじつとしてるので、ブラウスの上から、胸のふくらみの裾野の所へ手をやつてくる。そして、それも許すと、腕をのばして、私の肩を抱きこみ、ブラウスのホックをはづしてくる。下を向いてしまった。胸が痛くなる程興奮した。口がからからにかわいてしまった。やがて、私の興奮をためすように、スカートの脇のチャックをおろされた。

きゆう屈で、思わず、椅子をぎゆうぎゆうきしませてしまった。でも、二階のSMは人がまばらだったから、気がらくだった。

でも、あまり恥かしくて、その人の胸に顔を押しつけてしまった。

「出たら、どこかへ遊びに行こうね」

「ええ。ちよつとお手洗い、行かせて」

そう云つて、お手洗いへ行つて、すぐ逃げてかえつた。——あんなんなつたら、もう明るい所でなんか会えない。そんな気もない。私のことを何て思つてるかしら！ あのひとつも、今日のことを日記にかくかしら……。『今日はすごい経験をした』なんて……。

×月×日

市電のなかで、腰かけていたら、ひざの間に、足を入れられた。いくら、ぎゅつとはさんでも、侵入してくる。本をよむふりしていたが、ポーツとしようで困つた。汚れた夜をもつ。

×月×日

N館へ入つたが、手をにぎられただけで収穫なし。あきらめかねて、日本ものをやつて

いるR座へ入る。ここでも目ぼしい収穫なし。寂しい。けだもののようにアパンチュウルを求めてさまよっている私。よごれる。

×月×日

この日のことは、カンタンにしか書いてありません。でも、この日こそ、私にとつて一番いまわしい日だったのです。

この日も新宿のN座でした。私は、うえていました。アレが上つた日だったのです。私は、いつも、その日は、とてもヘンになつちやうのです。——だから、この日、私によつてきた、ジャンパーをきたヘンな青年を私は拒みきれませんでした。いつもなら、こんなひとは、スグ振つちやうのでしたけど。

一人ではなかつたのです。二人で組んでいたのです。私が、それを知つたのは、もう、大分時が経つてからでした。

逃げようとする、二人で、両方から、私の腕をつかみました。男二人につかまれる

と、身うごきも出来ませんでした。それに、弱味があるのです。

「お父様が外で待つているのよ。かえして頂戴」

そんなウソをついたんですけど、二人は西洋人みたいに肩をすくめただけ。そして、「ねえ、お嬢さん。僕たち、さびしいんだよ。一緒に散歩に行つてくれない」

甘つたれるみたいに、そんな事を云うのです。私は目をつぶつて、二人に、はさまれながら外へ出ました。なんとかして、途中で逃げようとしたのですけど、その機会はなかつた。それに話し合つてみると、そんなに悪者でもないような感じで、私は、気を許しました。

私たちは、それから、ムサシノの下で二時間位、おどりました。二人が入れかわり、チークを挑んでくるのです。男に甘い、官能に弱い娘だと見くびつたのでしよう。



「お願い、もう、そんなのイヤ」

そう云つても二人はききません。一人だけならいいけど、相手が二人なので辛かった。ヘトヘトになる位つかれ、びつしより、汗かきました。

それから、神宮外苑へつれて行かれたのです。そして、あの有名な絵画館のわきの芝生の上で……。

こんな悪い娘でも、まだ私は処女でした。私は、さすがに悲しみに泣き伏しました。あたりは真ッ暗になつて、夜つゆがしつとりとおりている秋の夜でした。流れ星が、すつと消えて行くのが見えました。

この春、婚約者が出来、今、私は、花嫁の修業中なのです。結婚したら、こんな遊びつきつぱりと止めよう、止めなくちやいけない、つて、心に思つているのですけど……。

気持の上では、キチンとそう決心していても、私の躰の方が意志通りにはならないで、勝手に動き出すかもしれない……、なんだかそんな予感もして、とても怖いんです。いゝ奥さんにはなりたいたいと思つてはいるんですけれど、本当は私、自信がないんですわ——。

★アブコント★

無 銭 飲 食

加 古 川 慎 吉

慎吉はぼんやり歩いていた。何時ものことだ。

しかし、フト前方でなんだか騒々しく、人だかりがしているのに気がついた。彼が時折飲みに行く小料理屋「美よし」の前らしい。彼は人ごみを掻きわけて、店の中をのぞき込んだ。如何にもニヒルチックな顔をしてはいても、彼にはまだこの程度の好奇心は残っているのだ。

「畜生！ やつぱりお前だつたんだね、虫も殺さないような顔をしやがつて！」

グル／＼縄をかけられて転がっているのは、この店で板場を手伝っている、十七、八の少年だつた。唇まで真青になつている。その傍に口汚く罵りながら、竹箒の柄を握りしめて立つていいるのは、慎吉がひそかに憧れている「美よし」の内儀さんなのだ。

未亡人だと云う彼女は、美しい表情を引きつらせながら、その竹箒で青年の顔を横ざまになぐりつける。鈍い音がして、慎吉はアツと声を呑んだ。

「フシ／ まつたく、家の中に盗人をつてたようなもんだ！」

まだ三十前後と思はれる彼女は、如何にも憎々しそりに青年への打擲をゆるめないう。物高見く覗きこんでいる、衆人環視の中である。

雇人のその青年が、店の売上金をクスねる現場を発見されたりしいのだが、異常に亢奮した内儀の表情から、慎吉は何かを敏感に感じていた。明かにサヂズムの血が、彼女の豊満な女体の底で燃えているのだ。

彼は自分が日頃から、何となく彼女にひかれていた理由が判つた、と思つた。そして、そのみじめな青年を躰が震えるほどにも羨望した。

それからの慎吉は、なんとかして彼女に激しく打擲されたい、責められたいと腐心するようになった。そして或夜遂にそれを実行に移したのだ。

「金なんぞ一文もあるもんか！ 悪けりやサツへでも何でも連れて行きやがれ！」

慎吉は帳場の彼女を横眼で見ながら、大ゲサに土間にひっくりかえつた。だが次の瞬間、丁度その場に居合はせていた、私服の刑事にグイと引きずり起されていた。

風俗草紙最近號主要目次

★七月號★

責められる女三態 喜多玲子画
男色喫茶店 かびや・かずひこ
私が拷問した女 根津 明治
新らしい責古い責 上田青柿郎
のぞきの悦楽 最上 京子
鞭 の 家 須川 夏枝

倒錯の手記集

うゝるにんぐの嘆き真下 光二
華麗な惨虐の回想 進藤江利子
嗜虐放浪記 天野 鉄治

傑作小説特集

悦惚の白鳥 鳥羽 瑛子
秘色大阪城絵巻 岩堀 光
悦虐の部屋 喜多 玲子

秘密レター・サロン

レスボス通信 園村 恵子
そどみあ通信 藤井 晃
嗜虐倶楽部 大槻久良二

定價百圓

★その他華麗悦虐讀物満載／御入手洩れの方は直接本社へ／

★八月號★

妖 虫 喜多玲子画
いけにえ二題 北原 環画
ぐろてすく芸談 正岡 容

特集囚獄の記録

少年監獄 安野 洋治
男 色 営 倉 松尾 亮
責められる女の表情 伊藤 晴雨
やわ肌を責めて 喜多 玲子
木馬責め滑車責め 上田青柿郎
女切支丹拷問秘史 深田 徹

あぶのーまる・まにやの手記

私が責た六人の女 林 譲介
共同便所の秘密 宗方 綾子
まぞひすとの街 吹岡清一郎
そどみあ通信 藤井 晃
レスボス通信 園村 恵子
傑作小説特集
みだらな指 鳥羽 瑛子
まにや地獄 日夏由紀夫

定價百圓

★九月號★

ジャック・ナイフ 北原 環画
縛り絵六景 喜多玲子画
縛り写真・兇行現場写真
女体の縛り方十五種 伊藤晴雨
ぐろてすく芸談 正岡 容
歪んだ閨房 武野 藤介

傑作あぶ・すとおりの

凌辱開花 日夏由紀夫
隠花植物 相磯 武雄
男色アパート 志摩 雪夫

特選悦虐讀物集

悦虐の泥沼 喜多 玲子
刑事部屋の拷問 三谷 祥介
擦り責め臀部打ち 大槻久良二
俺が縛つた女 増富 次平
病癪に憑かれた處女の手記
汚辱の令嬢 金澤 樹子
爛れた肌 和田 夏枝
哀しき被虐 木暮 陽子

定價百圓

★十月號★

あなぐら 喜多玲子画
悶える女三態 中川彩子画
責められる肌 特写真
ぐろてすく芸談 正岡 容

さぶ・まぞ・傑作集

奴 隸 祭 三宅一郎訳
双生児犬 比企狂一郎
責め特集

女はこう縛られた
ら抵抗力を失う 伊藤 晴雨
新らしい
スタイルの責め 喜多 玲子
責めにおける
各種の小道具 細谷満佐子

同性愛讀物集

馬をみる夫人 日夏由紀夫
歪んだ女 鳥羽 瑛子
そどみあ放浪記 濫川 徹夫
まぞ・ふえちすとの手記
臀部狂崇症 油井 啓二
甘美なる糞尿 菅芳 一郎

定價百圓

秘 落
史 城

伊 丹 落 城 哀 史

(第二話)

主君の逃亡をしつてから、かつて、村重の局のひとりだつたお方が、一夜押入つた亂暴者に強姦されたのがはじまりで、しだいに城内は、互いの心をうたがつて殺氣だつていつた。足輕が上役の娘をかつぎだして……

岩 堀 光

1

たきの召使はなが、おひる頃から見えなくなつた。夕刻になつて、はなの明輩のゆきが真青になつて、たきの前に手をついた。

「お方さま、はな殿が……」

たきはゆきの眼色で、だいたいのなりゆきを察した。「で、はなは無事でいやつたかえ」と、きいた。いのちさへあれば、このさいとて、起つてしまつたことはしようがない。できるだけなくさめ、力づけてやりたいと思つた。

「いいえ、米倉の横の草地で……お庭まで下

人に運ばせましたが、いかようにはからいましょうや？」

たきは打掛のすそをとつて立上つた。廊下にでてみると、庭に戸板がおかれ、むしろがかぶせてあつた。女房、召使などが、四、五人たもとを眼にあてていた。

ゆきがむしろをはねてみせた。

はなは胸の上に手を合せていた。

たきは頭の根がぐしやりとつぶれ、もとゆいも切れ、かみかざりひとつなく乱れきつてゐるのを、まず、眼にとめた。

ふびんな、と、思つた。ふつと、はなが、男知らずだつたのに思ひ到つて、じぶんがかつて、城主の荒木村重の、ばん力に組みしか

れた時の、あの恐ろしかつたひとときがよみがえつた。

たきは死体に合掌して、すぐ、部屋に引返した。ゆきをよんで、なきがらを発見した時のありさまをきいた。よきした通り、はなは肌もあらわに両脚をひらいたまま、こときれていた。

乳房にも下腹にも、むらさきに浮きばれたひつかき傷があり、血が黒くこびりついてゐた。哀れにも、おそろしげに思われたのは、ついさきまでは、かりそめのゆめにもふれられなかつたはずの、花のつぼみが、五弁をむしりとられたように、ひき裂けてしまつてゐることだつた。

そういえば、上の唇も、はれてでございました、と、ゆきはいつた。それはたきもめにとめた。そして、荒木の前歯が、ガチツと音たてるようにぶつかつた、あの夜の痛さを思い出した。

「お方さまにはおきもつかれませなんだでございましょうが、お緋色のお下着は、まるでおこもの破衣（ぼろ）のように、いくつにもひきさかれ、まわりの草原に捨ててございしました。そんなご用にたてるために、飾着なされたわけでもないに、むざんや、まぐらの用のうすがみがわり、そのかずも、両手の指に数まさるほど。あげくのはてが、あのようにしめ殺されなされて、怨霊あらば、かならず……と、思へましたにござりまする」

ゆきは、それでも、はなが最後に、洩らしたらしい、みにくさにはいいおよばなかつた。彼女があわれたから、と、いうよりも、さいごのさいごにまで、みとがめられれば、さぞはすかしかりう、みにくい不浄のなかにいのちおわらねばならぬ、人間が、いとわしかつたのだ。

たきはゆきも、身邊に氣をくばるように注意した。「お味方の男衆とて、心ゆるしてはなりません」と、附加えた。



事実、城内に入込んでゐる織田の軍兵は、さぞ注意もあつての上のことか、未だ、理不盡には、城のものにふるまいもしなかつた。むしろ、八分通り望みをうしなつた、城側の兵隊が、やけ半分に、けだものの慾のまま動くひとなつてゐるのだつた。

たきの許へも、足輕大將中村新八郎が、しつこくいいよつていた。

「誰にみさおをお立てになるのです」と彼はいつた。「あなたが殿への進物として中川殿から送られておいでになつたとき、拙者は、あなたに泣きすがられたのを覚えてゐる。ご慈悲だから、逃がしたも、と、あなたはいわれた。あなたは京の貧乏公卿の娘だつたのを、黄金と引代えに中川殿のもとへあがり、伊丹に送られてきたのだといつた。殿が怖ろしいから逃がしてたもれ、といわれた。拙者はそればかりか、あなたの初夜を見知つてゐる。拙者は殿のお風呂に従つてゐた。あなたは奥の女房共に、手足をおさへられ、とうとうはだかにされなされて、殿のお背を、お流し申してゐた拙者の足許に、突倒されなされた。あれいらいの恋でござつた。拙者は、あの時の、うすぐらいお湯殿のともしびに、ゆらめくように浮きでた、おみさまの、ちやうた

けたお肌の白さが、かたときも忘れられなんだ」

中村新八郎は、さる十五日、敵將滝川一益に内通して、彼の將士を城内にみちびきいれた謀反人である。そのために、さしも一年有余、織田の大軍を前に守り通してきた伊丹城も、裸城同様になつてしまつたのだ……。

「それとて、お方のためでござりまする」

と、彼はいう。「いづれは遅かれ早かれ、落ちるお城。そうなつては、戦国のならい。城中の女共のなりゆきは、灯をみるより明らかでござりまする。ことに、御大將は信長公にこの上なきおいかりを抱かせた方、そして、ご自分だけ、お城をみすてられたようなしうち、残るものにたいして、どんなみせしめをあそばすやら、暴將の名も高い信長公、いわずと知れてゐるのです。拙者が滝川殿にお味方申したは、お方をお救ひ申したため……お方さへ、拙者のものにおなり下さるなら、いまでは、織田軍中の某、なんとでも才覚できるのです」

2

狼慾のにえになつて、はじ多いかばねを城

内のお庭やお倉にさらした女子衆（おなごしゆう）は、はなひとりではない。このほどずいぶん、用心してゐるのだが、日に、ひとりやふたりはある。もつとも、みないのちを落すとはかぎらず、まるで、心をうしなつたようすがたをよろめきよろめかしつつ、お部屋にもどつてきた女もいた。

攝津伊丹の城主、荒木村重が、織田信長に謀叛したのは、一年前、天正六年十月だつた。

村重は、さしたる豪族ではなく、もともと信長お取立の大名だつた。

天正六年はじめ、織田信長は、宿敵毛利勢を打破るべく、羽柴秀吉を大將にして、兵を中国に進めた。しかし、大坂本願寺と結んだ毛利勢も強く、羽柴勢は播州姫路に釘づけの有様だつた。織田信長は、まさに、龍運の一代にはじめての危機に立つた。いままで、信長に臣待してゐる大名が、いつうらぎらぬとも限らなかつた。強きにつき、弱きを叩くのが、戦国武士の習ひである。げんに松永久秀が反旗をひるがえし信貴城にこもつたのを、やつとほろぼしたばかりである。

本願寺をたすけた毛利軍強しの報は各地に飛び、上杉謙信すらが、毛利と同盟、信長の

背後を襲わんとしていた。

信長は、山陽道を羽柴に、山陰道を明智にと、自家の軍隊を四方に配置して、みずからは、京都にいた。

芸州三十七豪の覇主、山陰、山陽十州の大守、七十五万石毛利家を相手にして、信長は必殺の兵を動かしていた。これが彼の最後の覇業といえよう。

その矢先、一股肱の驍將、荒木村重に叛かれたのである。一兵でも無駄に力をそぎたくない折だった。

荒木村重は、そろばんをはじいたのだ。

彼は信長軍を、彼の重鎮である高槻城主高山右近、茨木城代中川清秀らが、当分くいとめていよう。そして、そのうちには、毛利軍が海陸から大阪に到り、吉川、小早川、宇喜多の軍兵、雑賀の宗徒、大阪の宗徒らが一手となつて、織田軍に向つてくるだろうと……。

当時の大名がみなそうであつたように、彼もまた、主君信長と中国の覇者をはかりにかけた。

村重の賭は美事に外れた。信長は、一ヶ月を経ずして、高山、中川両將を懷従、伊丹城に迫つた。

荒木は毛利家にしばしば援軍を乞うたが、

毛利軍は来はしなかつた。むしろ、じりじりと、羽柴、明智の軍兵に、圧迫されていた。

「尼崎と花隈の城を差出して、城内の女子供のいのちだけでも、お許し願つてはどうだろうか？」

一年近い籠城に、うみあきて逃亡する軍兵がしだいに多くなり、食料もとぼしくなるとそんな声が城内に起つた。

「いや、すでに尼崎までは、毛利軍が到着しているのだ。予が自ら、その軍を迎えに参るゆえ、一同、安堵致すがよい。万一の時には

城内三千の人数をもつて妻子を具して尼崎に奔ればよいのだ。それからでも、村重の一命かけて、妻子の命乞ひはできるといふもの」

村重はそういつて、五人の侍を供に、城を抜けだした。一ヶ月半ほど前だ。

重臣連が、やつと、主君の逃亡にきがついたのは、中川新兵衛たちが謀叛を起し、城を裸同様にした後だった。

重役荒木久左衛門はじめ、幹部たちは、百計盡きて城門を開いた。そして、尼崎にいつて主君村重をとぎ、あらためて領土を差出すことを織田軍に申入れた。

それまでの人質として、主君はじめ家臣た

ちの妻子を差出した。重役連は、村重の跡を追つたが、そのまま、逃亡してしまつた。

主君の逃亡をしつてから、かつて、村重の局のひとりだつたお方が、一夜、押入つた乱暴者に強姦されたのがはじまりで、しだいに、城内は、互ひの心をうたがつて殺氣だつていつた。

足輕が、上役の娘をかつぎだして、りんかんした。はなのような、ただ、お方の女中にすぎぬものの難にあうのは、もはや、だれも珍らしがりもしなかつた。

重役の逃走後は、いつそうやけになつた小者たちが、昨夜までは、影の後を嗅ぐさへ許されなかつた上臈の、面やつれた化粧の香を口臭と共に嗅ぐべく、機を狙つた。

げんに、西のお方とて、み合さまについて権高だつた二十六歳のお方が、日頃仕える下人が石疊にぞうりを揃えるまま、なにげなく庭に降りようと、おみあしを片方縁からお下しになつたところ、その下にへいふくしていただくの小者が、いきなり、お下しになつたばかりのおみあしの、ふくらはぎを抱きあげ、「あれよ！」と、おなげきも、むなしいう早わざで、はずかしくも、殿さへもあそばされなだらうに、がつと、齒のない口を齒に

かまれなされた。

すぐ女中たちが、下人の腰に抱きついて、やつとの思いで、むりに、いやしげなせまいひたいにあせかいだ顔を、必死に蔽ほうとだけなさつてゐるお方さまの打かけのすそから、ひきいだした。

「ふん、つづきは今夜だ、おぼえてろ！」

すて科白で下人は馳け去つた。

誰に訴へようもなかつた。侍たちはすでに捕われ、逃げ出したあと、ただ、るすの家老池田和泉ほか数人が、人質となつた女たちを警護してゐるだけだつた。

その池田も、重役たちが逃亡し、そうした城内の乱れをみると、ついに発狂した。あげくは鉄砲で自殺した。

3

伊丹城人質の人数は、三つの集団にわけられた。たきは、「重だてる人々」のなかにいれられた。



「わが身にかえても、女房子のいのち乞ひをしよう」と約束した、村重や重役のなさけないう有様が、かえつて、信長の心をいらだたした。

たきは、信長が、ときどき、猫がねずみをいたぶるような真似に、酔われるおん方ときいていたから、処分の法も察しがついた。

はじめ、侍の女房、娘たちが集められ、荷馬の車に、束にのせられて、運ばれた。

その後を、召使の女、若党などが、それぞれじゆずにつながれて、腰を蹴られながらあるいた。

次にたきたちが、二、三人あて荷車にのせられた。

侍の女房、娘あわせて、百四五十人はいたが、尼崎についた時に、ちようと、百二十二人になつていた。

道中の宿で、どことなしに呼ばれて、従わないと、かみの毛もろともひきずられ、闇に悲鳴だけを残したりしたのをみたが、二、三十人は、そのまま、人数のなかに戻されなかつた。どうなつたかは、たきもしらない。

荒木村重たちは尼崎に籠つてゐる。それへのみせしめもあつたろう。百二十二人、揃つて、七松というところで、はりつけにされることになつた。

たきの許へ、別れの挨拶を残していつた娘は、わずか十五歳だつた。たきが、男のけが

れもしらぬ身のあわれをゆうと、ゆきはあの娘もこの数日、母者人諸共、ひとつ牢舎で、城にいた若党ほどの男の数を、身にかぞえ得る体験をしたと教えた。

「てすりあしずり懇願すればするほど、面白がつて、人のかずのますばかり、ついにはただ、なすがまま、なすけもないみにおとされました」

と、娘は語つたげな。

「どうして、舌かみきることともようせなんたのえ？」と、たきはきいた。

「まだおさないひとゆえではござりませぬえ。ものもえいぬほどに、いきなり、くちに、男の下のおほいぎぬをおしいれ、それだけでも、いきのつまる苦しさとか」と、ゆきは答えた。

「きさまらもみておくがよい。いずれは、身の番だ」。

たきたちも、その日、番卒の棒の先でお尻をひつたたかれて、見物させられた。

十字の柱に、両手足首を、しばりつけられた女たちは、さまざまの様子をしていた。

髪を頬に乱れかけて、唇をかみしめるもありまだ、幼ない子を、経帷（きようかたびら）のふところにいれ、そのまま、巻きつく荒縄

に、泣く子の声に身もだえているものもいた。そうかと思うと母と娘が、なんとなく面をそむけあうように、柱にかけられているものもある。名を呼びあうもの。名号をとなへて菩提のすえを願えば、いつぼうで、ああかみも佛もあろうかと、叫びののしる声。

いつぱんに、老女ほど威儀正しく観念してみえるのは、みなりに乱れのみえぬせいだった。若いほどに、美しいほどに、ここへくる朝の八時も、ゆうべのつづき、まどろむひまとてない責めにあつて、心も乱れ、身にまとう衣も、わざと、下人のために、おもむきありげに開かされたり、引裂かれたりした。

はじめは、いつせいに鉄砲をいかけられた。そのしゅんかん、幸ひ、しんのぞうを射抜かれてたえたものはいいが、あとは、くるしみ、身をねじて、泣き喚き叫ぶ声の中をなにやら、じぶんでも心の鬼におどろくほどのものにつかれたひとみで、鎧、長刀など、思いの武器でもつて、足軽たちが、あたるを幸い、眼にしているままに、あばれ斬りに斬りはじめた。

首をはねられて、いちばん幸い、手足をもがれるもの、胴をななめになかばたちきられるもの、帯から腹を斬りさかれ、生みの子い

がいはしりもせぬうちを外界にさらすもの、さんびの極、たきは、二度、三度、失心した。

それから三日して、たきは、ゆきたち、女中共が、引立てられるのをみた。それまで、ゆきたちは、敵の足軽と通じて、落ちのびる手段をなんどもたてた。けれども、城中で、そうしては失敗し、翌日の朝になると、敵陣の前方で、高々と、大の字を逆にした裸体を柱にさらしあげられるのをみたように、たいていつかまつた。

足腰たたぬまでにされた姿で、もどされてくると、こんどは、同じ捕われ人の若党小者に、さんざもてあそばれた。

敵兵に無茶されおつた崩れ女子の崩れ谷なら、いずれ落朽ち葉にくさかろうと、さかにつつて、塩水をそそぎいれた。みるめも、いたいたしげに、赤ただれにただれてみえる谷の岩間を、こんどは、自分たちが崩しにかかったりした。

若党百二十四人、召使の女が三百八十八人空家にさせた、薬ぶきの百姓家に押し入れた。

大きな家ではあつたが四軒ばかり、どこも身動きならぬ様子。冗談に胸をおさへ、お尻を叩いて、もの慾しげだったものが、前後左

右から、さあさあとはかりに押してくるのに男たちは、そんな気の、その字ばかりもおこらない。

なかには押し詰められるなかばで、倒れたが、起きもならず、誰彼ない足に顔も胸も踏みつくされて悶死するものもある。

わずかに空気の通うとみえた窓や、天井に乾草がつめられた。寒気の迫る多十二月というのに、むつとして、ああ、いきがつまると眼前の男女の差別もない、ひきのけて、間をつくろうとする。そのむなしい身動きと、焦心に、いまにも家が裂け散りそう。やつと、家々のまわりに柵がもうけられ、乾草に、燃えるほのほが点じられたのは、朝からはじまつて、午後である。

「うわあーん」と、いうような、なんともけものじみた声が、空にこだましそうにあがつたが、ひとりひとりの声もすがたも、みえはしななだ。

ただ、さかなな炎と、いやな、いつまでもはきけのしそうな、にほいとが高くなつた。と、崩れた家と柵の中から、はね上るような黒い影が、面白おかしげに、踊るようにはじきでた。だが、その影は、たいてい、三、四の手足をふる動作で、炎の中にとけた。

「美濃踊りじや、美事に踊れ！」

獄吏たちは、肩を叩きあつて笑つた。

たきも、その影が、生き悶える人間としらなければ、面白がつて、笑つたかもしれない。それほど無格好な身振り、手振りだつた。

4

たきたちは京都に送られた。

その前に、ちようど、ゆきたちの焼殺されたのをみせられて、眠れずにたきがいた夜、城をでていらい、姿をみせなかつた中村新八郎が、あらわれた。

「あんたたちは京都送りだ。そして」と、中村は、同じ牢内にいるみ合さま、そして、ご家老荒木久右衛門さまの息女のほうをじろりとみた。

「どんな刑にあわねばならぬのぞえ？」

十七歳で、来年の春は、織田家中の柴田さま一門へ、ご縁組とかの話だつた息女がきかれた。

「うちくびでござる。洛中、お引廻しの上六條河原にて……まあ、それまでのいのち、いずれの方さまもお若い。たんと女子のいのち

を燃えささつしやい。地獄では、鬼が相手、手荒うあつかわれて、腰のくだけぬようにのう」

「無礼な、犬め！ 下りや！」

み合さまのお声が震えた。たきはその眼尻が、いつか、殿が、彼女の肩を抱えて、廊下をお運びの時、たまたま、であうたみ合さまの、裂けるばかりの眼尻に、ようにているのを、感じた。

「たきのお方、おでなされい！」と中村がいった。

「いやでござりまする」

「捕われの身の、命令にはそむけますまいぞ。ご奉行より、ちとお尋ねがござる。そなたは、攝河随一の美女として名も高い方。村重の愛着もひときわ深からうほどに、なんぞもらしはせなんだか、荒木村重とのねやのむつごと、そのありさま、つぶさに取調べられるのでござりまするぞ！」

「そんな……」

と、たきは理不盡をしかけられたように、身をひねつた。それは、中村の眼に、いつそ、みだらな色を誘ひださせたようす……たきは、牢格子をひきずり出され、地面をはだしで、みちびかれながら、みのちぢむ圧迫感

を感じた。

低い天井の、物置小屋らしい家にはいるといきなり、中村に肩を抱きすくめられた。

「ああ、なにをあそばします！」と、たきは

中村の顎を掌でささえ、上半身をそらせた。

「声をおたてになるな」と中村はいった。

「拙者はみとがめられても、なんとも申開

きのなる身、お身はそうはゆかぬぞ。このよ

うなところまで、牢を抜けでた女、どんなに

あうやもしれぬぞ！」

「むむ」と、たきは、袖からはいつた腕が、

ひきよせるように、右の乳房を鷲掴みするの

に、思わずうめいた。決して、叫び声をひか

えたわけではなかった。

そつたからだの弓なりの足ひぎに、中村の

足がからみ、たきは、彼を抱くような格好で

どうと板敷の床に倒れた。

中村は、心がいらだちはやるのか、しきり

に、足ひぎや腕を動かせた。それが、

たきにはつきり感じられたのは、やは

り、相手の肌を感じたときだつ

た。それまでは、抵抗しとおしてみる

きというより、ただ夢中にさからつて

いたのが、ふいに、かいもない努力に

思われてきた。

「さけびなさるなというに」

中村は、なんどか、たきの口を掌で

蔽つた。

「もし、わらわが、おとなしういたし

ましたなら、ほんとに、おいのちを救

うてくれてかえ」と、たきは、なお阿

膝を固くしながらきいた。

「おお、武士に、二言あつてなろう

か」

「そなたが、それをいいやるのか？」

「男が戀の闇地に踏みいれば、二枚、

三枚舌のつづくかぎり、むつごと申



す」

「わらわが京で、お引廻しになるまでに、ほんとに、救うてくりやるかえ？」

「くどういうて、手間とらせられるな」

「わらわを、女房とよんでくりやるかえ」

「おお、よばいでか」

「ほんなら」と、たきの声が、急に小さくなつた。それまでに小半刻も、中村の腕が、たきのやわらかい胸を、しばしば押しつぶしうにしていた。また、幅せまい黒じゆすの帯がほどけて、ゆるんだあいだを、むりに中村は手首で開けた。そのまま、いぜん、お湯殿で、村重に抱き起され、なき泣いで、赤銅色の村重の腕をこぼんだ、少し下ぶくれの眼のくらむような白い肌をみた。

たきが、じつとしていないのでなにもかもながくそうしていたわけではなかつたが、中村にも、たきの承知の、間近さが察しられた。

、ちようど、その夜、彼女が獄舎に戻つたとき、格子の中は、叫声で一杯だつた。

明日は京送りの末に、死刑と確定したので、それまで、なんとなく上臈衆というだけで遠慮していた、牢番共が、どつと、酒の末になだれいつた。夜も二時に近い。

たきは、おどろいて、中村の後を追うように引返そうとしているところを、背後から抱きつかれた。

「こいつどこへでてうせた」

かぶさるように、前へ身を廻そうとする相手をかわして、たきは逃れ走つた。前の小屋の戸に身をぶつけるようにまろびいつた。

かえつてそれが不運だつたのは、小半刻も後のたきのむざんな格好をみればわかる。彼女の争う物音に、警護の武士がかけつけた。「逃亡をくだておりました。手引致した男がなければ、牢はでられませぬ」

下人の言葉に、武士は調べてみるように命じた。彼女は、小屋にあつたつけもの石に片足首をゆわえられ、もう一方を天井の張りにぐいぐいひきあげられた。

「ひいッ！」

と、叫んだ。体が裂けそうに思えたが、その感覚がしびれると、腹に血の伝うのを感じた。

降されて、そのまま下人たちに渡された。

そして、たきは、そのはじめに、いままで覺えたこともない、痛みを感じもだえうめいた。

京都へは、二人、三人が、荷車にのり、牛

のひくまま、見世物にされていつた。たきがいちばん興味をもたれたのは、美人のうわさが高かつたせいである。

彼女は中村の名を警護の武士にいわなかつたが、その後も、彼女に忍ぶものへ、連れて逃げてくれとたのんだ。たいてい引受けたが十二月十六日、斬刑の朝まで、誰も姿をみせなんだ。もちろん、中村も顔をだしもしなかつた。

色のほどもいい小袖に、かたびらすがつたで乞食共の胴を抱いてのせ、お尻を棒でたたいて追ううちに、女たちは刑場へついた。

たきは最後の時に、少し亂れた帯をしめ直して、髪を、高々と、器用にひとりでゆいなおした。

背後にまわつた刑吏のほうへ、うつくしいうなじをみせびらかすように、小袖のえりもとをすかした。そして、首打たれた。

世人評して、

「美人、死臨みて、儀容、好し」と、先進国の文章をひいてきてほめた。

(をはり)

×

×

×